ゆ。右の方に不動瀧大き成瀧三段に落る也、此下に砂金（イサゴ）ありと云、又峻路を登る、是より別當坂、大てんしやう、餓鬼け喉といへるせばき岩窟を過き、左手に仙人か岩屋在、屏風を立たる樣也。是を過き右手に蛇引谷（ジヤ）とて三角成谷あり、山陰なり、大馬屋、ちく生谷上に風穴あり、下りて左り手に溜り水あり、じやうせうが池と云、水清からす、登りて右の方に池あり、權現の御池と云、水色赤く見ゆれ共、汲は清し。此池にてひねりをうかゝふと、紙を入て其浮沈にて善惡を占ふと云、是より一里の間坂道究て峽し、眞砂（マサゴ）坂權現の御花畠といひて色々の草花あり、黑岩幕木谷龍神塚あり、又蛇塚とも云、彌陀ヶ原とて大き成原あり、右の方に御的場あり、塚（ツカ）の形に石を以てす、圓如此、此原に池五つあり、右に三つ左に二つ、名付て五水晶の池と云。是を過て五葉坂を上る、左りの方に鏡石とて名石あり、大御前の方に向ひたり。是より越前室に至る、此室は大御前の正面なる故に、御前室ともいふ、一の瀨より御前室迄四里、今も大師堂と護摩堂あり、平泉寺の僧每夏參籠す室の左の方に西（サイ）の河原とて阿伽の水有。大師加持水と云、傍に垢離有り水あり、水清し、美濃室と云は越前室より辰巳にあたりて、八町計隔たり。則美濃長瀧寺の僧參籠の室也。越前室より大御前の社迄八丁を御前坂と云、燒くつれたる石路あり、其内にじやうわうと云所在り、昔藏王權現を勸請したる所なるへし、手引の岩屋とて岩有、神代に天神宮出生の岩屋と云傳ふ、尤此手前に別山の移今別山といふ社あり、右の岩屋の辰巳に向ひ伊勢の方を拜する也。不動か岩屋とて古き石の不動尊あり、此邊より福井見ゆる、加州も見ゆる、江州の湖水竹生島もみゆる、美濃の方は大河長く見へたり。東の方雲中幽に見ゆるものあり、富士山なりと云。谷へ下りて辰巳の方三町計下に轉法輪の岩窟と云あり、又二里餘下りて谷に御厨屋とて冷敷（スヘ）池あり。

大御前本地十一面觀音金佛二體、小きは年代知れす、奥州秀衡造營とも云、小松重盛寄附とも云、古佛也。大い成は近代青木紀伊守造營なり、御本社は帝都の方へ向ひ給ひ、王城國家の鬼門を守護也と云、大御前の後ろの山を御ぜんが嶽と云、やけくつれたるすさまじき石峯也、俗に劍か山と云、人行事あたはす、是も秘所の一つと云。大御前より股摺の岩屋を通る、俗に胎内潛（クヾ）りといふ、その長さ三間計、石中相わかれて深さは人たけをかくす、中の廣さは漸身を入るよばかり也。次に大師判形の石あり、ほろん字なりと云、六道と云所に地藏堂在り、本尊は舊ひたる金佛也。奥州秀衡造立と云、此邊りに千歲か池と

て神代よりして消ぬ雪今も方二百間計か間に推（ウツタカ）し、池の水は見へす、雪の下より細く流れ出る水は湯本の川へ落る也。此外髣髴しこに消殘りの雪多し、此邊は草木もさすか山深冬のことし、五葉松多し、千歲が池の雪を下りて山の方にサイノ河原とて有、參詣の人砂（イサゴ）をつみ重ねたり、是より地獄谷へ下る谷を見おろせは、池三つあり。中にも大き成を不孝因地獄（イン）と云、何れも水はあるのことし。俗に紺屋の地獄、酒屋の地獄と云ならはす、邊りにやけぬけたる大穴有、高き所には燒崩れたる跡も有、上を望めは皮籠（カハカゴ）か岩屋とて權現の金藏と云傳る岩窟あり。大已貴（フンナジ）本地阿彌陀の金佛あり、是より加賀室へ八丁下る也。四つ塚へは一里下る、加州の方の籠尾（ヲヲエ）副村より此社迄は九里八町ありといふ、初は四つ塚を越州加州の境とす、今は尾副村より越前の國境とする也。大御前より別山へ三里龍（リウ）か馬場を通るなり、龍か馬場の王子とて有是より畜生谷を過き、美濃室の谷合より雪の上をすき行大難所也。油坂を越へ大屏風小屏風が池まて二里、此池水清し、是をけつさい池と云、かんはつにも滅ぜず。邊りに室の跡有、天池より別山の社まて二里。

別山本地聖觀音の像金佛金森法印素玄造立、天正十三年に大野の篠倉野にて鑄たる也。社より別山室へ八町石徹（イシト）白（シロ）の者上りて居る、別山より下り一里の間甚嶮しき下り坂なり。夫より一の瀨の下り口迄皆下り坂、水なし、大きに難所也。

柳谷より一り計登り、藥師堂あり二里計登、なはしろ田と云有、大さ二間に九尺計の内水溜る。

○越前國治君之事　天平勝寶元己丑より寶永七庚寅まで九百六十二年歟。

四十六代孝謙天皇御宇
押勝　藤原南家左大臣　武智麿之男也　惠美大臣天平勝寶八年於當國被討

四十九代光仁
苅田丸　坂上左京大夫刑部卿從二位但犬養の子也

五十代桓武
田村丸　坂上右大臣鎭守府將軍陸奥守

五十二代嵯峨
藤嗣　越前大掾參議左衞門督大織冠鎌足五代の孫中務少輔鷲取の息也

五十四代仁明
高房　越前守從四位下

五十六代清和
時長　民部卿鎭守府將軍

六十代醍醐
利仁　鎭守府將軍上總介左近將監北陸道七ヶ國守護時長の息也

六十二代村上
敍用　齋宮頭越前押領使

六十四代圓融
吉信　齋藤加賀守從四位下二階堂の館に住

六十六代一條院
伊傳　齋藤民部少輔　越前押領使

六十八代後一條
爲時　卒前帶刀　北陸道七ヶ國押領使

七十二代白河院
爲頼　疋田越前守　右に同
同
國章　越前　押領使
七十四代鳥羽院
國貞　同　同　國貞まで藤嗣の後胤なり
七十七代後白河院平重盛
光明　林六郎大夫　從五位下
同
助近　藤嶋左衞門尉
實隆　稻津新助　越前守
源頼朝公
高綱　佐々木四郎左衞門光實と改折立稱名寺建立
同
義重　波多野出雲守從五位下　姓藤原、六波羅之評定衆
法名如夢、越前吉祥山永平寺開基は義重也、戒名者如是
精靈と申也
同
基清　波多野左衞門　從五位下
實朝公頼經公
時光　後藤兵衞　佐渡判官
基綱　後藤佐渡判官　立蕃允
北條泰時時代
重通　波多野左衞門尉　出雲守
同
基政　後藤壹岐守　判官帶刀
時頼
朝通　波多野治郎左衞門尉
同
基宗　後藤佐渡守
高時
通郷　波多野出雲守
基維　後藤壹岐守
源尊氏公
高經　足利尾張守修理大夫武衞と號、從四位下當國管領
義滿公
義將　斯波治部大夫從四位下　義詮義滿二代管領
義敎公
義重　勘解由小路治部大夫　正三位
義政公
義淳　斯波治部大夫
同
義郷　同左兵衞督　息千代德丸義健早世によつて義敏を跡目に立。
同
義敏　同左兵衞督　實大野修理大夫持種の子息なり。後義敏を追出し義廉を家督とす。
義堂
義廉　武衞治部大夫　義政義尚二代　實澁川左兵衞尉義紀の子なり。
土御門御守
敏景　朝倉彈正左衞門尉法名英林　文明十三辛丑七月廿六日卒
義材公
氏景　同孫右衞門尉法名子春　廿八歲治國五年　文明十
六丙午七月三日卒
後和原義澄公
貞景　同太郎左衞門尉法名天澤四十　歲治國廿　六年永
正九壬申三月廿五日卒
後奈良義植義晴公
孝景　同彈正左衞門　尉法名大岫五十　六歲治國卅六年
天文七乙已三月廿三日卒
正親町義輝義昭公
義景　同左衞門　督法名大珍治國廿六　年天正元癸酉八
月廿日爲信長被討
義昭公平信長公
長俊　桂田播磨守法名空治、初は前波九郎兵衞　吉繼と
云、義景之臣也、信長公へ依有忠越前を給と云とも、國
中一揆起り、富田孫六誅之。天正元十二月下旬長俊越
前守護と成、同二年正月廿日被討。

一揆　治國三年天正元年より亥まで
信長公
勝家　從五位下　柴田修理亮　治國七年天正五より十
一まで、天正十一癸未四月爲秀吉公被討、四月廿四日
摧鬼院殿と號す。
豊臣秀吉公
長秀　丹羽越前守始五郎左衞門天正十二申より酉ま
て治國二年天正十二乙酉四月卒五十一歲。
同
長重　丹羽五郎左衞門尉天正十三酉八月加賀江國替。
後陽成秀吉公
政　堀左衞門督天正十三より同十八まて、治國六
年、國の川北を領、天正十八庚寅年卒、法名道哲。
同
秀治　堀久太郎治國七年慶長二丁酉越後江移
同
秀一　羽柴藤五郎侍從、天正十三年より八年治國、川
南を領す東鄕爲新城住居城槇山と云、文祿二五月十四
日於外國卒、永昌院殿前拾遺天岫一公本姓長谷川也。
同
秀康　同長吉郎五位諸大夫文祿により家督、任四品、慶
長二年二月四日卒梅盛院。
同
秀秋　筑前中納言、空在代、山口玄蕃慶長二より同三
まて治國二年
同
秀以　青木紀伊守慶長三より同五まで、治國三年。慶
長五庚子年九月卒。
同
正光　保科肥後守慶長五年より六年迄。

家康公
秀康　結城中納言三河守治國六年、慶長六年丑九月入
國、同十二年丁未四月八日卅四歲薨去、淨光院殿と號。
秀忠公
忠直　越前宰相三河守治國十六年、元和九癸亥年故有
て豊後江配流、嫡子仙千代寬永元甲子年越後江移、高
田居城二十五萬石領越後守三位中將光長と號。
秀忠公家光公
忠昌　越前宰相松平伊豫守治國廿二年、寬永元年入部
正保二年八月朔日四十九歲にて病死、法名貞眞。
家光公家綱公
光通　從四位左少將越前守治國卅一年、八歲にて國守
となる、十九歲にて入部、延寶二年三月廿四日三十九
歲にて薨。
家綱公
昌親　從四位侍從兵部大輔治國三年、元祿九子年十二
月二日任少將、延寶二寅六月三十五歲にて國守となる。
同年隱居、實は忠昌の子也。
同
綱昌　從四位侍從越前守延寶四辰年十　六歲にて國守
となる。同五年巳五月入國、同八年申八月任少將實は
中務大輔昌勝子也。十四歲にて昌親の養子となる、治
國十一年なり。
綱吉公
吉品　從四位下右少將兵部大輔再任なり、貞享三寅閏
三月より實永六年まで治國廿四年なり。
家宣公家繼公吉宗公
吉邦　從四位下左少將伊豫守治十二年、享保六丑年十

二月四日四十一歲にて病死。

吉宗公 宗昌　從四位下侍從中務大輔治國四年、享保六丑十二月十一日相續、同九年辰四月廿七日五十一歲にて病死。

同 宗矩　從四位下左少將兵部大輔、享保九壬辰五月十一日家督治國廿六年なり。

家重公 重昌　從四位上少將　越前守

同 重富　從四上少將越前守、始仙之助

越前名勝志 終

越前鯖江志

越前鯖江志自敍

癸丑之春、予有鼓盆之憂、閒居無聊、偶有從遊之人、則問以鯖江事跡、隨而筆之、以供一消遣、或曰鯖江彈丸之地、何煩地志之錄乎哉、予曰不然、吾藩　先君邑於玆也、荆棘狐兎之區、經之營之、鬱然爲一都邑者、不知費幾多之財、役幾多之氓、豈非邦家不朽之丕績乎哉、予不佞承乏侍講、於藩中形勝事跡也、其可無述乎、顧百年新造之都、無文獻之可徵者也、乃僅得之故老一時之談、錄藏之巾笥、而以竢他日之異聞焉、庶幾觀者是正其謬、而補其不足、則府志行將完備也、是予之志也、因題鄙言、而請敎于同志君子云爾、

寛政五年癸丑夏四月、芥元澄書于鯖江城東樂山園中、

越前鯖江志

鯖藩儒臣平安芥元澄子泉纂輯
男希膽子軾同校
希由子轍

○鯖　江

鯖江　古昔鄉名、古名深江鄉【舊事記】曰、高志深江是也、【日本記略】曰、弘仁（嵯峨天皇）十四年六月丁亥、越前國割言上奏、丹生郡管鄉十八驛三分九鄉一驛號今立郡、按古圖、鯖江屬今南西郡、無今立郡、未詳何代改之、或曰分割今立郡、爲今南東郡今南西郡・今北東郡、未知在何時也、蓋斯波氏朝倉氏之際也乎、寛文四年甲辰福井侯受判物之時、復併三郡爲今立郡、古老傳曰、鯖江鄉中有住笠庄、今不可知界何地而名之也、

一名鯖矢（サバヤ）　古老傳曰、往古　大彦命爲北陸道將軍、略定北地、與戎醜戰、于時神矢向敵而墜、戎醜敗亡、因名神矢墜所爲鯖矢、今福井傍有立矢里、立矢祠祭神矢也、一說曰、崇神天皇之時、改深江鄉爲鯖矢、後改名鯖江（サバエ）、鯖取鯖矢之鯖江取深江之江云、

一說曰、鯖江天文・弘治之頃名中村、南爲上中村、東爲東中村、近世福井侯第三祖伊豫守忠昌公、（謚隆芳院）命復古名、爲西鯖江、改上中村爲上鯖江、東中村爲東鯖江云、

越前國初爲福井侯封國　後分爲六藩、鯖江其一也、中屬將軍家、置土方官宰之、至有德廟之時、吾藩第二祖　瑞昌院君自越後村上徙封于此爲一藩矣、舟之曰、間部下總守詮言享保五年移封于此、

○三太山舟津明神祠

三太山在鯖江東南隅　古名三太山、（出和名抄）土人稱圓山（マル）古在舟津鄉（舟之曰、【和名抄】丹生郡三太今立鄉船津本文舟津應當作船津鄉、）云、【神名帳】作御板山又號大山、社記作遇山、一玉山、（或曰、【和名抄】丹生郡三太神名解大山御板神社共無山字、本文二山字宜削、）古老傳曰、西行法師和歌曰、「著幾神之宮居于遇山之月見志人者我波加里加波、」

舟津明神祠（舟之曰、【延喜式】作舟津神社、蓋舟字訛作舟也、）　所祭三神、一爲猿田彦、一爲孝元天皇、一爲大彦命、

祝史傳曰、往古　第八代孝元天皇、以皇子大彦命爲北陸道將軍、略定北地有功、子孫世爲北方藩鎭、至四世作祠三太山上祭之、號舟津明神祠、著在【延喜式】所謂諸國式內社也、後歷亂世祠所轉徙、今東鯖江田間、僅存遺趾、今在山東麓、（祝史橋本正恒曰、寛保二年壬戌徙祠于今所云、此時祝史橋本低儀開墾千五百步神田傳至于今矣、）神寶亦散亡、今

東都谷中一寺（失寺名）藏古代兜鍪、銘舟津明神之字、鯖江人觀之云、

案國史曰、十代崇神天皇詔以大彦命・武渟河別・吉備津彦・丹波道主、命四人、爲四道將軍、平四方戎夷、

愚按、孝元天皇崩、開化天皇立、崩、崇神天皇立、孝元帝崇神帝之祖父壽百十七、開化帝崇神帝之父壽百十五、然則以大彦命爲孝元帝之子者可疑矣、將遣四道將軍者、當孝元開化之時乎、

今圓山之西麓驛路名柴田路、近世柴田勝家受封于北庄、而開之云、柴田氏滅後（勝家之敗走也、其臣毛受正助者、稱勝家向敵、而戰死、事畔野史、考地形則疑似指此山、而戰未知是否、或云、正助戰死之地今庄之邊也、）本願寺門徒蜂起、（或曰、本願寺賊侵郡邑、在于朝倉氏紹祖、後柴田氏受封前天正二三年間）互相呑噬、此山蓋爲戰爭之衢、山上處々墳起之地、土人爲城壘遺趾、疑爲埋屍所、近世鯖江詩家號三太山、稱王子岡若王皐者本之、

昔者本願寺親鸞上人北遊也、詣拜神祠、因納所負彌陀佛一軀于神庫、土人稱背負彌陀佛、今現藏于祠庫、山之東北、城之東南隅一岡、特起草樹蓊々、古有一株偃蓋松、上人憩息之所、或曰白山遙拜所、三十年前樹枯、先是觸樹者數受祟云、至今土人呼其所稱一本松、

南北朝之時、足利高經（高經者足利尊氏之舅、後稱斯波氏、）據府中新善光寺之壘、新田義貞在于杣山、弟脇屋　助在三　、兄弟猗角、義助率

百五十騎略鯖江地、將築壘而逼高經、高經諜知之、率騎五百而防之、義助使卒放火、於瓜生・高木・眞柄・北村諸村、爲候烽報知義貞、義貞率騎二千趣之、大戰鯖江、高經敗績戰所蓋今三太山之地也、事詳玄惠法印【太平記】中、（【太平記】十九卷、新田氏落越前府城條下、新善光寺今正覺寺之地）

○白姫川（シラキカハ）

白姫川　後世誤稱白鬼女川、（田邊新【太平記】稱白城戸、）蓋姫鬼音同故譌、且略姫之旁爲女也、發源越之東南瀨戸山中、西流歷小倉八乙女、折而北過雛岳杣山西麓、至府中之東又西北、迤過鯖江之西、逶迤可十里、會諸水至于三國津入于海、古老傳曰、住古河歷王山之東、北至朝生津、又曰古以河爲郡界、西爲舟生郡、東爲今立郡云、舟之曰、此川古歷王山之東、今歷其西、在繼體天皇開三大河之時也、

雛岳　一稱日野山、以姫川經其麓又稱日野川者土人之稱也、故老曰、河之上流往古祭皇女白姫之靈、古有其祠因名之云、皇女未詳何帝之女、

一名和那美水河　（後世訛稱能美川）　一名追河　（舟之曰、能美川在追河之上流也、）

【萬葉集】和歌曰、「追河之、月之行衞者、三太之山、船津之鄉于御舟留無」中臣宣行和歌曰、「追河之、月之光毛、左也加于天、三太之舟津于、秋風會吹、」（舟當作船、【古事記】、

按垂仁帝紀曰、垂仁天皇之子譽津別皇子、年及三十不能言、一時觀鵠飛鳴問曰、是何物、自是始言、帝遣山邊大鷦令取其鳥、大鷦追尋其鵠、自木國到針間稻羽・且波・多遲麻・淡海・三野、遂來高志和那美水河、張網而取其鵠而獻之、一說云、上流曰和那美河、下流曰追河、

附考、按國史曰、二十七代繼體天皇、應神天皇五世之孫也、應神帝生二派皇子、皇子生太郎子、太郎子生彦主人王、彦主人王生繼體、一說曰、應神之子曰私斐王、生彦主人王、彦主人王生繼體、住越前、武烈天皇崩無後、大臣迎繼體帝而立之、時年五十八、崩、長子安閑天皇立、母曰目子媛、在越前時之妃也、安閑崩無子、弟宣化天皇立同母弟也、愚按、彦主人王者其大彦命之苗裔、而世住越前、而生繼體帝乎、將大彦命之子孫世住越前、而應神帝之孫彦主人王、代守此國乎、舟之曰、【日本書紀】男大迹天皇（繼體天皇）紀曰、男大迹天皇更名彦太尊、譽田天皇五世孫、彦主人王子也、母曰振媛、振媛活目天皇七世孫也、天皇父聞振媛顏容殊妙、甚有豔色、自近江國高島郡三尾之別業、遣使聘于三國坂中井、（中此云那）納以爲妃、遂產天皇、天皇幼年父王薨、振媛廼歎曰、妾今遠離桑梓安能得膝養、余歸寧高向（越前國邑名）奉養天皇、

又曰、今鯖江東南五分一村阿治滿野、草莽狐狸之區、其遺跡也、福井足羽祠祭繼體天皇、則足羽郡亦爲其遺跡乎、諺曲有稱花筐者、演繼體天皇仕女之事、曰帝初住越前阿治滿野、稱大阿都部皇子云、又鯖江東二里有粟田部村、將大阿都部之轉語乎、將誤粟田部而爲大阿都部乎、年代悠遠無史錄可徵者也、將博古之人有所考乎、書以竢後考、舟之按、據繼體天皇開三大河之大功、考之則大彦命子孫世爲北方之鎭乎、不然不得爲此事業也、又按、古代天皇以地名名者多矣、大阿都部蓋取粟田部地名也、

○七所清泉

一曰王清泉、（在瓜生村）二曰天洲湖清泉、（在五郎九村）三曰壺清泉、（失在所）四曰小浚清泉、（在定次村）五曰黑清泉、（在鯖江天女祠傍）六曰長泉池、（在長泉寺村）七曰鳥山清泉、

長泉寺在鯖江西北、寺因泉得名、隸白山平泉寺、古有三十六院、罹兵焚而亡、今存一院曰中道院、泰澄大師之遺跡、池頭崖上有靈地閣、俯臨池上、所祭慈惠大師也、山稱長泉寺山、

鳥山清泉在府中本多氏別莊土人稱花屋敷、本多氏第館土人稱御茶屋、聞之故老曰、戰國之時上杉謙信朝足利氏于京師也、織田信長築館于府中而享之、後大多氏就其遺趾而爲館、因于今稱御茶屋云、

鯖江之北古有東西汚池、東池今藩中士人第宅之地也、西池在鯖江西北隅、土人稱阿滿池周廻可五六十步、深潭漭沅、大旱不涸、舟津祝史傳曰、一條院正暦二年旱、有神託宣祈雨七所清泉、有蛟託之偶、有觀其形者、則病而不起云、

鯖江之地處處有清泉涌出、百年來人家鑿井歲增而泉漸減水云、

○佛　院

亨淨山萬慶寺　初名萬松寺、在鯖江之南、隸永平寺、基祖陽光禪師從藩第二祖瑞昌院君、自越後村上而來鯖江、永平寺承天禪師爲之訴官爲退隱之所、故以承天爲開基、以陽光爲第二世、吾藩君香火所、祠堂祭列世　神主、且一藩士人有死者輙葬此後山者、十而六七、墳碑纍々然可謂一藩之北邙山矣、

上野山誠照寺　開祖曰如覺上人、親鸞上人之孫也、父曰善鸞上人、爲五分一村毫接寺開祖、支院六七、有祖師堂・彌陀堂、嚴然一大刹也、在鯖江府館之北、越前四本寺之一也、鯖江誠照寺、横越證誠寺、五分一毫接寺、中野專照寺、　寺隸東都上野王府、院主例自僧都昇權僧正位云、

清光寺　在鯖江市間、女僧住持之、按昔者朝倉氏之滅也、義景二女遁而免、姉爲大坂本願寺教如上人妻室、妹爲尼爲庵長泉寺山下而住之、名宗榮、後死江戸、今長泉寺村中有女僧庵女僧庵曰攝政寺　其遺跡也、清光寺疑宗榮之乳姆、而爲庵鯖江而住之也、清光恐姆尼之名而後名庵也、寺中舊有松虫鉦鉆者、蓋朝倉氏之遺物、今在府中引接寺云、右二女之事、抄福井心月寺「朝倉記」、

眞泉寺　天女祠　在鯖江之東、聞之故老曰、天女像弘法大師所製、而　藩先君幕府拜賜之物也、故嗣君爲祠堂而崇奉之、令僧侶司祭、爲僧庵號眞泉寺、眞言宗也、祠堂傍有小池周廻可二十步、懸崖數仞、清泉涌出、大旱不涸、清潔無比、冷冽如氷、所謂黑清泉也、

不動院觀音堂　在鯖江市間、稱朝倉觀世音、蓋國初朝倉氏遺物也、京師東山清水寺門前有觀音堂、亦稱朝倉觀音、稱偶呼符合、是亦朝倉氏遺物也、

○諸　山

鯖江眺望雛岳爲最、當鯖江東南、相距三里而近、其間雖有山、其猶兒孫乎、秀麗奇偉神仙所窟宅也、可謂越南小芙蓉矣、鯖江一奇觀也、嶺上有山神祠、稱日野山權現、土人每歲以七月廿三夜而登之觀日出云、

正東之山爲帝釋山、一名雨降山、周廻三里、舟之曰、土人稱三里山、　山上祭帝釋之像、旱則村人負像而下山下、設祭禱雨必驗云、詩家號新粧山者、以山在新庄村也、相距可半里、秀媚可愛矣、上鯖江村齋允臧曰、或說【千載集】稱越中山者是也、和歌曰「雁加禰之、歸路仁哉、迷羅武、霞隔志、越之中山」舟之曰、新庄山之東麓有中津山村、祭國中神社、【延喜式】所謂國中神社卽是也、中山今曰中津山云、山中有佐佐內藏助遺墟云、五分一村亦有佐佐氏遺墟、

東北隅崛然鬱翠者爲文殊山、相距可二里、數峯峻削矗立、形不類他山、其越南尤異者也耶、或曰、有僧西行角原望文殊岳晴雪之和歌、角原文殊山麓之地名、　舟之曰、西行和歌「越于來天、富士止也以王無、角原之、文珠之嶽之、雪之曙」

西北連鯖江之地者爲長泉寺山、詩家稱長白山者泉去水也、山不甚高蹯踞平野、山趾陵遲連帶西北隈鬱蒼深秀可謂鯖江藩屏矣、

西南隅稱茶臼山、有城疊遺跡、

西面連嶺如濤、相距可六七里、西北最高峻者爲越智、名岳也、泰澄大師卓錫之地也、

正南有光善寺山、爲道元禪師卓錫之地、西南之野、鬱然特立如兜鍪如覆釜者爲本保山、以在本保村也、山上祭地藏尊像、土人稱愛宕地藏云、

若遠望奇觀、則東北連嶺上、四時晴日見一白嶺者、白山也、相距可二十里、

正北可半里、有琵琶阜、以形得名也、

東南衆山上竦然特出者、美濃冠岳也、未詳相距幾里也、其餘遠山奇秀者亦多、僅記一二尤者、以竢他日異聞焉、其他名山不關涉鯖江者、非所纂之意也、故闕如焉、

○產　物

其土上壚、掘之數尺下悉黃埴、絕無砂石、故宜播種、可一丈而青埴、其下砂石、故井泉潔冽、木則柿・栗多、他衆果能結子、而唯桃不多結子、間有結子者亦不熟一奇也、花木亦多品梅櫻尤多、唯北地暖遲百花不以次第而開、較之京師浪華、則大抵遲可一月也、土人有稱宇和美津者、一稱夏櫻、花似櫻・桃、子似山椒、漬鹽藏之、以爲好下物、「和名抄」爲朱櫻、地隔海六七里、海物不匱、秋冬鯖、昊昊、胡封切、音話、魚、鰈、火魚多、春夏棘鬣魚多、昊魚產于北海而不產西南海、鰈多、品味亦各異、石決明、海螺多、而絕無蚌蛤・牡蠣之類、海菜稱黑海苔若雪海苔、「佳味也、河魚亦多種」鮒絕無大者、而香魚初秋有至尺者、已上波及鯖江者、又合附記之、

越前海丹醬甲于海內也、舟之曰、原本雲丹塗扶作海丹今從之、　人人所知也、藩君例充幕府冬貢獻者、其精密可知也、

孫　舟之校

越前鯖江志　終

加能越中記

加能越山川記

加賀

○敷地川　敷地川は江沼郡にあり、常は所々歩渉也、大正寺近に敷地幷十町川、下福田二ヶ所に橋有、敷地天神後通北の川端を下れは、西濱瀬越鹽屋潟端へ行、道程一里餘あり、此川少々の出水にも船渡也。此源は東大日山より出る故、本名大日川と云。中にては山中川、下にては敷地川と云。大正寺より山中温泉へ道程三り川上なり、此川卯の方より湊迄戌の方へ流て、吉崎潟へ落る。又山中の上左より一川あり、上新保川出る、西潟は加賀越前入合の所也、潟の中に島あり、大正寺領也。四十年計以前、七面明神を勸請す、此潟の東山の根に、加賀吉崎村、越前吉崎村と云所有、僅其間小川を堺とす、此所に御館山と云、蓮如上人の廟所有。大日山は公領私領境目の高山也、頂上に池あり、長旱の年は此池にて雨乞をする也。西南は私領九谷の内木地屋村の山、東北は公領越前西谷新保村の山也、是山内十八ヶ村の内也、此新保村より越前船橋北の川端へ行を大日越と云、上下六里又東谷牛首村より七里、此二ヶ所の外尾小屋村・西俣村にて關所を越ると也、

（大日川）

右新保村より、大日峠を越て行越前へ出る、此道牛に米三斗程付る也。水の源大日山より西海まで川筋十三里餘あり。私領木地屋村に關所あり、番人百姓也。此川の湊を堀切と云、加州本吉浦より五里餘あり、南浦方續也、水戸淺き故大船は不入、百石程積小船入、去とも流ゆるき故、水戸口折々波にて打埋る事あり、常に船渡也。加州大正寺より女人を禁する、北は小鹽端立村笹原にも濱續也。南は越前川北郡北潟村と云川北十八萬石、金津西より船橋の北丸岡堺迄沼田足入也、又福井より三國湊江川端五里あり、雨繁き年水損多し、今は大形公領にて下郡也、大正寺より廿町川上へ登て渉瀬あり、川を越て左へ行ば山代の湯本へ一里半あり、右は此川を渉しに出水の時は大正寺へ廻る故、貞享の頃山代の南橋を造立す。橋端を通天と云也、茶屋二軒あり、又山中温泉は行基菩薩の開基、中興は六百年以前に長谷部信連の興立也、委細は山中藥師の緣起にあり。山中の五町川上に蟋蟀橋あり、此橋渡て川下の北四十九院村、此村を行は山代及自生山那谷寺觀音に行、山中より動橋本道よりは近し。那谷寺は一山巖石にして、古松枝を垂景勝の地也、往昔養老元年泰澄大師開基也、其后人皇六十五代花山院法皇御落飾後、此所暫く御閑居、此寺御造營、一條院度々勅使を被遣、其處

（山中）

を菩提村號す、其より遙に過て、寛永十九年大守前黄門利常卿御祈願の事有て、小松より善美を盡し、殿堂御建立、庭作り別所卜齋山上善右衞門被仰付、本道は小松より一里上え今江村、砦の西を通て南方へ行、左右に熊野杉を植、又今江村より一里半巽の方に粟津村溫泉有、此村より那谷へ一里半山續也。又動橋の橋詰東の小山を越て行是を豊行村通と云道近し、又山中より越前丸岡へ越る道二ヶ所有、山中村の奥九谷の内、下は風谷村上は大内村と云。（俗記王地村と書誤也）又越前領二ヶ村は下は市の野村道近けれとも悪し、上は竹田村と云、道遠けれともよし、四ヶ所に關在、越前市の野・竹田は足輕番也、加州風谷・大内は百姓番也。此二道の間に關所を除て通る陰道あり。大正寺より領堺木地屋村迄十里に余れり、大日山までは十三里程有。大正寺辰方山中谷の南に當て富士社と云山有、三里余在、加州宮腰其外西濱より晴天の節は明に見ゆる也。富士山に能似たる故に富士なと書なるへし未詳。

○動橋川　動橋川は江沼郡に在、泥川にて悪し、往還に同く橋あり。山代・山中湯本へは巽の方庄屋へかけて行一里に近し、此水源は大日山の北大士山より流出て潮津潟へ落る、此邊各足入也。潟より山迄八里、此潟の北濱に壽永年中木曾義仲上洛の時、平家の實盛討死の地、篠原にて彼首を洗池有、則右に依て清水潟と云也。三百有餘歳を過て後、遊行上人追善の時の土器とて多有。遊行廻國の時は定て小松多田八幡幷此篠原へ詣、此潟西國へ近けれとも濱地形高故潟水の遙に北の日末潟へ流行て、安宅湊へ落る、山より西海迄道程八里餘有、凡巽より乾の方へ流、日末潟は金澤大聖寺御領入合の潟也、今江村の西にあり。又東に木場潟有。

（山松）

利長卿、大正寺の山口玄番允正弘慶長五年御退治の刻、寺井三道山より松山砦へ御移御下知有之と也。此砦は動橋川上一里に近し、地形少小高く、松少々有、三方沼田足入、一方東山際也、那谷より山代に行道際也。那谷より山代に一里半道、細くして悪し、大正寺より此砦に二里餘有、是を松山の古城と云。

○梯川　梯川は能美郡に有り、梯は橋北に有村の名也、小松に橋有、安宅湊へ水流、水戸口、常に船渡、右小松より安宅浦へは濱田村に渡船在、水出る時は長崎村へ廻る。小松の西は沼田足入也、小松より本吉浦へ濱續、吉原村通二里。利長卿、大正寺御出陣の時分は、寺井砦より梯川の上落しの渉を御越、木場潟の東通、粟津村へかけて右松山砦へ御入と云。但落しの渉は小松より一里上、漆村能美村の間に有、此川夏中は何も歩渉也、總て川に大川の小川又

小川の大河と云事有、第一水流遲きは大河にても是を小川と云。小河にても水足早く深して海近き川、又濱にて海際淵の入川は小川にても大河の格也、用心すへし。木場潟の東とは、今の往還より東串野、矢田野を右に見て、東の山根を南方粟津道右松山までを云。此梯川は南北ともに大方五川也、水源は同郡大杉村、奥山より一川出、又一川北鄕の谷此川へ入、又南より一川西俣谷水鹽屋村の下にて落合、又一川は此川の奥の谷尾小屋村奥谷新保村山境より流出る、南北の二川小松より一里川上五合の橋下にて落合。尾小屋村・西俣村・大杉村は公領堺故關所有、百姓番人也。此尾小屋谷は上使廻國巡見道故、東谷阿手村へ峠を越て行、又小松より一里川上中村にて舟渡す。東方より一川原村川流出、此原村は佛御前住所也。此村より東谷別宮村へ行、小松より三里三坂峠とて上下一里餘の大坂在。此道は東谷尾添より吉野邊、西山能美郡より鶴來村市場へ行往還也。此別宮村手取川端に古より鈴木出羽守古城あり、但鶴來より小松へ常に往來は西燈臺村の舟渡を越て、手取川端南を下り、寺井三道山の南山際を通て、同村南の橋詰へ出て、小松へ行、道程五里石高にて道悪し、

○手取川　手取川は能美郡・石川郡の間に在。此兩郡は此川南北を境とす。此川の水源は白山絶頂谷々の水此川へ流出一滴も外へ不流、越舟橋川を白山の流と云は、本山の總名にて、權現は三所立給、北に大巳貴、南に別山、中に本御前也、別山は本越前大野郡の地と云へ共、此山の別當石礪代と云所、美濃地なるに依て、則美濃の別山と云。此石礪代より南濃州へ越る道有、其道に三國峠と云所有、何れの高山も二三ヶ國を跨事有故、必出入有。口傳、舟橋の川は此別山の澗水なれは、白山川と云習はせり。然れども禪定本山の水は四方ともに加州へ不殘流出。南方山内十六ヶ村は元能美郡の地也、天正初越前柴田修理亮勝家、下知を以て佐久間玄蕃允盛政、谷峠を越牛首邊より、石川郡吉野村迄兩度出陣有て、切取由、其刻川南今の十六ヶ村、能美郡は盛政に隨ひ、石川郡吉野村・佐良村・波瀬村市の原村・木滑村・中宮村・尾添村・荒屋村の八箇村は、一圓越前へ不隨由、依之盛政立腹して吉野村より奥、石川郡を放火して男女不殘切害す。此故に石川郡分兩年右八箇村亡所となる、尾添村は白山の麓にて山廣く、十里四方と云也。則山中を兩郡の堺とす。山大は石川郡、小は能美郡山也。卽中川は堺也、白山下尾添村・荒谷村御領替に付、寛文八年濃州御代官杉田九郎兵衞殿御出、加州より津田宇右衞門・園田左七・河北彌左衞門出る。これより、山内の

（白山内）

十八箇村公領となる。右の代地江州海津中村被遣、右十六箇村越前勝山御代官支配成しか、越前少將光通御代、福井に御預り、山内の庄屋加藤々兵衞一人に支配被仰付置、寛文十一年頃、故有て藤兵衞被追放。さて此川禪定より鶴來迄は巽より乾へ流。鶴來よりは坤を指て落、白山の頂より西海迄凡廿五里程有、大河故所々渡舟あり、湊・粟生・燈臺・笹原・笹谷・佐谷・廣瀨・上野、六箇所也、埴橋・山内・吉野・佐良・濁澄・中宮・尾添、籠の渡し六箇所有。凡中島村邊より中宮村迄道程七八里の間、兩岸不殘巖石屏風を立たる如にして、川幅僅所に依て四五十間に不過ども四時不案内の者步渉不成川なり、鶴來より此谷を河内の庄と云、鶴來より一里半上に左より一川直海谷、此間に直海峠とて其間百間計、急成坂在、冬雪中には必雪頽(ナダレ)あり、其時は廣瀨村渡をして上野村に掛て、吉野古橋を越る、直海谷に九箇村有、此谷筋口より山奥へ道六里程有。同橋詰より半道上て江津村川向へ公領西谷大日川一川落る。又此川上へ一川、同杖谷の水私領渡津左礫村の上にて落合、一川は私領阿手村へ西谷尾小屋村峙の水阿手村中にて大日川と落合水、大日山より出て大江津村に向ひて大川へ落。阿手村堺目故關所有之、足輕番人也。別宮奉行支配なり、此大日山は加州石川郡の南に當る、大山故

小松金澤の外より明に見ゆる也。此山の西水は敷地川へ落、東水は公領新保村へ出る。又公領地東谷八嶋村に大嵐谷小嵐谷二川出。此谷に材木雜木多けれとも、谷急成故木呂不出。二川は下太郎川、又上に一川鳳岸谷出る。凡此川は東谷の奥の谷也、南は越前舟橋川の打越、平泉寺より白山へ禪定道有、此山筋の下牛首村より勝山道を谷峠と云。道程七里有、四り上て三里下れは船橋川端へ出る。勝山・松岡・丸岡・福井へ行往還也。此峠水四り北へ下て牛首村にて右白山川と村中にて落合、白山禪定道は牛首村風嵐村より登る道程九里八町有、谷續き南東廣柳谷より上五六里の間、大谷四川出、近年加州へ出る木呂は此山々より出る、又一川禪定道五里上一の瀨湯谷より流出。又一川は本山の麓(越前、加賀美濃)三宝堂下手の水道へ流て出る。此外本山の水不殘風嵐へ出る、牛首村風嵐村は本御前の別當所、大已貴は加州尾添村別當と近頃於武州御定あり。又西谷に此外三川程流れ出る、此手取川の奥の谷水源は加州中宮山、河内川の續にして、禪定續妙寶山の澗水也。此山より飛州西山村々明に視える、此外河内川白山別當所の訴訟申上る、牛首村庄屋左助五郎右衞門・利右衞門・五郎兵衞・七郎兵衞・源右衞門、兩村に〆六人、中宮山の内七八ヶ所、大谷流左に一川瀨波村川下往還佐良村に埴

橋あり。又中宮村坤の方に一川、荒谷川是をめつこ谷と云此谷の水は本山千蛇か池、又龍頭の水出る、又一川中宮より一里登て小谷川橋あり、又一川尾添より一里半上て祓谷、此川は白山禪定人垢離を取川也、則白山道筋日新宮神前御壺の水出る、さるが鼻の北方にて大川へ落る、白山道筋略す。又此上に一川御瀧川是百廿丈の神瀧の水落流る故に御瀧川と云。禪定通美女坂近邊より視、則百廿丈一文字に落故、天氣合に依て、白布とも見へ、曇る時は或は白雲とも見ゆる希成大瀧也、禪定する者見る事少し、又少上に一川中の川と云、公領尾添村、私領中宮村堺谷也。此谷の東より出る大川へ落所僅に一町に近し、又其上に一川湯谷川落合、温泉は本川より十町程右へ登る谷也、手取川本源は河内川谷、妙法山より流出一川也。下にては谷々九川程あり、本川へ流出る、大谷手取川と號するは、此川、上代は金澤より今鶴來村へ通る道筋、山根に添て北西を流、金府の一里西古保川を北へ流て、八田瀉水と共に大野湊へ落、其節は此川上舟にて西へ越者は、白山道坂尻村の三町程上、獅岩の西にて舟渡す、則船を右の岩につなく。其節宮腰湊はなく大野湊一所也、依之寺中社を大野湊の神社と云、社地の跡大野港にあり、其後此川漸々南へ流寄、元暦の頃は上え往還、小山村松任の

坤方、宮丸村・柏野村の間三百石の少村なり。此橋邊を流下て鶴來の戌方西、松本村湊へ水流落と云傳、誠に鶴來より松本村の間其節川筋と覺て、島々の名在、土地薄く、石多下田也。壽永年中に木曾義仲北國行軍の時分、五月雨の頃此川甚洪水にて、諸軍渡り不得に付、其みぎり川北に、幸筮間の八幡宮座す、故に此社へ願書を献し、被祈、此八幡宮は大社にて、神名帳に載、石川郡十社の内也。然に感應有て一夜の内に瀨一ヶ所見ゆる、此時義仲も手を取りたりとて手取川と云傳。此瀨夜明て見れは、黒く見ゆるとて、其所を今に黒瀨川と云、高三百石餘の小村也、此川向の南方に手取村と云、高八百石の中村也。其後此川南を指て流、今の上口寺井村、三道山の根まて流れ行也、此手取川兩川端に名所・舊跡・靈社・靈佛、多雖有、山川迄を記て略之。

○犀川　戈川は石川郡河北郡の間に有、上下に郡堺入込の所有、中にて南北堺とす、何方も步渉也。金澤上口に橋有。長四十間、此川水源は石川郡遠山倉谷村・二俣村・奥村より流出る、先奥にて二川あり、西谷は二俣山、東谷は倉谷山也。川筋村より道程西谷は七里、東谷は六里有。此谷奥四ヶ村、遠山故御用の刻は山人足を出す。古は山林莫大に有と云とも、金山用事に伐取、又十ヶ年餘薪木呂を

伐出す、今は伐盡て無し。右四箇村は口は見定村白尾村也、奥は二俣村・倉谷村也。西谷東谷の間の高山、東に金山西に銀山有、九十年以前に山盛なる事有と云、今は曾て金銀不出、金山の續戈川三方礪倉山、此二の高山晴天の時は、戈川橋より見ゆる。此四箇村は無高故右より地子銀幷熊の皮二枚上ると云、其皮は今は赦免也。又六月朔日金城へ此谷より氷を献す也。西谷大瀧を上れは赤犬と云高山あり、此山續は鶴來の奥、瀬波山千丈か平と云山つゞき也。西谷ともに上にては其間僅一里に近し。又一川は水上谷二又村に落る、又下にて一川内川末村の向にて落合、此水は堂村後谷村山々より出る。此兩村も村續無き遠山にて金澤へ五里、毎日男女薪賣に出る、大雪の時は道に雪頽有故、西方鶴來へ一里余山越にして出る。其節は金澤街も鶴來通にて、二日掛て歸る。戈川西谷大障子谷東の内左の小谷に自然に生る菊有、依之戈川の河水を以て造る酒を菊水と云。古より此流を呑て長壽を得ると云傳ふる也。此菊花小く黄色也、植て試に金澤にて數年不生也、此川宮腰より金澤へ二里半、金澤より倉谷迄七里、西海より水源迄十六七里有、右兩村の山々より此川へ落る水十八九川有。

○淺野川　淺野川は石川郡河北郡の間也、常は歩渉也。金澤下口に橋あり、長五十五間、又四町下に小橋あり。此川奥の谷は河北郡横谷山南戈川谷の北堺日尾村山堺より一川出、又一川湯涌谷、此村に溫泉有、金澤より三里、又東の方石川郡曲村河内村、奥山より一川流出、湯涌へ渉瀬の上にて落合、又刀利通横谷村より一川、是は刀利道添て流出、又一川金澤より二里登り、東の方内尾谷より出る、又東に一川折谷川出る、是を葵池谷と云、又一川金澤より三里登て、白尾川市の瀬村の上にて落合。此川東は畠尾谷、西娚杉村、谷流て白尾村の上にて落合。又一川は河北郡五箇村領の尾山より出る、此山は篠竹多し、十月十一月の間に筍掘出す、江郡へ上るとあり、此川右谷々より出、下往還の内八田潟へ落て粟ヶ崎橋下を流れ、大野湊へ出、總て此潟へ落川第一淺野川、第二長屋川、第三森下川、第四津幡川、又御門谷是を奥津川共云、矢田川とも云也、此外金澤より津幡邊の小谷不殘此潟へ流入故、洪水にては此潟迄度々水損有、山より西海まで六七里。

○森下川　森下川は河北郡に有、歩渉なり、往還森下村に橋有、金澤より一里北也、此水源は同村二俣村より紙を出す一川、奥山醫王山又田野島村奥山白兀山西平の水、此白兀山は越中犀川邊に越る也。又一川戸室山西平の水流出て、二俣村中にて二川落合、小原越の谷へ添て流出。此北

に一川小武御林廻、一里餘の水は、横瀬村橋へ出て本川へ落る、又北より一川淺野深谷水出る、又南より一川涌波谷の水不殘此川へ出て、不動寺村向南にて落合、森下橋より流れ、八田潟へ落る、下は泥川にて悪し。總して津幡より森下の西潟端への間足入也、山より潟迄五里餘有、潟長南北二里半、幅廿町深一丈二尺より八尺程有、鯉・鮒其外魚を獵す。

○津幡川　津幡川は同郡に有、所々歩渉成共、泥川にて足入、少にても出水の時は歩渉成がたく、又廐田村の東橋有、潟端常に通無し舟渡也、津幡より潟迄一里に近し、潟口を舟橋村川尻と云。此川上凡四川有、一川は津幡村より十町左倉見川落る、則杉の瀬橋有、又南より一川松根谷、是は此川の奥の谷なり、又二川倶利伽羅山の南北より出る、南谷の上藤俣村・下藤又村より竹橋の南を流て、大坪村にて落る、又北谷竹橋村中橋を通て、右南谷と南にて一所に落て本川へ入、松根谷は越中安江邊へ越る道、常に牛馬多通故道悪し、猶瀬の渡を越て宮野村を通り、右松根山南の端を通て越中末友村へ出る。松根砦山に一本松有て、森下の此方谷の出口其外河北山より能く見る。又同所の南松林有、是は納年村宮權殿と云、松根砦は天正十二年越中佐々内藏介成政、加州へ出陣のとき、加州より築之。又朝日山の砦に村井氏を置、此砦金澤より四里に近し、往還は今町村の南より山道を東へ行、朝日村の東の山也。實は化生村領柴山場よき所一乗寺砦の向也、堀土居形少々見る。八講村砦を舛形山とも云。又一乗寺砦とも云。近邊にて嶮岨の高山。右朝日砦の向、前に云倉見川は、七里村鳥越砦の打越南より出る。此砦は加州方より御築也、成政能州末森へ出陣の歸り、津幡の東山の内倶利加羅邊に人數被引取時、主無き砦と見て、味方寺嶋兄弟を殘置、翌年の秋秀吉公越中御發向の刻即時に落るとも也。右谷の水八田潟へ流出るなり、山より潟まて道程四里半余有り。

越中

○小矢部川　小矢部川は礪波郡に有、小矢部村は今石動の少川上に有、往還石動に橋有、水出る時は橋の北に舟渡有、伏木・放生津高岡・木町邊より長舟に荷物を積て此橋下に引上る、又下りの舟も同し。此川の奥の谷は同國刀利村五ヶ所有、此村より五ヶ山へ越る、樗尾峠より一川流出る、又福光・井波・城端二ヶ所の間谷也、故に枝川多し。金澤より飛州高山へ陰道あり、此刀利村通也、淺野川湯涌道を登て、河北郡横谷村より刀利へ掛て、右峠より五ヶ

山の内赤尾村の關所、又飛州へ入椿原村の關所、右兩關を通て行、是を西道と云也。金澤より赤尾村迄十三里。又赤尾より飛州高山迄廿里程、合て三十三里程有　高山へは此庄川の南東を指て行也、又本道は礪波郡城端の奥二つ屋村小瀬峠通也、又本道石動より中田・水戸田・城尾へ掛て行先年高山在番道也、一川は小瀬峠水、一川は瀬戸川一川は原川、一川は大井川、此川礪波一川は萱谷川、此谷に木葉石あり、取來れは必大風吹と云也。此山頂に池有、繩池と云、旱には此池に雨乞する也。一川は虵喰川、又一川は院宣川、各小松の下にて落合、又東に東城川、一川は又井波東西の谷水一川、此川各上津村にて落合、一川澁江川、安居道石坂新村の東を流て、埴生の下にて大川へ入る。根本此川は金澤より福光越、小又村より出る。一川長坂の下一里、塚本砂川は千石村も加州谷村より出て小矢部川へ近く落、一川は今石動半道乾の方、氷見道上向田村巳の方、小撫川出る。同往還に橋有、此谷を宮島谷と云、村數多、此川上にて一川、但一川は東谷森屋村、一川は栗栖村、此川往還橋の東にて近く大川へ落る、上下泥川にて少にても出水の時は渡がたし、此谷の奥は能州口郡、牛首村・河井村、又加州高松寶達邊へも出る、能州より今石動へ越る道也。一川荒俣川、古は千保川へ水多流、故此川水多し、近年入川無き故千川也。其外東の用水清水川石動より高岡往還にて七瀬程渉る故冬悪し。此川々下は高田村にて小矢部川へ入、又一川會部川、是は戸出村近邊の清水にて源なし、和田新町の南を流て西は大源寺村にて本川へ落る。此川の鱸は名物也。又一川西山能州堺同郡澤川村より流て岩坪村の北にて落合、一川は千保川、此川は高岡入口橋の下を流て、下は守護町の向にて本川へ落る。此所に渡舟在、是伏木・守山・氷見抔への道也。

○庄川　庄川は礪波郡にあり、庄川とは谷口の村名也。水源は飛州高山の西、北陸第三の川也、飛州の東南西山筋より御領五ヶ山谷を流れ水無村より出る梅川と、下千納原村少下にて落合、此川筋十里程有、飛州にて東神通川と庄川と二川の水源は其間二里餘程有。此庄川は飛州にて山深き故第一此川へ大材木多出る、本川へ飛州にて出る谷々大方、東方一川黒　川、又一川右に寺つき川、又一里半下に一川尾土川、其下に一川二里餘下て大日川、二里半下て一川、荒谷川、又三里下て西の方飛州椿原村の北桂川有、又其下御領五ヶ山赤尾村關所の外に一川有、是を堀川と云也。飛州越中堺谷より出る。赤尾にて大川へ落る　此谷は加州と越中の堺に有、此水源は加州白山續中宮の北續瀬波山千丈ヶ平打越東より出る。此堺谷往還よ

り一里程奥小村川を境て二ヶ村有、越中葛村南一ヶ村、飛驒葛村兩村山家八軒有。此村より金澤へ燈樺を出て商賣す。この赤尾關は五ヶ山東西の惣谷を此關一ヶ所にて堅たる物也、川東に往還無し、東西村々籠の渡の外に道無し、金澤より刀利を經て赤尾へ三里、又赤尾より廿一里合て三十三里、金澤より高山城下まて也。惣て高山へ越往還四道有、此道は小道なれとも諸方へ不知陰道也。凡此庄川は飛越兩國にて二十瀬計谷々落る、又五ヶ山東西の間大河籠の渡七ヶ所在、會山村・奥津村・猪谷村・田向村・細嶋村・中田村、渡る者籠の渡の外渡事不成、鳥ならては翔かたし、又此川に上下橋四ヶ所あり、五ヶ山の内二ヶ所千納原村東西、下は大門新町能町に橋有。此川上を庄川と云、中にて中田川と云、枝川を高岡にて千保川、水出時は大門橋の西枝川舟渡在、能町の橋は放生津・伏木草嶋抔への往還也、水戸口伏木に渡舟二艘あり、此川筋所々居繰の小舟を以越、不案内の者歩渉不成川也。庄川へ礪波郡射水郡西山谷々不殘小矢部川へ落て、伏木の上にて庄川へ落合故、北陸の中川也。往昔源義經奥州下向のとき、伏木湊にて千保の袴を舟賃に被出たる由云傳也。此湊の向に放生津浦と云有、（金澤より十四里）漁夫多し、八幡社有、藤原家持受領の刻、此八幡にて放生會を執行、故に所の名とす。此湊より西北の方氷見浦まて三里入海也、此間に名所多く有、磯海も此續也。又氷見の北能州口郡嶋廿一ヶ所有、七尾湊へ續入海也。金澤より氷見浦へ十六里也。能州奥郡三崎浦へも浦續也、氷見の辰巳に潟有、布瀬の湖と云也。鯔（ナヨシ）名物なり。此外唐嶋・岩崎・奈呉の浦名所有。此潟の水は氷見町中にて此海へ落る、橋有、庄川水源の山より北海迄道程四十里程有。

○和田川　和田川は同射水郡にあり、歩渉也、今石動より富山往還中田の東に有、此水は婦負郡山田村の打越辰巳の方より出て、芹谷野西南東北を流廻て圓池（ツブラ）村北橋有、關口村にて庄川へ落入。芹谷野向に天正の初神保安藝守氏長數代古城跡有、上杉謙信此芹谷の城を責る、其以前父爲景敵の謀計に應し、此野にて打死也。依之越中は先祖の敵國成とて謙信芹谷野并魚津天神山迄兩度出陣有と也。

○神通川　神通川は新川郡婦負郡の間にあり、北陸第二の大河也。第一は越後新沼川也、此川の水源飛州高山東より二川出る。宮川、野川、又一川は三日市川流る。奥の谷は城下の坤方西峠川一川出る、此川の中に神通と云所有、依之川の名とす。高山より越中富山迄道程三十二里二町有、高山城下より所々城下へ各三十里餘有、右の川川城下乾方にて流合、高山北往還東猪谷道東より一川出

る、是を古川と云、又湯谷共云。此川は信州堺飛州地蒲田の湯谷より出て、越中猪谷御關所の南往還高原村にて本川へ落合、同所に橋有。此川の水源は信州高山鎗ヶ嶽邊より出る、往還より山迄八九里有、又一川百瀬川と云、是は五ヶ山の内百瀬村の山より東神通川へ流入。此谷の内十里程上にて百瀬山林多し、總て五ヶ山の水は不殘庄川へ落れ共、此百瀬川は庄川の内梅川の東九里塔村の打越より出る、又本川筋婦負郡の内數川流入、西岩瀬村の奥より一川、又一川東吉野より出る。右二川の間に高瀬の荒川在、則長原村の向にて落合、又一川は覺入谷より出る、八尾村は富山より八里に近し、婦負郡山の内の市場也、家三百軒餘有、又一川は五味谷川出る、是八尾東良の方にて落合。御領熊野川此川富山の南を流れて坤の方にて落合、一川常願寺川は川筋用水の餘水流、此水高瀬口より入て袋村にて落る、井立川と云、此川は新保村の上より入て下は古木町の下にて大川へ入。常願寺水西方に一川有、赤井川と云、此川は富山金澤の領堺也。上は御領粟田村より分落る一川、荒川新庄入口に橋有、此川大場村流杉村より入、此川へ入川すれは嶋の内に水損有、此荒川水は富山金澤兩所の用水なる故に、川口必至と留る、事不成川なり。此水奥田村東にて右二川共に大川へ落

（道州飛）

る、此神通川如此谷々多流入故、北陸の大河也。富山の北に舟橋有、舟數六十六艘程入、下東岩瀬の湊に渡舟有、御上り下には舟橋也、舟數百三十四艘、水高き時は百五十艘より百七八十艘入、北陸七ヶ所の大河有、略之。飛州高山へ行道越中に四道有、西に一道今石動より中田村水戸田通城端村へ掛て八尾の下まて行、婦負郡川端七ヶ村を通、加賀澤村關所を經て、三ヶ河原村にて神通川を越、向牧戸村へ行、又川端八ヶ村を通直に高山へ行、此道は先年加賀より在番道也。又一道八尾村通西山の内を行、此道は富山領赤原村關所を越て、飛州切留村の向一本橋を渡る、小無雁村の東に渉瀬有。又一道は富山より野々市村陀羅尼寺村小黒村通、御領東川端十四ヶ村を通、御領猪谷村關所を通て、荒井村より高山へ入。西に一道加州より越中刀利に掛て行、是は陰道故記さす。富山より高山へ道三十一里十八町有。

○常願寺川　常願寺川は新川郡に有、常願寺は新庄村の東橋詰に有、此川の水源は立山より流出て、北海の水橋の湊へ流出る、往還水橋に渡舟在。大守御上り下りには舟橋也。此川上の内にて大谷川二有、左り正妙川と云、此水は立山御前眞砂ヶ嶽の流水。又地獄谷の水也。又右に一川湯谷川と云、此水は東南三谷水落合、高地中根川藥師

（立山）

ヶ嶽川一の帷子此三川流る。奥の谷は伽羅陀山一の腰越より出る。此谷の南山に溫泉有、夏中土民等入湯す。此溫泉へ行道松尾と云難所の大坂上下三里餘有。右南北の二川平岩の下にて流合、又南に一川金剛寺川、此水は内尾の水遠山有、嶺村へ出て流る。此村は御領又飛州堺也、下は水次村へ流れ出て芦峅村の向にて本川へ入、水次村關所在、百姓番人也。飛州并遠山への往還人を改、又南龜谷より北芦峅へ藤橋二ヶ所在。又一川は目乘谷より流出て伊勢屋村曲淵村の間にて本川へ入、常願寺川は本名立山川也。立山は日本の三高山なれ共、白山と違ひ山の内狹く、谷々不多して水流少故、北陸五六番の川也。夫故水橋湊川幅狹し、又每年六月立山禪定人川通行時は、富山より中市村高屋敷村を通、川上流杉村下にて、當願寺川を渡て岩峅へ行、岩峅は立山別當所也、此川水高き時は往還富山より新庄村の東の橋を渡て、高原野を直に岩峅迄登る、岩峅川端に堂三所在、此所に一宿して同所にて案内先達人を同道する格也。岩峅は立山別當所、立山は越中國主佐伯有若大納言の踏分玉ふと緣起に見えへたり、芦峅は姥堂の別當所にて文武帝の御願也、二ヶ所ともに御當家より各五十俵宛御寄進有、一川大岩川上は大澤より出て、下は新庄村西にて目乘川に落る。天正十二年十一月

廿四日越中國主佐々成政雪中にざら〳〵越の刻、此山の温泉へ入湯して日和を考、十一月廿八日の頃三州家康公へ内通の事あり。ざら〳〵越の事秘して別に記す。成政入湯の湯舟今に有、松板にて厚さ一尺計有、其湯舟は今の湯坪より一段上に有、此川山より北海迄川筋道程十八九里あり。

○加茂宮川　加茂の宮川は同郡滑川宿の南に有、往還近橋在。西の橋詰に加茂大明神の小社あり、水戸口宮の西、海に近し、依之加茂川の名とす、少々歩渉、山より西海迄十三里程有。此川は山奥千石村山より出る、此水源は御内陣又は劍の山の南谷堺の水也。凡此川は四名有、往還にて加茂の宮川、中にて小出川、上にて上市川、又眼目川共云。本川の南方に一川若狹川、辰巳東に一川大岩川、同所北谷に又一川白岩川、此三川上市村の坤方にて落合、此若狹川は座主坊布倉ヶ嶽より出る。此山は諸國に希也、如此急成一ッ山にて人登りがたし、新庄川其外水橋往還高原野筋より巽（タツミ）の間に當て見ゆる山也。則岩峅の上にて近し、又大岩山は行基菩薩彫刻の石不動の靈佛立給、此所を茗荷谷と云也。小松利常卿御代犬千代君、御祈願所、同村の内を以田地廿石のところ御寄附也。右三の川市村半里計坤の方にて此川へ落る。又此眼目山は右は唉華山と號

し、曹洞宗峨山和尙の弟子大徹和尙の開基也、號立川寺、在世の内奇特の事共有之、右の川水源より西海迄七八里有。

○早月川　早月川は同郡に有、歩渉也。魚津より道程五町程ある、住吉村の南也。出水の刻は川端南北村より川越の人足を出す、此川荒瀬石高く流早く、洪水の時は石を流す川也。出水には往還にて四ヶ所へ流分る、此故に渡舟不立、西海まで高塚村三ヶ村の間へ落る、山より海迄八里程あり。此水源は松倉奥山古鹿熊村より流落る。魚津より松倉道二筋在、各五里有。鹿熊村先年金鑿屋敷跡を小高にして田畠少々あり、松倉は遠山故人相猿の如し、竪炭を燒、蕨狗脊なとを取て經營とす。此村の道早月谷道よりは道惡し。冬は猶以通事難成、故に魚津巽方より宮津村の東の高山へ掛りて往來す、道三里半有。大阪にて嶮難也、魚津より峠へ二里半、峠より村へ一里有、深山にて雪深き年田畠不熟、捨る事有。椎名右衞門泰種松倉古城も此峠の西の續高山也。此城天正の初上杉謙信越中出陣の時落城、古は往來の人今の峰を通しと見えて、小山を切て總門を建たる也、古城の下西に切通と云所有、此川は立山劍ヶ嶽の西筋より出る、松倉山に猿多く秋田畠を荒す、山より西海迄七里程也。

○片貝川　片貝川は同郡魚津宿の北に有、所々歩渡にて流早く、石高く荒瀬にて渡舟不立、出水の時は南北の村より川越人足多出す。此川も立山劍の山の北水也、此劍の山は御前御内陣より嶮し、入倫通難し、山の容子及を立たる如し、此山の水其外蓬澤村幷大菅沼と云處より出て、嶋尻村東北を流廻て出る。此山は早月谷より大材木多く、杉檜生茂る事如麻、山より西海迄八里餘あり、此山幷早月谷毎年の秋御定有て魚津薪木呂等を伐出す、此川辰の方より乾の方へ流。

○布施川　布施川は同郡にあり、歩渉也。此川は笠破村の奥山より大海寺野の北を流廻て出る、石田村上にて片貝川と流合。山より西海迄七里有。

○黒部川　黒部川は同郡に有、此水源は上にて東西二川也、東は信州西方より出る、又南の一川は越中・飛州・信州の山堺赤牛と云處より出る、内山村の外村無き故、山の樣子遠山々廻の外知者無し、所々夏歩渉、此川南方より橋迄は北へ流、又橋の下よりは西を指て流、荒瀬にて渡舟無し。古より黒部は四十八ヶ瀬と云傳たる大河也、少にても出水のときは往來人日泊して及難儀故、萬治年中三日市村より泊の間に浦山村舟見村二ヶ處に新宿を立て愛本にはね橋を掛らる。長卅三間あり、此橋は日本無双の大棧也。此川立山の東下を流通る、高山急成故足下を流す、立山より河水見えへす、南北川筋は遙に見え、水源より西海迄十七八里有。此川古は陸路に流出て三ヶ所へ水分れ流ると云へ共、今本川筋は芦崎村・東狐村の間に落る大河故洪水の刻は今も三四ヶ所へ流落る。此川は東西共に越中山にて、他國と入合且て無し、谷の内杉檜等材木多し金澤より遠き故材木出る事無く、他領の如く成行可惜、此川上に信州へ越す陰道あり。口傳。

○小川　小川は右同郡舟見村の北にあり、歩渉也。此水源は蛭谷村奥小川の湯谷より流出て、春日村・赤川村の間に落る。此川上往還にて小川と云、濱にては赤川と云、鮭の名物也。

○境川　境川は同郡に有、歩渉也。此川は所々に稀成荒川にて、石高く瀬の早き事瀧の如し。西海に近し。此川境村の北にあり。御關所は村中に有。此谷の出口右の山は御領大平寺と云、往還より道程十町餘有。又左に有村は上路村と云、越後高田領也。往還より同道程卅町有、道より海迄五町あり、又山奥水源より西海迄四里程あり、此谷の嶮と云事人倫の通無く、鳥ならでは翔かたし、不案内なる者は小川故度々過あり。此川は小川なれ共大川の格也。往來の人可氣遣、境村の西向は能州奥郡小木の港也。海上二十五里有と也、萩村は宇出津より一里半北なり。

能登

○近江川尻川　近江川尻川は能州羽喰郡に有、常に歩渉也。出水には必す例の入川にて過有、海際の砂川は何方にても例の入物也、加州高松浦の北に有、又同所より十町計北砂山に加州・能州境目の所に大石を山の根に立置、海より三四町東にあり、此川は一川は同郡上河井村の奥牛首村より出る、又左に一川は瓜生村より出て上河井の上にて落合、又一川寶達川落合、二ッ屋村より牛首村へ掛て行は、越中宮島谷通今石動越の道也、此は能州今濱邊、又加州高松邊より越中往來、又右上河井村へ登には巽の方に加越能三ヶ國の境山、則三國峠と云也。形一里塚の如し、土民の諺に三尺の繩を以て牛を繫、三國の草を喰すと云也。此境山加州は吉倉村、能州は上河井山、越中は荒間村柴山也、又一川寶達山より出て口口村にて本川へ入、此川出水にて渉不成時は二三十町計上夏栗村の向に渡瀬あり川上にて渉てよし、今濱村より南の在也、加州高松へ出る道二ヶ所有、此川少にても水出る時は往來人の渡るを見て可渡、不案内成者度々過有。今濱より二里十五町行て一宮有、右の方半道北に金榮山妙成寺有。

○子浦川　子浦川は同郡今濱より一里北七尾道也、能州内の浦又外海は此今濱より東西へ分る、同國外陸地は同所路塵濱村羽喰村へ掛て行、此二ヶ村は羽喰川の南北に有村也。又内の浦七尾往還は今濱より子浦村飯山村へ掛て行、此川の水源は子浦越の南谷公領原村山、又私領當熊村山より西を流て出る。此原村越中堺能州寶達山の北にあり、大村にて杪多柴多し、此水子浦村の北より直に千路潟へ流入、此潟の水は西羽喰村へ流出る、此潟の北に大町村・金丸村御藏有、羽喰へ小舟にて一里川下にして加州宮腰浦へ廻る、此潟へ流入る川は今濱村より飯山の間東の小谷不殘流入、西海より潟まで一里餘、又潟より山迄五里有。越中氷見より能州へ越る道四筋有、子浦越飯山越・高畠越・荒山越也。此道筋四ヶ所共秋九月頃より明る四月迄道大惡し。

○飯山川　飯山川は同郡にあり、七尾往還歩渉也、同村南の端に有、又同所巽の道より十一町奥に當て洞谷山永光寺あり、瑩山和尚開基也。此川は越中氷見庄輪田村打越より出る、惣して能州に大川無し、國幅狹故也、口郡にて廣所四五里有。奥郡にて或三里或一里餘有、能州は加州より北へさし出る國也、去共海陸山里共に自由の叶ふ小上國也。惣して一國土地山奥廣所は必大河有事自然の格也、同所の北に潟有、千路潟と云、長廿六町幅廿町深七尺より一丈程有、鯉鮒なとを取。

○二の宮川　二の宮川は同郡鹿島郡にあり、西海にて川尻川と云、田鶴ヶ濱、又入海へ落る、又此川へ入、半郡芹川村より北の谷々不殘流入。此川の水源は天平寺石動山へ一里廿町、谷々の水流る、上代石動山は寺院一千ヶ寺程有しと也。天平年中泰澄大師開基也。田鶴ヶ濱の一里北に七尾より湧浦溫湯へ行道に、松百村に入海五十町の所を長四間の橋を以て渡す。正月同所より鮪の鮨と云名物を出す、此邊勝景所也。田鶴ヶ濱に長家代々舘跡有、北に同く菩提寺東の山にあり、東嶺寺と云也。加州より穴水中居邊への往還は、高畠村の南西より、北を指て往來す、七尾より石動山へ三里有。麻生村・菅澤村より山の原を登る。天正十年の頃石動山は越後上杉謙信方に付て信長公依御下知、越中より佐々成政、能州より　利家卿御兩族を以て責玉ふ故、早速落城す。其時衆徒の張本人般若院・寶達坊・萬藏院三人を講堂の庭前にて被害、其頭大柴峠に被掛。其節當山の般若院と云惡僧南方荒山に砦を構戰て討死す。砦は本山寺院より一里に近し、此砦西南は甚絕所にて山高し、北は高さ半町程、東は一町程有、北に荒山越の道砦より半町程下に有、此砦は無双の所なれ共、水無

き事一失也、砦の平東西十間南北廿三間程有、餘は略之。

○羽喰川　羽喰川は則羽喰郡に有、此川は今濱より外通奥郡に通也。羽喰は此川の北に有村の名也、此川は千路潟より流出る、此潟に子浦川、飯山川、其外東の山手境谷の水不殘入、往還常渡舟也。此川潟より西海に水流間一里餘あり、此水源は子浦飯山川の所に委し。此川の北に在村を羽喰村と云、南に在村を塵濱村と云、奥郡へ陸路往還は今濱村より此渡をして西海端を通る往還也、濱に瀧村石多し、右山手に日蓮宗瀧谷金藥山妙成寺へ行半里有、日像上人の開基也。

○神代川尻川　川尻川は同郡に有、南方は大念寺村、神代は近在の村の名也此村の東に福野と云少の潟ありて瓢を出す名物也、幅廣し、川北は公領阿部屋幷私領川尻村也、川口少の湊にて往來舟渡有、風に依て百石積程の小舟は入、此水源は辰巳より出て西の方にて西海へ落る、此谷を堀松谷と云。阿部屋より内の浦田鶴ヶ濱への往還にて五里有、此川は同郡佛木村奥山より流て、代田村より道へ添て流故、所々にて橋を渡、又左より一川直海谷より出る、此谷は中道の東より出る也。阿部屋より富木への往還内外二道あり、外を福浦通と云、此湊は北陸第二の大湊にて、何風にて如何樣の大船にて無障入湊也。中道は泥にて雨中別して秋冬惡し、其上四里の間松山の内に人家無し、別して雪中に惡き也。又外は夏通ひ冷く道善、冬は風烈通ひいと惡し、然とも富木迄は九ヶ村を通る也。中道は左右の村へ半里餘程宛有、富木の南近く山下に荒木と云所有、波着る時は往來難成故、上の山へ廻る、此所の北に松ヶ下と云處有、小舟を掛て善、然共北風は善、西南風惡し、此川山より西海迄道六里餘有。

○富木川　富木川は同郡に有、富木は惣名にして鳳至村と云、此川本名は貝田川、上にて河内川、下にて富木川と云。外浦より鹿島郡熊木の鄕中島村邊の往還也、貝田村在、又富木の入口二ヶ所に橋有、此川山川切岸にて歩渉惡し。此水源は鳳至郡河内村の奥山より流出る、川筋道程七里餘出て西海へ入、富木より鳳至郡劍地村へ行、此村に針金を引半途に大福寺と云高山有、麓に眞言宗觀音堂あり、山上に一本の枯木有、此山は海中へ少出たる地形故、晴天のときは加州浦所々より見る。

○劍地川　劍地川は奥鳳至郡に有、歩渡の小川にて、同所の南村端にあり。此水は馬場村の奥より出て、同所の坤方にて西方へ入、山より海迄一里有。

○阿岸川　阿岸川は同郡に有、歩渡也。此川を北野川と云東方小池村奥より流出て、腰細村の西にて海へ入、水源

より西海迄二里に近し。

○道下川　道下川は同郡に有、歩渉也、上にて寺口川、下にて黒嶋川と云。惣持寺の東荒屋村奥山より中居村へ行往還に添て流出る、又浦上村よりも一川出る、所々橋を渡る。先年より此道は上使内の浦より外へ巡見道也、寺口より中居村へ六里峠坂道也、冬道悪し。此黒嶋村より北は九ヶ村を西海七浦と云、夏刺鯖を切出す、名物也。

○長井川　長井川は右同郡に有、鳳至郡輪嶋往還也。浦上村より峠へ登て縄又村・丸山村・啼木山より東の道へ添て流出る、坂下にて輪島近北海へ入、此川山川故切岸にて渡悪し、小川也、輪嶋橋有。

○輪嶋川　輪嶋川は同郡に有、輪島は奥郡にて大所也。漆細工幷素麺を出す、名物也。同所入口橋有、下にて輪島川、中にて山岸川、上にて熊野川と云。同村奥山より出て北海へ入、海迄四里半。

○大川　大川は珠洲郡鳳至郡の間に有、常は所々歩渡也。西海水戸口大川村時國寺村に船渡有、此川能州奥郡にて第一の大河也、故に大川と云。總名町野川と云、中にて柳田川、外浦に小田屋村より内の浦宇出津村への往還也。此水源は南方當熊村幷河内村奥山より出る、西海より山迄七里有、此外谷々出る、又柳田村より北東へ掛て内の浦松波村へ山道あり。

○飯田川　飯田川は珠洲郡にあり、歩渉也。小川也、此川は飯田村奥山より流出る、山より東海迄二里に近し。

○鵜河川　鵜河川は鳳至郡に有、歩渉也。鵜河村中に橋有。此水は八田村邊より出る。山より東海迄三里餘有、此村の南中居村有。猶南鹿島郡穴水村に、長谷部信連の菩提寺有、眞言宗來迎寺と云、信連の像有。同所より七尾への陸道豊田村・笠師村・大津村・鹽津村・三引村、此村に赤倉山有。眞言三ヶ寺有。長家代々造營有、田鶴ヶ濱村如此村々入海の廻にあり、此邊は景勝の地也、田鶴ヶ濱より川尻へ山越五里又加州への往還七尾道高畠村西を通る、劍山子浦通り加州高杉・津幡へ出る。

加能越山川記　終

金陵地名考

金陵地名考

金澤　成言　尾山　又御山共

御城天正の頃迄六條本願寺末寺有て、所々より參詣と云習しけるか、一揆の事有て信長公より佐久間立蕃を以て暫居城せしむ。天正十一年より前田又左衞門尉利家公御入城ましく〳〵ける。然るに文祿元年二月下旬利家公御國御發駕にて京都へ上着被成しかは、肥前守利長公に被仰渡、此御城を故垣に被成旨御意を請させ給ひ、御繪圖を御目に懸られ、土地を金澤に御持參有て、小奉行・諸役人・郡の人足等觸させ、戸室より石を伐出させ、夫より御取立山城に築かせ、惣構にて二の曲輪本丸のまわり隍を掘らせらる。扨石垣を被築立させ給ふよし、東の方二度まて崩れ入、幾千人の費と成、利長公も御難義に思召けるに、上方へ聞へけれは、利家公筥原出羽をたて、委細箔錢早速金澤へ下り、右石垣つかせ可申旨、利長公へも被仰遣。利長公其儀ならは、出羽承りの通りつかせとて守山へ御歸城有。出羽畏て石垣八分通築立外緣をいたしつき立成就しけれは、利長公以の外御立服にて、高石垣に壇を付たるも不過之思召けれ共、來の上は是非なしと御堪忍被成ける。二三の丸西の丸迄人持並居て屋敷相渡り屋形美し敷立られ江戸大阪に引續き名城とこそ申ける。

御本丸（東丸、鶴丸、三の丸、二の丸、玉泉院丸、新丸）數百丈の石垣いづれの匠か倒出せる、青巖のかたち其中に龍樓鳳闕玉を瑩きたる三重二重の御櫓丸として、朝日明れは隱々として黃雲より入粧ひ、ひな鶴の千代のくもを舞あそへは、とふ〳〵たる御池の汀に萬歲をうたふ龜、ゆふ〳〵たり。御內郭・御本丸・二の御丸より至り、名木奇石泉水の類ひ勝て計へからすといへとも、諸人の知所なり、何もされは記す計とも其恐れあれは是を殘す。

石川御門、河北御門、土橋御門、金谷御門、早鐘（三の丸左久間玄蕃居城之時鐘なり）、大將籠（二の丸極樂橋、二の御丸埋御門の外にあり）組屋坂、石川御門の方より、公事場より修理善之間へ出る口、此所に舘紺屋とて御染物仕者ありしと也。其子孫今材木町へ出居る、おちよほか池、辰巳御櫓の下に有、昔本願寺末寺の有し時、御堂坊主廣濟寺居住しける時に、おちよほといふ女有朝夕水汲たる池なり。

利長公御代まて此水を用ひしなり。

稻荷屋敷、御城築し前より、辰巳御櫓の下升の方林の內也、御城御普請の時分稻荷橋邊明地に勸請有之、其後眞言宗眞長寺境內へ御預け、其節眞長寺は古寺町構川端、今の富永

權佐屋敷地、[illegible]其後野　後へ所替也。
時の鐘越後屋敷圍の内に有、元祿初の頃迄も權現堂の内に有しなり、黄鐘調にて長久の基也、越後屋昔富田越後の住宅なり、此圍の内の空地に岩時鳥と云石あり、此邊にて小便等の不淨を行へは、卽時に亂心すとなり。此石は昔此處に越後居住の時分安置の摩利支天宮の下にありし石也　金屋御廣貳、此所昔高山南之坊と云侍の居宅と也。高山南之坊は貳百石に而加州御家來成しか、慶長の頃諸國切支丹宗門御制禁之時、此高山も宗門なれは御吟味有て宗門替たる者は異國へ送られ數所此者宗門替成らすと答ふ。依て妻子一所に慶長十九年三月異國へ送らる。南之坊嫡子に十二郎とて美少年の能をすきけれは、其頃流行歌之能を見るより、なく高山みなみゑかけすの二郎を、かやしにうたひける、十二郎妹を横山大膳へ嫁の所、南の坊より斷有て一所に異國へ同道也。此外甚右衞門坂の下に有し傳高山も同宗に付、異國へ送られし人々は、内藤德庵貳千石、宇佐多久關千五百石、早川宇兵衞千石、此木田權兵衞五百石なり、各宗旨に俸祿を替て異國へ送られけり。此屋敷跡は神護寺邊數ヶ所なりとて、甚右衞門坂、昔此所坂の上に笹塚甚右衞門とて武士有けるを御合力知として、利長公より二百石宛れしか、後々奥州へ退去有也。テンシヤウ屋鋪、利長公御慰にテンシヤウと云し異國人を召置れし所と言。又貞乘と云彫物師居たる故貞乘屋しき共云說も有。會所本願寺末寺御堂坊主有しなり、下臺處本願寺末寺の時御堂坊主有しとなり。
御作事所津田玄蕃先祖の舊宅なり、其節玄蕃は御客分也と云、御算用場前田内藏允居宅にて有しとなり。此子孫才川石坂に有り。公事場昔は淺野川懸作より味噌藏町入口、不破權左衞門後に有しと也。其後今の新堂形の所に被移、町會所寛永十三年安見隱岐とて壹萬石の大名の住居成しか、隱岐重て不屆の赴有しに、能州へ流刑被仰付、此後普請會所。

金澤火事辨

慶長十三年巳十一月晦日戌刻雷電夥敷響き渡、御城天主に落ち燒上り風彌々薄卷なり。御臺所に火燃懸りて御本丸御新宅まで火失に及ぶ、南の提脇に三拾三間的場有、其外に櫻の馬場有、其外に侍町堂形え續て御城下にて、高畠平左衞門、同甲斐父子の屋形有、天主燒上るとひとしく石垣の上より利長公大音上られ、平左衞門〳〵と御呼被成しかは、平左衞門答へ奉り、其儘懸出御城中へかけ入、御脇きん倍臣の隔なく引廻し、御前樣幷女中引連興津内記屋舖へ入置、奉行其外女中は中川宗半の方へ置、二三の丸幷薪丸の

大名衆へ御父子共入らせ給ふ。火も半成りいかんして入らん、焰消藏へ火の紛入、とふ〳〵と鳴渡り、町中も半時計眞黑の闇と成、其後一度百千の雷のことくなり渡り、生さするもの頭も碎て魂消るかと覺へたり。藥の勢ひにて方々へはね付られ死る者夥し。前田作州屋敷の外、西方寺有、其屋敷へ長刀持なからはね付られ死る者あり。追付灰を取のけて、御作事組合、春は追付御屋形出來す。其時より御城に天守を除き、三階になりにける。其内に木村主計を江戸へ遣、利長公は富山御隱居被成度之旨御訴訟有て相叶、富山へ御隱居被成ける。元和六年申十二月廿四日夜、御城中御奥御次の間置圍炉裏の底に火殘緣の下へ火廻り、根駄板に燒付疊を通し障子え付けれとも、寢入懸りの時なれは、たれ人知る事なし。番人煙の匂ひをかき付、高聲に呼はつて、何も起しける所に、天井板の上にもえ上りけれは、下はさのみの火にてなかりけれ共、天井の上の火を俄に消へきやうなく、先御姫樣、若君樣、三の丸興津内記屋形へのかせられ、利常公は北の丸の山崎美濃屋形へ御入、翌日横山大膳屋形を明て利常公幷若樣方御入被成、大膳は下屋敷へ引越ける。御本丸表具方の御屋形の燒て外は燒さりける。明春年頭御禮に波着寺法印登城して御道具は不苦候、上々樣方御恙なく恐悅之至申上る。利常公仰には人も不損御道具の儀は無御構、何よりおしきは其方より上たる火防の札不殘燒たるかおしきと御意の所、法印申は、定て御身替に成可申にては御座と申上れは、左もあらんと御笑に成けるとなり。御作事奉行辻助左衞門、松江次郎兵衞初、奉行一々御領國は申不及、上方よりも大工人來つとひ、年内より御作事元組正月下旬に早立家になり、春三ヶ月に御障子襖唐紙の御好まて出來、四月上旬御徙移し相濟けり。寛永八未四月十四日大風に而天氣能世間さわがしき所に、巳の刻犀川橋爪淨土宗法船寺門前町二間の間へ火をはさみ燃上りて、法船寺の藥師堂へ付、夫より客殿くりへ付けれは、川原町一面に押來、風强く中川原の大橋を燒落し、寺町より東をさして總構の付越、堅町より燒拂總構の外の火籔の内長九郎左衞門山崎長門家に付、大家な札は仙石町堂形へ一面に火と成、煙くろして御城御本丸之上に人夥敷莚を以懸る、火の紛を防事、見るに氣も魂も消る計成り、後には黑煙有頂天にたな引、城の形も見えず、然るに奥村河内屋敷に火懸りて、城を打越えけれは、是は〳〵と云内に、辰巳御櫓に火懸り、御本丸の燒る火のこ江戸町を燒拂、田井口悉く燒廻り申、金屋町に而火留り、御城の火明巳の刻消りけり。利常公は北の丸飛驒との丸へ入給ふ、御堂形米は燒に焦して御用に難立に付、御扶持人たる者の火事に逢たる者へ、五拾石宛被

下足、輕小者迄割符の外、總町中へ被下ける。此由江戸へ聞へければ、爲上使德山五兵衞、桑山左門を以御衣具、ふとん御小袖、帷子被遣。正月十一日金澤へ着御本丸え上り、燒屋敷見分せられ、利常公御父子御同道にて、御城中見物有。德山申は、扨〳〵此城は作久間玄蕃誓在城の後、利家公築せ給ふか、あの案細山日の下にて、殊に小立野も城の爲に不宜上により五千下口より五千程有ならは金は左も入ましと被申しは御挨拶と何も申ならしたり。其火事に付南町片町は燒されは、金屋忠左衞門家近所に三軒の町屋へ上使入置れ、御賄を仰せ付け、給仕小性柳田長三郎・佐藤伊織・安藤兵部、其外五三人かわり〳〵附置て、頓而御暇申され、上使へ御進物有て、江戸被歸けり。右燒跡御作事に俄に御材木あらされは、其時分本願寺末寺建立の爲に材木京へ、物幾千本といふ、年々宮腰へ積置けるか、御備用にて取上れば宮腰の馬備共是を迷惑し、訴訟申上る所に、此末へ大材木とも十四五間も一通りて末口にて指渡し四尺貳尺有、何としても馬にて附屆へしと御尋あれ、初而御詫申上る、近脇より大工共集り、其年翌年懸り御屋形出來、其序を以て侍屋敷町並悉く立直り、屋敷替とも有之けり。寛永十二亥五月九日の曉方に川原町の後より出火、才川口河原町・堅町筋・南町・石浦町・堀町・尾張町・新町・中町・寺町・おかやより田井口へ押廻し、淺野町人持衆下屋敷とも悉く燒失に及、其時町中を總構の外え屋敷替被仰付割附侍屋敷作事等年々相濟候由。

元祿三年三月十六日夜丑刻、犀川新堅町高橋某といふ賤士の家より出火、川風はけしく餘焰四方に覆て、近所の町へ一度に燃付、油車柿木畠的場より本多房州下屋敷へ燃付、百餘軒一火に燒立、次第〳〵に風あらく火四方へ燃ひろかり、明れは十七日辰刻に房州坂へ出、此坂の脇貞乘屋敷として御外廓の一亭にして、しかも城門へ相並へり、之へ火懸りては御城も危かるべしとて、火消の諸侍村井出雲・今枝民部・小幡宮內・前田萬之助・前田源之亟・成瀨伴藏・山崎庄兵衞・笹原主水・中川采女・品川藏人等大音聲にて下知し、兵士とも九死一生に防けれは、難なく是にて火しめりけり。火消の諸士立歸らんとするに、亦御城の西の總構の外左近橋近所堀宗叔といふ外科の家より火出る、煙焰ておこし、暫し火雲を卷て翻飜る、慥も西南に大風吹て車輪のごとく成焰十町か外に燃付、一度に覆ひ、火の粉四方へ散亂て、諸人東西をわかす、前後を亡ひて迷ひたる有樣は、唯四方五逆の罪人の、焦熱の焰に身を焦し、牛頭の呵責に逢ひけんもかくやと覺えたり、火は五手に分かれて燒廻り、一手は升形より鍛冶町外、總構鹽屋町、淺野川を越て、淺野川大橋口

町端まて直に通り一文字にやけ通り、又一手には總構御坊町へ燒出る、彦三町・關助・高場・大衆免・高道・春日迄、又一手は上安江・木町より、袋町・尾張町・新町・袋町淺野川大橋を燒落し、森下町・觀音町・愛宕・摩利支天・八幡・祇園・久保市毘沙門・卯辰寺の町家一てうも不殘燒たり　あら悲哉、神社佛閣は皆金殿玉樓臺をならべし靈場、一時に灰燼せり。又一手は武藏辻より十間町迄、近江町・博勞町・今町・枯木橋・小將町・川端迄、今一手は安江木町・六枚町・新保荒町・堀川口一軒も不殘燒失せり。十七日申の刻にしめり、燒灰を吹立、二三日の間は唯闇夜のごとくなりたり、おもふに前代未聞の火事也。遠く異國を考れは、越王呉を亡して姑蘇城一片の煙と成、項羽は秦を滅て咸陽宮三月火を熾にせし、呉越秦楚の古へ、近く我朝を顧みるに、弘建の武兵革又は明曆年中東都の回祿にも超過せり　又同月廿四日の晝、城東吹屋町より出火して黑煙天を掠たる、過火の人々仰天して驚事、唯薪を負ふて燒原を過、雷霆を賴て江河を渡る思ひをなす。又大風吹て其邊の町家百余軒刹那に燒て、横山左衞門の下屋敷へ燒出づ、二百餘軒燒口しに、淺野川にてやけ留り、是より後人心深淵に臨て薄氷安き心もなしとて、江戸御留主のことくなる燒家五百餘軒、武士歩行以下小者迄の家七百餘軒、町家五拾餘軒、百姓家三百餘軒、寺社合三百餘宇大小橋數五拾餘箇所燒死人四十餘人、半死半生數不知、三月十七日新堅町の火付人は才川石坂町矢作屋長右衞門水火の拷問にて、所々放火の趣及白狀に、於泉野礫に行る。

金澤町建替の事 附町の古事

元和二の頃石川河北郡奉行瀧與右衞門相勤、諸代官も其下司に隨ふ、鹽屋町前は御城大手口前田對州屋鋪邊、又御算用場邊に町家在しかと、堀川口へ所替被仰付。

○古寺町　犀川河原町の西阿陪甚右衞門邊、昔此邊寺町にて在しを泉野へ所替被仰付。古寺町殘りは寶來寺今に在。泉野寺町才川大橋より坂の上、昔は畠にて所々松なと有ける、泉野へ所替被仰付。町中にはさまり居る諸寺、又は古寺町より此所に移る。卯辰寺町下口總構の內に在し寺とも、此所へ移る。

○今町　昔山崎村といふ在家なりといふ。

淺野川懸作　佐久間玄蕃時代はりつけ場成とそ、此所に磯多筋之革細工能正六左衞門等の居住は、昔山崎村領地町端なれはなり。

○尾張町　大納言利家公金澤御入國の時、尾張に於て荒子御用聞の町人を被召寄、此所に居住せしむ、紙屋庄三郎等也。崩れ山卯辰茶臼山の續觀音の出崎の山、元祿十三卯十

二月廿六日淺野川え崩れ入、人家共多く慘死す、おに川俗に鬼川と云、御荷川也、御城御普請の時分宮腰より御材木等此川迄引上しなれは、御荷川なるへし。

○石川町　御城石垣築し時分、戸室山より石を伐出し、此ところを引なり。

○公事場　百姓町此邊石浦村とて民家成しか町と成、舊民の殘三人今に石浦誰と名乘、御郡支配也。本多房州下屋敷も此村の領地にて有し也、本行寺といふ寺も今に所付には石浦村と記す。

○法船寺町　淨土宗法船寺より出火し、御類燒御城に付、法船寺住持幷火元貳人禁牢させ、放火人御吟味の所、彼寺の門前に住ける小者奉公人也、被召出御吟味の上及白狀、大原治郎右衞門役小者に而、不義銀重り難義に付、火を付騷の紛に河原米屋より米壹俵盜取宿へ立歸り、又長九郎左衞門式臺より長筒鐵砲一挺取て出ける由申上けれは、妻子共三人牛に乘せ、金澤中引渡し、於泉野大罪に行る。其時住持禁牢御免有、火元二人は追放せらる。法船寺には才川の下にて川原を屋敷に被下たり。此住持權譽上人とて、北國無双の談義者にて、暫小屋懸の内に談義せられけれは、頓而諸旦那寄進して、寺建立有。追付萬人講を取立、寺造立を鋪益しける、其節貳人の同人宗壽と云者發起し、裏屋敷に念佛堂を立引籠、其内諸方の道心坊主集りて晝夜念佛怠ることなし、宗壽は野町へ出て小庵を結ふ、彼念佛堂相續繁昌して、自然に萬日講と成て、延寶年中には口回向として江戸新智恩寺來駕せられ、國中の僧俗男女參詣す。權譽知勇により才川下河原に寺造營し、夫に隨ひ追々町々はひこり繁華なり。

○武藏辻　大納言利家公伏見に御在住の時分、御用聞町人金澤へ參、當所々々興中繁花成所に地を拜領し、武藏庄兵衞と申けり。武藏辻の頭梁たり、利常公の出頭にて御側を近く被召仕ける。正保三戊三月廿九日に小松利常公の御參勤之御供し、關東鴻の巢にて大聖寺飛驒守樣の御家來江守彦左衞門若黨に切懸られ、重而手を負ける、終に是にて命終りぬ。江守若黨は切て逃けれは、親兄弟罪に行るへきを聞、親兄弟の命御助被下候へと書置し、武州板橋の一里に上り自害して果けるとなり。

○劍崎辻　馬坂寶憧寺坂、眞言宗寶憧寺昔此邊に有し也。是より小立野所替也。

○大乘寺坂　元祿の比迄此坂の下に大乘寺有し也。嫁坂昔邪見なる姑有て、此所へよめをつれ、谷へ落し殺したれは、嫁坂と云ふと、此說世俗の口なれは、聞たらす。龜割坂、野町神明の前の坂をいふ、俗說に昔義經奥州下りの時、召仕の女同道し、此所にて產し、胞衣の入たるかめを此坂にて打割たれは、斯名に付といふ、野人の說信にたらす。

○吹屋坂　才川橋より十丁計川上に泉野へ上る坂也、昔此所に鑄物師共住。

○熊坂橋　東末寺の後前田權助前に有り、何故此名と云事不詳。

○思案橋　本多房州下屋敷に本多家當國へ來られし時、手廻の者ともとて男たてきほひ者被置しか此者とも毎日此橋へ出、今日は西へや行かん、東へや行かんと思案すると也。香林坊橋川南町より石浦行道構の橋の上橋爪に香林坊と云町人有、牛右衞門橋、才川荒町に在り、橋爪に伊藤牛右衞門と云武士有し故也。川原町昔此所才川荒町に河原にて有。依之名付候。慶長十九年の比此河原にて茶屋作右衞門と言者芝居を立、薩摩の磯之助、金太夫抔と云者集り上るを、あやつり初めける、一兩年も仕內、四月十四日御城御類燒に付、町中立替、才川の河原方地もなく、屋敷渡り其內禪宗龍淵寺へ二千步屋敷渡り、此寺內にて三拾日計芝居初て、後に止にけり。芝居の有時分、山里の口すさみに「つゝし椿は山の端を照らす、女良衆極樂橋をみす」とうたひける歌舞伎と云濫觴は、後鳥羽院御宇通憲入道は諸藝堪能之人なり、舞樂を和らけ、磯の禪司といふ女舞をして白き水干さして立ゐほし太刀をはき舞はせし故と云、禪司か娘靜に傳ふ、後に太刀を略したる故、白拍子と云。夫より代々白拍子に傳ふ、慶長元祿の比佐藤島お國と云舞女數多の女を集、京四條河原に芝居を立る、妓女なれは是を歌舞伎といふ。其時猥かはしき事多かりける女おほきを禁制有之より、若衆かふきになりぬ。是も又同樣なれは、兎角かふき御停止有。江戸にて彦作勘三郎兩芝居の頃なり、其後樣々に願ひを立、彼若衆の向ふかさりを取て、野良になし、芝居を立へしと御免許有ける。其野良より女かつらをきせて、京島原傾城狂の體を狂言に仕組み、髮切島原さかた島原などと狂言の題號にせしにより、芝居の總名をば島原といへり。其後古へのこととともを作りしては、島原安宅島原などといへり、今は島原といふ名目なし。淨瑠璃と云は織田信長の侍女小野のお通と云香才能筆の女あり。後に太閤秀吉公の御臺所に仕へ仰を受けて、淨るり御前牛若丸のことを十二段に被作、筆勢物語に似たり、太閤感じ給ひ　平家物語信濃の前司行長娘か作にて生佛といふ座頭ふしを付たり、お通か作の淨るりは、岩船檢校節を付へしとて、山中山城守によませ、岩船ふしを付しと也。京田舍に流行て。四條河原に六字南無右衞門と云女太夫芝居を立る後は、十二段も聞ふるしとて島高館なとにふしを付て、是を淨瑠璃ふしと云しより、

總名となれり、又曰、瀧野澤田と云て、兩檢校琵琶の妙手也しか、淨璃り物語を作り置しか、曲節を語り出せり、其折は三味線に合せし事もなし。右の爪先に而扇子の骨をかきならし、拍子を取たり、其後都めくりと云物を作る。是は檢校の門人京東洞院目貫屋長三郎と云者の作也。慶長の頃の帝是をゑいらん有へしと、人形に懸させ度々召れしより、上るり大夫の受領を拜することに成けり。江戸にては大薩摩にさつま四郎與吉と、芝居立初て也。其後油屋茂兵衛・烏屋四郎吉・南北喜大夫・又後として源大夫・土佐大夫・江戸半大夫、替芝居立るなり、人形は根元西宮傀儡師を招て、人形を舞しむ是始なり。

才川の緣に寬永の頃まで、女かふきの座屋、お吉・鹽谷・十五夜とて三人の大夫、皆人異名に揚貴妃・李夫人・勾當の内侍と是を云り、其外十六七計の女とも三十人之有、兵庫わけ前髮を立、いつれも若衆の風俗にて朱かえらきの大小にて金銀すかしの袴、眞紅下緒、印籠巾着をさせ、女なれとも面白かりけれは、武士町男女の隔なく、一人の札錢小間銀三分宛の事なれは、每日數百人の見物有、短册を送も有、折々は菓子瓶子を送るも有、芝居は晝八時過けれ共、女共暫休息し、七ツ過より一人二人宛乘物にのり、屋敷へ連行程に、十日前より約束せねはかなふ事成かたしとそ。

○淨瑠璃　あやつり　宇右衞門雄樂　助座　踊子濵枚藏人座　能狂言　喜大夫孫大夫座　淺野川堀川下也、宮腰大野栗ヶ崎等より馬足の助として、下安江と云所より堀川を通し船の儀有けり。

寬永の頃此所に遊女町置、其有樣は須磨明石兵庫の景に異ならす、又中河原町野町に風呂屋有、遊女と名付て女をおき、江戸芝口下谷とやらんに相似り。

金澤寺社

米百二十石東照宮御宮、寬永廿年に御造營、內陣拜殿外廻り悉く美を盡せり。

米十石大樹公御殿彫工美を盡せり。江戸上野に常照院別當天台宗　神護寺

寬永二年に御造營幷別當所寺か、寬永廿年に御建立。二百二十三石二斗五升、寺領高寶圓寺內九石六斗五升は元和二年御檢地之刻打減也。殘る貳百拾三石六斗今の寺領收納米高。

四貫六百九拾八匁貳分六厘、

外に九拾三匁九分七厘貳步入、但朱封丁銀直步也。

〆四貫七百九十貳匁二分三厘　只今銀高

利家公越前府中に御在住之刻、高瀨村寶圓寺へ御參詣被成、其後能州御領分被成候時分、右高瀨村之寶圓寺を御呼寄、能州に寺御建立にて被指置し也。又其後加州御領分に成より、奧村伊豫の居屋敷へ寶圓寺御建立にて、其後其屋敷へ御移しの由、年號等不知、塔中

利家公御父前田縫殿助利春公は、尾州荒子の城主にして、荒子の鄕を貳千三百貫領し給ひしか、永祿三申十月十三日於荒子薨給ふ、法名久岳道機居士と號す。御母公は御生涯不詳、御法名長齡妙久信女とて、利家公越前府中御在住之時分御用居にて、天正元酉十一月廿一日府中に於て卒去し給ふを、高瀨村寶圓寺に葬て是より高瀨村の寺に御兩親樣の御位牌を立させらる。御命日に利家公御參詣有て御崇敬の御事也。或時利家公不思議之御夢想あるに付、和尙へ御物語可有とて呼に被遣けるに、和尙は不思議の夢を見たる御咄申上んとて、府中乘物を急かせらるるに、半途にて御使に行合、同道して府中へ參りたり。利家公被仰るは、我白鳥と成て空え立上り北をさして飛行す夢見て候との給へは、和尙承り我等か夢も貴公樣白鳥三羽に成給ふか、追々北をさして飛行し給ふと夢みて態と來駕を催す所に、御使を被下、つく〳〵と案し見れは、昔東夷をたいらけ朝を指て登らせ給ふ御神之白鳥と變して上り給ふを、白鳥大明神とし奉る。此御夢は北國の城を取給ふへし、瑞夢なり。北國七箇國の城とりになり給ふならは、拙僧は御菩提所の看坊たるへし、御領國宗の惣祿を御預被下候へと語て歸寺せらる。夢の告に少しも違なければ、加州へ被召寄しは高瀨の七世泰山和尙也。今の寶圓寺の表門は裏門也。昔の表門は材木町の方今裏門の所あたり、參詣の人々雨中の時分坂にて難儀故門を付かへしと也。

利常公御代寶圓寺筋目を思召、越前高瀨の寶圓寺より東堂を被召寄、小松の北寺村に草庵を建立させられ、御崇敬有しと也。金澤寶圓寺三世和尙、隱居所を鶴來村之邊月橋村山の中間に一閑院とて小庵を結ひ、今に寶圓寺代々隱居所に住す。

寺領五百石。御領國曹洞宗總祿禪宗、天德院、利常公の御簾中天德院樣御逝去の翌年、元和九年御建立、寺領御附、光高公御代より富山大正寺にても配當御寄附なり。

開山は關東より御請招の泉滴和尙塔司小立庵、

此寺屋敷、昔は小立野とて大成野にて小立庵と云小庵有しを、今の塔司に附られしとなり。光高公御卒去の御草履取剃髮仕、七石五斗、祐玄御墓番仕度旨願候、依而今に此子孫道濟內に居住す。寺領七石三斗、

寺領六十石藤澤末寺遊行上人道佛、泉野寺町玉泉寺諸國遊行の始は、後宇多院の建治元年なり、東山遊行の開山上人

は豫州人河野七郎越智廣の二男也、俗名は別府道秀といふ、其後知眞坊と云、人王九十五代後醍醐帝正中二年相州藤澤の道場、藤澤山淸淨寺草創す。御朱印百石の地。

大宰府繩鋪之天神、元和三年玉泉院樣御勸請、菅神眞筆連歌、料米十二石附、筑紫太宰府天神者、延喜元酉正月二十日、左遷大宰府權帥、同三年二月廿五日薨于配所、葬安樂寺、御歳五十五、正曆四巳年五月遣勅使於大宰府安樂寺、詔贈太政大臣正一位、【神社考】曰、天神御所、高辻小西東院東洞院南、亦曰紅梅殿五條坊門北北野御子家、或云天神御所、其左遷時詠梅歌、

東風吹は香ひを越よ梅の花、主なしとて春を忘るな、

【日本紀】曰、推古天皇十年冬十月、百濟僧觀勒來之仍貢、曆本及天文地理書幷遁甲方術之書也、此時撰書生三四人、以使學習於觀勒矣、陽胡史祖玉陳習曆法、大友村主高聰學天文遁甲、山背臣日並立學方術皆學以爲業、

敏達天皇十三年、鞍部村主司馬達等、得佛舍利獻於馬子宿禰、

昔の寺屋敷は犀川橋より寺町入口、今淨土宗成覺寺の所に有、其時分淨善寺とて小庵にて有し故、遊行三十代目の上人迄は、犀川總構のきわて台健宇西方寺にて百日計の勤行在りしと也。然るに玉泉院樣當國へ御入在しより、遊行末寺淨善寺に御家長久の願として天神堂を御建立被成、月次のれん歌を御祈禱のため被仰付、料米御附御家には菅家の末流なれは別而天神を御崇敬なり。斯て御遠行之時御老中より宗圓寺へ獅之助と云、御相摸の者を以玉泉院樣御遠行之旨案內し、早々登城尊骸の御前に御茶湯等營み申候へと申ふくめけれは、獅之助其形すさましき大男の、嘸付にて、荒五郎と云大きなる男長刀さし寶圓寺に早々とすゝむれは、和尙きつと見て夜中にても有り、是は正敷盜そくの我を傷ひに何方にてか打殺し、衣を剝取らん謀に成そ、卒爾に出てはあしかりなんと心得、和尙被申は玉泉院殿の御遠行ならは、老中の御一家方より爾々書札にて御使者の有へきに、われらが體は先年利長公の高岡に御在世の時、かぶき者とも數十人しらべてはりつきに懸らるゝ、夢のはつ右衞門、三昧男右衞門、闇夜園三郎、石垣を住右衞門、不見非之助等、かやう成者樣の者か何者そ、名をなのれ、拙僧は忝もはきの伴翁か一の弟子雲堯と申て、馬に乘事を得て長刀も遣得たり、心ゆるすな大男と申されは、獅之助興さめて立歸り其由申上けれは、利常公は和尙の申所も有とて、御使番を被遣、其勤せられ、御葬送りの用意出來し、寶圓寺導師にて御法名は先年於高岡に瑞龍院殿御導師光山和尙の血緣にまかせ、玉泉院殿松岩永壽大姉と御回向とけて歸る、然るに寬永元年十月遊行上人三十五代目當國へ廻られしか、淨善寺廣被成繁昌しける故、是へ此度は留り居られ、弟子一人歌學に達したるを住持に居られ、是をにふやかと申けれ、宿司持なり。翌寬永二年丑二月廿四日玉泉院殿第三回忌に成けれは、利常公如何思召けん、玉泉院殿の別而御入魂の寺殊に天神堂も安置す、此寺にて三回忌の御法事執行すへきとて、淨善寺へ被仰付、御入用品々金銀米錢等被遣御奉行人被遣、御法事九御念頃に遊行上人を初、數百人の僧俗に御布施物、御小袖等施し、御叮嚀に被成たり、其時遊行上人訴訟被申淨善寺といふ寺號を除て、玉泉寺と改、寺の向と橫下野町のきわまて、寺の門前に被成けれは、夥敷地子銀を取立、寺の雜用に可成、其後明曆元未年は玉泉院樣三十三年に當り給へは、前年より玉泉寺屋敷替有て、今の所に寺天神堂御建立被成、前の寺屋敷淨土宗成覺寺相渡、甚右衞門門前町は被召上、此代りは今の玉泉寺門前なり。於玉泉寺三十三年忌御法事有て、甚右衞門小松より利常公御參詣有し也。扨玉泉院樣御位牌を當寺に建られしは、寬永十六年二月廿四日、十七回御忌の節よりなり、御代々樣御法事の節、御施行米被下候は、此寺門內におゐて被下候、扨玉泉院樣御遠行の節、寶圓寺和尙の獅之助を盜と思はれけるを、利常公和尙の申所有と御意被成ましゝは、其正月廿日の頃、淺野川山の根に如來寺有之、一庵に祖閑と云坊主有し、塔中に小庵を作、其奇麗なる事は、都の古跡の寺に同し、閑炉裏緣杮梨地蒔繪にして、諸人慰ける、しかも手前有德人にて有けるに、夜中に走者を送り度由申來る、袈裟衣に而拵同者壹人草履取連て旦那と同道し、馬善の奧三昧へ參りける、小者を追拂、祖閑を切殺し、袈裟はきて逃けるを、曉に寺より尋付たる、其頃出家方には、夜中にむさとは導師に出る事を吟味して、慥ならぬは出さりける、雲堯和尙も強力坊にて早馬乘の上手也、辨慶も欺く和尙なれとも、たちせられしおかしさよと、諸人申あへり。餘り馬を好きてはね落され、腰折て腰義に成被申しか。小僧の時より芳春院樣御取立の出家にて御念頃成故に、寶圓寺住持被仰付、其後鶴來口の一閑院に隱居せらる、扨如來寺の祖閑を殺したる者後聞へける、吉田賴母と云御小將頭の家來林藤左衞門と云者の妻は淨土宗にて、祖閑門徒なり、常より參りて祖閑と密通す、男聞たり、祖閑をたはかり出し、一所に打殺し、此國を立ち退けり。

法華宗　立像寺

泉野寺町

慶長の頃壽福院樣御領國同寺號四箇所御建し一箇寺なり、小松・金澤高岡・富山なり。何も立像寺と云、紋は各松川ひし

を欄間等彫物等被仰付也。

寺領五十石御領國一宗惣祿小立野法華宗經王寺、利常公御母堂壽福院樣御先祖之寺越前府中に有、經王寺と云、此弟子養仙院を慶長十三年に金澤被召、壽福院樣より寺御建立の刻、經王寺と號、御附。寬永八未三月六日江戸におゐて壽福院樣御卒去、御遺骸を金澤へ御移、御法事等御用意の處、金澤火事に付、寺類燒仕、其内假屋可成之所、承應の四年壽福院樣十七回御忌に付、利常公より御再興有之由。

寺領貳百石　淨土宗小立野如來寺、塔主信念院・攝取院・淨土宗は、後鳥羽院の御時源空法然上人洛の黒谷に有て、一意專語念佛正行の淨土門を開てより以來、此宗始れり。源空上人圓光大師と諱せられしは、元祿十五年よりなり。此宗にあまたの門徒有といへとも、今世に流布するは鎭西・西山の二流なり、鎭西と云は法然の弟子に聖光上人辨阿筑　後善導寺の開山にて、其後京に至り、念佛門徒を弘、西國より光れる流儀成故に、鎭西流と云なり。又西山流と云は、是も法然の弟子に證空上人善惠粟生の光明寺に居て、念佛門を弘京より西山なる故に西山流とかや。天正五丑年開山故、立野寺成を元和四年に天德院樣より權現樣の御位牌御立にて、其時寺御再興にて、綱紀公御代淸泰院等位牌御立、寬文元年小立野へ御移し也。此時塔頭二ヶ寺御立なり、如來寺は卯辰山の根に有り、今舊跡を如來寺上地町と云。

神明堂　野町　無社領　神主　多田氏

此社は昔卯辰山摩利支天山に有しを、本多房州今の所へ屋敷替仕、利長公金澤へ御入以後、才川に神明御建立可被成由被仰出之所、やしきせまく候段、西尾隼人より御耳に立、寬永十六年增步被下、其後社堂共御建立被仰付、今以御修覆所也。神主昔兩人罷在候所、双方申分壹人は非義に依て退轉なり。

神明宮は伊勢大神宮也、

內宮【日本紀】曰、垂仁天皇二十五年天照大神、誨倭姬之命曰、是神風之伊勢國、則常世之浪重浪之歸國也、傍國可怜國也、欲居是國、故隨大神教、其祠立於伊勢國、因興齊宮于五十鈴川上、是謂磯宮、則天神之始天降之處也、

外宮【神皇正統記】雄略天皇二十年己冬十月、伊勢皇大神教倭姬命、令迎豐受大神於丹波國與佐眞中原天、倭姬之命奏之、明年戊午秋九月差勅使奉迎之、九月鎭坐于度會郡山田原新宮、遡自垂仁帝御宇、移五十鈴川宮而至此年既四百八十四年、

西本願寺京本願寺建立龜山院御宇文祿九年也、元祖上人十一世顯如上人迄は一本寺也しか、天正之頃故有之。東西の二にわかる當寺を表門跡と云、金澤御城を築し迄は今の御

地有、寬永十一年より今の所建、八十四代順德院の建曆年中より法然の弟子親鸞上人善信、此宗を弘めて、國々に流布す。親鸞より十一代顯如上人の門跡と號す、親鸞本は慈法院弟子にて、天台宗たり、後に法然の弟子となり、善信坊と稱して後親鸞と改、一向宗門跡は俗說に後柏原の院の御時、亂世にて御卽位の禮行るへき御料もなかりけりを、三條實隆卿の計ひにて、本願寺より御卽位の御料を献す、其賞として初而門跡號を許さると云へり。准門跡といふへきにや、御門跡と云は醍醐天皇の御時、宇多法皇東寺にて灌頂し、御室を仁和寺に送らる。是御室始也、後の世に御門跡といふ事成も是より起る。宇多法皇のおわせし所なれは、御門の跡と云儀なり。

東本願寺　開基教如上人

此上人は豊臣秀吉公の計にて、御舍弟順如上人を本寺の門跡にし給ひ、教如上人は裏屋敷に隱居して有しを御召出し推させ給ひ、六條室町の末に御堂御建立有しを、西平の本願寺と成、御裏と云も、裏屋敷におわせし故也。

御當地にて舊跡は今の御城の內也、寬永十一年より今の處建。

御小人町　一向宗

昔本願寺御建堂今の御城中に有し時、江州武佐より引越、御堂守と成と、每年二月朔日緣起披露あり。

百姓町　一向宗

當寺本尊は芋堀藤五郎所持の閻浮檀金等身の彌陀尊なり、先年御門主拜見に入御厨子御免許の本尊なり。

泉野寺町入口　一向宗　小川　常德　寺

昔能美郡小松に有て岸田常德寺とて、一揆の大將たりしを信長公追拂給ひし時、小川村へ退去し、其後金澤へ所替。

泉野寺町　禪宗　洞下　玉龍　寺

當寺は前田對州之先祖前田與十郎とて、尾州蟹江の城主たりし時、菩提所にして尾張に有しか、與十郎子對馬守長種入道源峯加州へ來り家人となり、越中守山居住の時當寺を守山へ引、其後對州小松城代の時小松へ引、又對州子孫金澤へ引越の時、當寺も今寺所へ引となり。

泉野寺町　淨土宗　大圓　寺

中興心岩和尙代常念佛、始心岩は盡く妙を得たる人なり當寺に淸盛の愛妾佛御前の鉦皷有、當寺の屋敷は元祿十一年日蓮宗の法蓮寺の退轉の地なり。

諏訪社泉野寺町高野山の役寺別當眞言理證院、信州諏訪を勸請す【正統記】曰大物主神之子健御名方神者、事代主之弟也、今之諏訪明神是也、【諏訪記】宣曰業盡たり、有情難放不生、故宿人天同證佛果、亦神功皇后三韓を征し給ふ時、天照

大神記而住吉諏訪之兩神を以補佐とす、信州之諏訪野州之宇都宮狩獵して鳥獸を供す。祇園牛頭天王社　泉野寺町別當本山山伏　顯行寺　利家公御入國の砌越前より召されし山伏也。

山州祇園同社【日本紀纂疏】曰、山城國愛宕郡祇園社、則進雄化神也、凡有三座、一牛頭天王、亦の名曰武谷天神、【諸社根元記】中の間は牛頭天王、素盞嗚尊垂跡、東の門は八王子五男三女、西の門稻田姫御前、【祇園緣起】曰、天竺北有同名、九相其國有園、名吉祥、其國中城之中有王、名牛頭天王、亦名武谷天神、娶竭羅龍王姫爲后、生八王子、其眷屬八萬四千六百五十四神、

【神社考】素盞嗚、唐には牛頭天王、父武谷天神と云、天竺には金比羅神、又摩訶羅神と云。

野町　稻荷堂　無寺領　眞言宗　直長寺

稻荷昔は御城中也、寺は古寺町に有しと也。今日泉野なり、先年の住持關東より金澤へ罷越、中村刑部を以て利常公へ申上、寺屋敷拜領仕有し所、元和八年利常公より稻荷社御建立、夫より御代々修覆也。

八幡社　無社領　眞言宗　波着寺

八幡宮利常公御代金澤御城に御安置被成置し所以、御代雷火にて御城火の上の時と當寺へ御移每年御鏡餠御城より被遣也、右社大破に付御斷申上候、延寶年より御修覆也

九石五斗正五九月御祈禱料　眞言宗　寶幢寺

拾壹石五斗右同斷　眞言宗　波着寺

五石（利常公御預將軍地藏なり）右同斷、卯辰愛宕眞言宗、明王院

五拾石　寺領卯辰　右同宗　永久寺

三拾石　寺領　臨濟宗　獻珠寺

當寺橫山外記母海元院方より利常公へ申上屋敷被下、慶安四年に建立、海元院知行之內を被仰、依之住持替の達在御聽也。

長谷觀音　無寺領卯辰　眞言宗　觀音院

此堂初は修覆谷坂の上に有し所、利長公より御祈禱被仰付、慶長五年利長公御意を以て山屋鋪より下に所替仕、觀音堂山王堂、再興仕、利常公御子樣方御宮參の刻境內挾き故、利常公より淺野將監石川義兵衞に被仰付、又山の內屋敷拜領仕、觀音堂は元和二年天德院樣より御建立在、山王堂幷客殿、元和三年利常公より御建立三重之塔は、承應三年御再興、每年四月朔日・二日、山王神事、於舞臺諸橋波吉兩家猿樂うたひ舞あり。

卯辰八幡宮　無社領　神主　厚見氏

當社昔越中森山に有也、利長公森山に御座被成候時分、御祈禱に被仰付、社堂御造營の所、利長公金澤へ御移之時分、

八幡社も金澤へ御再興、夫より御代々御修覆なり。

八幡緣起

人皇十六代應神天皇、三十六代欽明天皇の御宇に、豊前の國宇佐の郡蓮臺寺の麓に、八幡宮と崇め成、應神の御母公は十五代神功皇后なり。此御胎中にまします時、神功皇后新羅・百濟高麗の三韓を平け給ふに、武威を感し奉り、弓矢の守護と崇らる、依之御父十四代仲哀天皇三略の書を自書て皇后へ與へ、其後太子を御もうけ有之故、御出生の御子を軍神と名付給ふ。五十六代淸和天皇の貞觀年中に大和の國大女子の僧行教と云者、宇佐に參詣して通夜せらるゝに夢の御告に、世王の鎭守、軍法の守護神となるへしとなしたるに、御託宣有之、其名譽をなしめ給ふ、此時路南鳩峯に八幡を勸請し奉なり。

摩利支尊天社　卯辰　眞言宗　寶泉坊

マリシテンは梵語なり、飜譯して陽炎也。

兵法の家には必摩利支天を信用するなり、依之富田越後は兵法を我か物とせられし故、卯辰愛宕の側に利長公御下知にて摩利支天堂を越後建立なり。

愛宕山勝軍地藏米五石（正五九月御祈禱料）　眞言宗　明王院

當寺へ金澤に佐久間玄蕃代より居住成、慶長四年利常公御持尊の勝軍地藏御預社領屋敷等の程被仰出、別而御信仰有なり、二代目の住持隱居の時愛宕の東觀音山に住し、則觀音を勸請し居住せられしか、何の頃よりか觀音と愛宕と二社と成根本は愛宕の隱居所なり。

明和の初の頃、宗辰公御母堂淨珠院樣より菅公の御眞筆の御緣起御預にて、愛宕堂の脇に御社御建て、愛宕も其一兩年以前再興にて、美を盡して成就なり。

久保市乙劍社　眞言宗　卯辰　法住坊

當社昔は今の新町、西尾隼人屋敷之所有。

安江八幡宮　鍛冶早道　神主　厚見氏

此宮は卯辰八幡の別宮なり、上安江村氏神なり、此村昔は今の長九郎左衞門屋敷の所に有し也。住吉社下安江村に有り、上安江八幡神主厚見氏持分、此社は天平の頃より御鎭座と云傳ふ。昔より當國の刀鍛冶共の傳授を請るは、此宮地へ來り湯加減を相傳せしむ、神代卷伊弉諾尊、往至筑紫日向小戶橘之、各檍原而祓除焉、遂將澡滌身之所汚、沈濯於海底、因以生神號、曰底津少童命、次底筒男命、中略、凡有九神矣、其底筒男命・中筒男命・表筒男命、是則住吉大明神矣、下略【神書鈔】住吉之名神功皇后の時、此神托后體而濟行四方、遂到攝州之地、宣言曰、直住吉之國也、因鎭座其地、名曰住吉、下略、三筒男二、神功皇后を加へて住吉四前と云、

泉野寺町　本尊藥師如來眞言、行基山伏　伏見寺

當寺開基芋掘藤五郎は元來城州の産にして、氏姓賤しからす、藤の五郎といふ、此國に來りたり、富樫の庄に居住して、其里を伏見寺とし、近き里へ越住吉小原山料村と名付しも、古郷の名所床しき也とて致と也。其後は卑賤の身と成て、常に芋を好て食とす、時の人藤の字消失て、芋掘藤五郎と云、妻女は和州長谷の里に幾玉右近萬信と云者あり、財寶多長者とよべり。彼か妃名を王和五と云、其形清くすくやかなれは、時の人美清女と云、此國に來りて藤五郎に嫁す、芋掘藤五郎芋掘所皆金砂なりといへとも寶としらす、美清女寶なることを知らせる、又ある夜藤五郎夢をかふむる、告にまかせて堀に、御長一寸八分、閻浮檀金の藥師如來を掘得たり。近き山中に堂を建立し、彼の尊像を安置し、香花を捧て禮拜供養おこたる事なし、其山を伏見山と云、山號に改、行基山伏見寺とす、當寺の本尊是也。又藤五郎三つの金牛作りて納む、其所を三小牛村とて今は其里絕えたり、藥師如來を歸依せん者哉、此牛をあたへ得させんと也、藤五郎死して後、寺地町に塚を築く、大乘禪寺門前なり、二五塚是也。藤五郎は十二神の内宮毘羅大將、かりに藤五郎と現して藥師如來を土中より堀出し、又行基菩薩同佛の藥師尊鑄造らしめん爲也と、其後告給ふとなり、委く緣起に有り。

泉野寺町　　眞言宗　　遍照寺

利常公御幼少の時おさる樣と申上候、御妾腹成しを、小松の前田對馬守深岸へ利常公より御預にて御座有し内、高木より學清と云坊主小松へ來る、此者人相を見る事上手と聞て、お猿君を乳母抱き奉り參て見す。學清手を打て扨々目の内人にこへ高く天名の相有、末子にても相領になるへき相有、能々そたてよと云、乳母敬てされはかやうくと語らされはとて、只今とは云はす能々守たてよと云けれは、御滿とかをも望、則書て進上す。夫より南紀へ歸り又折々能州所口妙現院に來る時、小松に來れば必乳母御守りを申請る故、後は高野よりも御守を調て便に付て越さると也。扨程なくおさる君は利長公の御養子に成給ふ、學清は相する通也又其後能州越、被申上候、加州に御留有而侍家の明たるに入置給ふ、後に寺號を望、遍照寺と改、追而寺町玉泉寺向へ屋敷被下けるとなり。

泉野寺町　　禪宗洞下　　松月寺

開山松林坊文祿の頃迄濃州大垣に住庵せしか、其地大垣の城主伊藤長門守、同彦兵衛在住の時、無二の碁相手成しが、長州金澤へ來りし時、此僧も同道にて來り、當分長門守、同嫡牛之助、松林坊三人所に野町高泉越前屋何某方に借家せり、其内長門守病中爲看病料牛之助へ新知千石利長公より給り、其翌年慶長四亥長門守は病死せり、長門守遺蹟をは松林坊に所置せよと御意有り。又其後寺號を取立候得と被仰出、松月寺と改む。泉野にて寺屋敷拜領有、開基旦那は伊藤氏、此子孫出羽町に千石領す、伊藤彦兵衛たり、昔は伊東也しを、長門守に大閤より東を藤とせよとあり。

泉野寺町　　眞言宗　　寶集寺

當寺本尊千手觀音は往古泰澄大師越前於越智山、一の靈木を以地藏、觀音、孔雀明王の三種の尊像を彫刻し、中堂に安置し給へり。其後同一に平泉寺の大所院一代彼三尊の中の觀音は大出を勵精し、二世の悉地を祈り、卽刻この奇瑞奇告をあらはす、世間を利濟すこと尤多し、依數百年來萬方の民俗へ歸依偈仰することくに增庵す、然るに天正の兵亂に一山大破の折から、大出自同國嶋鹿村某が家に忽等として鎭座ましまします事、凡二十か月、爰に故有て當國黑津舟の本地堂に勸請す、實に鎭護國家の大性心尊と仰き奉る事、他に異也。然るに神道を弘る者守りたらさるを以て、自分官に訴へ諸社の本地を除かむ事世の知る所なり。爰に一日老翁壹人の尊體を荷負ひ來り、告て曰、此は是泰澄大師の御作にて、黑津舟權現の本地大悲薩埵也、當山に安置してと平なくに公利の大願を營み給ふと云告て其の往所を知らす、依て本山當山に恭敬供養しけるなり。

金陵地名考 終

能登名跡志

能登國名跡志序

夫能登國は、北海を出る事行程遙に五十里に有、横程纔五里を過す、山曠く地せまりて山海わかたす、たゞ壁岩の嶮路曲折なる、怪岩奇石浪を砕て蒼海目前に有、故に山水の勝地にして佳景の秀雅一歩にあり、加之皇祉靈閣郡に滿ち、廓跡舊典在野に盈り、嘆敷哉邊鄙の遠境なれば知人なきを恨む、都て此國の風土古代殘りて人柔懦なり、予いさゝか公務にかられて此北濱を巡ること年久し、折にふれ物語或は雅見するに任せて文蒙のをかしきをもしらす、只其儘に書記して集たるを懐にするものなり、

安永六酉立春

加陽金府

太田何某

能登國名跡志首卷

太田賴資撰

建置

【續日本紀】曰、元正天皇養老二年、割越前國羽咋・鳳至・能登・須津四郡、始置能登國、又【類聚倭名集】曰、能登國靈龜二年割越中國置之、國府有能登郡（今之鹿島郡也）何哉、北方者陰之地也、此國者日本之爲鬼門、【分類要語】曰、陰之靈曰鬼、陽之靈曰神、陰陽之妙靈爲往來、有萬物造化、謂之能門良、始書能門能者陰德名也、門者監會名也、今書能登【一宮記】曰、往古此國有化鳥、不穩山海氣多神靈平之給、海內船能登、故能登國爲偏海國、於運漕有魚鹽之利也、嶺南之產物漂流來云云、

能州四郡組合鄉庄村附之事

押水大海庄十八ヶ所　押水中庄十四ヶ所　押水北庄九ヶ所
邑知陽之內
志保庄十ヶ所　粟生庄七ヶ所　羽咋正院三ヶ所
菅原庄七ヶ所
太田富永庄

邑知院二十二ヶ所　尾長庄三ヶ所　若部保二ヶ所
甘田保四ヶ所、　加茂庄三ヶ所　大坂庄三ヶ所
土田庄十四ヶ所　堀松庄二十六ヶ所　藤掛庄十六ヶ所
押造庄八ヶ所　熊野方鄉十六ヶ所　鉈打鄉九ヶ所
酒井保一ヶ所　冨木院二十八ヶ所

萩谷村組六十三箇所

押水大海庄牛首村　瓜生村　上河合村
下河合村　太田村　箕打村　元女村
黒川村　野寺村　瀨戸町村　中沼村
二ツ屋村　免田村　大海川尻村　森下村
夏栗村　八野村　澤川村
押水中庄坪川村　正友村　紺屋町村
東間村　御館村　三日町村　上田出村
中野村　上田村　山崎村　寶達村
北川尻村　冬野村　東野村
押水北庄門前村　阿原村　米出村
今濱村　小川村　麥生村　宿村
竹生野村　吉田村
志保庄敷波村　萩谷村　萩市村
子浦村　聖川村　新宮村　下り坂村
當熊村　海老坂村　萩島村

粟生庄　柳瀨村　新保村　粟生村
平床村　柳瀨出村
菅原庄　吉野屋村　石坂村　向瀨村
塵濱村　所司原村　塵田村

堀松村組四十五箇村

堀松庄　堀松村　清水今江村　吉田村
梨谷小山村　火打谷村　神代村　川尻村（鹽師）
大津村　小浦村　上野村（鹽師）　百浦村
赤住村　西山村　江浦村　矢藏谷村
未吉村　大念寺村　長澤村　福野村
町村　大念寺新村　松戸村
土田庄　館開村　大島村　德田村
印内村　代田村　谷屋村　栗山村
福井村　館村　二所宮村　上棚村
矢駄村　柴坂村　瀧谷村
加茂庄　矢田村　倉坂村
大坂庄　米濱村　穴口村　大坂村
甘田保　宿女村　坪野村　岩田村
狢谷村

杉野屋村組三十九箇村

邑知院　千代町村　中川村　野村

柳田村　一宮村（鹽師）　同寺家村　瀧村
飯山村　坂内田村　上江村　圓井村
吉崎村　深江村　白瀨村　藪野村
福水村　千石村　神子原村　走入村
清水原村　菅池村　見砂村　下境村
太田富永庄　太田村　二口村　石野町村
三ッ居村
菅原庄　杉野屋村　菅原村
羽咋正院　立開村　羽咋村
粟生庄　土橋村　粟原村　兵庫村
若部保　本鄉村　志々見村
尾長庄　堀替新村　尾長村　千田村

相神村組六十六箇村

富木院　高田村　小室村　廣地村
江添村　大西村　欠田村　田中村
和田村　今田村　八幡村　八幡座主村
飯室村
熊野方鄉　草木村　日下田村　谷神村
豐後名村　荒屋村　中山村　町居村
日用村　中泉村　相坂村　里本鄉村
草江村　稻敷村　柏木村　六鳥居村

大福寺村　酒見村　相神村　領家町村
地頭町村　町本鄉村　七海村　中濱村
紛分村　領家七海村　生神村　福浦村
三明村　中畠村　長田村　牛下村
押造庄　尊保村　阿川村　楚和村
灯林　鵜野屋村　地保村　切留村
藤懸鄉　深谷村　藤濱村　笹波村
鹿頭村　小窪村　赤崎村　千浦村
風戶村　風無村
堀松鄉　田原村　大笹村　米町村
小室村　直海村　釋迦堂村
押造庄　入釜村

鹿島郡七組

良川院三ヶ所　淺井庄十一ヶ所　長澤保二ヶ所
金丸保三ヶ所　久江保一ヶ所　小田中保四ヶ所
高田庄四ヶ所　四柳庄一ヶ所　酒井庄一ヶ所
大町保一ヶ所　一音庄十五ヶ所　高田保七ヶ所
三引保三ヶ所　吉田保二ヶ所　笠師保四ヶ所
豐田保六ヶ所　中山鄉五ヶ所　崎山澤野鄉一ヶ所
南三鄉四ヶ所　石動山院內一ヶ所　矢田鄉十七ヶ所
萬行保十ヶ所　江曾鄉五ヶ所　八田鄉三ヶ所
飯川保一ヶ所　熊木院十ヶ所　島庄二十ヶ所
三階良川保十ヶ所

、中島村三十九ヶ村

鉈打鄉　藤瀨村　河內村　西谷村
鳥越村　古江村　大平村　町屋村
上畠村　免田村　此九ヶ村ハ羽咋郡ナリ
熊木院　中島村　瀨嵐村　小牧村
橫見村　長浦村　濱田村　上町村
宮前村　橫田村　谷內村　別所村
外原村　深浦村　外田村　岸村
山戶田村
萬行保　舟尾村　奧原村　和倉村
祖濱村　新保村
三階良川保　石崎村　松百村
矢田鄉　津向村　北島村　盤若野村
池崎村　滿江村
萬行保　赤浦村　直津村

但し此組は兩郡入交りあり

能登郡下村組十二ヶ村

良川院　良川村　上村　德丸村
淺井庄　西馬場村　東馬場村　寢勝講村

能登郡下村

金丸保　金丸村　金丸出村　鹿島路村
長澤保　會禰村　下會禰村

鰀目村組三十四ヶ村

島八箇庄　野崎村　日出ヶ島村　二穴村
佐波村　次會村　半浦村　通村
無關村　田尻村　閏村　南村
長崎村　曲村　向田村　祖母浦村
小浦村　八ヶ崎村　鰀目村　別所村
久木村　右二十ヶ村島の路なり
中山鄉　岡村　上湯川村　鵜浦村
三室村
矢田鄉　太田村　佐味村　苻中村
後畠村　所ノ口村　天神川原村　藤橋村
江曾鄉　國分村　細口村　白馬村

芹川村組十六ヶ村

淺井庄　德前村　淺井村　芹川村
井田村　尾崎村　小竹村　水田村
久江村
小田中保　小田中村　藤井村　福田村
高畠村　小金森村

四柳庄　四柳村
酒井保　酒井村
大町保　大町村

笠師村組十五ヶ村

豐田保　豐田町村　河崎村　土川村
萩屋村　豐田村　奥吉江村
笠師保　笠師村　鹽津村　筆染村
大津村
三引保　三引村　深見村　白濱村
吉田保　吉田村　七原村

武部組二十六ヶ村

淺井庄　蟻ヶ原村　二宮村　武部村
一音庄　石塚村　久の木村　坪川村
西村　今羽坂村　新庄村　在江村
廿九日村
三階良川保　川田村　三階村
飯川保　江曾村　若林村
八田鄉　中挾村　八田村　千野村
國下村
石動山院内　多根村
古符村
藤野村
小池小原村

古城村　古屋敷村　竹町村　矢田村
萬行保　萬行村　佐野村
崎山澤野鄉　澤野村
南三鄉　廐生村　須野村　菅澤村
黑崎村
中山鄉殿村

高田村組十九ヶ村

高田保　田鶴濱村　川尻村　新屋村
垣谷村　高田村　杉森村　下村
三階良川保　溫井村　町屋村　三階村
瀨戸村　伊久留村
一音庄　一音村　大槻村　春木村
羽坂村　末坂村　黑氏村　花見月村
町奉行支配所口町
羽咋郡松野屋村組に有之、土方氏領分、
太田村　四町村
鹿島郡武部村組に有之、土方氏領分、
小栗村　槇山村　清水平村　紺子山村
外林村　〆七ヶ村
羽咋郡御領地
敷波村　針山村　原村　神子原村

福水村　四町村　白瀨村　千路村
中山村　上棚村　二所宮村　安津見村
町村　安部屋村　佛原村　松木村
豐後名村　〆十七ヶ村

鹿島郡御領地　鳳至郡八組

諸橋鄉十七ヶ所　山田鄉二十五ヶ所　上町野鄉十六ヶ所
中町野鄉十五ヶ所　下町野鄉十六ヶ所　南北鄉二十三ヶ所
本鄉十九ヶ所　櫛比鄉三十二ヶ所　河岸鄉十八ヶ所
江岸鄉二十一ヶ所　七浦鄉二十九ヶ所　大屋庄二十三ヶ所
河原田鄉十八ヶ所　三井鄉十五ヶ所　南志見鄉十一ヶ所

大澤村組三十八ヶ村

七浦鄉　大澤村　上大澤村　赤崎村
下山村
大屋庄　小池村　鵜入村　厥野村
光浦村　堀村　釜屋谷村　水守村
稻屋村　長井村　山本村　房田村
下黑川村　上黑川村　繩又村　二又村
別所谷村　瀧又村　吼木村　空熊村
三井鄉　長澤村　漆原村　新保村
細田村　內尾村　小泉村　別所村
二又川村　貝吹村　嶺村　年兼村

四井村　瀧上村　東折村

稻舟村組三十五ヶ村

河原田鄉　久手川村　塚（醫師）田村　稻舟村
大野村　惣領村　谷內村　熊野村
西脇村　市瀨村　山の上村　北谷村
中尾村　石休場村　横地村　杉平（南志見鄉醫師）村
山岸村　宅田村　二ッ屋村　白米（同）村
野（同）田村　名舟村　尊利地村　小田屋（同）村
里（同）村　澁田村　忍村
中町野鄉　大箱村　仁行村　中村
本鄉村　渡合村　興德寺（醫師）村　打越村
大屋庄　小伊勢村　輪島（醫師）村　同島村
同海士村

馬場村組五十三ヶ村

仁岸鄉　馬場村　館分村　釼地村
大泊村　腰細村　赤神村　上代村
黑岩村　入山村　清澤村　瀧町村
大釜村　木原月村　神明原村　馬渡村
窪村　久川村　中谷村　切狹村
飯川谷村　渡瀨村
河岸鄉　池田村　藤瀨村　北川村

是清村　南村　鍛冶屋村　中田村
椎木村　小山村　大切村　山是清村
二又村　江崎村　白禿村　猿橋村
小瀧村　千代村　新町分村
櫛比庄　小名村　上河內村　中尾村
廣岡村　館村　本市村　內保村
大角間村　上中村　越後村　桂谷村
堀腰村　鑓川村　百成村

走出村組五十四ヶ村

櫛比庄　走出村　清水村　勝田村
道下村　宮古場村　八幡村　浦上村
中野屋村　淺生田村　安代原村　高根村
和田村　鬼屋村　日野屋村　廣瀨村
深田村　田村　栃木村
七浦鄉　廣磯村　深見村　六郎木村
小杉村　矢德萩原村　吉浦村　五十洲村
大瀧畠中村　中谷內村　鵜山村　餅田村
皆月村　百成大角間村　暮坂村　薄野村
樽見村　西二又村　小町村　上村
新保村　黑杉村　雜座村　池田村
本鄉谷口村　能納屋村　平村

大町村　荒屋村　長井坂村　地原村
定廣村　原村
大屋庄　圓山村
櫛比庄　山邊村　井守山坂村　門前村

中居村組三十三ヶ村

南北鄉　中居村　中居南村　川尻村
乙ヶ崎村　新崎村　內浦村　志賀浦村
根木村　會根村　會福（曉）村　宇留地村
鹿路村　河內村　計谷村　比良村
小又村　挾石村　柴村　上野村
麥浦村　七海村　波志借村
三井鄉　市坂村　州衞村　地藏坊村
山田鄉　大田原村　柏木村　椎谷村
木戶村　伊久留村　菅谷村　木原村
曾山村

宇出津村組二十三ヶ村

上町野鄉　合鹿村　久田村　桐畑村
鈴ヶ嶺村　笹川村　寺分村　中齋村
十郎原村　五郎右衞門分村　神和住村　藤瀨村
本鄉村　久龜屋村　天坂村　小間出村
鴨川村　國光村　石井村　柳田村
五十里村
諸橋鄉　宇出津村　同分村　藤波村

鵜川村組三十四ヶ村

諸橋鄉　小坂村　古君村　山中村
矢波村　太田川村　竹原村　明泉寺村
宇賀川村　甲村　前波村　沖波村
七海村　鵜川村　波並村
山田鄉　谷屋村　神道村　吉谷村
本鄉村　組倉村　木住村　三田村
山口村　武連村　西安寺村　魚地村
坂尻村　龍村　官釜村　下代村
八田村　番頃各村
上町野鄉　宇賀塚村　曾又村　鶴町村

粟藏村組四十ヶ村

下町野鄉　粟藏村　鈴屋村　寺山村
時國村　大川村　敷戶村　廣江村
牛尾村　栁戶村　川西村　佐野村
眞久村　舞谷村　金藏村　西山村
西印內村　東印內村　東山村　圓山村
寺地村　德成寺內村　麥野生村
長尾村　德成村　是より末十五ヶ村は、珠洲郡方許

若山鄉州卷村　白瀧村　南山村
上山村　宗末村　二子村　上正力村
吉ヶ池村　北山村
西海鄉黑丸村　長橋村（隣郡）　片岩村
仁江村　眞浦村　淸水村

鳳至郡御領地

鹿島村　黑島村　下唐川村　上唐川村
天神谷村　川島村　大町村　七海村
梶村　藤卷村　岩平村　鹿波村
會良村　中谷村　院內村　黑川村
伏戸村　井西村　時國村　大野村
河內村　鵜島村

珠洲郡三組

木郎鄉三十一ヶ所　忠鄉十六ヶ所　飯田鄉六ヶ所
正院二十ヶ所　三崎鄉十ヶ所　若山鄉十ヶ所
西海鄉九ヶ所

松波村組四十ヶ所

木郎鄉　秋吉村　河ヶ谷村　上村（隣郡）
瀧之坊村　松波村　布浦村　九里川尻村
四方山村　白丸村　長尾村　新保村
越坂村　市瀨村　小木村　眞脇村

小浦村　大澤村　羽根村　國重村
宮犬村　淸眞村　戀路（隣郡）村　山中村
田代村　滿泉寺村　駒渡（隣郡）村　立壁村
時長（隣郡）村　行延村　不動寺村　馬渡村
廣國（隣郡）村　法住寺村　堂谷村　下鳥越村
黑丸村　鵜坂村　宗玄村　西方寺村
大町泥木村

飯田村組二十二ヶ村

忠鄉隣郡　烏越村　鵜飼村　金峯寺村　南方村
寺方村　北方村　飯田鄉隣郡　鹿野村　本鄉寺村
飯田村　熊谷（正院隣郡）村　小島村　正院村
河尻村　雲津村　小泊新村　竹澤村
伏見村　蛸島村　小泊村
三崎鄉引砂村　高波村　宇治村

折戸村組二十四ヶ村

西海鄉隣郡　馬渕村　笹波村　高屋村　大谷村
三崎鄉狼烟村　同新村　寺家村
粟津村　森越村　大屋村　小谷村
杉山村　本折戸村　河浦村
細屋村　岩坂村　唐笠村　鈴內村
飯塚村　山中村　岡田村

波出鄉廣粟村　出田村
若山鄉經倉村　古藏村　國兼村
廷武村　內山村　大坊村　火宮村
中田村　中村　向村

珠洲郡御領地

眞脇村　都合御領地六十一ヶ村

古代は郡方役人宿禰力禰・九文・自代・代官、又郡司・庄司・庄屋抔と申來るなり、御當代は十村肝煎番人と申來也。此國は今も家名に刀禰抔と呼申者多し。又知行所も昔何町何十領と知行有、又何十貫何千貫とも呼り。今百石、千石、萬石に同事なり、凡長さ三十步、廣さ十二步を一段とす、十段を一町といふ、上田は十段に五百束、上田有一束は米五斗、尤中田下田の差別あり。知行は尤五段を一貫とする也、古は永樂の錢十文に米四合八勺賣ゆゑに、永樂一貫文は四斗八升、百貫は四十八石なり。今知行草高百石に平均免四つ八步として、高百石米高は四十八石なり。寺領社領御扶持田等知るべし。

□□□□　相神村彌五郎　十五石　粟藏村丈藏
七石五斗　鹿野村恒方　七石五斗　大谷村賴兼
七石五斗　大澤村內記　七石五斗　上戸村眞賴
七石五斗木住村八郎右衞門七石五斗　若山村延武
七石五斗　道下村孫三郎　七石五斗　荒屋村三郎左衞門
七石五斗　皆月村彦　七石五斗　菅原村行長
七石五斗　中居村三右衞門　七石五斗　鹿磯村藤左衞門
七石五斗　中島村太左衞門　七石五斗　中川村太郎左衞門
七石五斗　鵜橋村次郎兵衞　七石五斗　小山村高左近
十五石　土橋村新兵衞　四石五斗所口町　永見屋助左衞門

右は能州利家公より、御扶持頂載の百姓。

能州寺領社領御修覆所之事

四百石　櫛比惣持寺　文祿二年利長公御再興有、慶長六年芳春院殿山門御建立、其後は修復は寺にて仕候。
百二十七石一斗一升　瀧谷妙成寺　諸堂不殘寶永十年より御修覆。
百五十石　石動山天平寺　權現本社、承應二年より御修覆。
三十石　吼木山法住寺　講堂白山宮、其外庫裏山門の外、慶安三年より御修覆。
二十石　富木大福寺　權現社頭天正十三年より御修覆。
田地五町　三崎高勝寺　高直七十五石內二十五石、御修覆料除知。
三百五十石　一宮氣多神社　承應四年より社頭永代御修覆。
九十俵　菅原天滿宮　萬治三年より御社領右の內、五十俵を以御覆仕る。
二十石　酒井永光寺　三十俵　太田海門寺
二十俵　鵜飼金峯寺　十四石五斗　輪島蓮江寺
十俵　道下寶永寺　十二石五斗　德田安養寺
八石六斗四升　松波松岡寺　十五石七斗六升府中靈泉寺

二十五俵　鵜飼妙嚴寺　十二石　　所口氣多本宮

能登一國延喜式内之神社四十三社、

羽咋郡十四座

氣多神社一ノ宮　羽喰神社　羽咋村
志宇神社　子浦村　瀬戸彦神社　直海村
藤津比古神社　藤瀬村　神代神社　神代村
相見神社　麥生村　千束姫神社　寶達山
椎葉園神社　宿女村　諸岡姫神社　二所宮村
百沼比古神社　未吉村　阿良加志彦神社　梨谷小山村
大穴持像石一ノ宮　祭豆美姫神社　阿津見村

鹿島郡十七座

伊須流岐彦神社　石動山　能登生國玉神社　所之口
餘喜古神社　能登郡　能登比咩神社　能登郡下村
天日陰比咩神社　二宮村　能登屋比古神社　羽坂村
久底彦神社　久江村　御門主神社　山崎村
少彦像石　山崎村　伊夜姫神社　二の宮村
菅忍神社　笠師村　藤原比古神社
荒名彦神社　白比古神社
久志伊奈太岐神社　美麻奈比古神社
久麻加夫都神社　熊木

鳳至郡九座

岩倉比古神社　時國村　邊津姫神社　穴水
奥津姫神社　中屋村　杉伊豆牟姫神社　本郷村
加夫都比古神社　甲村　美朝比古神社　岩車村
目伊豆岐彦神社　藤波村　小又ヶ谷内にあり。

珠洲郡三座

須津比古神社　三崎　古麻志彦神社　經倉村
加志波良彦神社　廣國神柏原にあり。

能州所々名物

羽咋郡產物

寶達山　藥草幷蕨、獨活、薯蕷、同樽見村　砥石、二ツ屋
銀鮒、羽咋潟　鱣幷鯉、鮒、鯰、瀧村　釣鯛幷鮑、白藻、牡蠣、
羽咋川　白魚、杉野屋　麻苧、福野　干瓢、富木　歌仙貝、
たばこ、福浦　海苔、栗山紙、風戸、平素麵、甘田保　四ヶ
布、

鹿島郡產物

所口幷清水米、羽衣酒、豆飴、松田　鮓鮭、蛇ノ子、澤野
牛房、崎山　たばこ、鳴路　芋、角島　水石、黑崎、火打石、
熊木　九萬疋、瀬嵐　海鼠、瀬戸、梨、能登郡　桃、本七尾

玉虫、石動院　天狗爪、

鳳至郡產物

劍地　針金、七浦　刺鯖、皆月　鹽辛、光浦　五色石、輪島
素麵幷朱家具、庖丁、小刀、神倉　鮑、長尾　たばこ、久田
紙、宇出津　鯨筋、鵜川　鱧、尾道　柿、甲　三(餘魚、中居
釜幷串海鼠、同腸附、谷内　蕪、大池　根深、赤崎　赤根、(ニンジン)

珠洲郡產物

三崎　和布、紐苔　折戸海雲、飯田　小刀、鵜飼　蠣、小木
鱈、馬濃　木葉石、

加州宮腰より、能州所々へ積米百石に付運賃米御定、

宮腰ヨリ今濱迄
同所より鹽濱迄　海上九ツ　一石四斗八合七夕
同より一宮迄　同十二ツ　一石六升六合二夕
同より柴垣迄　同十二ツ半　一石六升三合二夕
□□□　同十三ツ　一石三斗一升二合
同より福浦迄　同十四ツ　一石五斗七升七合二夕
同より劍地迄　同十九ツ　一石一斗四升
同より道下迄　同廿四ツ　一四石五斗五升四合
同より皆月迄　同廿六ツ　一四石八斗一升九合二夕
同廿九ツ半　一四石九斗六升八合

同より大澤迄　同廿九ツ半　一五石一斗三升三合二夕
同より輪島迄　同廿二ツ　一五石五斗八升
同より小田屋迄　同三十五ツ　一五石九斗二升八合
同より時國迄　同三十六ツ　一六石二斗一升
同より眞浦迄　同三十八ツ　一六石一斗九升九合二勺
同より片岩迄　同四十ツ　一六石三斗四升二合
同より大谷迄　同四十ツ　一六石四斗七升六合二勺
同より高屋迄　同四十四ツ　一六石七斗五升五合
同より狼煙迄　同四十四ツ　一七石二斗二合四勺
同より折戸迄　同四十三ツ　一六石八斗八升九合二勺

但し羽咋村より、大町村金丸村、潟上二里より川賃銀積米、十石に付六匁七分七厘、

能州所口より、内浦積米百石に付運賃米、

所口より松百迄　海上一ツ半　一一石三斗七升四合
同より野崎迄　同四ツ　一一石七斗二升二合
同より大津迄　同五ツ　一一石七斗八升八合
同より中島迄　同五ツ　一一石七斗八升八合
同より石崎迄　同八ツ　一一二石二斗六升八合
同より中居迄　同八ツ　一一二石二斗六升八合

同六ノ一一石九斗二升一合二勺
同八ノ一一石二斗六升八合
同七ノ一一石七升
同九ノ一一石四斗八升二合
同十一ノ一四石七斗四升九合二勺
同十二ノ一二石八斗九升八合
同十三ノ一二石三斗
同十二ノ一二石一斗六升三合二勺
同十四ノ一三石三斗三升二合
同十四ノ一三石五斗七升七合二勺
同十六ノ一三石二斗四升
同十六ノ一三石七斗二升六合
同十六ノ一三石七斗二升六合
同十九ノ一四石一斗四升
一三石九斗九升一合二勺
一三石三斗六升二合
同廿六ノ一四石八斗一升九合

名所舊跡

羽咋郡名所舊跡

同より　甲　迄
同より　鵜川　迄
同より　新崎　迄
同より　並波　迄
同より　宇田津　迄
同より　眞脇　迄
同より　小木　迄
同より　長尾　迄
同より　布瀬　迄
同より　松波　迄
同より　鵜島　迄
同より　蛸島　迄
同より　正院　迄
同より　寺家　迄
同より　引砂　迄
同より　松波　迄
同より　越中魚津　迄

一香　島、南北鄕、
一跡鑓山、熊野村、
一惣持寺、寺　口、
一宮城山、中町野、
一岩倉山、時國村、
一七ツ島、名　舟、
一光　浦、大屋庄、
一奥津宮、中　居、
一沖　波、諸橋鄕、
一八重櫻、藤　波、
一鷲　嶽、河原田鄕、
一石佛山、山田鄕、

一大路潟、邑知院庄、
一陰陽瀧、寶　達山、
一瀧　津、邑知院庄、
一尼　崎、藤　懸、
一長手島、土田庄、
一戰場ヶ端、飯　山、
一かん〳〵石、安部屋、
一美女山、（柳田邊より白濱邊迄）

一越知野、邑知院庄、
一押　水、中の庄、
一羽咋の海、邑知院、
一荒　木、富　木、
一産　神、熊野方、
一鉈打山、熊野方、
一跡　野、笹　波、
一福野潟、堀松の庄、

鹿島郡名所舊跡

一能登島山、八箇庄、
一松尾山、本七尾、
一鵜の浦、中山鄕、
一熊木の里、熊　木、
一知盛塚、水　白、
一屏風崎、蘆　浦、
一氣多本宮、所　口、
一實盛塚、國　下、
一菱脇濱、四柿庄、
一いかけ山、崎山澤野鄕、
一種ヶ島、瀬嵐村、

一机　島、八箇庄、
一角　島、鵜　浦、
一瀬嵐熊　木、
一新王塚、小田中、
一岩屋清水、所　口、
一石動山、二宮より、
一溫　泉、和　倉、
一永光寺、酒　井、
一長曾川、金丸保、
一國分寺跡、國　分　村、
一佛　谷、佐々波村、

鳳至郡名所舊跡

一錦　川、釗　地、
一高淵山、大野村、
一高尾山、寺　口、
一寶泉寺、道　下、
一岩瀨渡、中町野、
一重藏宮、輪　島、
一神倉島、名　舟、
一親の湊、大屋庄、
一明泉寺、諸橋鄕、
一一本木、諸橋鄕、
一來迎寺、穴　水、
一龍大明神、山田鄕、
一八重一重櫻、豊田保、

珠洲郡名所舊跡

一長崎浦、（松波より三崎迄）
一不動寺、木郎鄕、
一佛　穴、布　浦、
一地藏杉、堂ヶ谷村、
一本　杉、上　戸、
一雲津里、三　崎、
一山伏山、三　崎、

一日の見殿、羽根村、
一戀路里、木郎鄕、
一吼木櫻、法住寺村、
一吼木山、忠の鄕、
一寶　嶺、若　山、
一駒の尾、三　崎、
一鈴の御崎、三　崎、

寶永六年改る駄賃錢御定

一能登國駄賃定は、口二郡本馬一里三十八文づゝ、人足は本馬之半減なり、輕尻は本馬の六歩なり。
一奥二郡は、本馬一里四十七文餘の割合なり、人足は輕尻の半分也、輕尻は本馬六歩なり。

一口　郡、本馬　一二、　輕　尻、六九四、
一奥　郡、本馬　一三二、　輕　尻、七九二、

能登國名跡志首卷

終

能登國名跡志乾之卷

○高松　加州河北郡也、津幡の驛より三里、本馬百貳文、輕尻六十四文、人足五十一文、家數二百軒計にて、過半獵師にて蛤名物なり、能き驛也。

此驛は金澤より本道を經て、凡六里半あり、本馬二百十文なり、間に七窪とて二里程入濱ありて、難所少し有、又金澤より間道は粟ヶ崎を經て濱傳に道程五里餘あり。是も七ツ塚とて人家を隔てたる所有、不自由なる往來なり。

又加州能州境は、山手は松の一木あり、是を境とすともいへり。濱手貝殻塚（カイカラ）とてあり、此塚を境の塚とす、先年此塚にて今濱村長三郎といふもの餘程の金子をひろひし事あり。又此山の東宮島越といふ、加能の浦方都て越中今石動への往來なり、上川合村といふより東へのぼれば、加越能三州の境山あり、是を三國峠といふ。坂上に一里塚の如くの小山ありて境とす、南は加州の吉倉山なり。東は越中宮島山なり、西は能州河合山なり、諺にいふ三尺の繩に繫ける牛は三國の草をはむとは此所なり。

但し越中の宮島村は能州境二里の間散村となり、宮島とは總名にて中にも能登近き所を小名に栗栖といふ、此村の入口に俊寛僧都の古塚あり、總して能登の國は往古羽咋の潟より、能登郡海道を經て内浦・田鶴濱・曾濱・石崎抔へ續いて島國なりしといへり。日本の北島の陰國にして鬼門たり、始は越中の内にても鬼界島といふて人も住す有しに依て、化鳥大蛇住て人を取喰ふ、是は第六天魔王我國を取かへさんとあまくだりて、神力降魔から通力失て、所なき外魔の集り所なるを、氣多の御神此變化を退治有しにより、次第に人家出來て一國となれり、今も小田の瀧大明神、鷲嶽八幡宮等の緣起にのこれり。俊寛僧都、丹波の少將、平判官三人の配所も此能登にて所々舊跡あり、中にも富木の鉈打山といふに、俊寛三十三所の觀音を移して順禮ありとて有、又成經康賴歸洛祈りの爲、三熊野の權現を勸請有て、毎日社參有しとて、熊野方といふに權現の大社あり。又聞兩人歸洛有りて内府平重盛卿此事聞給ひ、元より平家信仰の御神なれは、御神體を越中の國關野の神社眞津（マヅ）の宮へ移し給ふと緣起等にあり、俊寛の塚宮島に有こと元暦の頃木曾義仲越中に矢部川に陣取有しを聞、尋來り平家の運傾く迄此所に有りしとて、行法の瀧、難行の岩屋抔とてあり、此瀧の不動尊今も靈驗あらたにて、諸人歩みを運ふなり、其後爰にて卒し有しとあり、此外にも鵜茅葺不合命（ウカヤフキアヘズ）、鵜殿の御產所も能登諸棧の鄕に委しく御舊跡あり、是等の事今筑紫薩摩潟抔と諺ひ物等に書傳る事いぶかし、併是等にもかならず所々に此類多し、案ずるに邊鄙の物毎しれがたきにて、作者の未熟にしてしりやすき方に作れるもの成べし、然は根元のすさましくすたれる事甚だ恨の事成べし、去ながら古きを引今を改るにはあらねども、彼を聞是を見て書記さんとおもふより爰に記す、又高松より今濱迄の半途に大海川尻川とてあり、是は能州にて【和漢三才圖會】に、川尻より金澤へ六里とあり、昔は此濱邊にありて驛なりしに、水難に退轉して、川尻村は今山手に有りて今小村なり、此川尻村は常も歩渡りなり、出水には海岸洲入て危しあやまちあり。

すいりとは俗言にして、まことは砂落入て踏所定す歩む中に足深く砂に入て、或は死すものあり、能州第一の六ヶ敷川也、尤出水には川上に二ツ屋村とてあり、其向に涉り瀨あり、今濱より南の里人は高松への往來の道の瀨也、不案内のものは人の渡るを見て渡るべし、此川の源は寶達の牛首村山より一筋同瓜生村山より一筋流れて、上河合村といふにて合流す、又此川筋にて捕る鮒銀ごりとて名物なり。

（寶達山）

又二ツ屋村に弘法の名號石とて石毎に文字すはれる石畑中抔にあり、又寶達山は國の南にあり、誠に三州に跨かれる大山にて、過半能州也、誠に此山は藥草金銀其外產物多き山なれは寶達の名あり、寶達村は西平にあり、家數は拾軒ばかり町作りなる村也、金を堀し頃所々より來り集りしゆゑ出所を人々家名に呼ぶ中にも、谷内屋といふもの根元の者にて、今用る所の大釜は末盛の城の釜なりしといへり、其外此もの〻家に武器の類相傳る也、銀を堀し頃は繁昌にして家數も多く有しより、其時金を堀し處は谷内に在、金山散潰れし時、人多く死したるゆゑ今も雨の夜は人多くして泣く聲するゆゑ今汨（ナヰ）谷と云、是等の事惣して人の多く死せし古戰場などに所々有、魂魄殘りて天曇り陰陽氣せまり蒸て聲あり、野火燐火抔の不思議有事也。又寶達の御前といふは村より一里登る也、千束姫の神社に立給ふ式内の神社也、權現本地釋迦如來也、祭禮は每年八月廿六日廿七日也、高山絕頂にあれは常に風あらきゆゑに社の廻り土手を築き窪みにあり、又此御前北に陰陽の瀧とて不思議なる瀧あり、瀧口二ツになりて有、雄瀧といふは　銚子口より水落て一月の中上十五日水落て、越中氷見の庄小米川等の源也、雌瀧といふは下十五日洞口より水落て、能州子浦川

の源也、誠に希代、不思議の瀧也。其上此邊は山深く清淨の地にして折々天人天降り遊ふこと有と所にいひ傳へり。又此邊に能き髪剃砥出る所有、御留山にて伐出す事ならす、春の頃は猿の馬場又は朝日姫ヶ谷抔とて有て面白き所々數多あり、蕨・獨活・ぜんまひ名物也。此寶達の續きを押水大海の庄、押水北の庄、押水中の庄とて村々多ふし、これを押水三鄕といへり、紺屋町村といふに昔弘法大師あたへ給ふ水あり、杖にて岩を押たまへは水出しより押水の井といへり、是を以押水の名あり。又此村に岡部の六彌太の城有、誤りにや、併此村に六彌太の子孫とて百姓にあり、又川原村に長兵衞とて百姓に武器をもち傳へたるもの此鄕に多し、高松より今濱迄に米出川、相見川とて二筋あり、是は常に水少なし、相見村近し、相見の神社立給ふ近鄕の宗社也、式内なり。

○今濱　高松より一里三十四町、本馬七十八文、輕尻四十一文、人足三十八文、家數二百軒餘あり。

此宿は昔は荒地の捨濱なりしに、一上は川尻水難に退轉し、下は宿村とて末盛城下にて驛ありしに、是も兵火に中絕してありしに其頃子浦一宮より高松まて驛なくして往來便り悪敷により、御詮儀有て近里細見村・新保村・鍋坂村の三ヶ村を此處に、合せて新宿被仰付候より、今濱

(咋羽)

の名有、今は内外の追分の驛なれは次第にはん昌して、獵師商家數多出來、内浦々行は子浦にて馬次也、外浦へ行は一宮にて馬次也、此村に法華堂とて古るき百姓あり、此者昔細見村口に有しものにて、其時日蓮上人の御弟子日像上人北國法華弘通のため下向の時、此ものゝ家に御滯留ありて、近鄕の衆生に大乘の法味をとき聞せ給ふ折柄、近鄕麥生村今の妙法輪寺は其時は教場也しに、其頃法印日像上人と度々の法論有し、終に法印法論に負け、日像上人の弟子となり改宗ありて則寺を法華の道場となし給へり。今も本尊阿彌陀と釋迦と左右に安置あり、兩尊共に行基の作なり、其外佛具其時の佛器共なり。

御收納藏二筋あり、其外御家中米藏あり、此今濱より子浦へ一里十五町有、本馬四十六文なり。

此上卷は三崎の鄕狼烟村迄記に依て、外浦通の事を書載り、末盛子浦の事近里なれとも下卷の末にあり。

今濱より一宮へ行程二里に羽咋川あり、能州第一の大川なり。常に往來に舟渡しあり、此川は羽咋の潟尻にて則羽咋村は川の南にあり、能州一の商所にて二千石餘あり、家數三百軒餘有、本念寺とて羽咋郡東の方淨土眞宗の觸頭の錄所なり、此御坊の報恩講の時八月廿五日唐戸

(潟咋羽)

山といふにて角力あり、人集りにぎわしき事なり、又當國三十三ヶ所の札所の内拾五番目の觀音松岡寺といふは、村の東端にあり、今は寺なし、御收納藏數戸前あり、塵濱村と有れども名目計にて此村の支配なり、塵濱村は續にて無高所にて獵師ばかりなり、又羽咋の潟村の北東寄にあり、長一里餘幅二十二三町有、潟緣村々多く名所も所々にあり、是は子浦川、飯山川、其外南北の各水流れ入なり、鯉・鮒・鱸の名物なり、往古は入海にて内浦所々へ續てありしに、次第に陸地となりおのづから潟となりしとなり。昔島國なりし時は第六天の魔王悪鳥と化して人を取喰ふ、氣多大神宮平け給ひしより羽咋の名あり、

【萬葉】の歌に

鹽路からたゞ越へくれは羽咋の海の、朝なきしたり船かちもかも

此潟緣は大町村・金丸村・千路村などとて村數多し、千路の潟とも云へり、中にも太田村・四町村は江戸在住の土方何某殿の領地なり、四町村に古き百姓あり、昔畠山家領地の時分は餘程の扶持も給り居申由にて、畠山家臣溫井氏等連判勝田永三殿と申扶持狀等數通所持す、又堀替新村に彦助といふ大百姓あり、四町村の内若松屋とて抱の女ありて繁昌なり。

○一宮　今濱より二里十五町、本馬八十八文、輕尻五十四文、人足四十四文なり、高松より是迄は平砂なり。

此一宮は宿と寺家と二ヶ村に成て、宿の分は家數百五十軒餘ありて、商家などあり、又寺家村は氣多の社の門前にあり、神主百姓入交りて是も八十軒計もあり、此一村は氣多の社地にして火を齋む事正し、或は女の月の穢などは家々屋後に別家ありて籠るなり。又懷胎のものは山に出小屋とて有、是にて產するなり。其外當社は他社と違へ社格色々有て嚴重なり、若無愼者は忽に其祟りあるなり、惣して昔は一國當社の守地なれは如斯火を齋しによつて、能登に限り產して新齋の内を小屋の内といふ。又氣多の一宮大社にして、【延喜式】などに委し、本殿は大己貴の命、奥の社は素盞烏の命、稻田姫の命なり、卽御夫婦の御神此處にて神隱れ給ふとなり、頂の社は大穴持の神の御像石なり、神代よりの御鎭座にて北國の大社なり。又諸神記の卷中に曰く、氣多の神社は崇神天皇の御宇御勸請とあり、又【類聚國史】神祇の部に、文德天皇齊衡二年五月辛亥詔有りて、能登の國氣多の大神宮寺に住寺を置くとなり、其頃は社人、禰宜、社僧多くありて、中頃畠山國主の時は三千石なり。其後は兵亂に大神宮寺多くの社人衆徒も絕轉す。御當代になり亞相利家公社領三百五十

石御寄附又黄門利常公になり、大宮司櫻井氏の外に社僧四ヶ寺御建立あり、社頭諸堂御再興、御膳調上の濱十町網船一艘御寄附、大宮司大監物六十五石、社人廿人神子一人は七石宛、別當長福院は六十石、地藏院藥師院正覺院三ヶ寺共十石つゝなり。御社領三百五十石の内いつれも配分す、櫻井大宮司は一國の觸頭の錄所なり、長福院は四ヶ寺の首領なり、此寺の露路は利常公御逗留有てつくらせられしとて見事なり。また當社寶物數多あり、中にも滿汐珠あり、是は種々奇端有て靈珠なり、賴朝卿奉納の太刀一振、梶原の太刀一振なり、其外寶物おほし分て崇神天皇より代々勅使あつて、綸旨院宣數通あり、これは大宮司鍵預りにて賴て拜見あるべし、むかし秦澄大師川越の堂に籠りて天照大神宮を拜み奉らぬと誓ひありし夜、夢想の御詠歌に曰、

戀布者（コイシクハ）、尋天毛見與（タヅネテモミヨ）、能登（ノト）、一宮之（ノ）奥之社江（オクノヤシロヘ）、

斯御告あるによつて、大師此社へ詣給ふに、御神體山伏の姿にあらはれ卽誓て曰、天照大神を信ずへくは先我を信すへしとて、神隱れ給ふ、其古例をも每年三月四日より石動山衆徒六人來て中門殿において七日の別齋ありて、神前に三升式の護摩を燒て奥の社へかけるなり、是を採燈の護摩といふ、是を俗にをとこはらひといふ、御社の煤拂といふことにや、昔より石動山は北陸道六ヶ國每年大宮一度、此宮分一度知識米とて勸進す、往古より石動山とは有緣あり、其外祭禮年中數多あり、中にも大祭は每年二月初午の日御出輿ありて、所口本宮能登生國玉の神社へ八里の程行幸あり、本宮に二宿座ありて御歸座あり、此道すからいろ〳〵古例あり、福田村七郎兵衞といふもの、ちいさき籾の俵二ツ備ふ、是を投俵といふ、又八幡の內捨子後といふ所にて、其昔御子を捨給ひし因緣にて、神輿の鈴をならし給ふ、姉宮は上曾根村の氏神、弟宮は下曾根村の氏神なり。又昔の道筋は遠くて廿田保へかゝり、宿女神の宿に御一宿有しなり、依て宿女の名あり、此宿女の御神體は椎葉圓の神社と號して、石動山天漢石三ツ一ツにて、山御同體の御神にて、御神體は石なり、誠に此旅祭の行粧は多の禰宜神主美々敷馬上にて神輿に供奉し、長途の行啓の莊觀なり。又每年十一月中の巳の日は鵜祭とて、昔は代々の帝より勅使ありて、四方にかくれなき御祭禮なり、同國鹿島郡中山の鄕鵜浦村より鵜をとり捧し、一宮迄十一里道の程あり、道すから勸進す、所口本宮にて卯の日新鍋の祭禮ととてあり、夫より良川村の宮にて、一宿巳午の日一宮にて淸め祓あり、丑の刻に神前へ鵜をはなつ、鵜おのづから本社の階を登る、戸帳の前にて羽たゝきして跪く處をとらへて海へはなつ、此鵜きまりて越後の國中山の神社能生權現の磯による、其時能生權現の祭禮なり。此謂は近き浦も有へきに、遠き鵜浦より鵜を捧ること、或時代島の女神此鵜の浦の磯へ寄給ひて、一宮の御神と夫婦になり給ふ、其後御中惡敷なり給ひて、女神又越後の能生へ飛給ふてある社地をかり跡を垂給ふ、能生權現も中山の鄕中山の神社また鵜浦も中山の鄕なり、今も鵜田とて利家公より御墨付を以御神田ありて、當座のもの此田を作りて鵜をとりて捧るなり。

又一宮上野に十三塚とて有、何も古塚にて中にも甲塚とて樣々兵具を堀出せり。又石塚といふは方二十間計にて積とる石每に梵字彫てあり、是はいづれも一宮社領三萬石の時は一きはの所にて、衆徒多く有に、其時の跡なるへし。今に衆徒の住し處とて、羽咋村境六萬坊といふ所あり。又一宮と柳田村境に粟生の七郎といひし人の城跡とて有、此人越後謙信勢と戰ふて討死有しとて、其塚は羽咋村境猫橋の邊にあり。

又一宮宿村の淨土眞宗の御坊に聖德太子の靈像あり、色色奇瑞あり。是は瀧村寺ヶ崎といふより堀出し候といへり。一宮と瀧村境に瀧あり、山茂り大木ありて餘程の瀧なりしより、依て瀧村の名あり、此瀧の不動尊は泰澄大師の作にて靈驗あり、今は瀧村の氏神となり、社有瀧石とて眞石の水晶の帶有る石礎などによき名石なり、瀧村は海へさし出る處にて、昔瀧の津にて繁昌な處にて、此邊の津なりしとて、一宮の勅使の御宿せしものゝ筋とて、四位といふものあり。今は一村釣を業としてあさましきことなり、釣鯛の名物なり、昔一宮の勅使に中納言家持卿の歌とて、

越路野をさし出みれはをふちかた、氣多かく見ゆる瀧津瀨の宿

都より思ひ越路の竹の津に、一夜のうちに雪は降りつゝ

越路野は千路の潟の北平に有、潟の南東の方を大路の里といへり。七十五ヶ村をさしていふなり。是は倾山の處に書き記すなり、又芝垣村は一宮より往來十四五町にあり、茶屋助左衞門とて古るき百姓あり、昔芝原將監と云ひし鄕士有しとて、廓跡は南の山に有、館中將監ともいへり、いたつて富貴にして佛神信仰の人なり、色々奇特ありて常は山水の風景を好み、領內に近江八景を移し、又は內外の伊勢の神垣勸請せし所とて、東の山中などに所所有、此磯三町計沖に長門島とて風景の岩ありて、今は

（妙成寺）

七面明神の堂有、江州浮御堂の風景のよし、本尊七面御神體は此海より揚り給ふ石佛にて奇瑞あり。則此村に本成寺とて法華宗あり支配なり。將監は瀧谷妙成寺開基檀那にて、法名法光日惠大居士と號して、瀧谷開山堂に位牌等あり、則妙成寺開山日乘上人の伯父にて、上人は此家にて御出生のよし、又瀧谷は此芝垣村より山手へ入なり。十町餘あり、一宮より二十五町餘有、瀧谷村は不殘妙成寺の寺領地なり。

金樂山妙成寺は羽咋郡土田の瀧谷村にあり、法華宗にて永仁年中日像上人の開基の御寺にて、北陸第一の一本寺の法華の道場なり　地領百二十石餘、中興黃門利常公御母君壽福院殿御菩提所にて、諸堂御建立有りて、組物彫物等手を盡し法華七堂迦藍作とて言語も絕したる寺なり。中にも番匠の名人山何某の作れる名物の五重の塔有、寺中に七坊の棟をならへ、其外末院所々に多き大地御寺なり。又寶物數多あり、中にも日蓮上人、日朗上人、日像上人三幅對の曼陀羅、傳教大師眞筆の心經一卷、水晶の塔に入て有。弘法大師吼木の板にて彫し給ふ法華經の版木六部あり、是本山法住寺の什寶なりしに、今此寺にある事謂傳あり、兆典司書の涅槃像繪一軸是も一宮の什寶のよし、菅相公の御筆の一軸利長公御直筆の當寺境内陣取の繪圖一軸、其外寶物多し、略す、いづれも常は寶藏に入開帳あたはす、又鎌倉の町奉行靑砥兵衞尉寺法の定書客殿にかけて有、又開山日乘上人此寺繁昌ならは茅張べしとて、平生用ひ給へし槻の杖をさし給へるに大木となり、今開山堂の後に杖塚とて槻の木の枯木有り、又釋迦堂の本尊は丈六の大佛なり、此御首は芝垣の磯に奇瑞ありて寄給ふ尊像なり。其外靈驗多し。昔此寺は瀧谷寺とて石動山門徒の教說の大地なりしに、時の住寺を乘微阿舍利とて尊き行者なりしか、或時佐土の國への渡りの船中にて、日蓮上人の御弟子日像上人と行力くらべ有しに阿舍利日像上人に負給へしによつて弟子となり日乘と改名ありて、則此寺を日像上人に渡し、法華の道場となし給へり。永仁二年四月のことなり。此事石動山衆徒聞くいろ〳〵仇をなすといへとも不叶して、終に日像上人草創ありて日乘上人を開山となし給へり。每年六月廿六日、日乘上人忌講會あり、諸商人他國よりおほく集り參詣群集して繁昌なり。此忌講會は諸國の末院僧徒集り、當住の官主を輿に乘せ、客殿より開山堂迄音樂歌舞にて行列あり、僧徒供奉し、中にも山伏の姿にて螺貝などを吹て供奉するも有、是等は則乘微阿舍利の古式なり、近國參詣ありて賑敷事なり。

又向の山に蚊寄の八幡とて有、是は此日の夜乘師蚊を封し給ひし事有りて、寺中の蚊のこらす此八幡の拜殿に行て寺寺におらす、依之蚊よせの八幡宮といふ。此忌講に町村の武右衞門千路村の柳屋といふものは、古き百姓にて由緣ありて拜禮に出るなり。宗旨は淨土眞宗なり、又二宮村の北左衞門、加賀左衞門とて有、是は石動山より仇なせし時、一命にかけ御身かたせしものとて、是も拜禮に出るなり。七八町奥に元瀧谷といふ處に乘師屋敷とて有、御隱居所の跡なりといへり。元より此日乘上人は瑞德甚敷上人にて、今に瀧谷村に產婦あやまちなし、厄神の祟りなし、七面の社は向の山四五町にあり、靈驗あらたなり、又一里山奥に大森といふ恐敷處に白山の宮あり、是日乘上人の石動山より仇をなせし時、御伯父原將監此處に隱居まいらせしとて、御神體は上人守護神、御長三寸の白山妙理大權現の黃金の尊像なり、いたつて奇瑞あり。日乘上人は御歲百十四歲にて、六月廿六日遷化ありしなり。瑞德不思議なる上人なりと、又此上人の弟子の內石動山と一味して、却て上人に仇をなせし事有に、是も不叶して夜中什寶造具を舟に運ひ、今に越前國敦賀郡に瀧谷寺とて有るよし、又聞昔は此瀧谷寺は眞言宗にて鳳至郡大屋の庄吼木の山中村にあり、吼木の根本にて弘法大師開基の寺なりしとて、今に瀧谷と地名に呼ふ處に大寺の跡あり、大木の槻の木二本あり、今に礎としてあり、寺二ヶ寺の跡あり、山中にて盜賊の難ありて、芝原將監と乘微阿舍利心を合せ、今の羽咋郡へ移し給へりといへり。また一ヶ寺も內浦へ替地して吼木山法住寺なりと吼木山にいひ傳へり。法住寺の事はいかにや信じかたし。法住寺にも弘法大師の御舊跡數多あり、只吼木村といふよりいへる事なるへし。羽咋郡妙成寺は其頃法住寺の法類にて、彼地にありしや、吼木の版木あり、又芝原家の事などのこと所替有て無程改宗、乘微阿舍利有しや、吼木村の隣村別所谷村といふに、成隆寺とて法華宗一ヶ寺あり。此寺も日乘上人の德をしたひ改宗ありしといふ、誠に此妙成寺は一宗のもの參詣あるへき靈地なり。

此瀧谷へ芝垣村より參詣して、大島村へ出るに。往來纔に五町計の廻りなり、裏門より出れは元の磯邊の往來なり。大島村は芝垣より一里餘あり、能き村にて御家中給人藏宿有、この村の氏神は海際の山の茂りてみゆる松森なり、本地正觀音にて諸願成就の宮といふなり。每年石動山衆徒僧正廻りに出る時、此宮にて祈念を初めてこれより、諸國へ出るなり、又此時に境兵衞とて百姓あり、先祖境兵衞天正年中利家公肥前那古屋御陣中へ、手船

に兵粮米を積んで呼子湊にて利家公へ指上候事神妙に思し召、竹布の御帷子幷御扶持高の御黒付頂戴ありしとて、利家公御墨付等數多、竹布の御帷子家傳すといへり。今は御扶持方は家屋にて引有之由。

又大念寺新村は往來にて大島より一里あり、此村は捨濱にて有しを近鄕より出屋して次第に大村となりて、今出村と呼ふなり。大念寺も近きゆえに大念寺新村と本名をいふなり、今に諸役御免除にて無高處なり、依て御收納藏數多あれとも是も川尻村の支配なり。神代川尻川の湊にて川の南は出村、北は川尻村なり。間に三十六間のはし有りて境とす、川口は餘程の舟出入して、兩村とも賑敷なり。此川の源は佛木村奥山より一筋直海山谷水等流て、福野の潟を經て此湊迄六里餘流るゝなり、此川上に赤目の淵とてあり、横穴ありて奥しれず、總して此川筋又潟緣等村々多し、又堀松村は川尻村より十八町あり、本馬二十一文、是より内浦大津村へ出る大道にて二里半あり。本馬八十文なり。内浦より金澤へのをふかた往來なり、又末吉村は出村より十町あり、手筒何某の城跡あり、其筋目ありて盆中は灯籠の手向、金澤御家中よりあるよし、また此村中の橋爪に自然石の地藏あり、又百沼彦の神社立給ふ、此村の源助といふものは、昔義經へ宿

まいらせて給りしとて、太刀の小柄を取傳ひあり。いかにも古きものゝよし、又堀松村に國田の何某の十村役あり、禪宗日蓮宗の寺二ケ寺有、此邊の驛にて能き村なり。

又山手に阿津見村とて有公領なり、則登豆美姫の神社立給ふ。又二所宮村潟の北方なり、諸星彦の神立給ふ。昔大社にて兩部にて神主社僧あり、社領二千石なりしよし、境内ひろし、此森茂りて近鄕より見えし故元は森村といふ。中頃城地のことも有しとて、馬場等或時社僧と社人等元朝に神前にて口論仕出し、刃傷に及んで人死する事多し、此時は宮退轉す、其時の社人の子孫とて天神左近森兵衛抔とて、今に不思議あるは正月十五日迄、松の中に小豆又は着類よふ成ものも、赤きものを用ゆると家内中血になるのみか凶事あり、依てかた〴〵忌むなり。其時の社僧は二里わきなる德田村といふに退き、則森山とて眞言宗六坊あり、總名安養寺といふて今も寺領十二石餘なり、是は利常公の御母君壽福院殿此所の御出生ゆゑ寺領有之、

又二所宮村は御預ヶ所と御私領とにて有、此村の中屋といふもの先祖は森仲安と云ひし公卿にて有しか、持傳へる寶劍ありしを、利家公大福寺へ御參詣の時分、仲屋方に御宿申せる、右劍御所望ありて指し上、其代りとして戴し御脇指なと持傳る。此者の名字を村名に唱しともいへり、今に森の中屋と諸人いへり、此村の晦日川の淵に其時の宮にありし鏡ありて、水就には見ゆるといへり、又梨谷山村に阿加志彦の神社立給ふ、御神體大石にていつれの御像石にや知れず、又釋迦堂村の氏宮は御神體丈六の釋迦如來なり、則社地は大寺の跡なりしとて、礎等殘りて有り、又直海村といふには瀨戸彦の神社立給ふ。又佛木村は山中にあり、元は佛切村といへり、是は峨山和尚の御弟子梅山禪師此所にて盜賊に逢給ひし時、守佛の觀音身代りに立ち給ひしゆゑなり。越前國御簾尾の龍澤寺は、此梅山和尚の開基せしといふ、大蛇を化導有しこと緣起に委しくあり。

又福野潟は昔は一里に二里餘の潟なりしに、今は所々開處出來て、少し蘆原等になりてあり。此潟緣館村館開村抔あり、館村に古田何某の廓跡あり、福野干瓢は多此邊にて出來、御用なき年は所々へ賣出すなり、總じて此能登の國は昔は今濱より三崎迄内外の浦傳ひ往來なく、山の中通り往來せしにて、其時は此福野など通りしものなり、是を今中道通りといへり。說にいふ「能登はやさしや土までも」といふは、此中道のことなり。果實菜根まで浦

わとは違ひ、やはらかにて味よし、

○神代川尻　一宮より二里廿五町、本馬九十一文、輕尻五十五文、人足四十五文なり。家數三十軒計有。

此村川の湊にありて商家有、小舟抔出入して餘程繁昌の處なり、驛場にて富木へ越る往來二筋あり、一筋は五里峠とて二里餘は人家なし、難處なり。併是は本道なり、又一筋福浦村を經て行なり、是は道よく浦半の詠めあり、然れども福浦の高き石山あり、道せまく駄貨物は通りがたく、又神代も此川尻より川上十町計有、神代の神社立給ふ。又川尻村には御家中給人藏宿あり、又福浦通りは安部屋を經て行なり、川尻と安部屋村の間に町村とて有。廓跡あり、城主の筋目とて武右衛門といふ古き家有、公領なり、又安部屋村も公領なり、船のかよひ間あり、向ひ島とて間を抱へ島有、御普請にて波除石垣あり、辨天堂あり、前に夜中舟の目當の燈明堂あり、小酒屋抔とて舟持あり、富たる處なり。津兵衛といふものあり、先祖は尾州中村の住服部土佐守とて、太閤秀吉公に仕へ、一萬石被宛行ものとて、知行目六等家傳して由緒有ものなり。此村町端の崎にカン〳〵石とて打は鐘のごとく鳴る石あり、又福浦村は川尻より三里あり、赤住・百浦村抔とて往來にあり、赤住は懸り船の間あり、福浦は北國の一の間

（福浦）所にて、夏中數百艘の船不絶、家數百軒計ありて、船問屋持はんじやうなり、大間の外に不見の間とて有、何れも間の縁に家居して有、淨土眞宗二ヶ寺あり、是等も間の縁にあり、間の上の崎を日和山とて、船の目當の燈明堂あり。此邊面白き所なり。又不見の間の高に盜人穴とて洞あり、又少し行は鷹巢島とて不思議なる小島あり、岨敷事限りなし、此方に瀧あり、鷹巢の不動とて靈驗あらたなる尊像なり。此邊岡に目納左衞門といふもの住し處とて有、錦砂とて壁なと塗よき砂あり、又牛下村ととてあり、此磯に機具岩とて有、浪の寄る風情面白き處、織機具にわさ〳〵石工のなすとも是程には有へからす。

織姫のたてしや磯のはた具岩、あやをりかゝる浪のかす〳〵、

又少し行は產神村とて有、此村に產神の宮產神の池とてあり、昔此處にて源九郎義經の妾の難產ありしに、行末產婦を守らんと誓ひ有しより、此一村產婦腹帶せす、產に昔より危なし、本地不動明王なり、前なる川にて石を拾ひ、代りに池へいれ、池の石をとり懷中あれは、產にあやまちなし。

祈りつゝ恵そあふく產神の、守りの石をひろふ人
人

此村肝煎久左衞門といふもの、氣質淸直にして至て孝行のものにて、安永年中御聽に達て三人扶持に永代諸役御免にて、近鄕のもの是を見習ふへしとて御觸あり、かゝる邊土にかよふの志し希代の事なり。

又富木の上の入口に七海の荒木とて、山岨へ海へ指かゝる處あり。此風景山の形を海邊の岩組砂川の淺瀨岩間を潛るありさま、怪石、異石、自然の詠め言葉にも盡しがたき佳景なり。去るによつて露路を作るには此處のさまを移すといへり。寶永の頃淺香の何某此處にて、

今更に心もなきぬ波風も、あらきの浦の名かたゝすして、　久　敬

此處浪あれには往來なりかたき事有て、上の山へあかり、四五町廻るなり。又加州宮腰往來に在、龜山は此處よりあかりしとて、其雌石とてあり。是も龜形のさながらなり。此處を義經通り給ひし時狂歌有しとて所に云傳へり。

義經か身のさひ刀ときにきて、あらきの鞘へ入そかなしき

○富木　神代川尻より四里二十五町、本馬百六十七文、輕尻百四十文、人足五十二文、一五の日市場なり。

富木とは總名にて此邊の鄕名あり。町中に富木川とて流る二十間計の橋あり、川の東は地頭町とて驛なり、西は領家町村なり。其外高田村町・七海村町・本鄕村抔とて入交り、家數五百軒はかり有、過半商家にて八兵衞膏藥とて歌仙貝なと、又林氏十村役有、其外由緒ある百姓なと有。

又富木の城跡は、東の山の城ヶ根尾といふにあり。又富木川は貝田川とも河内川ともいへり、源は鳳至郡河内村奥山より流切富村緣を經て川筋七里餘にて海へ入るなり。此川緣をあがり內浦熊木へ出る道あり、此富木院內とて山廣く横幅能州一の廣さなり、熊野方の口鉈打の鄕とて村々多し、鉈打山とて近鄕の高山有、昔俊寬僧都・康賴・成經三人の配所此邊にて、俊寬此山に三十三所の觀音を建立し順禮ありし觀音の堂あり、今も無志ヶ岑とて當國廿四番の札處なり、元は那谷內と云しなり、則僧都那智山と谷汲寺をかたとり付られしよし、加州那谷寺觀音は此處の本尊なりしを、利常公移し給ふと處にはいへり。又熊野方の鄕に熊の權現の大社あり、近鄕の總社にて神主尾崎氏なり。是は昔平判官康賴、丹波の少將兩人歸洛祈のため、三熊權現を勸請ありて日參ありしなり。其頃の宮跡は谷內神社とて有、其御神體を移し奉りしといへり。其外三人の配所地名なとに殘りあり、いつれも山中にある村なり、鉈打山は羽咋・鹿島・鳳至三郡の境山にて絶頂に大石ありて境とす、高山にして風景類ひなし、內浦曾福村より近し、又富木村は御收納藏御家中藏宿もあり、此富木村の西の方濱手は藤懸の柳とて赤崎手浦・用戸・風無・小窪・笹波・前濱とて村々あり、是を富木の七浦といふ。此灘傳ひ風景にして松ヶ下といふ處は船の懸り間あり、犬戻り駒返し抔とて面白き處あり。又尾崎とて大に西にさし出る處あり、此國の西方のはてなり、上野を尼野といふなり、此處自然と蕪菜多く生るなり。昔義經の辨慶に鉋をとらせられし處とて風景あり。又前の濱村の內に關野とて義經のしはらく住み給へるとて不思議成る岩窟あり、七八町海へさし出る尼崎にある岩窟なり、內に種々の所ありて廣きこと不案內にては元と入し口へ出る事ならす、前濱村より案內を連て見物あるへし、希代の岩窟なり。

武士のたけき心の程しるく、石の岩屋の今にくちせぬ

又笹波村玉龍寺とて眞言宗有、十五社權現の社あり、向に人影の淸水とてあり。

但し三ヶ國に一ヶ所つゝあり、加州石川郡日御子村宮森の內に人影の水あり、越中礪波郡立野村田の中に有、人寄せす靜成時は水涌上り、人立するとやむなり。

又富木より劍地村へ行には三町計に中濱とて入濱あり、

秋末は風あらく難處なり、相神村に土島彌五郎とて、利家公より御扶持頂戴し、十村役なりしに、近年退役せしなり。又酒見村近く龍護寺とて禪宗あり、五百羅漢の木像安置なり。又境内に龍護水とて冷水あり、此水にて造れる酒美也。

富木より二里の間八百比丘尼の植しとて椿原あり、按するに若狹の白比丘尼の舊跡處々に有、是は伊勢國白子驛の産ゆゑに白比丘尼ともいひ、又は百比丘尼ともいへり、又城中黑部の庄玉椿といふ處の産ともいへり。いかにも長生して八百年の事をしれり、いづれも囘國して若狹の國白椿山に在しとて今に繪像あり、手に椿の枝をもちてあり、其外緣起に有、出生慥ならず、又慥ならさる事なれども所にいひ傳へる事を爰に記すなり。

昔越中の國黑部川の湊に玉椿の里とて今幽成處あり、其頃玉椿千軒とて繁昌なる處なりしに、此處の長なる人、或時上京せしに獨士と連立ぬ、不思議ありて、又戻りにも連立往來の宿の名染も重なり別れにける、彼侍のいへるは我社越後國明光山の麓に住み、三越左衞門と云、千年經る狐なり、今よりは其許へ折々來り語るへしと約して別れぬ、其後は三越左衞門度々來りてむつましく語りけるに、後には心安き友一兩人もよりて咄し合ぬ、或時三越いふ樣は民家の物さわかしきなれは、我等眷屬にいひ付、此家の後に一亭建て語るへしとて、程なく亭成就せし振舞とて、三越山海の珍味膳振舞けるに、其中にこざしき友の眷屬の料理物を覗きみれは、何やら人の形のものを料理す、此事を外の友に呵けれは、各此肉をくわす、三越出てわけて此肉を食へとすゝむによつて、ひそかに懷中して歸るさに捨ぬ、一人酒にて醉て此肉を忘れて歸りけるに、一人の娘ありて土產とをもひ喰ひけり。三越其後參りていふ樣は。人間は短命なれは共に長生して語らぬとおもひ、日外人魚を出せしに喰へ給はす、人間は疑ひふかきものとて其後再ひ來らす。此人魚を喰し娘長生して八百比丘尼と云しよし。又能登の國鳳至郡繩又村の產とも處にいへり、是も玉椿と同し說なりいかにや。

又富木村より二里に大福寺村の大福寺とて眞言宗あり、寺領二十石諸堂御建立なり、金陵山といふ。本社は權現なり、高爪・氣多・三崎・石動・白山・八幡宮の六社なり。昔は七堂伽藍大寶年中泰澄大師開基の大地にて、富木院内は不殘社領なりしといへり、其時鳥居有し處を今も大鳥居村といふ、中頃迄五十余坊ありしとて今も百姓に學泉坊寶泉坊とてあり、いつれも兵亂に退轉の由、中興北の坊とて奇妙なる法印有て、利家公・利常公、歸依ありて諸堂御建立社領等御寄附有りしなり。此法印はいろ〳〵怪異ある人にて、大福寺の紙袋米とて取れども〳〵米つきる事なし、その外不思議多き法印なりといへり。高爪山とて高山あり、絕頂に觀音堂有、村より一里登りなり、脇に藥師の石體あり、是荒木の海より上り給ふ大佛なり、重き事限りなきに其頃六十餘歲の里人に告ありて背をひ山上せしとなり、杉の大木有、每年六月十八日は祭禮にて、十七日の夜燈籠あかる、此山楠多し、山岨數事限りなし、加州越前など浦方より北の海中に見ゆる山は是なり、此山東十町計に注連原村とて有、家四五軒此村より往來の峠へ出るなり。

又富木より大福寺迄は平地なり、是より劍地までは峠なり、峠の谷内に有村を深谷村といふ、是迄羽咋郡富木の境なり。是より鳳至郡仁岸の鄕なり。

○劍地　富木より三里二十五町、本馬百廿文、輕尻七十七文、人足三十八文、此驛より駄ちん違あり、鳳至郡なり、家數二百軒計あり。

此處針金出來して日本一の名物なり。此始は此村何方のものともしれぬ若き男來りて入聟となり、此者劍を能打出せしに、併し此もの細工の處をいたく人に見せす、妻不思議におもひものゝすきよりのぞき見れは、其形鬼神となり、口より焰を吹かけ、鐵をのはし刀にせり、此有さまを見あらはされたるを耻ちて、數百の打たる所の劍をもちて波の上を走り行、妻別れをしたへしに、筐にや一振の劍を投けあたへり、其銘に鬼神大王波平行安とあり。殘りの劍を投け込し處とて婦古の七ツ岩といふ處のふかき海あり、今に其不思議あり。又其屋敷跡は西の淸兵衞といふものゝ井戶其時よりかはらぬとて、此水にて穢たる物を洗へは祟りあり。又此家にて產する事今にかなはす、此ものより鐵をのはす事傳はりしなり。又劍地の名も是より始れり。

又繞石川とて【日本名所記】又は【方角抄】抔に載る所の川あり、劍地の南の入口にある川なり、今あやまつて錦川といへり、源は馬場村の奥山より流て東より西へ流るる川なり、步涉川なり【萬葉】の歌に、

妹に逢す久しくなりぬ繞石川、幾せき瀨ことに皆
　うらはへてなん、

此邊を繞石の鄕といふ故なり。今は仁岸の鄕と書り、宗祇【方角抄】に展轉して書寫の誤りとてをるし川と假名付有、又錦川といふも誤りなり。

紅葉散る山下水は染ませの、にしき川とそ見えわたりけり

此歌にてしるへし、聞への似かよひたる言葉成るへし、繞石川といへともにしき川と見ゆる歌なり。

今も猶妹にそうとき繞石川　　所口勤文

流のするをたつねわひつゝ

此川の上に能き鮎あり、又馬場村近く伊藤氏の十村役あり、又本誓寺とて東方淨土眞宗の鳳至郡一郡の觸頭の緣所なり。昔此寺は石動山門徒の眞言宗なりしとて、泰澄大師などの什寶多くあり、東の山に仁岸石見守といひし人の城跡あり、又黒岩村の大きなる堤あり。

又劍地より一里計に阿岸川とて有、此邊は阿岸の鄕といふ故なり、北野川ともいへり、常は歩渉りなり、小池村奥山より流れて腰細村の西にて海へ入るなり、二里計の流れなり、此邊は仁岸阿岸として兩座にて村々あり。

又小山村といふに高左近とて利家公御墨付御扶持戴し百姓あり。又黒島は劍地より往來にて一里半計あり、公領にて能村なり、番匠屋などとて船持あり、繁昌なる所なり。是よりは道下村へ十二三丁有りし山手へ入なり。鹿磯村濱續きにて黒島の間の濱より道下村へのほるなり。

先年黒島村と鹿磯村と此濱地論有て公方の役人立會にて改り、今は濱に定杭あり、又鹿磯村より輪島にて西海七浦の鄕とて村々多し。西海鯖と刺鯖、鹽辛類の名物なり。深見・大澤・五十洲・皆月・鵜入・光浦・下山などとて御進物、鹽辛等は此浦傳ひの灘よりあかるなり。磯傳ひは鹿磯村・深見村へ三十丁有、半途に磯の觀音とて有、この深見村に御瀧とて名瀧あり、村より東の谷内へ八町登るなり、數百丈の山上より五段に落て次第に幡廣くなり、二丈計簾を垂たるごとくになり落るなり。麓の岩窟なる虎に權現の社あり、本地不動明王なり、脇に此磯へ沼に寄給ふ大佛の像あり、しやれ木にて印像しれす、瀧二ヶ所在、右を雌瀧といふ、左を雄瀧といふ、此瀧の不思議には雨中にも旱魃にも水の增減なし、往古より同し流れなりといへり。誠に山の姿瀧津瀨の有さま、長山四方につゞき松柏生茂り、哀猿さけぶ聲淸洲河岸靜心をすまし、言語にも絕したる所なりと人もなかめ殘せし事口をしき事なり。寶永の頃淺香何某此處にて、

染出す色もふかみの山陰に、來る人もなき瀧のしら糸

しかし今は漸に聞しりてや、權現社内に連俳詩歌の樂書抔いろ〳〵風詠ありといへともいとまなく記さす。病有ものは此瀧にうたれて來るとて切たる本ゆひ夥し、靈驗あらたなるよし。

山ふかみわけ入る瀧の淸けれは我心まてすみまさりけり

又道下村より此瀧見物あるには向の山を越なり、六郎木村を經て行よし、六郎木村は道下より三十町餘あり、山中に大唐竹の御簸あり、小杉村といふを經て磯邊へ出ずれは、五十洲村なり、六郎木村より三十二町有、道難處なり。此處天德の蛇池とて昔女の身を投け死せし靈蛇になり住しとて、又汨の池とも云よし、十五町磯傳ひに行は皆月村餘程よき村にて、夏中破損奉行滯留長田彦とて利家公より御扶持頂戴せる山廻り役なり、御收納藏有、此七浦の御獻上塩辛は此處にて出來、則塩辛御藏あり。又此沖に動島とて雌雄の二つの浮島あり、折々に交合するとて一集になりて島一つにみゆるなり、海あるゝ夜は此島動鳴るなり。又茂りの浦面白き所に義經の碁盤石とて在、此所の氏神御神體辛鮭なるよし云つたへり。辛鮭の宮とていろ〳〵怪靈ありしは段田の鄕上戸村の一宮なりと有、又皆月より上大澤村へ行は山越の難處あり、樽見村とて山中に有村なり、皆月より三十町餘なり。昔は磯邊にありしに、はがせ作の大船沖にて難風に逢ひ、此磯によりしを此村の者とも情けなき者ともにて、船中の者ともよわり有しを不殘打殺し、荷物を奪ひ取しに、大浪打て一村不殘家居を打崩せり、其後も度々なるゆゑ此山中へ家居せしに、家建揃ふと地くづれて家一軒もなくなる事數百年の間同し、近年も明和年中地深さ三丈計落入り家不殘崩せり、又半道餘今の處一村移り、是も又々崩かゝるにより、此頃は五十洲皆月の地をかり家居作りたきよしあれとも、兩村とも又下地のあるゝ事もあらんとゆるさす、其初大浪打村海底より浮み出しとて、其時のはかぜ船の形なる島あり、はかぜ岩ともいへり。此島に海あれの時は多く船幽靈顯れ、泪聲抔夥し。又上天澤村へ樽見より八九町四十九曲坂とて難處を下るなり。

上大澤村より大澤迄二十四町餘あり、内記とて利家公より御扶持頂く十村役あり、筒井氏なり。先祖は此邊の鄕士のよし邊土には稀なり。其外家居有て能き村なり、後山に埋み栗の御林なり是を廻りて上黒川村長井村へ出る道あり。

又赤崎村大澤より十九町あり、千右衞門とて能き百姓あり赤根（ニンジ）の名物なり。又下山村二十五町餘あり、鹿島明神あり、要石とて有り、此處いかなる地震にも動く事なし。又磯邊に達磨石とてさながらあり。淺香氏通りて狂歌

に、

往古より立すくみたる達摩石、九年面壁ものゝ
かすかは　　久　敬

鵜入村は下山より十九町餘あり、彌十郎とて能き百姓あり、此村に象頭の端とて海へ出る島あり、風景なる處なり。洞あり奥深き事限りなし、七八町計あり、役人も有しといへり、奥知れず寺口の象尾山へ續きあるよし。

又光浦村鵜入村より二十九町餘あり、昔時國村岩倉山の觀音夜な〳〵光りをはなち給ひしを、漁父の網に上り給ひしより、光浦といひし。此浦を袖の濱とて五色の光る小石あり、盆盞抔にうちて名物なり。其外小貝あり、國中一の風景なり、是より輪島崎への遊人絶す風景言語にのべかたく、又磯傳ひ鹿島より輪島崎まて五里計の間海山の絶景言葉にも盡しがたしといへども、道難處多く、中にも六郎木村坂・駒上ヶ坂・四十九曲抔とて村人の外往來はなき處なり。

○道下　劍地より一里三十町餘、本馬八十八文、輕尻五十三文、人足廿七文、家數二百軒計。

此村寺口へ近くて、一山の用達し商家交り有、能き處なり、御收納藏數戸前有、近年燒失ありて家立惡しくなりしなり、四谷孫三郎とて利家公より御扶持頂きし山廻り役

あり、和田理左衞門とて山廻り役あり。氏神住吉宮は南の岡にあり、神主四柳氏にて數ヶ村持宮支配あり、九十三ヶ村なり、近鄕は不殘此神主支配なり、櫛比總持寺、大工棟梁櫛比源兵衞といふは此處の住居なり。

又近きに鋲川の護摩堂とて有、櫻尾山寶泉寺といふ寺領十石なり。此寺昔は櫛比庄今の總持寺の地にありて、弘法大師再興の密院なりしに、中興院主定賢律師夢の告あり寺地を螢山和尚に與へ、此處へ來り一宇をむすひ住給へり、本尊不動明王の二尊安置なり。一體は脇見の不動とて白山權現の御作のよし、一體は弘法大師の作なり、其外惠心僧都の不動、運慶作の本尊彌陀、弘法作の不動の尊像なと木の裏表に彫てあり。同作の大黒天の板木あり、其外寶物あり略す。寺は緣起にあり、中頃賢覺律師は道德の人にて每日護摩修行有けれは、護摩堂の御坊と人々呼り。則利家公御寺領御墨付にも護摩堂とあり、又邊りに寺跡あり、新善光寺といひしよし、此寺の本尊彌勒菩薩は惠心僧都の作にて則寶泉寺にあり。又鋲川大明神の社あり、近鄕九十三ヶ村の總社なり。昔は大社にて別當寶泉寺神主は道下村四柳氏なり、則鋲川とて前へ流るゝを云、又道下川は一筋は荒屋村山より流、又一筋は浦上村山より流れて高根尾村の下にて合流て、黑島と鹿磯と

の間にて海へ入なり。又寺口は門前村といふて家數二百軒計あり、總持寺の門前に宿屋商家諸職人有、家並能き繁昌の處なり、道下村より二十四町浦上本市へ行く半途にあり、諸嶽山總持寺は鳳至郡櫛比の方にありて曹洞派日域一宗の大惣錄にして、寺領四百石、地方一里四方拜領にて、都合七百石とあり。境內に鬼屋村・日野村などとてあり、寺代官兩人日野氏三十石、江尻氏二十五石、寺領の內配分、寶物品々あり、後醍醐天皇勅願所にして 代世の綸旨院宣數通あり。備中の永禪寺より萬治二年に謂れありて寄附ありし、菅天神眞筆の【金剛經】あり。弘法大師をはしめ諸宗開山の眞筆あり、其外什寶數多筆に盡しかたし。常は開帳ならす、每年七月盂干のとき拜見あるべし。又行房卿書給ふ、後醍醐天皇の勅額惣持寺と書たるあり。又五院塔司にも色々寶物靈像あり、普藏院に井戸よりあがり給ふ靈像の荒神あり。覺園院に大徹和尚へ龍神より捧けし袈裟あり、永泉寺本尊觀音はかな川の御神體のよし、その外什寶多し。

本山開基螢山和尚、二世峨山和尚、又院は普藏院開山は大源和尚、妙高院開山は通幻和尚、洞泉庵開山は無瑞和尚、傳法院開山は大徹和尚、妙意庵開山は實峯和尚なり。此五院の開山血脈の法類より一院每年八月十五日に輪

番に一ヶ年當り住職有なり、十二月割合を以本山へ方丈入室有なり、此日諸國より人集り賑敷なり、開山螢山和尚は御諱は紹瑾と申て、御出生は越前國多禰の郡にて、御姓は藤原氏なり。御母夢に日光を呑て孕體有りしより御誕生なり、十三歲にて同國永平寺にて御薙髮あり、夫より加州大乘寺に於て通介徹和尚に大悟あり、法の御弟子となり、正中二年八月十五日五十八歲にて當寺に於て遷化あり、佛慈和尚と諡あり、其後安永六年光德圓明國師と勅宣あり。此寺むかしは行基幷開基の敎院なりしに、其頃螢山和尚は同國酒井の永光寺にありしに、夢の告ありて此處へ來給ふに、其時の院主定賢律師といへるにも、又夢の告ありて符節を合て則此寺を禪師に明渡し、其身は邊り近き道下村に庵をむすひ住みたまへり。今の寶泉寺是なり、其後螢山和尚奇瑞四方に響き勅願所となり、參內ありしより、曹洞宗傳衣此寺より始れり、依て一宗禁裏官此惣持寺に有て大錄所たり、委き事は【開山瑞夢記】にあり。其後は大納言利家公御簾中芳春院殿御菩提の爲に、諸堂御再興あり、山門、廻廊、五院、諸堂甍をかざり、三十宇の塔司棟をならへ、凡なき行粧なり。よりて塔司の內にも芳春院は首領にて寺領三十石あり、其外塔司は五石づゝなり、其外金剛符役義次第配當あり、

また境内ひろく門前に唐銅の勅使橋あり、一切經藏の輪藏あり、組物彫物手を盡したる毎年開山忌日に灯籠の松あり、又右の山を龜山とて龜形の山にて開山墓所なり。二世峨山和尚の御母墓所其外武衛家の墓など有。又左の山を鶴山といふ、峨山の墓は寺中永壽院にあり、秋葉社鎭守神明宮の大社あり。是より十五町奥に高尾山とて當國觀音十九番の札所の靈地有、御瀧とて有、此瀧に打るゝ人諸病を治するなり。其外祈願有に成就あり、道の坂岨數て余程のほる道々西國三十三所觀音の順禮あり。又金毘羅權現の大社あり、又後の秀山とて風景なり、開山御茶水の冷水の井戸あり、向の山を獅子山とて海上見おろし風景類なし。又尾の山を象尾山とて閑靜の佳景に開山の座禪石あり。其外境内廣く筆にも盡しかたし、誠に靈地にして諸堂美々數こと言葉にものべかたき大伽藍あり。

但し山門は芳春院殿御存命の内御建立なり。棟札の表に、奉行越前の住三輪藤兵衛尉藤原朝臣吉宗、同國住大井久兵衛住源直泰、奉行田中仁兵衛尉重政、五十嵐角兵衛尉吉連、棟梁藤原朝臣森五郎左衛門尉涛定、脇棟梁藤原朝臣椙比源兵衛尉重次、藤原朝臣名村甚左衛門尉正藤、以下番匠數三千七百六十人、

當山門　加賀大納言利家卿御内所東之御方芳春院殿被成建立者也、

以觀音慈眼、壽福增延、子孫繁榮、成就佛法僧之功德、依羅漢聖應、除災與樂、百事吉祥、終證過現當之菩提、

時慶長十五庚戌年暮春如意吉祥

又此寺口より内浦穴水乙崎への往來は上使道にて往還なり、道下より本市村にて馬次なり、一里一町餘、本市より荒屋村にて馬次なり、二里二十六町、荒屋より小又村へ一里七町、小又より穴水へ一里なり、本市より荒屋の間内保村とて有。散村にて毛屋といふ處あり氣邪大權現あり、此御神天竺摩迦陀國より我國丹波の國へ飛來給ふ御神なりしに、螯山和尚瑞德によりて此所へ跡を垂給ふ。昔社地は道脇田の中にあり、いろ〳〵奇瑞有りて今の社地へ移し奉ると有、其時より宮守の子孫とて百姓に丹波といふものあり、惣持寺より五俵つゝ扶持ありて、今も宮の裁許するなり。惣持寺鎭守の宮なり。又宮川村とてあり、此氏神は仁王尊なり。則小名に仁王堂といふ脇に願正寺とて淨土眞宗あり、是も昔は天台宗にて色々古佛安置あり。又荒屋村に人隱しとて奥深き谷あり、原村に本鄕三郎左衛門とて利家公より御扶持頂きし山廻り役の一軒百姓なり、小又村に和泉とて長家へ由緒ある百

姓なり

又寺口より大澤へ行には小町村といふへ出行なり。走出村寺口續にて諸岡氏の十村役あり、小町村より大澤の間に七瀨の瀧とて名所あり、言語に絕したる處なり。

○浦上　道下より一里二十町、本馬七十四文、輕尻四十八文、人足二十四文、此村は一里四方へ別れて所々小名あり。

輪島へ行には此村の散村にわかさといふ有、峠にて難所なり。此村八幡宮は浦上の惣社宮の脇といふ處にあり、散村廿七ヶ所の宮々は、祭禮八月十五日神輿廻り給ふて賑敷なり。又宮古場といふ處には石動山五社權現の社あり、昔石動山門院の大寺有しよし、夜盜の爲退轉のよし此村に兵左衛門とて山廻り泉氏なり惣して此邊を八家といふ。

○圓山　浦上より一里十四町、本馬六十七文、輕尻四十文、人足二十文、家數二十軒あり。

此村より長井村へ出る間道あり、道少し近し。さいやの水とて有冷水なり。又蛇池とてあり。しゆんさい生してあり、惣して此邊は蛇池とて九ヶ所あり、委き事は稻舟村の所にあり。

又此村東の方山奥、村々多し、吼木村といふに瀧谷といふ地名に大寺の跡堀礎等其儘あり。大木の槻の古木二本あり、吼木山の根元にして口郡瀧谷妙成寺は眞宗にて、此所に有り、盜賊の難をいとひ處替有しといへり、別所谷村近し。

○繩又　圓山より三十四町、本馬四十九文、輕尻二十七文、人足十三文、此村九ヶ處へ別れ、家數九十軒計有。

此村は山里に有て秋の末は長井繩又とて泥道にて惡敷堂坂とて有、坂のをりとに堂坂橋とて長七間の橋あり、此邊よりは輪島の海上を見をろし、春は櫻秋は紅葉を見、難所といへども詠めあかぬ處なり。此川上半道計に別所谷村とてあり、此川緣に神明宮有り、此川中にまないた石とてあり、此石の上へ祭禮十一月十五日に鮭の魚あかりて死して流、此魚を喰へは疾病に成といへり、此事は山田龍大明神にもあり、不思議にも奇特なる事なり。又此村に成隆寺とて法花宗あり、此村つゞき吼木村、荒屋村貝吹村などへ出、中居、穴水へ出るなり。

○長井　繩又より一里餘り有、本馬四十八文、輕尻廿九文、人足十九文、家數百軒計所々散て有。

此村より輪島へ平地なり、此村に勘十郎とて古き百姓あり、利家公より七石五斗の御墨付ありといへとも御扶持せず、利家公樣子有りて輪島の御旅館を俄に御立有て此

長井へ御越し候て、此勘十郎が家に御泊り有し時いたゞきし御墨付なり。

又輪島まて半途に小伊勢村中段村境領の長十八間の橋あり、此川源は浦上村山、東平谷水流て別所谷川と合流て、黒川村を經、輪島川と合流す、長井川ともいへり、又鳳至川ともいへり。中段村に毘沙門の社あり、昔は大社にて七堂伽藍の兩部の宮にて有よし、今も鳳至町住吉祭禮御旅所にて祭りには賑敷なり。又小伊勢村氏神廣田大明神にて祭禮毎年九月十五日なり、昔は伊勢の内外の御神勸請して諸人歩みを運ひし、役御伊勢の名の由、又此村に坂東氏あり、先祖は長家の催促うけ穴水谷内一の坊といふ處にて打死す、塚今に一坂村にあり、今も此村に御館跡とてあり、是は伊勢の御師の館跡ともいへり。又稻屋村とて有、西行見佛上人に逢ひ給へるは此所とて、名によりていへとも實は布浦といふ處にて舊跡あり。

又水守村に桃の林あり、花の頃見物なり、又東の山手に常田といふに藥師堂あり、風景類ひなき地にて其上靈驗あらたにて、毎月八日十二日に人々歩みを運ひて賑敷なり。寺中佳景いはんかたなし、又輪島の上の端入口あり。橋をかせ橋といふ、則此川を謙川（フカセ）といふ、堀村山より流鳳至川へ出るなり、此堀村山は外濱へ續き景内なり、

（小屋の濱）

靈泉寺とて禪宗小庵あり、是又た佳景なり。

○輪島　長井より一里一町、本馬四十文、輕尻二十四文、人足十二文、道平地なり、輪島は惣名なり。

鳳至川合海士町輪島崎にて家數千軒餘あり、此四ヶ所を輪島といふ。昔鷲の惡鳥住しより鷲魔の名あり、順【和名鈔】抔にあり、大屋の庄小屋の湊とは此處なり。又【東鑑】に能登國大屋の庄へ長谷部信連遣すとあり。又【源平盛衰記】にも能登の國大屋の庄を信連に賜るとあり、いつれにも其頃は此輪島は信連の領地にて、則爰に辛去有しない。廟所は河井町川向の山ぎし村中頃十村役せる遠藤氏の田地の中にあり。盆中は長家より代參燈籠の手向等あり、則城跡は同續き宅田村といふにあり、今も地名に一番町抔とて有て、城下の時、氏神住吉抔あり、其後城地を穴水へうつせしなり。

鳳至町大屋の庄は川の西に有て家數三百軒餘あり、河合町は川原田の鄕にあり、川の東なり、家數三百軒餘あり、間に長さ四十八間の橋ありて町の境とす。此川源は市坂村奥山より一筋流、其外所々谷水落入て熊野川とも河原田川ともいへり。鳳至川と合流て湊は數百艘の船夏中は不絶、小屋の湊とて繁昌なり、此輪島は國府同事の所にて諸商に便りよき四九の日市あり、中頃迄御郡奉行在住あ

り、今も御鹽代官三人、山廻り役三人在住なり。御武具土藏、御收納藏は河合にあり。御高札は鳳至にあり。兩町に肝煎あり、町に畠中・山形・久保抔とて古き船持のもの有。

河合町に若恩屋とて利家公御腰かけられし筋目あり、鳳至町御印物項載せし鍛冶十三軒あり、輪島鉋丁小刀の始なり、其外名物をゝし。輪島素麺堅地の朱家具、熨斗鮑類海草の產物多し、兩町に神社佛閣多し、禪宗蓮江寺は河合にあり、寺領十五石開山贈山和尙にて、利家公畫像安置有。同町に妙相寺とて法華宗あり、鳳至町に寶龍寺とて淨土宗あり、淨土眞宗兩町にて六ヶ寺、中にも淨明寺は山岸といふにありて、東方院家にて大寺なり。鳳至町氏神は住吉大明神にて町中にあり、一鄕の惣社にて神主淺井氏なり、祭禮三月六日、中段村多門天宮へ御幸あり。川合町に住吉宮あり、是は山岸村の長家氏宮を移せしとあり。鳳至町に觀音堂あり、本尊泰澄大師御作、當國三十番順禮札所あり。又重藏宮は河合町に在、一郡の大社にして近鄕の宗社なり、鳳至比古神社とあり、神主能登氏なり、此大宮は御神體天冬衣の命にして、大穴持命の異名にして御同體なり、本地十輪地藏のよし。往古此處は鷲魔とて惡鳥住て人をとる、大穴持の命平け給し鷲骸を納めしより、鷲藏宮といふよし。又重藏島より御神體あかり給ふより

重藏といふもあり。又十輪地藏の垂跡より輪島といふ由。中頃迄兩部習合の社にて。諸堂建ならび七堂伽藍にて、其頃國守畠山氏より社領田地七町八段寄附、社頭修覆あり、社人社僧多ありて、神林寺・西圓寺・佛體寺・觀音寺とて有しに、天正の頃石動山衆徒と與せしにより不殘利家公四ヶ寺ともに燒拂ひ給ふより、今は地名のみ殘りあり、漸く神主能登氏下社家の筋目神人とて、河合町に四十八人、外神子一人殘りあり、其後は長家より手傳ありて社頭修覆あり。又々繁昌して時々の神事不絶、又社地の廻り數百間高石垣なり、是は小笠原氏寄進にて今も修覆あり、當社寶物あり、御璽の明鏡とてあり、唐鞍とて有、鬼神大王行安の大太刀、弘法大師大盤若、同作の佛像多し。兆典司畫の十三佛一軸、其外色々あり略す。淺香久敬書る處の緣起あり、當社祭年中七十餘度あり中にも大祭兩度あり、毎年二月七日は神人四十八人の當屋あり、町氏子にも一人宛五十歳になりしもの、百姓分次第に當屋をつとめる事なり、扨二月朔日より海山の珍物珍味を調ひ、神祭に備なり、氏子の中へ美を盡し配る事なり、七日の夜は餠酒はいふに及ばず、珍味調ひ當屋より振舞、通夜して歌舞をいろ〳〵なせるなり。此當屋の造用莫大なり、又神供には色々社人中調ひ備へるなり、御神水と

て半道計山に有り、此水を以御供人の重き程燒櫃に入、上に肩衣一具、珠數一連のせて、丑刻に神前に備るよし。是は昔犧人御供の粧ひといひ傳へり、神秘の事なればあらく敷はしれす、其外古式多し。

又七月廿三日より廿六日までは毎年御採とて輪島中の祭禮にて、近鄕隣國より商人等群集して賑敷事限りなし。廿三日河合祭禮にて重藏宮の御神輿濱傳ひ、川尻の御假屋へ御幸あり、御宿座にて行粧夥敷なり、先濱の左右に柱篝松明とて長三四間の柱の先きに大松明を結付、四方へ大きひかへ綱付、神輿御通の時燒切るゝ樣子する事なり、扨町中おもひ〳〵に大灯籠立て供奉することなり、此有さま夥敷見物なり。又神馬數多牽、禰宜競馬などあり、此粧ひは御採とは催馬樂といふ略言にや、翌日町中御幸ありて御歸座あり、廿四日は鳳至町祭禮にて、住吉宮町中御幸有り、是も其夜町中大灯籠有て、美々敷事同樣なり、廿五日は輪島祭禮にて、天滿宮、鳳至住吉宮へ御幸ありて御宿屋あり、其夜輪島崎大灯籠賑敷事同樣なり、是も翌日御歸座有なり。元とはいつれも重藏宮の祭禮なり、昔冬衣の命邪神退治のため、當國一の宮より廿三日の夜御着船有、此湊へまし〳〵て惡鳥平らけ給ふよしの祭禮といへり。しかし今此祭禮河合町中舊式色々あ

（町土海）

りていひ傳るは、神代の事とも信じかたし、昔此沖廿里に重藏島とて有、此島の御神蛇身に仕ひし破れ船に乘、此浦にあかり給ふに、俄に御產の氣有しゆゑ、今御假屋の體其時の有さまに藁抔敷、さながら產屋の體なり、其時火を藤内の者よりもらひ給ふとて、今も祭禮の篝松明は川尻の藤内勤るなり。又其時紙をは畠中のおもやといふより貰給ふとて、今祭禮の九字切紙幣紙は畠中といふより出せり。又此祭禮の齋の竹等は善龍寺とて淨土宗の寺より出せり、此寺始は教院にて奥の道場といふて有し時の事にて產所の竹を貰ひ給ふよりといへり、九字切繩、扣繩等は時の役人中出せり、其時用ひし水は御手洗の井とて、今町中にあり、又腰かけ給ふ石とて馬場といふにあり。夫より鷲藏宮の社地を借跡をたれ給ふより重藏宮と云よし、此舊式由來の事いかにや。此外祭禮七十度餘あり、又濱の藥師とて有、此尊像此社内に有しを近頃社外の門前に移せり、春日の作靈驗あらたなり。境内に比丘尼の松とて若狹の白比丘尼が植し松なり。又鳥居の向に見ゆるは諏訪山とて明神の社あり、此松山續き風景類ひなく惣して河合町住吉諏訪彌勒にて氏子三ツに別れて祭禮有り。

又海士町は鳳至町の西輪島崎の間にあり、昔は筑前の國より夏每に來りて、此沖を拵しに、中頃より此處に在住

（輪島崎）

を仰付られしより諸役御免にて初は幽なる住居にて有しに、次第に榮えて家居能並び居て百軒計あり、肝煎一人あり、夏中は番頭のもの留守居一人殘り、のこらす十八里沖なる重藏島といふに渡り、邊の小島の又七里此方の七ツ島抔をかせきて、多く鮑類或は海草を取て九月になれは戻り來るなり、此島に小屋といへとも今は能き家居建てあり。重藏權現の社抔は美敷輿抔ありて御幸の祭禮あり、神主鳳至町淺井氏、寺は同所寶龍寺旦那にて、神主も寺も夏中は引越し有よし、此島共は昔は輪島の領なりしに、中頃綸旨あり、少し近き後名舟村の領分になりしなり、海士は今も渡りかせくなり。運上は白銀十三枚上納するなり、往古より此輪島に鮑をとると見えて中納言家持卿の長歌に、

すゝのあまの、をきつかみに、いわたちて、
かずき取といふ、あわひたま、いづちもかも

七ツ島・袖貪島は委しき事名舟の所に記す。

又輪嶋崎は海士町のすへ少し放れてあり、家數五十軒余あり、誠にこの浦の崎にて船の間ありて、高の山に夏中灯明堂あり、船問屋沖の崎刀禰とて有て、夏中數百艘の船不絕繁昌なり。氏神天滿宮なり、神主は湊氏なり、此宮に日本始て鑄造の明鏡有、祭禮每年九月九日なり一說は御神體少彦命のよし、又聖光寺とて禪宗あり、此寺始は七堂伽藍の大寺にて天台宗なりしといへり。今に境内廣く寶物おほし佛舍利あり、是は和州龍田の法隆寺と此寺に有計なりしといふ。其外釋迦如來金像、衣の切れあり、其外略す。又此尼ヶ崎に岩井堂とて秀景の所に夷の船あり、又町家の後に昔此處信田小太郎といふ人のさまよひきたりて刀禰といふ者の方に仕へ有りしとて、其時の腰かけ石とて垣結廻し有、わきに能き清水あり。

按るに、信田三郎の事にや、夫六條判官爲義の三男にして、父に與力し朝敵となり方々流浪ありて、後元暦年中に義仲と同意して、伊勢國にて誅せられしとも、また伊勢の國にて自害ありしとも有、夫なれは信田三郎先生義廣とあり。又後々は義範ともいへるよし、保元の頃此處へきたりけるにや。又子息の中にもありや。

又此沖の崎を少し廻れは鴨浦とて面白き處あり、少し行けは袖の濱なり。是より光浦へ續き名物の五色石盆盞抔に打て名石あり。歌仙小貝もあり。此袖の濱風景は向の沖に七ツ島とて風により、いろ〳〵に變化し、誠に喜見城をなせり。堀釜屋谷内の山續きの岡なとあり、海上見下し、右は輪島沖の崎、左は鵜入、光浦、秀景筆にも書盡しかたし。依て輪島より遊山春は老若男女の隔なく、袖を爭引

る、錦の濱とは此處をいふ、則光浦は七浦庄の所に記せし岩倉の觀音の光を放ちあかり給ふは此處なり、委しくは【岩倉寺緣記】にあり。

又輪島河合町の後、川原田川の緣に彌勒堂とてあり、昔は能き社にて有しとて、今も九月七日は祭禮なり、此宮森の内に酒塚とて有、此塚より美酒湧出し事あり、色々物語り有略す。又此川緣一里上に粉川といふ處有、紀州粉川寺の本尊同木作の觀音の靈像あり、當國順禮三十一番の札所にて、堂の中に大像の仁王尊の古佛あり、其外古佛多し、今も靈驗あらたなり。每年元朝には糟の占として、酒の糟を苞にして此川の淵へ流すなり、止れは吉として、流るゝを凶とす家口なり。元觀音は是より奥七村といふに泰澄大師再興ありし、七堂伽藍の大寺ありて、石動山門徒にて衆徒多く有て、近鄉寺領地なりしに、兵亂に退轉し、今本尊を此處へ移せしなり。今も近鄉に仁王堂・釋迦堂、の外に大泉坊・常學坊・上蓮坊などとてあり、又熊野村は横地村の粉川より一里あり、跡繼山とて紅葉の名所其上不思議なる山の形ち川の流れ佳景類なし。

詠めこし花も緣も色かへて、跡つき山の木々の
　紅葉は

此向に嫗の坂とて峠あり、惣して是を輪島にては河合谷内とて村々多し、穴水中居の往來なり、小泉村にて穴水へ行には一の坂村へ行なり。中居へ行には州衙村へ行なり、いづれも輪島より五里半道程あり。輪島より一の瀨村、小泉村と馬次なり。又嫗の城とて有、城主三井の何某といふて長家の類葉なりし由、是より三井の鄉といふなり、誠は興德寺村の領なり、本鄉村近し、神杉伊豆牟嫗の神社立給ふ。一鄉の惣社にて三井の大幡祭とて、三月廿一日二十二日なり、本鄉村・渡合村・中村・仁行村、四ヶ村に當夜有て賑敷祭禮なり、神主は山崎氏にて興德寺村にあり。又興德寺村に大寺の跡あり、興德寺坂とて往來に在、此寺は梅山和尙の開基惣持寺近門の寺なりしに、天正の頃退轉なりしといへり。又本鄉村に九兵衞とて百姓あり、古き印物を傳へり、長家抔よりの書物あり。又往來より少し山手に石休場村とて、昔泰澄大師七村山粉川寺へ山上の時石に休み給ふ腰懸石あり、今も小名にわけて石休場といふなり 又此村領の內に神田山と神山とてあり、川中に俎板・俎箸岩鉋丁岩とてあり、山神此處にて鮭太郎といふものを料理するといへり。其外此神田山は昔長者ありて寶を納しとて、金の鷄ふ事あり、此聲を聞は仕合吉といへり、惣して此邊は鄉士の筋目とて數多あり。又此往來穴水近きに一の坂村領の內に、小伊勢坂

東氏墓所と石碑あり、是は長家催促をうけ、越後勢に出合打死せしとなり。又輪嶋より宇出津へ越るには道筋幾つもあり、河內越・今藏越、本道は町野越なり、何れも八里餘あり、中にも近きは六里半なり。當目越とて當目村より神和住村・會又村・宇出津と出るなり、この當目村方々へ散村になりて蓮花坊といふが住來なり。千毒といふ村中に岩井戶とて不思議なる洞あり、海邊より三四里の山奥なれとも、汐のさし引あり、烏賊抔吹出せし事あり、昔此國に猿鬼といふもの住て人を取る、是を大穴持命退治有て、其靈を祭て今猿鬼の宮とて有。按するに是は猩猩の類にて有し、其外猿鬼退治有し時の舊跡色々有、略す。又大箱村近し、此村に笠岩谷といふに、さながら傘に似たる岩有、見物なり。

又輪島より惣領へ行く本道に磯傳ひ七町計にて久手川村とてあり、長十一間の橋あり、源は當目山より流るゝなり。又磯邊に歌波の地藏とてあり、泰澄大師作厄神除の本尊とて利益あり。又輪島より十町に稻船村とてあり、往來より山手にあり、此村に藤太とて十村役在、笠原氏なり、先祖は由緒ありて數千年の百姓なり、昔は輪島にありて或時旱魃にて多く田畠われ入けるに、其頃のあるし是を嘆き、何卒此田へ水あて呉れるものに獨りの娘を得させむと誓ひしに、或夜一人の若男來りて一夜の內に田每に水をあてけり。其後娘を連ゆかむといへとも主ゆるさす、其ものは此輪島川の淵に住める蛇身にて、或夜其家を七卷纏ひすでに戶口の潛より入らぬとせしに、內に大なる蟹有て此蛇身を九つにはさみ切る、其骸九ヶ所に飛ひて池となり。今に蛇池とて九ヶ所近鄉にあり。中にも惣領村の內深見といふへ頭飛て是をや池といふて、をそろしき池に靈魂住て、此笠原の家へたゝりをなす、其頃泰澄大師此家に旅宿ありて此事聞給ひ、法力を以退散ありしより無事なり。其例を以て今も五月八日には、此家に石動山衆徒僧正廻りの節一宿あり、翌日は深見の親池にて加持あり、此因緣にて笠原に蟹を吉事として殺す事なし。又家に潛といふものを用ひす。尤此家數千年傳り、利家公御發駕の節御扶持等も頂戴あるへきなれとも、此謂れにて石動山へ由緒あり、其節御沙汰なしと云へり。

又輪島より東にあたつて大野嶽とて近鄉の高山あり、輪島より登り二里あり、半途に大野の村有、別當高泉寺とて有り、本尊高洲(コウス)藥師とて靈像あり、御前は村より一里あり、五社權現の社あり、少彦の命の垂跡なり、神主水上氏なり、惣して高洲山といへとも實は高洲なり、洲と淵との誤りなり、【夫木抄】などにあり。中納言家持卿の歌に、

狩人の來ぬ日もあれど高淵の、山のきゝすはのどけからまし、

家持假に暫住給ふ處とて、今公家の谷内とて村の内にあり、此嶽は高山にしていろ〳〵恐敷處あり、賽の川原、はむの池などとて有、併し絶頂は近國を見下し絶景なり。社の脇に大木の杉あり、別當高泉寺は眞言宗にて元は八坊ありしとて、寺跡其儘有、其頃の寺代官の筋目とて谷内村に甚右衞門とて有、昔は此寺一乘といふ處にありしと云、一乘千左衞門といふ先祖は主馬判官盛久の子信吉といふ人の子孫なり。又同村の打越の與兵衞といふ百姓も鎌倉の權五郎景政の子孫なるよし。

○惣領　輪島より一里十町、本馬六十一文、輕尻三十六文、人足十二文、家數六十軒計處々散々有る村なり。此邊は河原田の鄕なり、此散村深見といふ處に親池とて恐敷池あり、昔蛇神住て人をとり、泰澄大師加持にて退散ありしにより、今も石動山衆徒僧正廻りに毎年五月九日此池にて勤行有なり、其昔は此池より風雨起りて雜儀有けり、今も雨の宮・風の宮とて田の中に小社あり。又少し行は鷲嶽と云あり、是は谷内村の内なり、海際の磯山に茂りたる大森なり、櫟原（イチハラ）彦の神社立給ふ、則鷲嶽八幡宮と號す、本地大日如來、昔しは兩部の大社なりしが、

（七島）

兵亂に神主までにて鳳至比古の御神鷲の大惡鳥を矢にて退散有しに、其羽に八幡の文字あり、是を勸請せし社なり。又此骸を納しより輪嶋鷲藏宮といふよし、委は緣起にあり。中頃利家公御通りの時、此宮の衆徒の内石動山と與力せしもの有て、長刀にて御成敗ありしとて、往來に其所を長刀坂とあり。往來の者あさみの水とて冷水あり、渦を凌て通るなり、又道わきに有、御鹽藏は白米村にあり。

又名舟村南志見の鄕なり、惣領より二十八町、此村は川西より上りの馬次なり、小田屋へは八町あり、沖なる七つ島・重倉島は此村の領なり、七つ島七里あり、舳倉島は七つ島より十二里、中頃輪島と論ありて此村の領になりしなり。七つ島は大島、海士は小屋島と云輪島より午の方にあたり六里半あり、名舟より五里半餘あり、長百九十間餘、巾五十間計あり、海士の小屋あり、雁股島、海士は矢筈島といふ、長さ五十間、巾二十間計有、龍島長百間計、巾八十間計、赤島長七十間餘、巾三十間計、あかき島なり。荒神子島長百五十間、巾五十間、隼（ハヤブサ）の巢あり、たかさ四十間計、岨敷島なり。こしき島は海士は烏帽子島といふ長五十間、巾二十間計、御厨（ミクリヤ）屋島は高サ三十間計、長百間餘、巾百間計、是島も隼の巢あり、其外邊り小島多し、島

より嶋迄五町より八町計つゝあり、島の形ちいろ〳〵に變して誠に喜見城のことし。又舳倉島は名舟より十八里といへとも十七里あり、亥子に當る。輪島より二十里といへとも十八里子の方にあるか、當日島の高さ七八間あり、長サ九百間計、巾二十五間程有、廻り一里餘、水地三ヶ所あり。老木松八本、島權現、瀨織津姫の神社南の方にあり。祭禮十月十五日十六日、御神輿御幸あり。神主淺井懸所あり、御神體明神宮といへとも辨財天なり、脇に觀音堂あり、寶藏寺懸所有、淨土宗なり、海士小屋九十軒有、不殘板屋造りなり、船の懸り間有、自然に菜蕪生して外は芦芽のみ生するなり。其外廻りに小島多し、第一黑御苦、鮑名物にて御上へ御用の分上るなり、御運上銀十三枚なり、其外魚時により大猟するなり。

○小田屋　惣領より二里有、本馬九十五文、輕尻五十二文、人足四十八文なり、家數五十軒あり。

惣して此邊を南志見と鄕名を呼ふなり、商家酒屋などあり、能き村なり、南志見川あり、向は里村といふ、此川源は金藏奥山より一筋東印内村山より一筋流れ、此湊へ出るなり。御收納藏、御鹽藏あり、又井口藤彌亟といひし鄕士の城跡あり、里村に西光寺とて眞言宗あり、又宇出津へ行金藏越は此川緣をのぼり、柳田村へ出るなり。又曾々木大川などへ行間道は此濱より磯傳ひ行、又本道川西へ行に澁田村を經行なり。此澁田村に照光寺とて淨土眞宗あり、是は南志見の城主井田氏の子孫とて、井口山といふ、此村より峠を越ゆれは大野村なり、此峠の内に濱田藥師道と石碑有。是は時國村の散村に大川といふ處にあり、靈像の藥師如來當國十二藥師の内なり。此村の磯に義經の舟隱しとて奥しれぬ大洞あり、二町計は舟をさし入るるなり、夫より奥は闇くてしれず。又唐竹の御藪あり。御鹽藏あり、此村は町野川の湊にあれは大川の名有。川の向は曾々木なり、大野村は澁田村より峠を越れは伏戸あり、町野川の緣にあり、大村にて能き村なり公領なり。池田などとて酒屋あり、氏神は八幡宮毎年八月十五日に祭禮歌舞妓などあり、賑敷なり、上時國村は此村向なり。

○川西　小田屋より一里十六町、本馬六十八文、輕尻四十一文、其外人足二十文なり、家數所々に別れて有村なり、川西ゆゑ呼ぶなり。

此村に棚具の藥師とて昔は大寺にて、其跡あり、其外谷内の妙義などとて有、又櫻井といふ所に古寺の跡あり。又少し川上に井の面村とて公領あり。氏宮は岩井堂とて不思議なる社地なり、御神體は臍の緒と云り、又川西より鈴屋へ行には櫻木といふに渡し舟あり、此渡しより山

手へ行は金藏村なり。金藏寺とて眞言宗あり、白雉年中開基のよし、山王權現の社あり、近郷の大寺なり、昔は七堂伽藍にて八坊ありしなり、兵亂に退轉す。今の金藏寺は松習院とて白山の別當なり。

○鈴屋　川西より十七町、本馬二十一文、輕尻十一文、人足六文なり、家數五十軒計、能き村なり、酒屋などあり。村中に川あり、寺山川といふ源は寺山村山より流て大野川と合す、長六間の橋あり、此はしを渡れは粟藏村なり、惣して此鈴屋村より宇出津へ五里、坂田村へ五里、輪島へ五里あり。此橋を粟藏橋といふ、橋爪より追分なり。又宇出津へ行に粟藏より丸山へ一里、丸山より久田へ一里廿四町、久田より久龜屋へ二十四町、久龜屋より宇出津へ一里廿五町なり。粟藏村に丈藏とて利家公より御扶持十五石頂戴せし十村役の有しに近年斷絕す、今其跡彦之丞とてあり、先祖は粟倉氏にて、彦十郎とて大納言樣御宿仕り男子二人あり、御陣中召連られ、次男は末盛の合戰に打死せしものなり、兄彦之丞は御いとま下されて父の名跡繼しなり、其時より御扶持なり、其外御印物傳へり。又此村に岩倉彦の神社立給ふ。御神體白山權現なり、神主瀨尾氏なり、近郷の宗社にて又元宮跡とて田の中にあり、岩倉山は此北の高山なり。又東の山手に佐野村と

て有、則佐野寺とて眞言宗有。是より舞谷村とて有、日の御前とて高嶺あり、昔は五社權現の大社有しに、告ありて權現を石動山へ移し奉りて、今は神明宮を石動山より勸請して有、舞谷御前ともいふなり、近年論有て寺山村分になりしといへり。

又粟藏より南の川緣の岡に善願寺とて眞言宗の小寺あり、又往來一里に東村とて小村あり、是に岩瀨比古の神社立給ふ。御神體八幡宮なり、座主八幡寺とて東村に眞言宗有、神主は川向德成村大瀧氏なり。此町野川を此邊にては岩瀨川といふて、此處則岩瀨の渡しとて、元は渡し有しとなり、此渡り月の名所にて今も川瀨に每年八月十五日夜には月影二體移りて國中一の月の名所なり。古歌に、

舟とむる岩瀨の渡し小夜更て、御鏡山を出る月か
け　重敬卿

宮崎山ともいへり、御鏡山をみかまき山と誤りていへり、岩瀨の渡しの東の高嶺なり、社は此麓にあり、昔は兩部あり、習合の大社にて近郷の宗社なりといへとも、今は幽なる小社なり。又渡しの向に大鳥居あり。德成村八幡宮の鳥居なり、每年名月には近郷より月見あり賑敷し、惣して此川に、鳳至・珠洲の兩郡の境を流して源は四筋

なれとも、本川は河内村領高洲山の東より流れて、一筋は上町野五郎衞門分村奥山より流て笹川村にて合流す、一筋は合鹿村山より流て小間生村にて合流す、一筋は寺山村より流て粟藏村にて合流、上町野・中町野・下町野の三鄕を流て曾々木の湊迄流れ八里餘あり。當國第一の流にて大川といふ、町野川ともいへり、其外所々にて岩瀨川とも大野川ともいへり。此川續き村々多、丸山村粟藏より一里天王寺とて眞言宗あり、近頃法印入定ありし塚有、又長尾村に昔弘法大師與へ給ふたばこ種とて、たばこの名物あり。又小間生村本隆寺とて眞言宗あり、道重とて百姓あり。又久田村は紙を漉き名物なり、鄕の田といふにて追分の馬次あり、合鹿村は三ヶ所に別れて權舍とて山中に散村あり、五輪とて古塚あり、又田平（タラ）といふ散村に福照寺とて淨土宗の大寺あり、此邊を上町野の鄕といふて鄕の田より分れて、此田平を經て木郎へ出て三崎迄の往還なり、宇出津へは鄕の田より久龜屋へ出行なり、又小間生村の東谷へ入、此散村大鄕（ヲヽカワ）といふを經桐畑村より內浦・吼木島・越村等へ出るなり、これを泥木村越といふ。

又小間生村より町野川緣をのほれは石井村近し、藏福院とて禪宗あり、米山藥師とて安置あり、是は柳田村領の米山の城跡に有し尊像なり。長十四間の橋有、氏宮諏訪明神は別當淨土眞宗なりとて社內に有、昔天台宗なりしと云り。又柳田村笹川村・石井村三ヶ所領境に笹川落合ふなり。笹川村にも長八間半の橋あり、此川は五郎左衞門分村和住より流て寺分村天坂村等を經て此處にて合流するなり、柳田村此邊の大村にて五ヶ所に別れて有、安養寺とて眞言宗あり、昔は二百石寺領有て、五社權現の社あり、今無別當なり。其頃は七堂伽藍なりしに今は小院なり、此寺の隱居地に法華寺とて眞言宗近鄕の寺なり、本尊藥師如來の靈像は大佛にて、堀田の中より出給ふなり。又米山とて城跡在、冷水あり、升形刀の池などとて有、法花寺といふ寺ありて米山藥師とて有しに、兵亂に退轉す、本尊は石井の藏福院にあり、石井村は其時の城下町なりといへり、市姫社あり、又柳田村ねへき谷といふ處に女瀧男瀧兩瀧あり、此瀧の邊の岩に諸菩薩の來迎の御姿を彫あり、金山といふに近き頃にて、此村に十郎兵衞とて大百姓あり、此所持有し千刈の一牧の堀田有、板屋山とて栗の御林あり、米山とて同御林あり、今藏越とて所々へ行は晦日（ツゴモ）谷內といふより登るなり。又河內越といふは川上へ登り五十里村へ行なり、國光村近し城跡あり、委事しれす。西山村に田村丸の太刀とて傳へるものあり、五

十里村田川上半道にあり、長福院に本尊行基菩薩の作上品の阿彌陀如來あり、又此村に町野川の淵跡とて、今蟹池とて有、昔此淵に大きなる蟹住て人を取る、弘法大師威力を以退散あり、其後も此池に有りて大石と成いろ〳〵怪靈をなすゆゑ此池を埋めしなり、今も此地を穿ち石を顯はすと、霖して數百日やます、是は金藏村境にあり、黒川村近し、新助とて公領の庄屋あり、能き百姓なり、河内村近し、高洲の嶽の東平に有村なり。又鈴屋より飯田へ越へる間道あり、黒嶺越といへり、四里あり、鈴屋村の向東の谷内へ寺山村を經て登るなり。此寺山は所々別れて山中にある大村なり、散村阿部屋（アヘヤ）といふ處に黒嶺の城主阿部の判官義宗といひし人の塚あり、則往來にて處を五輪といふ、則此村に判官の子孫有て、阿部殿々々々と呼ふを誤りて、阿部當と今呼ふなり。是より黒嶺山へのほるなり、道に不思谷・銚子谷などとて深き谷在、是は黒嶺の城元朝に落城せし時器を捨有しゆゑに地名に呼ふといへり。絶頂に落城の時死後遺物を埋し大塚と見えて、今も穿ては兵具出るといへり。此黒嶺といふは城廓の時は大木茂り黒くみえしゆゑ名とす。東平上戸の領山にていろ〳〵舊跡あり、上戸三ヶ村の所に記せり、西平は寺山村領なり、又寶嶺山といへり、山の本名にして誠に絶頂に冷水あり、藥草其外產物多きのみか、一國はいふに及ばず、近國を見おろし、船の見當となり、景内いはん方なし、實にも寶嶺にして、内浦鮮網の見當となりて、御前は城跡の北二三町登るなり、松柏茂り、則寶嶺大權現の社あり、御神體白山宮なり、此御前は南山の領なり、近く權現の鍵等は十兵衞といふ古き百姓にて支配するなり、別當は上戸の光性寺なり、神主は飯田葛原氏なり。此寶嶺の麓に洲巻村白瀧村とて有、則白瀧とて名瀧あり、異像の藥師如來有て是も南山村十兵衞支配なり、天竺傳來尊像にて靈驗あり、惣して此邊に昔中田村兵右衞門・北山村治郎兵衞・南山村十兵衞、是等は一廓構まへ中田殿・北山殿・南山殿とて威勢をなして古き節目の者有しといへり。此邊は若山の鄕とて廣く村々多し、委しくは飯田若山の鄕の所に黒嶺續き川の流迄記す、又鈴屋より飯田へ本道通りは五里、鈴屋より黒丸へ二里三十町、黒丸より大坊へ一里八町、大坊より飯田へ一里十六町なり。是を八太郎越といふ、又若山越といふ、委は末に記す。

又鈴屋より大谷村へ行は、鈴屋より吉か池村へ一里二町、本馬八十三文、吉か池村より大谷村へ一里、本馬六十四文、此吉が池村に吉祥寺臨濟宗の禪宗あり、古き寺のよし。

又鈴屋より時國へ行には、廣江村へ出る、此村田中に堂あり、弘法大師作の彌勒菩薩なり。又此村宮森の内に麻苧（マヲカラ）の地藏とて有、虫喰齒を痛むもの、其年の數ほど麻木の箸を拵て備るなり。痛忽に治る事靈驗あらたなり、町野川上のものは五六里するに右の通り箸をして流すなり、奇瑞あり。此村に成政とて山廻り役あり、粟倉氏なり、智德寺とて禪宗あり、伏戸村續きなり、公領なり、寺地村間にあり、高玄寺禪宗なり。

○時國　鈴屋より廿九町、本馬三十八文、輕尻二十三文、人足十文、此村は下時國とて公領と私領と入交りあり。川西よりは一里十町あり、本馬六十一文、輕尻三十六文、人足十八文なり。上時國村に日野氏右馬助とて一軒百姓有、公領第一の高持の庄屋なり、此先祖は昔元暦の頃平大納言時忠公此國へ配流ありて、其嫡子時國といへる人の子孫のよし、中頃まで此處を大刀村・晦日村といひ、不殘田地せしなり、今の下時國村田地をわけ藤左衞門といへるをたのみて御當代になり出家せしより、下時國とて私領になりしなり。右馬助にいろ〳〵什寶あり、畠山殿時代の書物おほく持傳へり、今も上時國不殘公領にて、右馬助の内にて一村下百姓の家來分なり、いつしかいふ大刀村・晦日村を此家名に呼ひ、今は時國村といへり上時國・下時國・大川・曾々木とて別れてあり、御收納藏あり。商田寺とて眞言宗あり、時國兩家の菩提所なり、東の坊とて同宗の小庵あり、氏宮八幡宮に八月十六日には每年祭禮に歌舞妓あり、曾々木といふは町野川の湊にて、少々商家もあり、下時國村入交り、藤右衞門とて右馬助別家山廻り役なり、日野氏なり。

嵐とていとふもあたよ奥山に、はこはて詠む瀨々の紅葉は

又東に高山あり、岩倉山といふ、海中指し出たる岨敷靈山なり岩倉比古の神社立給ふ。本地千手觀音なり、此本尊は輪島の光浦の沖に夜々光る物有、白雉二年不思議ありて漁父の網にあがり給ふ靈像なり、則別當は白雉山岩倉寺とて大寺なり、山の半腹に有て村より十町餘有、又岩倉山ともいへり。惣してこの町野の鄕に眞言宗十四ヶ寺あり、不殘岩倉山といふなり、則名所記にあり、宮城山是なり、深山木ともいへり。名歌集に、

我戀は君を宮城の山ならて、まつにかひなき長浦の浦

按するに【元亨釋書】に曰、大和國岩倉の金藏寺は隆豊上人の開基、多武の峯の定惠上人の御弟子にて、ともに渡唐有、金藏寺を建立す、海中より靈木を得て大悲の

像を作と有。近きに岩倉山金藏寺あり、又千年の像海中よりあがり給ふ抔、似たる事爰に記、また金藏村金藏寺は白雉山中の開基にて、昔は七堂伽藍にて八坊あり、今の金藏寺は白山宮の別當松習院といひしよし、町野十四ヶ寺の内に今も大寺なり、岩倉山の緣起いまた不見、有かいかにや。

又時國より眞浦へ行には道三筋、いつれも國中一の難處なり、本道は岩倉越とて此寺の腰より越るなり。廿五町あり、一節は簑捲越とて曾々木の家の後より登りて、山の半腹を越るなり。山岨敷して石山の恰も劒のごとく、下より吹上る風にて、みのなど着る事あたはす、依て名とす、是道程十三町計有、又一筋はひろ丈とて道程六七町あり、又なき難處なり、是も曾々木御鹽藏の腰より磯の岩壁の半途を通るなり、高は山岨しく屏風を立たることし、下は數千丈の大海なり、出口に大なる洞あり、浪打入る時は響きて雷のことし、是にも氣臆れて凄しきことなり。此洞は福穴とて役の行者の護摩を燒給へる洞といへり、奥不知、此洞の口を、浪間を考へ向の岩に走り上るなり、夫より岩石に手懸り足懸りあり、是を能くみて取付踏へて歩む事なり、是も氣臆れて手懸り足懸りも見えす、又或は梯子とて岩を割きたる所あり、是を登り下るなり、迚も此道の有さま筆にも盡しかたし。我等も物語りにもおもひ通り侍りしに、聞にも增さる難所にて、氣臆れては前後を忘れ、再ひ通るましき所なり、併所の者は道の近きために、荷負ひなどして通るなり、されとも危ち有りて死せし者多し、然るに近年安永年中より、片岩村海藏寺隱居の發願にて石を伐ひらけ餘程往來安くなりしとなり。

○眞浦　時國より二十五町、本馬三十三文、輕尻二十文、人足十文、家數三十軒計あり。

此邊は西海の鄕といふ、中にも邊鄙の片浦半なり、前は蒼海漂々として後は岩倉の山峨々たり、左はひろ丈の岨敷嚴々たり、右は朴坂の峠嵩々と有て、誠に閑靜いはんかたなし、御鹽藏の傍に藥師堂あり、丈六の金色の大像なり、いつの頃より安置といふ事知す、其外權兵衛などとて能き百姓一兩軒あり。

又仁江村近し、朴坂峠越へは廿町あり。友定といふ百姓あり、清水村は八町あり、皆鹽師にて御鹽藏處々にあり、此所は難所多く、道岨敷といへとも山水の詠め盡す、鹽釜の體、岩間の人家の風情又なき詠なり。

又此邊の磯邊に赤岩といふあり、岨敷面白し、浪寄て四方より波打所有、則四海といへり。

○片岩　眞浦より一里九町、本馬五十九文、輕尻三十六文、人足十六文、此邊の大村なり、家數百軒計有り。

此村に御收納藏・御鹽藏あり、海藏寺とて禪宗あり、又片岩より大谷へ行半途に長橋村と云少し山手にあるなり。此村に北島神明宮とて大社あり、境内廣く能き社地なり、(桓武カ)延德天皇延曆元年より鎭座と緣起にあり、昔平大納言時忠卿の此邊左遷の時、歸洛の事を此社へ祈り給ふとて、天國作の寶劒一振、中宮御産の時の子かへりの玉、又時忠卿奉納歌に、

能登の國聞もいやなりすゝの海、また吹きもとせ
いせの神垣

○大谷　片岩より一里三町、本馬五十一文、輕尻三十一文、人足十五文、家數二百軒計、道近の大村なり。

此村は昔平大納言時忠卿の左遷の地にて其の舊跡色々あり、船着し所を卿の間とて有、其時烏一羽立去りけるを、是則時忠卿重代の烏丸の太刀の精なりとて、此烏の行泊りし處に館せんとて、半道山の奥に城構抔たくましく、館の跡あり、則時忠卿の子孫とて、則定惣左衞門といふ一軒の百姓館跡にあり、家後に時忠卿の古塚あり。其外に其頃持遊ひ給ふ器財なと持傳へり、其烏の出し川を今も烏川といへり。又此村此卿の筋目とて實名を家名に呼ふもの十二人あり、賴兼・賴光・賴政・兼政・政賴・友安・友吉・助友・吉盛・國吉・助光・則定、是を大谷の十二名といふ。中にも賴兼は山廻り役にて利家公の御墨付御扶持頂戴有、又吉盛といふものゝ屋敷に地藏ありて、内に十二領の具足ありといへり、惣して能登の國義經の奥州に下り給ふ時、此國に立よれりといふは此時忠卿と義經とは知緣有りて、態々時忠卿の配處訪ひ給ふがゆゑなり依て能登此義經の舊跡多し。

此大谷に元弘の頃日野大納言資朝卿の一子阿新(クマワカ)丸の舊跡あり、此阿新丸佐渡國にて父の仇本間の何某を討て逃しに、追手懸り難義に及ひしに、山伏修行の者に助られ、危き命をなからへて、則此國へ着船して、此大谷に世を遁れて有りしとて、其守り本尊なと助友といふ百姓の家にあり、其時の山伏は三崎權現にて有しといへり。【太平記】抔は、阿新丸の此國に渡りし事みえす、併し實記にや阿新丸御出家ありて行法ありしとて、大谷馬繋の山中に其舊跡あり、今も日野道とて草生へずあり。

又馬繋村、濱傳ひ大谷より村續て一里有村なり、大間鰐崎泊りとて小名有て三ヶ所に家あり、御鹽藏も三ヶ所にあり、此村にも馬繋の七名とて七人家名に實名を呼しものありしに、中頃いつれも退轉して一兩人殘り有よし、

是は阿新丸の筋目のものなりしといへり。惣して此所馬緤村といふ義經の馬をつなき給ふよりこの名とあり、卽其時神馬草といふ海草をもつて飼料ありしとて、外にては神草といへとも、此邊にては藥馬草といへり。俵藻の根成藻なり。又奥州御厨といふ處にも此說有いかにや。又本光寺とて禪宗あり、守禪寺とて塔司あり、昔峨山和尙住給ふといへり、此山に峨山道とてあり、今に日野道・峨山道とて人踏事なし。又此處に名物あり。蛇骨石とて菊銘石あり、御止の山になりてあり、又海中より蛇の屎とて金交りの黑き小石有、燒て粉になし、のめは瘧落るなり、又此村の大瀧といふ宮森にふかき穴あり、石ををとせは餘程聞ゆれとも、後には幽になりてしれす、金輪際よりの穴といへり。

又笹波村近し、少し山手に有る村なり、此山に雷斧石とてあり、俗に狐のまさかり石なり、惣して此邊の風景山の姿、磯山の形ち、磯邊の奇石・異石・怪岩の有さま絕景なり。

○高屋　大谷より一里廿町餘、本馬七十七文、輕尻四十六文、人足二十三文、家數百軒計あり。

此村は船の懸り間抔ありて、商家など有、繁昌なり。夏中破損奉行滯留あり、池田氏山廻り役あり、其外船持等ありて能き百姓あり、中にも刀禰といふ者古き百姓にて、昔より石動山由緒ありて、泰澄大師の衣とて傳へり、尤禎裳（コロモ）と別れて今の大きに異なるものなり、見る處上は素袍のごとく、下は袴なり、地は布にて今のほた晒のよふなる淺黃小紋の地白なり、紋有、形不知なり、胸紐革（ムナヒモカワ）なり、正平革といふへきなり、色茶にて摸樣なり。

禎　長二尺二寸餘、かたのゆき二尺八寸餘、袖巾二巾、ともゑり、三尺八寸餘、紐巾一寸五分、二筋、一筋の長さ一尺五寸、

裳　前長さ二尺三寸餘、後長二尺四寸餘、胸いた八寸餘、高さ三寸五分、紋あり、形不知、前後共紐あり、同革なり、

先年此村太郎助と申ものゝ方より出火いたし、火急なるゆゑ其節此衣を井戸の內へ投入れしに、刀禰家も類燒して火事鎭りしに、井戸の內へも燒入有しを、主し刀禰是をなげき、人足を以て水をかへ、灰塚なりとも築て衣塚ともいたし度とて、水をかへけれは、不思議や御衣其儘あり、今少し其時の燒穴所々ありといへとも　一向虫さしもなく、千餘年經るといへとも色もかはらす、石動山より衆徒連名免狀あり。

高屋刀禰先祖當山中傳之覺

一當山開基泰澄大師元正天皇御宇ヨリ禁裏御祈願所被爲定侯處者、依有異術、聖武天皇御宇天下疱瘡、泰澄修法息災、其比奥能登發毒蛇、萬民惱、則泰澄大師魔障悉咒傳、爲國家安全、萬民豐樂、五穀成就、愈修驗道、是以刀禰奉讃物大師、第一永門徒與成、夫ヨリ毎年廻國宿、具供奉御衣、御召下シ御衣刀禰ニ御免許下シ玉ヒ、當山出仕之砌着之、則俗體ヲ不改券事、眞俗不二、萬法一如義理、凡夫之外ニ无、仙モ佛ノ外ニ凡夫モ無キ心ナリ、其隨來曆毎年僧正廻ト謂之、四月晦日ヨリ、五月晦日マテ、能登羽咋郡內大島村正觀音ヨリ、祈念ノ初メ、在々所々鎭守二ケ數勤行、殊ニ刀禰代々吉例之儀式等不懈者也、右由緒有之上ト申傳候以上、

天平八年ヨリ正保二年マテ九百十年ニ成

能州石動山天平寺
衆徒中

大宿先達
脇宿先達
閼水先達
小木先達
高屋刀禰殿

右之通り刀禰方に傳有處を其儘寫といへとも、書誤と見えて讀兼候得共、爰に記也、此外に刀禰寬永年中より十ケ村、十村役抔書上たる扣あり、略するなり。いつれにも古きものなり、又長さ一尺計の觀音の像安置せり、螫山和尙の作とも又惠心の作ともいへり、又磯に嶽とて小山有、此山の腰に船懸りあり、則其腰に有る百姓を嶽といふて船宿するなり。

又婆くりとて此沖三里磯石島あり、鐵を吸とて船かたく一里四方不寄、ひくき島にて磯より見えかぬるなり。

○折戸　高屋より三里四町、本馬五十文、輕尻三十四文、人足十六文、家數百軒計、

此村に十村役あり、高井氏なり、其外にも能き百姓あり、海苔類有、中にも海雲（ミツク）の名物なり。又是より內浦正院抔へ行道あり、山越して本村へ二里あり、道に雁の橋とて大なる堤あり、風景類ひなし、又近きに唐笠村・山中村抔とてあり、山へ少し入るなり。

又河浦村は狼烟村へ行、半途に有、此處の黑崎といふに火打石の名石あり、いかほとへりても角のくつる事なし。色は黑く飴色なり、馬腦の類なり、御止め石になり取る事ならす、又島立といふ處に磯山の腰に洞ありて、奥知れす、內浦の松波村江の口の淵といふへ通したるといへり。

又狼烟村へ行上野廣し、春の頃は雲雀の名所にて、海も山も轉り面白き事限りなし。

○狼烟　折戸より一里一町、本馬四十九文、軽尻三十文。家數六十軒計、是より三崎の郷といふ。

此村に川崎七郎左衛門とて、古き百姓あり、先祖は此邊の郷士にて則城跡あり、磯山の風景の地なり、又家に傳へる什寶あり、唐の鏡とて異鏡あり、八分三字あり、定易重といふ文字なりといへとも、讀かぬるなり。又釋迦如來の金像衣の切とて五分四方計あり、武衛家より拜領せし蜀紅の錦の切れあり、又齋藤氏より傳へるとて利常公の御裝束の錦の切在、又利家公御筆の短册とてあり。

山家といふ題に

忘れしの人たにとはぬ山路かな、櫻は雪にふりかはれとも

七郎左衛門家由來の事

先祖川崎與之助は、珠洲郡狼烟の住人、其頃應永年中滿則能登國の守護の任に有しより、世々畠山氏の家臣なり、天正の兵亂に畠山義則の孫娘流浪有しを娶りしに、其引手もの畠山氏什寶の鏡をたまはる、是を唐の鏡といふものなりと云ひ傳へり、與之助・七兵衛は相公御代承應年中珠洲郡十七ヶ村の吏に仰付させられたり、妻は長家の家臣の浦野孫右衛門娘なり、七兵衛子は重左衛門、重左衛門子、七郎左衛門、七郎左衛門子我父にして、代々七郎左衛門と號す。

又畠山先祖者足利義純公男泰國始て畠山をもつて稱號とす、夫より國氏・家國・義深に至て南征討使となり、千破屋の城を拔て楠正勝を退治勳功により、義深嫡男基國始て管領となり、基國子の二男滿則應永年中能登の守護に任せられしなり、義則にいたる迄六代七尾の城主たり。又狼烟新村は寺家村へ行往來にあり、能き百姓あり、又三崎の山伏山は此國五十里のとまり、北のはてにある高山なり、是は過半は狼烟村の領なり、元は鈴ヶ嶽といへり、渡海の船難風に出合三崎權現にいのるに火見ゆるなり、夫より山を見て難をのかる事なり。依て狼烟の名あり。此山を廻れは三崎權現なり、今は大守より夏中山の半途に大なる灯明堂有て、一夜に油一升灯心布三尺つつ渡りて、渡海のたすけとなし給へり、誠にこの山は海中五十里に指出る尾に有山にて、其上櫻木茂り覆て渡海の見當となる名山なり。又此山を山伏山といふに色々謂れあり日野中納言資朝卿の一男阿新丸父の仇を討、佐渡の沖にて追手懸り、難儀に及ひしを、三崎權現幼年の孝心を憐み給ひ、山伏姿となり、船中にて難義を救ひ、此國へ伴へ來り給ひて、此山に神隱れ給ふより山伏山といへり。又聞義經の御内常陸坊海尊此處にて義經に別れ仙人となり、此山に住て山伏姿にて折々見ゆるゆゑに、山伏山といふも有。又三崎權現元大社の時衆徒多く、此山の腰に有けるより、山伏山といふともあり。また渡海より山伏の頭巾のよふにみゆるゆゑにいふもあり區々なり。大谷の助友の由來にて、阿新丸の事實說にや、往古は狼烟山とも鈴ヶ嶽ともいへり、誠に神の御山にて古木茂り一枝も樵る事ならす。古歌に、

山伏の螺吹嶺の夕くれに、そこともしらぬすゝの夕風　寂蓮法師

又此山の麓に間崎・宿崎・金剛崎とて風景の崎三つあり、依て三崎と名有るよし、又海中より越後の崎・佐渡の崎・能登崎鼎の足のことく見ゆるゆゑ三崎といふ說もあり、されとも佐渡・越後には三崎といふはなし、いかにや。快晴には越後米山、佐渡の神戸山、能登の山伏山、誠に鍋の足なりに見ゆるなり。名所記抔には御崎と書もあり、權現立給ふよりいへり。古歌に、

幾すゝかすゝの御崎をふりすてゝ、越なる里へいそぐ雁かな　顯昭

又宿崎間崎より金剛崎の一里沖に、姫島・神島・鬼島、段々沖へ並ひて三つあり、此處にをいて三崎權現神軍有て第六天の魔王と戰ひ給ふこと度々あり、其時は俄に海あれ浪の色血になりて凄敷事なり、其後は濱に矢の根石とて色々矢の根形の石あり、是を懷中すれは物負せずといへり。

又狼烟と寺家村の間に、鹽津とて昔は此邊の津にて繁昌なる所といへり、今は寺家村の内にて散村なり、此村に刀禰の傳兵衛とて太閤秀吉公の御朱印持傳へり。船一艘の械役御免の御文言なり、名當は鹽津村四郎左衛門とあり。又此村の一向宗御坊に聖德大子の靈像有りて、色々奇瑞あり。又大泊とて此鹽津の内にて家一兩軒あり。是にも鹽津繁昌の時は余程家數有し處といへり、此磯邊に人隱し、船かくしとてあり、不思議成處なり、船隱しは七八十間四方も有洞なり、船を十間計入れば一段高くて内に色々間取ありて、人住て煮燒せし跡あり、又左の方に七間計四方の口の横穴あり、松明をてらし一里計は行し者はあれとも夫より奥しれず、隱れ里なりと所々にいへり、色々物語り有略す。又人かくしといふは外よりは一面の山の様に見ゆれとも、登れは切戸ありて下より道有、口三十尋四方も有洞なり、是にもいろ〳〵間取有りていろり棚抔とてあり、いかにも亂世の時人かくれ住し

（鹽津）

處と見えたり、又此磯に獅子岩とて有、大獅子小獅子とて誠に唐獅子を畫る如し、是は古昔三崎權現獅子に乘りて天下り給ふ獅子の、岩と化したるといへり。說にいひ傳るは或時權現獅子いるかとのたまひしに、入鹿（イルカ）といふ魚有りて答しより、權現の使者海鹿といへり、今も此魚を喰すれは三年社參を忌むとなり、入鹿の三崎參りといふ事あり。又此邊に義經の駒の爪石とてあり、又此邊に伯父の釜屋とて鹽燒所あり、此竈燒く翁あり、何國ともなく風と來りて村中を乞食體にて徘徊せしに、國所慥成事も不言、年久しく此處に鹽を燒くなり、冬は繩なとなふて過しぬ、佛學儒道其外諸稽に達し、武道にも委しき者にて、或時此處に難船ありて諸役人滯留あり、此者の事を聞色々物語り有しに、くらき事なし、後にむつかしとて人行てもものいはす、物のいひごしは、いつれ西國中國邊のものにや有けん、長生して寶曆年中まて有しといへり、いかにも德をかくしてありける高僧の類か、又は敵なと持て身隱せるものにや有けんと、其破船役人等行し人予に物語り有、不思議なるものにて有ける。

爰に三崎の雀踊とて、盂蘭盆より菊月のするにて老若男女打交り、翁も杖を帶にはさみ、姥は孫の手を引なとして、濱邊せはしと村毎に踊る體、誠に世事をわすれ、餘念なく和順の風土、誠に古代殘りて、能登はやさしや土迄と、歌にいひしに其後二五の年經て、又此踊りの頃行みるに、昔の雀躍に引かへ、若きものとも粧ひ立て、縮緬の帽子など、ひらしやらするも見にしたかふて繩に世の樣もかはり行く有さまかなしく詠めつるさへ有に、音頭（ヲンドウ）とりしをのこの高慢らしく、踊の中に立て扇をひらめかし抔して、人もなけのふるまひかたはらいたし。

能登國名跡志乾之卷 終

能登國名跡志坤之卷

○寺家　狼烟より一里四町、本馬六十三文、輕尻三十八文、人足十四文、家數七十軒計。

此村三崎の權現の門前に有ゐる寺家の名有、三崎權現は高座金分の兩社にて須津彦の神社是なり、北方鎭守の御神日域四柱の其一社なり、高座御神體は天津彦火々瓊々杵の命、金分御神體は木花開耶姫の命也、神代より御鎭座、崇神天皇の御草創、社領昔は三崎の鄕三千貫、此頃は別當高勝寺、神主大宮司猿芽（サルメ）氏の外、社僧社人多く有しなり、中頃迄十二坊有て其跡あり、兵亂に中絕せり、其後天正年中利家公諸堂御再興あり、社領田地五町高に直し七十五石なり、內二十五石御社頭御修覆料に除知あり、二十五石は高勝寺、二十五石は大宮司猿茅氏配分なり。別當高勝寺は天台宗にて、講堂・觀音堂・阿彌陀堂・鐘樓・客殿・庫裏、建ならへて奧郡の大寺なり。塔司安養寺とて小院あり、當社寶物多し。中にも源義經翫ひ給ひし蟬折の笛あり、是は昔義經此沖にて難風にあひ此權現へいのり給ふに奇瑞ありて寄附有しとて、外に高麗笛一管あり、雪の下織の袋に入れ、緣起一卷と箱にいれあり、其外世々の帝の勅願所にして、綸旨院宣あり、每年八月十五日十六日祭禮にて十五日の夜は雜子寢とて近里はいふに及す、數十里より男女集り通夜して賑敷事なり、其外祭禮多し略す。惣して此御神は惡魔降伏諸難を除給ふ事奇瑞のおほく諸國より歩みを運ふ事おほし、其外當社の事筆にも盡しかたし。

又鈴の御牧とて昔名馬出て禁裏へ度々ひかれしなり、其牧跡とて此上野に駒の尾とてあり。

なつけつる鈴の御牧の駒なれと、飼し古野やわすれさりけり　定家卿

又權現の礫石（ツブテ）とて有、玉石塚ともいへり、人此石をとれともへる事なし、惣して此三崎の海深ふして春の頃喜見城立事度々なり、此邊は小貝の名物なり。

又粟津村は寺家村續きなり、是に昔三崎權現三千貫社頭の時に有し大宮司屋敷とてあり、御鹽藏は屋敷の內にあり、又金光院とて臨濟の禪宗あり。靈地見物なり、此氏宮十二の森とて十二藥師如來なり、本道正院村へ行には此村中より山手へ入るなり、本村にて馬次なり、又濱傳ひは粟津・宇治・森越・引砂・高波・伏見・小泊・雲津とて磯傳へ行なり、雲津まて一里あり、本道とは違絕景にて名所多し、しかし道は少し遠し。又森越村氏宮は片輪姫の宮にて海よりあかり給ふ手なき御神體といへり、又宇治村（高勝寺）

の氏神は天神の宮とて天より天降り給ひて、本地觀音なり、又引砂村の氏神は松森の宮とて山より出現有しなり、本地虛空藏菩薩なり。此三ヶ所の宮森は地より浮み出しとて、天神の宮を中にして左右間尺、高、廻、少しも違はず、廻り田地にて平地なり、不思議の宮なり。又伏見に伏見川とて有、源は山中村より流れ、湊は餘程水あり、又雲津村は南北へ一里指出る處にて、雲津の端とて左右の津を見をろし、向ふには越中立山など廿餘里の海上有といへとも、手の屆く程に見え絶景至極にて、名所記等にもあり、雲津の里とは此處なり、古歌に、

雲津より須津めくりする越船の、沖こきたるほのゝ〳〵に見ゆ　仲實朝臣

（雲津）

此雲津村昔は此邊の津にて數千軒有し所なりしに、或時猩々といふもの海よりあかり遊ひしを殺せし其むくひにて、津浪ありて人家不殘退轉してけり。今の村は其時教院泰澄大師開基の大寺有し門前に五六軒有りしか、又々一村となりしといへり、其寺跡地名に寺の前・大門・塔の上・不動坂・阿彌陀堂の地・上の六坊・下の六坊、などとて有、今も礎等有て動す事ならす、穿は忽ちたゝりなり。氏宮白山宮は其時の社にて、昔は大社にて百姓等に神主鍵主抔とて有。此宮森は高き所の崎にあれは諸方より見ゆるなり。又木の下とて古き百姓あり、數千年のものにて藤原氏小林姓のよし、利家公の繪像傳へし、又は【日本往生傳】に有、鞍見の里唯信の母木の下氏とは此家の事なり、又蛸島境に鉢ヶ崎とて有、不思議の塚なり、是は泰澄大師の鉢の子を納めし塚なり、依て鉢ヶ崎といへり。又蛸島村は雲津より廿町有、家數四百軒有、近鄉の獵場にて四十物其外問屋あり繁昌なり。川端にて山廻り役あり、其外能き身上のものあり、昔此沖に大成蛸あり、船中又は近鄉の人を取、此山の神と戰ひ、終には山神平らけ給ふより、今氏宮の山王權現是なり、其大蛸化して嶋と成、今に辨財天の宮ありて、磯三四町あり依て蛸嶋の名あり。

又正院へは十町餘りあり、間に正院川尻村とてあり、稻荷山の要害とて　城跡あり、城主溫井兵庫とて畠山の家臣にて、越後勢と戰ひ落城有しなり、今氏神稻荷の社地に有礎石垣等其儘あり。其外、外堀とて内堀とてあり、又此村の新保といふに七郎右衞門とて古き百姓あり、持宮とて五町計山に日の塔といふあり、惣して雲津より布浦村までを長濱の浦とて、不殘鹽濱にて風景言語に絕したる名所なり、諸書にも出る處なり、其上鹽多く出來有りて、大濱ともいへり。

○本村　寺家より一里六町、本馬四十九文、輕尻三十文、人足十五文、家數百五十軒計、散村なり、山中に有。

雲津より山中へ入て正院よりの本道なり、此村は本村とは中頃よりの名にて近鄉の本村ゆゑ名に呼へり、元は鞍見村といひしなり。則【日本往生傳】にいふ、佛書に能登の國鈴の御崎、鞍見の里出生の唯信といふ僧、山城の國醍醐の法花堂にて不思議の往生あり、父は親鸞母は木下氏と有、則此村の淨土眞宗の光樂寺といふの子なり、能畫によつて大和の當麻の曼荼羅を寫して、今諸人拜む處の曼荼羅は此唯信の畫る寫しなり、其時一集に寫せし所の曼荼羅此光樂寺にありて、什寶として每年兩度弘めあり。又村を鞍見村といふ、其は元は三崎權現の每年三月九月初丑の日より御神輿出座あり、濱傳ひ木郎の石動寺の山王の宮へ御幸あり、戻りは山手廻り御歸座有なり、其御輿御泊り有所に假屋有りて、道々玉居の祭りとて今も村々に餅抔搗き祭れり、此村は終りなれは鞍見の玉居て跡玉居といふ說あり。

○正院　本村より三十四町、本馬四十九文、輕尻廿七文、人足十三文、家數百二十軒計、町作りたる能き村なり。

此村は昔の要害の城下にて商家等あり、其上松まへ等に出店して能き身上の者數多あり、氏宮八幡宮は昔は猿樂なとあり、賑敷今も舞臺の跡あり、什寶に能の面數多あり、昔は今の櫻井氏の神主の外に社人多く、神子塚抔とてあり。本住寺とて法華宗の大寺あり、此寺は要害の執權職出雲石見守屋敷跡にて則開基旦那なり、千光寺とて禪宗有、淨土眞宗大寺二ヶ寺あり、町端に館の藥師とてあり、小路村續きなり、羽黑の宮とて羽州羽黑山を移したるあり、又能野谷村近し敎西寺といふ御坊に要害の城主守本尊とて親鸞聖人の眞筆の名號あり、正月七月十五日弘めあり。岩坂村近し、三俵外とて能き百姓あり、鹿野村近し經方友末抔とて百姓あり中にも經方は利家公御扶持頂戴なり、是等は越中阿尾の城主菊地伊豆守家來筋のよし、氏神天滿宮は靈社にてとゝの宮といふ、鮒（ト）といふもの海中より上るとて鮮濱とて除てあり、併し渡唐のいひ誤りにや、御神體渡唐の天神のよし。妙住寺とて法華宗あり、此寺の番神は飯田の城より移たるといへり。【夫木抄】歌に、

君か代のためしと見ゆる長濱に、千種の貝の數もつきせし

○飯田　正院より二十四町、本馬三十一文、輕尻十九文、人足八文、家數三百軒計、

此村二七の日市あり、不殘商家繁昌の處なり、御鹽代官一人、山廻り役一人在住、十村役篠田氏あり、淨土宗大運

寺とて有、本尊丈六の阿彌陀如來なり、作佛のよし。最勝寺、淨光寺とて淨土眞宗あり、昔しは若宮にありて眞言宗なりしとて、其什寶抔有、明（アキラ）とて御印頂し小刀鍛冶あり、城跡有しれす、今氏神春日の社地になりて有。又飯田川とて若山川ともいへり、源は南山村伽藍村より流て二里餘りにて飯田の下の町端にて海へ入なり、則長三十八間の橋あり、此川筋登れは若山の鄕なり、處々橋あり、此往來は太郎越とて鈴屋へ出るなり。若山の鄕村々多し。此山手に廣栗村といふに定廣とて平氏の筋とて有、隣村鈴屋といふに定廣の宮とて有、日宮村といふに大主といふ百姓、昌樹寺とて臨濟の禪宗あり。又出田村といふに獺越坂とてあり、是は獺の越るを見て付し新道なり、此村惣書とて百姓に蓮如上人の書物多く持傳へり、經念村近し。古摩志彦の神社立給ふ。近鄕の惣社にして大社なり。神主葛原氏なり、十町計奥山に御鞍掛とて神木の櫻あり、大木にて花の頃見物なり、宗末村といふに藥の水あり、湯に湧かし用ゐれは諸病治するなり、則行基の作の藥師如來あり。大坊村に正福寺とて淨土眞宗の大寺有。盤若山といふ本尊春日の作の阿彌陀如來と、昔は天台宗にて色々寶物あり。延武村に延武とて利家公より御扶持頂戴せし山廻り役あり、又山手に御塚とてあり、黑嶺利家公御責の時御家來打死の塚のよし。黑嶺山は東平此村の領なり、白米坂抔とて面白き處あり、又光性寺とて眞言宗あり、昔は行基菩薩の開基にて七堂伽藍（シチドウガラン）の大寺にて、今も作佛多く門前田の中に白比丘尼（ビクニ）の餉（カレイ）の箸をさして有し大木の杉あり、枝葉異なる木なり、能登の一本木といへり。又辛鮭の宮とて有、三ヶ村の惣社なり、別當光性寺、神主水島氏なり、此宮を辛鮭の宮といふ事は、昔此里人辛鮭を拾ふ何といふものにやしらす、幸に氏神とせしに此辛鮭いろ〳〵怪異をなして、后には人を取喰ふなり、行基菩薩此怪異を退散ありて大穴持命を勸請有て、今一宮大明神といふなり。三輪の御神御同體なれは、兼村の國兼末、義古・國宗・清德抔とて筋目有、又向村の了惠とて百姓有、禪宗なれとも、古佛淨土眞宗の寶物數多持傳へり、正月七月十五日は兩度參詣多し、此村に桃木原有て花の頃は見物なり、中村の願成寺とて禪宗あり、又上戸三ヶとて北方村・寺社村・南方村なり、飯田より村續きなり、此邊を大濱といふて鹽多出來所なり、飯田より御鹽藏等多く有。北方村中へ流るゝ川を飯屋川といふ、此川の石銀石とて光りあり、此假屋橋といふ橋爪に三崎權現の玉居の御假屋ありし名なり。此村に眞賴とて利家公より御扶持頂戴せし山廻り役あり、又山手に御塚とてあり、黑嶺利家公御責の時御家來打死の塚のよし。黑嶺山は東平此村の領なり、白米坂抔とて面白き處あり、又光性寺とて眞言宗あり、昔は行基菩薩の開基にて七堂伽藍の大寺にて、今も作佛多く門前田の中に白比丘尼の餉の箸をさして有し大木の杉あり、枝葉異なる木なり、能登の一本木といへり。又辛鮭の宮とて有、三ヶ村の惣社なり、別當光性寺、神主水島氏なり、此宮を辛鮭の宮といふ事は、昔此里人辛鮭を拾ふ何といふものにやしらす、幸に氏神とせしに此辛鮭いろ〳〵怪異をなして、后には人を取喰ふなり、行基菩薩此怪異を退散ありて大穴持命を勸請有て、今一宮大明神といふなり。三輪の御神御同體なれは、

三輪ならて爰にもありや一本の、杉のみとりのしるしさかえて

又蟹寺とて有、法成山永禪寺といふ、此寺昔は敎院なりしか、妖怪の爲に住寺を取殺す事久し、依て住職する人もなき明寺なりしに、貞和年中の頃か、同國酒井の永光寺螢山和尚の御弟子月庵禪師行脚の時、此寺に來りて客殿に終夜座禪しておはせしに、丑滿の頃震動して眼日月の如くなる恐敷もの顯れ出て、禪師暫く待た問ことありや、彼の者曰く、四足八足兩足大足右行左行眼天に在といふ、禪師汝は蟹にや有やとて、拂子を持て打給ふ、忽ち消て失にけり、夜明て里人來て見れは、禪師の無恙事不思議におもひその樣子を尋見るに、後の山に千尋深き池あり、其水の面に幾年經ともしらぬ一丈餘りの蟹の甲八ツに破れ死して浮み居たり、其後妖怪なし。

卽月庵禪師を開山として二世天桂和尚、三世北海和尚の木像、開山堂に安置あり、又蟹の住し池の跡後の山にあり、又此月庵和尚俗姓は曾我家にていたつて美僧なりしといへり、今も曾我永禪寺といふ、昔は大寺にて其時の寺代官の筋とて散家といふ百姓有、此寺の緣起に委しくあり。

蟹寺の謂れを聞に今更に、猶仰かるゝ法のちからは

按するに【孔子家語】曰、笑妖は不勝善政、【孟子】怪不勝善行と有、誠に怪を怪とせされは怪なし、妖怪は不正の氣なり、德有人に勝事あたはす。又是に似たる事勢州鈴鹿山の邊にもあり、蟹坂の蟹塚とて有、是にも蟹化して人を取る事有しといへり。又一說に盜人の異名を蟹といひしなり、鋏（ハサミ）をあけて手足をはり横行する形ちなり、若し此樣なる名より傳へ誤るにや。

又此寺辛鮭の宮、蟹寺有る故に此村を寺社村といふよし。又南方村といふに三盃といふ百姓有、先祖は山にて飯の盛たるを三盃拾ふよりいへりとあり、此村に柳田の神社とて有、境內廣し、古き宮のよしといひ傳へり。神主櫻井氏なり、又奥山に淸水といふ處あり、昔伽藍あり、觀音の靈像ありて其頃は參詣おくあり、今も中の茶屋抔とてあり。又山奥に日字の瀧とて虹の瀧ともいへり、瀧壺へ礫すれは忽ち白虹立登るなり、瀧壺深し、此流を虹見川といへり、今誤て鼠川といへり。此川に佛體石とて有名石なり、源は寶嶺の南平より流れて二里餘流るゝなり、往來に十間の橋あり。竹中橋といふ、橋爪に竹中といふ百姓あり、橋の西に家の有を冥加谷といふ。此散村の一里半山の奥に石坂とてあり、家十軒餘あり、黑嶺の大手にて城戸といふあり、家臣大場何かし屋敷跡抔とてあ

り、又往來に烏越坂とて城跡有て、是にも矢倉抔といふあり。是は烏越の城とて黒嶺の取出なりしよし。峠のをりとに谷崎橋とて長三十間の橋あり、此川を盤若峠といへり、まんか淵とて恐敷あり、川上に加護の瀧、盤若の洞抔とて有、是も黒嶺の東平寺山奥山より流て大川なり、惣の坊とて弘法大師住給ひし跡あり。惣して此山に日字の瀧、冥加谷、盤若の洞、加護の瀧抔とて有は大師の御舊跡にて、今も山中に護摩燒給ふ跡抔あり、また加護の谷とて大師白山權現勸請の宮あり、今は石坂村の氏神にて大木茂りあり。又盤若川の緣登れは吼木山へ行なり、堂ヶ谷村とて有、昔大師建立の地藏堂有しゆゑ名とせり、此村過半淨土眞宗にて此地藏堂を毀ちて本尊を杉のまたにかけ置しに、其本尊次第にいつとなく木の中へ入給ひしより、今高屋といふ處に地藏杉とて大木あり。

○鵜飼　飯田より上りの馬次なり、三十三町、本馬四十四文、軽尻三十六文、人足十三文なり、家數百八十軒計あり。

此村に昔は郡奉行在住ありて、其頃は大獵とて繁昌せしなり。妙岩寺とて東方院家あり、珠洲郡一郡、淨土眞宗觸頭の錄所なり、寺領十二石西方寺村一村支配なり、昔は西方寺村にありて、丈六山西とて天台宗にて三崎權現別當兼帶の寺なりしといへり。中頃利家公黒嶺の城主阿部判官義宗退治の時、雪中にをよび此寺に御滯留あり、元朝に黒嶺落城ありし時、御褒美に子孫有、爲に淨土眞宗になされ改名あり妙嚴寺といへり。依て利家公の御像代々御位碑客殿に有、其時は一郡の政務を御預け有しといへり、又什寶おほし。利家公歸依有し摩利支天の尊像あり、其外事繁きは略す。氏神住吉宮、廣國新左衞門勅命にて勸請せし由、又鵜飼川とてあり近鄕の大川なり、往來に三十三間の橋源は大町泥木村奥山より流て三里あり、此川に菜籠（サイロウ）の淵とて恐敷あり、昔菜籠を洗ふとて誤りて淵へ落せしに、松波村鄕の口の淵へ出しといへり。又此川の上に善野といふあり弘法の臼の井とて冷水あり、又大町村といふに黒嶺の家中の跡とて有、又此川湊の州崎を着崎といへり、風景類なき地なり、見付嶋とて大きなる嶋あり、辨財天の社あり、三月十八日祭禮なり。昔大同年中弘法大師御歸朝の時船中へ何國となく法華經の音聞ゆる方に隨ひ船を一つの島を見付て寄せ給ふに、船着處を着島といふ、見付島抔といへり、其時白山宮翁と顯れ、吼木の山上へ導給ふとなり、其時の道筋とて田の中にあかりの小路とてあり、其時の橋跡とて元橋とてあり、此橋爪に足洗ひの井とて今も靈水あり、大師足洗給ふ水なり。其外大

師の御舊跡近鄕在々に有て筆にも盡しかたし。吼木山法住寺は則法住寺村といふにあり、時に弘法大師法華經の聲に隨ひ此磯に船を着け給ふに、いつくともなく老翁一人來て曰く、我住山に櫻の古木ありて、夜々光り物して吼るといへり、大師此翁に隨ひて來らせ給ふに法華讀誦は此木の聲なり、光り物は大唐より投給ふ處の五木なり、則一宇を御建立ありて吼木山法住寺と號して大師住給ふ、其時の翁は白山妙理大權現にて、今東の山に大社あり、大師日本にて初めて祕寺御建立の道場にて、次第に繁榮して、嵯峨の天皇御勅願所となし給ひて、代々の帝勅使綸旨院宣ありて、七堂伽藍にして、境内六十四坊棟を並て寺領千貫、山方一里、御朱印あり。一宗北陸道第一の靈地にして、其後賴朝公より代々祈願所としてますます榮て諸堂美を盡したる靈場なりしに、中頃兵亂に中絕して諸堂兵火に炎上ありしに、今の講堂は則賴朝公再興の所燒殘りといへり、本尊靈佛の大像の三尊は兵亂に不思議ありて殘り給ふといへとも、六十四坊は不殘燒失あり、幽なる事なりしに、中興御當代になり、又諸堂御再興あり、御寺領三十俵、一山御寄附有といへとも、往古の一日の其一にして、塔司とても漸極樂寺とて一宇あり、然といへとも境内近里に大師の御舊跡は殘りありて

雜有靈地なり。中にも吼木の五鈷の櫻あり、大師御影移し像を作り給ふ鏡の池あり、大師閼伽の谷水を毎朝汲み給ふ時の座具袈裟懸の松あり、衣體坂あり、彌勒堂、藥師堂、稻荷社、山王社、諏訪社等とて大師勸請の社あり、大師植給ふ下馬櫻二所あり、又渡唐の產千年草とて外に生せぬ草ありて、料理にして不斷寺中喰するなり、高野の萬年草、此山の千年草とて名物なり。其外寶物靈佛多し、本尊大日如來、阿彌陀如來、釋迦如來の三尊は、善無畏三藏天竺傳來の佛にて、大師此山開基以來より此處に待給ふ尊像にて、平生開帳あたはす七年の忌に當りて開帳あり、奇瑞おほき靈像なり。聖德太子作の地藏、行基作の不動尊、二王尊、其外作佛多し、中にも大師四十二歳の御姿刻み給ふ御像、同吼木櫻を以彫仕給ふ、法華經の板木一部、同船板の御名號の板木、大唐より投給ふ五鈷有、是は我法成就の地に留るへしとて、三鈷、五鈷、十鈷の三つを大唐より投給ふ、三鈷は高野山三鈷の松に留る、五鈷は此山の吼木の櫻に留る、十鈷は佐渡の小比叡に留れり。其一つの靈寶なり。大師自畫自讚の一軸、代々綸旨院宣花園院勅願を以山櫻を植給ふ綸旨あり、勅使藤原の宗信と有、其外賴朝卿の寄附狀等數多あり、其外いろ〳〵有て筆にも盡しかたき靈場なり。

又金峯寺村は鵜飼より村續きなり。豐安山金峯寺とて禪宗有、開山曾我月庵和尚にして寺領二十俵なり、利家公御發向の時唐竹の名物にて御簇竿の御用に立し事有、今も唐竹の大藪あり、金峯寺竹とて名物なり。又畠山類家松波氏歸依の藥師有、御佛田料月崎七十五束刈田拜領あり今に有。又廣國村近し、加志波羅比古の神社立給ふ。其所を則小名に柏原といふなり、昔は大社なり、珠洲郡式内の社の其一社なり、其別當跡とて庵の藥師とて有、吼木山の下寺なりしといへり。此村を廣國といふは日野新左衞門尉廣國といひし人住しよりの名なり。此父は日野廣蔭といひて公卿の人後は改名在、知德廣蔭といひて京都より兵亂を遁れて爰に來りて卒死有しといへり、妻の後室長生して尼と成、八十四歲にて入定有し塚有、法華經一生書き寫有し經塚なと有、此廣國の子孫中頃十村役と成飯田に有しに、七郎右衞門と、或裁許の事に付遠島あり。其子其順とて醫師にて近頃迄存命有しなり、此家代々幼名に熊の字を以付し由、日野熊若丸の子孫にや、今委き事しれず。惣して此廣國散村の名に、助政・是國抔と此邊にあり、いつれも此筋目をいふよし、助政は太田氏のよし。烏越村近し、六左衞門とて山廻り役あり、同村に栃ヶ平の六兵衞とて古き者あり、栃ヶ平六兵衞、堂ヶ谷

善次郎兵衞、鵜嶋の三右衞門とて三人一集に七石五斗の利家公の御墨付戴きあり。又是より鵜飼川緣往來善野泥木といふを經て町家の鄕に出る道なり。

又みとりの城とて廓跡あり、法住寺村の領にて鵜飼村の邊なり、吼木山衆徒の取出のよし、【鎌倉實記】抔に、木曾の弟に吼木山衆徒あり、其律師の居城ともいへり、邊りにみつ寺とて今墓原になり寺跡あり、吼木山坊三ヶ寺有し跡ともいえり、妙金の宮とて山王宮あり、是は今も吼木山支配なり。

又鵜坂村境の山の尾に昔松波常陸介歸依有し藥師あり、其頃は藥師寺とて坊有しなり、今地名のみ殘り本尊金峯寺に安置あり。

又鵜嶋三ヶとて浦傳ひあり、黑丸村・鵜嶋村・宗玄村なり下りには松波村より此三ヶとて馬次なり、松波より鵜嶋迄二十四町、本馬三十一文、輕尻十九文、人足九文、鵜嶋より飯田迄二里半、本馬八十文、輕尻四十五文、人足廿二文なり、鵜嶋三ヶにて家三百軒餘あり、此邊より三崎迄長濱の浦といふて鹽多く出來あり、風景類なし、

【萬葉】の歌に

鈴の海の朝ひらきして漕來れは、長濱の浦に着てけるかな

又黑丸村氏神は八幡宮なり、社地廣し、境内に古塚あり、これは此村に横濱の三右衞門とて此邊の鄕士の者あり、姓は源家にて多田藏人といひしとて、此邊を多田の鄕といふよし。氏神は正八幡宮を勸請せし、此者先祖夫婦の塚といへり、此者方にて鎌倉の最明寺殿年を取給へり、其時下されしとて俊成卿の【千載集】其外扇抔持傳へり、又内並五右衞門とて中頃鄕士有之とて館跡有、其筋目のものとて八人百姓に有、館の邊に若王子の宮あり、近頃まて内並寺とて寺有しよし。又黑丸市兵衞とて大百姓あり、昔は山廻り役つとめて古き百姓なり、此者有故に黑丸の名あり、類家に黑丸藤兵衞とて同大百姓あり。又川尻川とて長十二間の橋あり、此川上に大瀧とて瀧あり、此處の不動尊靈驗あり、此瀧壺深き事限りなし、其上諸木茂り恐敷處なり、近鄕の雨乞は此瀧にするなり、古へは大木茂りて流れも水かさあり、往來舟橋有て今も舟橋川といへり。又鵜嶋村は中に有、酒屋與兵衞とて古き百姓あり、此もの先祖は弘法大師御宿をせしものなり、其頃此者の家度々火災有し事を聞給ひて、大師是を張りをくへしとて、

しけ柱氷の梁に雪の桁、さす樌までも水棹木かな

此札を張し後は火災なし、其時の座敷の床柱とて殘り在、今諸人に倒與るなり、諸病遁るゝとあり。又宗玄村に則宗玄の忠左衞門とて古き百姓あり、此者有故に宗玄の名あり、此村の氏神は乙劒大明神なり、安養寺とて別當有て昔は大社なりし由、又安養寺は今金峯寺の寺内にあり、毎年三月十五日三ヶ村祭禮にて、黑丸八幡宮へ鵜嶋稻荷宗玄乙劒御幸あり、立物山抔引賑敷なり。又宗玄村端に切通しとて岩山を伐拔て往來するなり、昔遙の山を越て往來せしを、郡奉行に黑川五右衞門といひし人此所を伐拔往來安く成しなり、是迄は多田の鄕なり、是を境として　木郎の鄕戀路村なり。誠に此戀路村名にめてゝ風景類ひなし。沖に辨財天の小島あり、菱尾波とて磯に菱形に波寄るなり。又左右の岩組岩根の鹽釜の體言語にも絕したる處なり。其上此戀路村に物話りあり、いつの頃にや有けん、多田の里に女あり、茂九郎の里に男有りて夜々行通ひけん、其頃は道も岨敷れは磯傳ひなる淺瀨をたとりけるに、月なき夜は女の石の端に篝を燒て待しとなん、又男ありて我戀の仇なるをうらみ、ある夜女をいましめ篝火の處をかへて燒置けん、彼男此事をしらす渡せしに、磯の深みへ沈み死しけるとなん、女も此事を聞續て身を投死せしより戀路村の名有といへり。

寄みてりいまによとまぬ菱男波、つらき戀路の名
こそ流るれ

此所に觀音坂とて峠あり、麓に觀音堂有、【是は夫婦の者の菩提の爲に建し尊像といへり。是より松波村へ十五町あり。山道に海上を見おろし面白き處なり、半途に座頭落しとて恐敷がけあり。又畠中の山手に入は松波散村の局（つぼね）といふに出るなり、昔の松波家の家臣局左衞門といひし人の屋敷跡にて、其の筋目とて百姓あり、又穴釜とて瀧あり、往古穴釜とて富貴のものありて此瀧壺より酒の出し事有といへり、今も此瀧壺にいろ〳〵不思議有といへり。又是より松波へ出る往還にて城山へ出るなり、又城山續きに大き成宮森あり、笠主（かさぬし）の宮とて上村といふの氏神なり。此宮の脇に笠主といふ百姓あり、此者先祖畑に出有しに、御神體天より此者の笠の上へ下り給ひて告て宣く、我を此處の氏神に祭るへしと有て、則此處に勸請するなり。本地金像の藥師如來の小佛なり、其日祭禮にて毎年三月廿二日なり、此村に光明院とて能き眞言宗あり、【和漢三才圖會】に光明院は能登の谷村に有とは外に光明院なし、書誤にや。又松波川とて有、此源は馬渡村・合鹿村奥山より流て松波の海へ入るなり。川筋に江の口の淵とて深きあり、此川緣を登りて町野へ出る往來

なり、松波村入口に長八間の堰橋あり、惣して此松波より三崎まで十里の間を長濱の浦とて、布浦高麗の端より雲津の鉢ヶ崎といふまて村々一目に見ゆるなり、秀景誠に名所なり、八景あり。

椎泊夜雨
　春雨のいつか晴なん長濱の、浦の筥屋の旅寐こそうき

松波秋月
　のこりなき秋の夜長き長濱の、浦すみわたる月のさやけさ

鵜島晴嵐
　はれてゆく嵐にのこる鹽竈の、煙たなひく長濱のうら

吼木晩鐘
　なせる罪はてしなき身も長濱に、夕くれ告る山寺のかね

黒嶺暮雪
　長濱に打出見れは名にも似ぬ、黒峯の山の雪の夕くれ

飯田夕照
　志なてるや春の日長き長濱に、ながはしわたる往

來久しき

蛸島歸帆
　帆につれて家路へ戻る釣舟の、いそく心も長はまのうら

雲津落雁
　雲井より雲津に落る雁かねの、行衞も遠くしら波そたつ

○松波　鵜飼より一里十六町、上りの馬次なり、本馬五十八文、軽尻四十一文、人足廿文、一家數三百軒餘あり、此郷の大村にて昔の城下なり。

此村は松波常陸介とて畠山の類葉の領知六萬石の城下なり。天正の頃謙信勢の爲に落城せり、城山は北の川向の松山なり、風景の地なり、此筋目とて福壽院とて百姓にあり。又積寶山滿福寺とて禪宗有、大寺にて、則常陸介位牌木像あり、其頃菩提所の時は地方三百石寺領せしなり、又松岡寺とて、西方淨土眞宗の院家あり、蓮如上人三男蓮綱上人開基にて、昔は加州波佐谷といふに有しよし、今も地方七石五斗御寺領なり。此寺の大鼓の筒は豆殻の木にて一撥二聲に響くよし、是は吼木山の什寶にて内に空海作と判形あり、兵亂の時此磯に寄りしといへり。神護寺とて眞言宗あり。氏神神明宮の別當なり、本尊

（灘廻り）

華嚴の釋迦如來聖德太子作なり。又氏神八幡宮神主は立華氏にて七十ヶ村の神主なり、十村役なり、恒方とて鹿野村より引越し有しに、近年退轉せり。御收納藏二筋あり、千路（センジ）太郎右衞門とて元十村役の筋目あり。又本道木郎越とて不動寺村へ行なり、又灘廻りとて磯傳ひ村々あり、甲斐の信玄前世に建立有しとて石體の地藏有、いろ〳〵奇瑞あり、松波より灘廻り間道なれとも、小木の九十九瀧抔とて見物有へきなれは、委く道程を記すなり、松波より布浦村へ十四町、本馬十九文なり、六ヶ所へ別れて有村なり、椎泊りとて指出る閑靜の地にて、船の懸り間あり、又比野（ナ）といふに佛穴とて洞有、南向にて磯に松嶋高麗とてあり、風景いはん方なし、閑靜にして奥州松嶋の景に等しとて、奥州松島見佛上人來り給ひて、三年まて此洞に往給ひて、其歌に、

三とせまてをりかさねつる布浦を、けふたちそめていつかきて見ん　見佛上人

【西行撰集】に西行此上人に逢ひ給へるは、能登の國いなやづの郡、洞は南向とあり、能登の國いなやつの郡なし、按に須津（スヅ）と書けり、いなやつの訓有やいかにや。又此洞の邊に盜人洞とて大成洞あり、眞脇三ともいへり、佛穴の隣に盜人穴、善惡の二つをかし。又郷の釜と云あり、沖

に義經喰物煮給へる釜とてあり、依て郷の釜と云月の輪とて風景あり。又坊の釜とてあり、藥師堂あり、昔は松波常陸介祈願所にて醫王山藥師寺とて眞言宗なり、今は小庵なり、本尊藥師如來は見佛上人佛の洞にのこし置たまふ靈像にて、御長一尺の焔浮陀金の三枝の蓮花藥師、左は日光佛、右は月光佛立給へり。靈驗奇特おほき尊像なり、緣起にいろ〳〵奇瑞の見えたり、松波家守り本尊にて有りしを此處に安置す、大寺なりしに、松波落城の后中絕有しを、又靈驗あらたなれは、再興して藥師寺とて木郎八ヶ寺の其一寺となれり、能登の國十二藥師の其隨一なり、脇に夢想の冷水あり。又松波より布浦へ行に毘沙門塚とてあり、是は穴釜長者といふもの、此神にいのりて福得有しより繁昌せし多門天の社跡なり。布浦より九里川尻村へ十八町、本馬廿四文、此川尻川、木郎川といふて水深き湊なり、三里あり、時長村山なり流、川緣村々あり、秋吉村に淸水寺とて觀音の靈像あり眞言宗なり、又川尻村此川尻にある村なり、惣して此邊は入海にしてもの寂敷隣へ行にも淺瀨を渡り抔して閑靜いはんかたなし、川尻より立壁へ廿町、本馬廿文なり、川尻より立壁の小坪といふへ舟にて渡れは近し、四方山村は村つゞきなり、御收納藏あり、白丸村へ九町あり、本馬十二文なり。

をかたとて古き百姓あり、又氏神を尻高の宮といふなり。此邊にて尻高といふ貝の大なるか每年八月朔日祭にてあかるなり。神前に備有なり、白丸より長尾村へ十一町あり、本馬十五文、長尾より新保村へ十四町、本馬十八文、新保より越坂村へ十五町、本馬廿二文、今は新道ありて十町あり、越坂より一瀨村へ十五町、本馬廿二文、此一の瀨村は九十九瀉の果にあり。又上市瀨とて十町餘山にあり、又吹上とて越坂の散村あり、山上に有りて九十九瀉を見おろし風景類なし。此處は昔天德寺とて大寺有て今も六千坊、經塚、開山塚、天德寺抔とて地名あり。其頃弘法大師此處にて餉の箸をさし給へるか榮えて今樫の大木二本あり、實大にて左卷にて名物なり、御上みへあかるなり。又此山つゞきに峠といふ所あり、宇出津・小木・眞脇・一の瀨への追分四辻なり、山中にある峠なり、熊野權現の大なる宮森あり、是は一の瀨村の氏神なり、昔此處に行基菩薩の開基の大寺あり、七堂伽藍にして行基山新善光寺といひしよし、天正の頃兵火の爲に退轉す。今も石垣礎等其儘あり、兵亂に鐘を入し池とて鐘池と云ふあり今も水底にあり、今寺號本尊は眞脇村にあり、其外同村長願寺本尊、時長村願成寺竹布の十二天の繪像、滿泉寺の十二藥師も皆此寺の什寶なりしといへり、其頃は近鄕

寺領にして上日寺の一王尊も近き頃まて此峠に有しといへり、此所の熊野權現は鎭守なりといへり。

また九十九入とて日本無双の入海あり、九十九潟（ウクモカタ）といへり、風景日本三景もひとしき所なり。これは小木・一の瀨・越坂三ヶ所の領境の入海にて、入江九十九ヶ所あり、深さ百五十尋餘あり、廻り三里餘有、中に鶴下り嶋とてあり、形ち蓬萊の臺の如し、越折の松とて名木あり、肉桂の木數多あり、辨財天の社あり、嶋の東に丸き蓋の樣なる所あり、元朝に開くとあり、まことに風景仙境ともいひつへし。

とはねとも其名もしるき友鶴の、をり居て遊ふ千代の浮しま

九十九入の名あり、城の下、館の入、椎の道、道の下、尾伏、堂船、濱の下、あけば、濱の入、田の下、春日の入、藪の下、坂口、びしやこ、入濱、たいの木、山枡のくり、松の下、宇那、名古羅、網のせ、一の入、岩根、狸の端、小谷內、田きれ、嶋の戶、懸竿、長戶、淺の浦、夕日、古山、鶴の端、笠の浦、二の瀨、兀浦、三の入、かつき、霞原、廻戶、朝日、吹上入、峯草落、一つくり、松山の入、川口、尾上、大石、大谷內、石山、たれ、はせ、嶋の越、島の入、渡し、嶺瀨、戶波、長手、二つ釜、蔗の間、岩越、岩の腰、奥の瀨、三の瀨、一牧

（木小）

田、やき山、釜中、船かくし、小入、猿手、灘こめき、沖こめき、横引、出口、穴口、洲崎、草臥、嶋立、瀨長、小濱、三つ穴、中の入、舟見、かんとろ、このくり、うを住、釜の入、瀧口、をせ川、彦の入、畠の入、畠の腰、七曲、腰折、前谷、すかも、波なし、小釜中、琵琶音、中の松、〆て九十九入の名なり、間口三町餘りあり、下の間口越坂村の城ヶ端とて城跡にて穴藏等あり、庄長の宮とて宮森あり、城主太田氏のよし、上の間口は小木の日和山にて景色あり、七ヶ國見ゆるなり、小木の間に船待するもの遊山する處なり、越後より此間口を舟にて渡せは十町あり、船ちん一人十二文なり、又一の瀨より小木村へは十四町あり、本馬三十九文、此小木村は御領分一の場所にて繁昌也、本町、新町、庄崎とて別れて家居あり、舟本とて古き者あり、山城屋抔とて船問屋あり、勝光とて刀鍛冶の筋目あり。小木鰐とて名物なり、切漬を御上へあくるなり。法融寺とて淨土眞宗大寺あり、此寺昔は貝田とて間の出崎の岡山に有しなり、此所に古塚あり是は此寺の姥ありて死せしか牛となりしものゝ塚といへり。又氏神三社權現は上野に有、能き社なり、近年此宮普請する時古通の牛の舌といふ金子堀出したる事あり、此處昔寺地にて坊の上坊の池抔とてあり、昔の社地は三船山とて風景の磯山なり、沖よ

りは大船の如くに見ゆる山にて、御船の端とて海へ出る崎にあり、誠に船形の松山なり、佳景至極なり、一山踏所鳴て下は空(ウツロ)なり、艫(トモ)と思ふ處に穴あり、旅の修行者此穴へ入しに、内は宮殿樓閣有しといへり、誠に仙境のよし、又佐渡の國にも小木といふに三船山あり、御船權現あり、御神體猿田彦の命にて御同體なり、今小木は古寺の跡にて大木有しゆゑ、を ふ木といひしよし。所口龍門寺此處にあり、槻一本にて建しといへり、其頃此小木は細木村といふて三船山の腰、岩木といふ處に有しなり、今の間所へうつし奉り、三船權現もうつし奉れり。

此ころや三船の山に立つ鹿の、聲帆にあけて鳴渡(タントロ)りけり　西行上人

又眞脇村の散村に姫といふ所あり。此磯の岩に陰門の形あるにより姫の名あるよし、三船山に對して笏島(タントロ)、錠島とてあり、秀景にして錠島は辨財天の社あり。小木より眞脇村へ廿七町、本馬三十六文、此村は六分公領なり、四分は私領なり、家居百七十軒計あり、入交りてあり、國中一の大臘する處なり、公領庄屋左衞門とて井田氏なり。氏神高座權現なり、神主高原氏なり、鷹王山上日 寺とて眞言宗あり、此寺昔百合若丸といふ人の寵愛有し鷹海中に死す、此磯に寄る、其菩提の爲に建し寺といふ、依て本尊千手觀音春日の作にて靈像なり、七ヶ年目宛開帳あり、其時は鷹來て棟を去らすといへり、其鷹の骸寄りし處を經塚とて錠島の邊にあり、此寺の二王尊は行基の作にて峠の古寺に有しなり。又新善光寺とて淨土宗あり、本尊は信州善光寺前立同木同作の尊像なり、臼の臺より二尺御長あり、厨子に負子(レンジヤク)付て其儘あり、正月十六日七月十六日開帳あり、此本尊昔公卿の姫君の少將姫といへる尼となり、負ひ奉り廻國有しに、詔ありて此山中に庵をむすび住給ひしに、無程繁榮して行基山新善光寺といへり、然るに此寺天正の頃兵亂に退轉す。本尊を今宮に移し奉りて新善光寺と又號すよし靈驗あらたにて、近年此村出火ありて此寺も燒失せしに、此本尊飛去り給ひし處とて寺山と今いふよし。又長願寺といふ淨土眞宗あり、此本尊阿彌陀如來は行基の作にて是も峠の古寺の本尊の由、大澤村とてあり、近年里人に告ありて掘出せし地藏尊あり。又眞脇より小浦へ十三町あり。磯に義經の烏帽子岩とてあり、又同鞍岩とてあり、何もかも義經々々とて所々に在、處にいふ故記すなり。氏宮八王寺の宮とて能き社地なり、御神體阿彌陀如來の木像のよし。又岡山に崎山とてあり、開き所に能き田地あり、百姓彦兵衞とてあり、此者先祖開きしなり、眞脇村より羽根村へ廿六町、本

馬三十四文なり、氏神八幡宮は能き社なり、昔は大臘して繁昌せしとなり、御鹽藏あり、唐竹の御藪あり、源三ヶ塚とて山奥に大なる池あり、又十町計山中に日の御殿とて日宮の社あり、昔しは不動寺の山王權現此宮へ御幸ありし御旅所なり、宮森廣く梅櫻の名木あり。又磯にほく打洞とて奥深き洞あり、波打入處あり、又高の山にもほく打洞ととてあり、二奥しれす、外浦へ通したるよし、脇に笠懸の杉とてあり、枯木なり。又磯邊に遊明寺とて古寺の跡あり、磯に風景の小島あり。稻荷の社あり、長與市郎の守神といへり、此遊明寺は宇出津の常椿寺なりといへり。又羽根の地藏堂とて小庵あり、本尊海中よりあかり給ふ靈像にて、石佛三體安置あり靈驗あり。

又田浦とて開所あり、是は宇出津の領にて橋本屋といふものゝ田地なり、又此邊山手に宇出津村は元有しなり、棚木の城の北なり。此棚木城は長家黑瀧與市郎城跡なり、天正年中落城せり、今に井戸・堀・石垣等其儘在り、此城山の北平の腰に船隱しとて不思議なる所有て、何艘有ても外より見ゆる事なし。また切通しとて山を切通し船の通ふ處あり、惣して此城山面白き風景所々にあり、大きに境内廣し、羽根より宇出津まで廿六町、本馬三十四文なり、

○不動寺　松波より一里三町、本馬五十二文、輕尻三十二文、人足十六文、上り馬次なり、家數四十軒計、あさま成村なり、木郎越とて松波より本道なり。

此村に醫王山不動寺とて眞言宗あり、光仁天皇第四の皇子知德上人の開基、其頃は天台宗にて七堂伽藍木郎一鄕寺領有て高倉院勅願所にして、數度勅使綸旨院宣等有て坂東山王廿一社を移して、本尊藥師如來は行基の作一刀三禮の佛なり、三崎權現毎年御幸あり、繁榮なりし御寺なりしと、其頃は衆徒多く今木郎七ヶ寺は末寺にして、皆醫王山と號すなり。山王廿一社は三ヶ所に勸請あり、不動寺村松尾の宮に七社、秋吉村瀨の爪の社に七社、行延村柿尾の社に七社、毎年三月中の申の日は木郎三十一ヶ村神輿玉居の御幸あり、【拾芥抄】の下卷諸寺の部に曰、石動寺は能登の國あり、知德上人光仁天皇御宇草創、高倉院の御宇勅使參議藤原宗道とあり、不の字の書誤りにして則此寺の事なり、知德上人開基を以て今も相子の若の御寺抔といへり、山王權現疱瘡除の守りあり靈驗あり、中頃衆徒一揆有て中絕せり、其後弘法大師住給ひて眞言宗にて諸堂再興漸く繁榮の地となりしに、又天正の頃兵火の爲炎上して多く坊舍什寶緣起も度々の兵亂になくなりて、今は昔の百分一にもなき事なり、今其時の舊

跡殘れり、脇の坊主の坊・寶藏坊・昌龍坊・上蓮寺・延々・行延・時長・國重・清眞・顯吉・吉延などとて一揆衆徒與力の筋目地名などにあり、背繼とて城形あり、其城主筋目とて五郎左衛門といふ百姓あり、衆徒多くありし所を山伏山とて今も不思議山あり、蝙蝠谷の内とて人隱しの洞穴とてあり、吹屋の谷内に行基の作とて地藏の石佛あり、靈驗あり、其外所々に舊跡のこれり。又滿泉寺村近し、滿泉寺とて眞言宗あり、瘤池とてあり、弘法大師の誓ひにて此水にて洗へば瘤おつるなり、此本尊藥師如來行基の作にて靈像なり、又此木郎越往來に弘法の井とて時長・行延村に一ヶ所つゝ冷水あり、昔は十町餘の谷水汲運ひしを、大師かなしみ與へ給ふ水といへり。

○山中　不動寺より廿六町、本馬三十四文、輕尻廿文、人足十文なり、上り馬次なり、家數三十軒計あり、あさま成村なり。

惣して此木郎越は四里廿餘町あり、山里にして上り下りと四ヶ村にて驛勤るなり、下りは宇出津より時長村にて馬次所は拾八束といへり、一里一町、本馬五十二文、輕尻廿六文、人足十三文、行延より松波へ一里八町、本馬五十八文、輕尻三十九文、人足十九文なり、此四ヶ村あさまなる所にて、人足等支へて時うつるなり。荷物ならは先觸を出すへし、行延村に古塚あり鄉士の塚といへり。又時長村に願成寺とて眞言宗あり、本尊藥師如來は元は堂ヶ平といふにありて、いろ〳〵不思議ありて此寺へ移し奉るとあり、此厨子に龍彫てあり、夜々飛行するゆゑに今大釘二本打込てあり、此寺に竹布の十二天の尊像の什寶あり。又此村に藤四郎とて御領分傳馬御免の御印物あり、鷹舟相改可申とあり。又榮孫とて百姓あり、宇出津へ行には下の長坂とて三十町の坂あり、長坂の上の地藏より直道あり、右へ行は行延村・柿尾坂上へ出松波への間道なり。左へ行は田原へ出町野へ出るなり。

○宇出津　山中より一里十二町、本馬六十四文、輕尻四十一文、人足廿文なり。

此宇出津は本町・新町・新村續きありて、其の支配違へとも皆宇出津といへり、三町有て家數四百軒餘あり。昔は元宇出津とて地名に成つて田の浦邊にありしなり、今の宇出津の地は天呑の城、棚木の城の間に杉木原にて有しなり、兩落城の後間緣にて便りよき所なれは、今の地へ移りしとなり、次第にはんしやうして國中一の四十物所にて、每春鯨抔捕故獵至極の地なり。其外諸商人あり間に數百艘不絕、問屋の座敷には數百の旅人不絕、不斷に市をなし夏冬の賑敷事國府にも增さる處なり。一國山奉行

兩人在住、御鹽代官一人、奉行附足輕六人、同山廻り役一人、銀見一人、三所にて肝煎四人、十村役一人、御收納藏數戸前、御武具土藏あり。禪宗二ヶ寺、淨土宗一ヶ寺、法華宗一ヶ寺、一向宗二ヶ寺、船宿問屋等多、中に堂の後とて船問屋あり、是は天呑の城主三宅小三郎子孫にて天呑明神堂の後に有りし故名に呼ふなり、西ヶ谷内といふ紺屋は宇加塚村に有て、寺代官の筋目なり。氏宮は棚木の白山宮神主棚木氏なり、一社は酒垂の宮松尾大明神にて町の南岡にあり、神主加藤氏なり、御神體は昔酒樽に乘給ひて此磯に寄給ふより酒垂大明神といふよし。兩社祭禮は三月十八日、町中立物山を引、賑敷事なり、八月十日十一日は棚木の宮にて氏子歌舞伎をして、近國より商人集りにきはしさ夥敷なり。又天呑の宮とて南の町家後に山ありて社あり、三宅の城内に有しを此處へ移し奉れり、今に不思議の靈驗多し、三月三日祭禮なり、三宅小三郎は畠山の家臣にして城跡東の間口にあり、今畑になりてあり、天正年中に落城位牌等は禪宗常椿寺にあり。黒瀧與市郎は長家の類葉にして城跡東の間口にあり、天正年中落城有て位牌等禪宗海前寺にあり。此寺は元棚木の城中に有て東丘寺といひしなり、又元觀音寺とて町野へ行往來の谷内にあり、今は寺なし、觀音塚といふなり、昔は海鹿の觀音とて、この谷内へ入海し海鹿多く集り大臘せしなり、今地名に海鹿田蟹田抔あり、此觀音は行基の作にて中居へ盜み行しゆゑ、中居に海鹿多く取と所にいへり、今は六月七日祇園會の御旅所なり、兩城山つゞき風景なり、中にも夷ヶ端（エビス）とて蛭子御神社あり、此邊わけて風景なり。又上町野・柳田村等へ行に上の長坂といふを登り、本鄉村へ一里九町あり、石井村へ一里十町、又本鄉より久田へ三十三町あり。是より末は外浦上卷に記す。

又宇出津より輪島へ當目越するは、曾又村なり、一里三十四町、曾又より當目村へ二里十七町、當目より輪島へ三里十五町あり、此往來村々あり、宇出津より一里に宇加塚村とて有、昔七堂伽藍の天台宗の大寺有て、此鄉を寺領せしとて舊跡あり。常蓮坊、大藏坊抔とて七坊の跡あり。經塚・錢塚・鎭守の跡・宇賀塚・比丘寺、公家の谷内、氏神白山宮、御神體行基の作千手觀音のよし、其時の寺號とて大乘寺といふて淨土宗の小庵あり、能き村なり其頃寺百姓の筋目は多く、宇出津へ出て有しといへり、寺分村近し、此所は此寺の百姓なりし名なり、又神和村近し城跡あり。又宇出津より波並へ行には間に藤波村とてあり、一里の間に所々へ別てある村なり、眞島といふ風景なるに八王子の社あり、灘濱（ナダ）といふに大宮權現あり、祭禮每年三月

二日なり御幸あり、此日を藤波の樽祭といふ、百姓分一樽、表百姓一樽、天窓振一樽、神前に備ふ、神主祈念濟て其三つの樽を我先人先にとあらそひ村中を振り歩行なり、其後酒の一滴もなくなりて、又々外なる酒求めて盛酌遊ふとなり、是を藤波の樽祭といへり、此兩社の御神體は山入にありし古寺の兵亂の時沒落せしか、此磯に寄給ひし御神といへり、又十七八町山に神目伊豆比古神社あり、今幽なる小社なり、宮森廣し、神目の谷といふ、境内に八重櫻とて名木あり、花の頃見物なり、小又ヶ谷内といふなり、昔は藤の名所にて谷川へ花の多く流れしにより藤波の名あり、武左衞門とて山廻り役の古き百姓あり、此諸橋の鄕に神目伊豆比古の神社とて額打所今にあり、いかにや。

○波並　宇出津より一里三町、本馬五十一文、輕尻三十一文、人足十五文、家數六十軒計、獵所にて能き村なり。此村に後飯盛抔とて古き百姓あり、又治郎兵衞といひし者の方に日の丸の旗瀧川皷、其の外太閤秀吉公御朱印等古書いろ〳〵有、此者先祖猪子兵助とて信長公・秀吉公の時代一手の大將をしたるものゝ筋目なり、又唐傳とて骨繼の妙藥あり、獺の傳へし方といへり。妙覺寺とて法華宗の能き寺あり、是は飯森彌左衞門といひし人の開基の寺のよし。德性寺とて禪宗あり、慶專寺といふ淨土眞宗、蓮如上人の寶物あり、每年三月廿五日弘めあり。又松の能き御林あり、此谷内より輪島へ行道あり。又矢波村浦傳ひなり、往來にて十町餘あり、寺田橋とて長十二間あり、脇に廣福寺とて禪宗あり、村端に螺穴とて不思議なる洞あり、氏宮山王は、村中にありて、龜形山にて風景なり。此往來に才の川原とて子供の多く泣く聲夜な〳〵する處あり、地藏堂ありて小石多く積てあり。又七海村境に達磨石とて此海中より上り給ふとてあり、又矢波の散村に山手一里計に猪の平といふあり、此村に音無川といふに藥水流て此水汲み涌し用れは浮腫の病治する事奇妙なり、則行基の作の觀音あり、靈驗あらたなり。又七海村は往來浦傳ひなり、久作とて能き百姓あり、青尾林とて大なる御林の松山あり、則散村に青尾といふあり、此處先年外は快晴なるに、民家一兩軒津浪ありて打て壞したり、不思議の事なり、此者とも、ねしけたる心立にて天のとがめなりといへり。

按するに、津波といふは入海に有りといへとも、此能登の國は往古よりなし、かゝる事は有ても神の祟りにて其所少しなり、潮の滿干によるにや。潮の指引は人の呼吸にて、盤古氏の息なりと有、水は陰精にして月

の出入に應するなり、北海は陰滿て潮の乾薄し、南海は陽滿て大干潟あり。又地形の高低によるにや、此能登には稀なり、又津波とは和訓にて海嘯江嘯の事なるへし。

又萬念寺とて禪宗あり。氏神白山宮なり、鵜川村へは十町有、磯に寄り地といふことあり、其昔鵜川の天神御神體菓付の大根俵藻に乘り寄給ふ神地なり、今鹽濱になりて有也、又此出崎を小倉の端とて二ヶ所有、何れも秀景至極なり、一に此岡を櫻木といふ、則櫻木の宮とてあり、御神體此花開耶姫の命なり、本地正觀音なり、春日の作なり、相殿少比古の命、御本地藥師如來は行基の作なり、境内に御手洗の井とて藥水あり、能登十二藥師の内なり昔は兩部習合の大社にて有しに、平治年中鵜川合戰の時兵火の爲に退轉のよし、鵜川天滿宮はしばらく此宮に移し奉りしより、今も御幸の御旅處なり。後の高嶺を善光寺といへり、此麓に道幣の宮とあり、御神體猿田彦の命にて中絕有しを、近年不思議の告度々有りて再興ありしなり、其外日宮とてあり、小垣村山王、答花村の高取の宮抔とていつれも靈社なり。

○鵜川　波並より一里十六町、本馬六十九文、輕尻四十一文、人足廿文、家數二百軒計、町作りにて能き所なり。則町中へ鵜川とて流て往來に長十五間の埴橋あり、此川は山田の鄕瀧村山より流て湊まて三里餘あり、餘程の船出入して商家獵師あり繁昌なり、十村役あり、多田氏なりしか中絕して北村氏勤役あり、日比氏に反魂丹の名藥あり、鍛冶屋濱屋なととて船問屋あり。氏神天滿宮は大社にして神主梅田氏なり。每年十月七日は八講會とて近里六ヶ村に十二名の當屋あり、供物御鏡餅を備るなり、祭禮の日十二名連座の拜殿に座す、時谷屋村の藤八といふものと一座するなり。扨鵜川村傳兵衞とてあり、此者の方へ七度使者を遣すなり、八度目は使に傳兵衞出合なり、是を七度半の使といふ、夫より傳兵衞拜殿の正面に坐し、神主中神樂あり、祈念濟んて御鏡餅の大なるを持出て當屋の者翌年の當屋へ渡す時、傳兵衞を初て例年より御鏡餅惡敷とていきとほること艮二時計にして、漸佗ひ入て小餅とてちいさき餅二三十添るなり、夫より神酒を祝ふなり、是を鵜川の餅祭といへり、此謂は其むかし七海村の磯寄地といふへ御神體寄り給ふ、鵜川村傳兵衞は其頃代官職にて告ありて、櫻木の宮へ移し奉る。又翌年十月七日鵜川の孀婆々に告ありて今の社地へ移し奉る、其婆々居し處を今誤りて馬場といふ。又連光寺とて一向時宗の寺あり、蓮如上人の火難の名號とてあり、同

（祭餅）

宗寶藏寺は大寺なり、昔は教院にて此谷内に有しとて什寶あり。又淨光寺とて法華宗あり、此寺の後に城跡あり、藤岡平左衞門尉といひし人住るよし。此高に丸山とて風景の山あり、此鵜川を登れば中川の郷とて廿五ヶ村あり此川にかぎり鰡(ボラ)を釣なり、外になき事なり、名所なり、又古歌に。

能く登る國の鵜川に鮎すめは、高野に雉子は住ぬものかは

又山田の郷は昔長家の類葉秀次といひし人住て、城跡は印内村にあり、位牌は西安寺村の西安寺といふ禪寺にあり、寺中に泰山府君の大木の櫻あり、花の頃見物なり、神道村に繫戒山とてあり松柏茂りたる高嶺なり、諸天明王の大石數多あり、皆建石になりてあり、是より内は女人入事ならず、女鹿さへいらす、此前の田を舞臺といふ、昔下の毘沙門とて大社の時歌舞伎ありしといへり、俗に石佛といへり。又田村に日出森とて田中に小山の宮森あり。日の出に地より浮み出し宮森といへり、則氏宮なり、又印内村大村にて公領なり。町といふに大社あり、今藏權現とて毎年七月廿三日より廿五日迄祭禮あり、是を山田御採とて諸商人集り、群集の參詣あり、神主中川氏なり、境内に大木の杉あり、元は八田村に大藏權現とて一

鄕の惣社なりしを、其頃城下なるゆゑに御神體を今の社へ移し奉りて今藏と申なり、大藏は昔に違ひ百姓の持となり小社なり。又不動山靈山寺とてあり、眞言宗にて本尊藥師正觀音は春日の作なり、大嶺とて後の山八町登れば石動山五社權現の社あり、高山權現と云、毎年三月廿四日は高山祭とて一鄕祭なり、毎年十月朔日より十日迄八講會とて近在十ヶ村に三十名の百姓ありて、祭の番屋を勤むるなり、昔は七堂伽藍にて中頃迄六坊有し跡其儘にあり、二王門・堂ヶ谷とて地名あり、其時領地ゆゑ院内村の名あり、【和漢三才圖會】に高山權現は高山にあり、祭神は猿田彦命、元正天皇の時始て建つとあり、此所をも石動山ともいへり、何れにも御神體猿田彦にてなし、三田村八幡宮の地主多門天は昔しは大社にて上の毘沙門とて、奥院三町計山の絶頂に多門天の像石あり、大石の立石なり、神主堀内氏なり、同村に妙龜山大盛院とて禪宗あり、昔龜山院御宇官女此所に流浪ありしを葬しとて、其塚龜山といふにあり、龜形の山なり、いろ〳〵物語あり略す。又瀧村は鵜川の川上三里に有て、此奥山より流出て一の瀧二の瀧とて二つあり、昔此瀧に大蛇すんて人を取喰ふ、大穴持の命是を退治ありて其處を龍大明神と申して、此瀧の本に社あり、此所の氏神なり、毎年十二月廿八日は

祭禮にて此瀧坪に俎板石とて有、此石上に鮭尾魚(サケノヲ)二尾おのつから上りて死して浮み流るなり、是を取て喰へは癩病になるとて人恐て不喰、是昔の人御供の代りに生贄なりといへり。此村の内にくれの谷内とて此大蛇の尾に劍ありて、雨雲覆ひ重ていつも闇かりし故に名なり、是則村雲の劍といへり、其時の淵の跡とて今沼になりてあり、其蛇の骨とて今八田村禪宗龍河山洞雲寺にあり、此謂にては素盞の命の退治ありし山田の大蛇に似たり、いかにや。此國陰國にて此類ひの外魔の住みし所にてかゝる舊跡所々にあり、又木住村に八郎右衞門とて利家公御扶持頂戴の山廻り役あり、新田氏にて義貞の子孫なり、花炭を燒事家傳なり、御上へもあくるなり。

又鵜川村より中居田村抔へ行は磯傳ひ往來あり十町餘行は、小田川村とてあり、中居へ行本道武連越といふは、此村中より山手へ登るなり、鵜川より武連村迄一里三十三町、本馬九十三文、輕尻五十二文、人足廿六文、武連より川尻村へ一里廿町、本馬七十四文、輕尻四十四文、人足二十二文なり、道難處なり、是より甲村へ出、中居なり、行道を茲に記す。尤武連村は山田鄕の内なり、往來より北の方吉ヶ池とて昔蛇の住しとて恐敷池あり、又武連の二子山とてあり、名山にて昔蛇の住し絶頂とて二つにわかれ富士山の如くなり、高山にてもなくといへとも、國中より見ゆるなり。此南の麓に永願寺とて古寺ありしなり今は地名のみあり、昔甲村に堀川の何某とて、京都公卿の兵亂をのかれて來り給へるか、其兄弟の骸を此山に葬りしといへり。又此散村一ッ家といふ處あり、昔一つ家にて有しを、甲の城主平右衞門督といひし人軍に打負かされ、一人此一ッ家に來りて身忍はんとたのみしに、主情なきものにて右衞門督をいひ甲斐なくも生害す、其跡として今四五間四方に草生せす、今十軒計り家數あり、殺害ありし處を氏神として小社あり、太刀よろひ等近頃迄ありしといへり。

又小田川より三四町浦傳ひ行は古君村とてあり、助右衞門とて能き百姓なり、蝶の鏡とて不思議ある鏡あり持傳へり。又此村の磯に姫崎とて妙泉寺地主權現の御旅所あり、風景の地にて謂ある神地なり、此磯に井筒波とて名所あり、相逢ふ波とも云、井桁ともいへり。

我戀は名にのみたてて諸橋の、わたし相合波の間はなき

つゝ井筒いへの名にのみふる君の、行にけらしな波のかすゝ

又古君より五六町浦傳ひに宇賀川村とてあり、此山手の

岡十町に明泉寺の白雉山明泉寺とて眞言宗あり、勅定山ともいふ孝徳天皇勅願所にして、白雉年中開基の寺にて本尊千手觀音春日の作とあり、靈驗あらたなり、其外行基弘法の作多し、昔は諸橋鄉寺領なり、中頃賴朝公三ヶ村を寄附ありしと、此寺觀音堂幷再興狀にあり、其頃は大伽藍にて今に十町の間に礎其儘殘りあり、今も畠山重忠の寄進の石燈籠梶原景時の寄附の大石の手水鉢あり、賴朝公其外將軍家廟所あり、境内廣し、大石塔多くあり、寺中に明星の池明星の石とてありと謂あり、【東鑑】に建久三年五月若宮誕生祈の賞に、若宮別當隆辨に工藤三郎右衞門光泰を以能登の國諸橋の鄉を下さるゝとあり、いかにや誠に一千年餘の古跡なれども、數度の兵亂に緣起綸旨院宣も不殘燒失せり。又いひ傳へるは善無畏三藏天竺傳來の本尊千手觀音にて、末法結緣のため此處に建おかれしに、其後天子の姫宮に痘有しを獨りの乳母一集に窄船に乘まいらせすてられ給ふに、此磯に寄給ふに白き雉子一羽來りて導まいらせ、此岡にいたり給ふにより、天子聞し召勅定を以て一宇御建立あり、勅定山明泉寺と號。姫君も乳母も尼君となりあたり近き住給ひし處を姫崎といふ、又古君の名あり、靈鳥出し所を鳥の濱といふ。又此頃明星天より降り石となる。夫より靈水出しより明泉寺と號すといへり、其舊跡殘り有といへとも。いつの時にや。緣起もなくなりいひ傳へのみ幽なることゝなりはつる事かなしく、かゝる靈場のあさましになり【元亨釋書】の頃洩しも遺恨の事なり、當國順禮第一番の札處にして、今も觀音は靈驗あらたにて、諸人歩みを運ふなり。又上田寺とて近し、今は禪宗なり、是も其頃尼姫千手觀音御影を刻み給ふ、本尊といへり。是は當國順禮第二番札處なり。

○前波　鵜川より一里五町、本馬五十四文、輕尻三十二文、人足十六文、家數五十軒計、

此村に治郎兵衞とて利家公より御扶持戴し、山廻り役あり、洞光寺とて禪宗あり、氏神稻荷宮此邊の大社にて神目伊豆彦神社、六鄉神社稻荷明神とあり、此社は其昔毎年祭禮に猿樂あり、則金澤能大夫諸橋權進は先祖此村にありて類家等今にあり、その頃舞臺の有し所を道化山といふ。又權進屋敷とてあり、其猿樂の時諸入用等留帳今に此社にあり、其外寶物あり、天の平賀蛸瓶とて神代の器物なり、春日の實瓶（ビラヘ）といふものあり、同作翁の面靜の面朝比奈の面とてあり、其外略す。又近年堀川三位康實卿奉納ありし色紙一枚あり。其歌に、

年毎に生添ふ竹の世々を經て、かはらぬ色をたれとかは見ん

山の端に匂ひし花の雲きえて、のこる日數の有明の月

是當社の神主も堀川氏なり、先祖は隣村甲村に昔堀川家の公卿流浪ありし其筋目にて奉納ありしとなり。又諸橋權進寶曆六年奉納せし守刀一振、舞扇子一本あり

樂人此堀川氏は神主にて、何も明泉寺領の内扶持有しものなり。又向の崎に諸橋の一本木とて不思議の大木あり、若狹の白比丘尼の植しとて視木なれとも、核實出來しなり、說にいふゑのみ千俵なりても木は槻といふは此木の事なり、權進先祖此木の下にて翁の靈面を得たり、是權進家の什寶なりといへり、誠に一本木にて外に草も生せぬ、眞砂の濱邊にある大木なり、其上一ッの奇得有、近年此木枯たり、其根株に屋根して鳥居抔立たり此木枯しより此所へ大石數多打上て今は數千に及て山となれり、是を小玉石といへり、越後國諏訪の海にもあり。古歌に、

諏訪の海水底てらす小玉石、手にもとられす袖はぬれまし

此海も諏訪の海といへり、則諏訪大明神か、此處に產給ふなり、此諸橋の鄉に御舊鄉あり、往古鵜茅葺不合の命は諏訪大明神なり、御母豐玉姫なり、隣村沖波村は濱續きなり、是に產屋の宮とて所の氏宮にて神主四柳氏なり、御神體豐玉姫なり、此所御產有しとて御產所跡を小屋の間とてあり、產家の水とて靈水往來中にあり。圓（ワラ）の宮とて不思議なる小山に社あり、御神體鵜茅葺不合の命なり、山手に諏訪大明神の神社あり、宮森不殘椎木原なり、是も白比丘尼植しとて皆枯木なり、是にも神目伊豆彦の社と額あり。前波稻荷神社と神號の綸旨あり、往來に開石とてあり又產屋を鵜の羽にて葺き鵜をとりたるゆゑ鵜出・鵜ヶ川・鵜川抔とて地名あり、惣して此諸橋ヶ鄉は神地なるゆゑ何に不寄植るもの一年に三度實のる靈地なり、今に小玉石とて此磯に寄る事末世の奇特といひつへし、かかる舊跡有に筑紫の鵜殿抔とて、諸書にもあり、神代のことなれはいかにや。

神もこの產屋の水を汲はやし、清き心も猶そゝくらん

又此村に官女の流浪ありて宿かり給ふが、其家若き男有りて亭の口より覗きしに、官女見て、

沖波の立とはすれと寄もせす

と有けれは若き男かくなん

東といふ風いまた吹かねは

といひけれは、彼男宮女と契り淺からすなりしを云ひ傳へり、又此諸橋に七不思議とてあり、土を穿ては神代の器物牟賀といふもの出るなり、槻木に核の實生するなり、諸橋菊とて水仙原あり、石上に毎夜火燃るとなり、天狗爪研石あり、金聲石あり、打は鐘の音するなり、甲村近きに二ツ家あり、其磯にある動着石は其邊なり、大石なれとも指にてさはれは動くなり、又九月頃より一偏に野山に水仙花咲くなり、少し常の水仙とはしべに變りあり、諸橋菊といふ。

○甲村　前波より一里十町、本馬六十二文、輕尻三十三文、人足十九文、黒崎・宮古・阿曾良・大甲・小甲、五ヶ所にて家數百七十軒計。

此村は王餘魚の名物なり、「昔堀川大納言弟左兵衛とて京都兵亂の頃此處へ兄弟の公卿來住給ふ、其頃まて此村を阿曾良といひしにより、「阿曾良大納言といひしよし。住み給へる處を宮古といへり、其兄弟の塚は武連の二子山にありといへり。此頃よりの者とて今石馬藏人刀禰公文抔とて百姓にあり、此卿の植給ひしとて阿曾良の笠松とて風景の地に名木あり。又此村は入海にして奥深き事廻れは阿曾良まて廿町もあり船にて渡せは四五十間計なり。大蓮寺とて禪宗あり、此寺の隱居惠寛和尚といへるか、安永年中に發願にて左右より石垣を積出し、長十五間の橋出來せり、名を鹿橋と號し、此風景類なけれは、俗の詩歌連誹あるを集めて【鹿橋記】とて一册あり。中にも惠寛和尚歌に、

入海や舟路にかはる長橋も、心かくれはなりし時かな

又東武の人の方へ、此橋成就せしとしらせの文有し、かへしに

身をつくしかけし鹿橋今そ來て、文見るすへのたのもしきかな

此外詩歌連誹多し略す。海に渡せる橋、此國は松百村の外稀なりしに、又爰に出來たりと奇特なる事なり。また甲山とて一國の名山なり、海の尾崎に誠に兜の鉢の如く丸き事諸方より見ゆるにあける事なし、諸木生茂りて見事なる事類ひなき名山なり、昔しは阿曾良村といひしに此山により今甲村といふ、絶頂に社あり、則甲比古の神社と申奉る。本地藥師如來なり、大橋氏の神主なり、此上腰奇石多く風景言葉にのべかたし中にも夜毎火とほれる石あり。又天狗爪研石とて面平なるに毎朝物を研し跡あり、此山の腰少しはなれて海中に錢塚とて小島あり、誠に錢

（淺）（塵）

積たるよふ杉の形の小島なり、いろ〳〵物語あり略す。

又大甲といふ高に城の嵩といふあり、是は牟の右衞門督といへる人の城跡なり、天正中落城のよし。

又宇出津抔より御渡りとて所口への往來あり、此甲村より向の島の路へ姥ヶ浦といふへ渡る、是を大口とて海上一里あり、舟賃一人は五分宛なり。夫より島の路艱目村・長崎村・野崎村を經て日出ヶ島村へ出てゝ向の陸なる三室村へ渡るなり。是を小口とて二十間あり、船ちん一人三分つゝなり、三室村より太田村抔經て所口へ出るなり。甲村より所口へ六里半あり。又此甲村を廻れは曾良・鹿波・岩車とて磯傳ひ三ヶ村あり。皆公領なり。曾良村近し。坂東とて古き百姓あり、利家公より械役二枚御免許の御墨付戴たり、此者先祖は下野國高木の城主細木家直といひし人甲村の阿曾良といふ處に來りしに、又此處へ移りて曾良と付子孫榮えて今一村となれり。又石動山には坂東は石動山權現の由緣あり、ころき村の番頭の子孫といへり、いかにや。委敷は石動山權現の所に記す。又千壽院とて眞言宗あり、船の間あり小船不絕、出崎に不動崎とて古跡あり。又鹿波村へ磯傳ひ一里あり能き村なり、一向宗二ヶ寺あり。此氏神八幡宮・白山宮。兩社祭禮は八月十五日なり、角力祭とて土俵の外に神輿を居奉り三十三番子供角力あり、肝煎行司とて正敷事なり、角力終りて神主森川氏鹽鯖一尾宛配るなり、是は發料とて田三百畝、畑千歩寄附あり、能き祭禮なり、此散村に内波とて山手にあり、惣して此諸橋の郷・藤波・波並・矢波・知波・沖波・鹿波・内波とてあり、能登七波は是をいふ。又岩車村一里あり、昔安養寺とて天台宗の大寺ありし今寺號一向宗になりてあり、今も寺の垣内・堂の上抔とて地名あり、五輪・石塔等其儘なり、氏神山王權現は美麻那彦の神社なり、今も美麻那の宮といふ此御神號は今穴水にあり、又出島に最勝の森とて面白き出崎あり、住吉明神の社あり、風景地形不思議なる處なり、毎年大晦日には此社へ龍灯あり、此所入海にして中居へは聲届きなり、渡しあり四町あり。

○山中　甲村より一里四町、本馬五十三文、輕尻三十一文、人足十五文、此村は誠に山中にて四ヶ所に別れ、家數六十軒計なり。

甲村の宮古といふところより山手へのほるなり、武連村へ近し、此道すから中居廻りの入口を見おろし、風景山水の有さま筆にも盡しかたし。

○川尻　山中より一里一町、本馬五十文、輕尻三十文、人足十五文、中居尻といふ、家數三十計あさま成村なり。

川尻川あり、長八間半のはね橋あり、源は中谷村山より流て川尻川へ出るなり、入海の東にあたりて舟にて十八町あり、大かたは舟にて越なり、本道は比良へ廻り、波志借村を經て中居へ出る、道程一里九町あり、此川尻村はあさまなりといへとも磯邊に有て、入江々々を見わたし鹽濱かせくあまの仕業、鹽竈の體は、詠に盡ぬ秀景なり。また此磯傳ひ岩車村近し。又比良村川尻より廿町あり、寶延寺といふ、西方一向宗の寺に不思議なる靈石あり、此方東方一向宗二ヶ寺あり、長八間半のはね橋此邊風景なり、川上は汁谷村・曾山村より流るゝなり。又波志借村は私領公領入交りなり、金翁寺とて禪宗あり、一向宗一ヶ寺あり、是又長七間のはね橋あり、川上は藤巻村より流て此橋あり、故元は橋梶村なり、梶村も續きなり。又此橋爪に開出しの地藏とて異像の尊體あり、行基作にて靈驗あらたなり、此村より中居へ十四町なり風景なり。

○中居　川尻より一里九町餘、本馬六十文、輕尻三十六文人足十八文、是は比良へ廻る駄ちんなり。大形は舟にて渡るなり。

此中居は南村・北村と別れて家數四百軒計なり、禁裏御用勤て諸役御免の御中居領なりしゆゑ名とす。此邊を南北の鄕といふ、往古此處に日吉山安養寺とて天台宗の大寺ありしなり、近き頃まで境内に舊跡あり、本坊は岩車村邊に有しと見えたり、七堂伽藍地にて不動崎に不動堂あり、神明ヶ端は鎭守神明宮あり、藥師堂・大師塚・坊の端・千部などとてあり、廿一社の山王宮ありしなり、今の六所權現の地に、七社、山王社に七社、岩車村に七社あり、日吉廿一社の三ヶ所とも、大社にて崇德院の勅願所ありて度々勅使綸旨ありて、美戸那彦・美戸那比咩の神社兩部習合の總社なりしに依て、日吉山安養寺とて別當なりといへり。今此御神號は穴水にあり、いかにや、兵亂に安養寺も廿一社も多の衆徒神主も退轉して三四里に末院有しも改宗せり。安養寺の寺號も一向宗穴水法性寺の懸所となり岩車にあり、其後今の中居の地は久敷あれ地になりて有しに、同郡櫛比の總持寺に東天和尙とて貴き禪師ましませしに、或夜禪師座禪の折柄いつくとなく女性一人來りて授戒を願ふ、禪師問ふは汝か正體をあらはさはさづけんと有ける時に、我は此山一つあなたなる入江に住ものにして千尋の大蛇なりと失にけり。禪師跡を尋て此所に來り給ひて一宇建立あり、臥雲山大龍寺と號して住給ふ、此禪師は生所しれず、羅漢の化身と云、則爰にて遷化あり、塚は寺にあり、今も此塚喰箸を備へ、祈願すれは蟲喰齒の痛むもの忽ち治るなり、昔し忌日龍灯有しに、次第に滅濟の穢れるや龍灯は向の最上の森の崎へあかる、龍神布施にまいらせし寺とて、塔司仙慶庵に有て、諸病火災を遁れて奇瑞有しに、其後封を破りてより、奇特うすし、今什寶になりて有、其時の大蛇は則奥津姫の御神體なりしとなり、今も毎年祭禮に此寺住主參詣ありて法施あり、元此寺の門前に五六軒、民家出來しより南村の始なり。又北村は昔より鑄物師にて初は内浦村沖の崎といふ處にありて、今も鍛冶屋の跡あり、其昔河内國丹南郡より鑄物師來りて此所に有しに其頃禁裏に夜な〳〵御殿の上に黒雲一叢降て帝御惱安からす、博士奏して曰、是は鵺といふ鳥にて至つて怪鳥なれは、陰國の水にて捺たる灯籠見給ふへしと有けれは、公卿詮議有りて此處へ宣旨あり、百の灯籠を鑄て捧しより、世々禁裏御用勤て能登釜の名物の始となれり、後鳥羽院の御宇に初て綸旨下りし時頂戴せし地を瑞鳳山とて、後鳥羽院の御像あり祭る、綸旨下りし日三月廿一日毎歳祭禮とするなり。

此瑞鳳山風景の名山なり、其後沖崎より此處へ來りて鑄物師今にありて、北村・南村と別れ榮えて鑄物師受領の者百五十餘人に及へり、今も口宣の書物五十餘通傳へり、眞田氏を改所となし、神崎・國田・島田・島竹・福光・米田・中瀨・森川・中山・宮崎・小泉・小林・吉岡・四柳などとて今もあり。御卽位毎に改所名代として此者より祭るなり、中頃眞田三右衞門・神崎金右衞門・橋梶の大津坊とて能登利家公御發向の時御手傳せしものにて、御墨付戴きあり。中にも三右衞門は大力の剛の者にてありし由、今も御扶持頂戴して十村役なり、又利家公の時鑄物師名人宮崎彦九郎といひしもの、金澤へ召され寒知とて今子孫あり。又此處にて出來の鐵炮の大筒とて目形七十貫計あり、異筒七挺御收納藏の内にあり、御鹽代官一人在住、兩町に肝煎二人、眞言宗八ヶ寺、一向宗二ヶ寺、禪寺二ヶ寺。北村氏神は六所大明神とて神主神杉氏、別當地福院なり。南村氏神は山王權現なり、神主四柳氏、別當醫王院・觀音院・蓮臺院・月光院、四ヶ寺年替りなり、祭禮は毎年三月中の申の日にて神輿兩社とも町中御幸あり、別當には昔の安養寺什寶古佛等社中において開帳あり、町中に若宮とて小社あり、是は日吉山王の時京都より齋直下り有しを、其靈を祭りし宮なり。其筋目今にあり、宗之市といふ家の前に湯の池とて神水あり、其頃の衆徒の筋目とて藤の坊・金剛坊・印輪坊・大宮坊などとてあり、今八ヶ寺の眞言も皆末院の改宗なり、又穴水法性寺も末院の筋目なりと有、また偏照院といふに不思議の觀音の靈像あり、是は宇出津海鹿の觀音なりといへり、御手片手なか

りしに獵師の網にあからせ給ふを付見れば、ふたゝひはなれす、其時周章付しとて、裏表になりてあり金像なり。又神明ヶ端とて社あり、その脇に藥師堂あり本尊海中より、上り給ふ石體の大佛なりといへり。又南の出崎風景の地に奥津姫大明神の大社あり、祭禮毎年三月十五日十六日なり、此社は元は隣村麥の浦境に宮の入とて深き入江あり、此所に有しを移し奉る也。又町家後に入江に洞あり兵亂の時の器財を隱したる所といへり。

○七海　中居より一里一町、本馬四十九文、輕尻廿九文、人足十九文、上七海・下七海と別れ、家數六十軒計なり。

上七海は私領なり、下七海は公領にて入海の奥にあり、其入口々々の有さま谷川の流れ磯邊の風景言語に絶したる眺なり。又往來に城ヶ端とて郭跡あり、芝ヶ峠とて古戰場あり、又穴水は七海より十九町あり、入海の奥にありて此穴水公領にて大町村・川島村といふ家數三百軒あり、中に長拾間餘の橋あり、川の南を大町といひ、北を島町といふ、此川の源は荒屋村奥山より流るゝなり。商家多く繁昌なり。毎月二日に三才の市あり、湊は餘程の船着にて賣買の便り有て、公領一の廣き處なり、大町庄屋は宮の森といへり、川島の庄屋は池田永齋とて長家へ忠勤の者の筋目なり。橋爪關寺といふ者方に弘法より傳

（穴水）

へし五香湯あり、産後によし、一帖何にても升物一升に代るなり、昔は此穴水は長家の城下にて數千軒有しに、兵亂に退轉せしなり、今の家居有は出村といふ處なり、其頃は寺庵も多くあり、兵亂に散亂ありて、今も兩町に藥師堂とて、二ヶ所作佛安置あり、瑞源寺とて禪宗あり、寺領五十石、長家代々菩提所にして大寺なり。又十町山手に來迎寺とて眞言宗あり、長家代々祈願處、寺領十石寄附有、此寺に長谷部信連の靈像あり、今武賢の靈社と額あり、誠に自作の靈像にして奇瑞あり、七月十六日、正月十六日開帳あり、寺内に信連が守護神の稻荷宮あり。又北の山手に白山宮あり、川嶋町の氏神なり、美麻那彦・美麻那姫の神社と額あり、境内に崇德梅とて枯木あり。勅使梅ともいふよし、又社近きに穴水の井としてあり、神水にて此水あるゆゑ穴水の名あり。祭禮三月十八日、毎年町中御幸有、神主四柳氏なり、又南の磯邊に奥津姫の神社とて大社あり、大町の氏神なり、社内に古塚あり、名を十種塚といふ、十の神寶を納し塚とはいへり、塚の上に古木の櫻あり、家傳櫻といふ、後の山を舟津山と云。神主關野氏なり、祭禮は白山宮と同日にて御幸あり。長家累代居城有し城跡は町の東の海へ出る山の尾に有、蛇の端とて溺手の海の手にあり、長家此城退散の時蛇出て名

残を惜しみし處といへり、今長家の玄關に龍彫て在は此謂れといへり、此磯に信連貝とて、鎌倉より觀に入て來りし、我子孫榮るならは生せよとて磯に捨てられしに今多く此磯にあり、貝に觀にすれし跡とてあるなり。此穴水は輪島よりも、寺口よりも五里あり、道は輪島へは一坂にて馬次なり、寺口は地藏坊村とて馬次なり、又穴水谷内村々多し、宇留地村とてあり、鳴瀧とて有、鳴橋とてあり、名所なり。上唐川村・下唐川村とを經て留木所口へ行往來なり、乙ヶ崎村へ行は磯傳ひなり、十町あり、間に鵜嶋村とて公領なり。

○乙ヶ崎　七海より三十三町、本馬四十三文、輕尻廿六文、人足十三文、家數四十軒計、あさまなる村なり、

此村磯邊と入江あり船を圍に手寄よく、穴水へ近く物毎に勝手能きゆゑ秋するゑは磯邊に大船不絶あり、普請なとするなり、御收納藏あり、其上あさまなる村といへとも源内といふ家居能百姓なり。又妙樂寺とて一向宗あり。又新崎村は乙ヶ崎より南へ一里海に指出す崎にある村なり、誠に閑靜なる村なり、鹽師とて御鹽藏あり、一向宗一ヶ寺あり。此村に謙信塚とて一里塚の如き塚あり古木の榎木一本あり。折々此塚の内震動する事あり、是謙信家臣有坂備中といふもの三崎へ船にて渡り、七尾城の搦手へ向ふへき手分なりしに、追手の勢と手配りより、はやく着船して道々亂逆して打取所の首塚なり、總して此ものゝ爲に多くの神社、佛閣失ふ事。此國に數知らす。かゝる惡逆無道なる家來をもち謙信の惡名殘れる事あさましき事なり、此國へ謙信發向なし、然れは有坂塚ともいはす、謙信塚といふ事不思議の有坂なり。總して此磯傳ひ志賀の浦根木香嶋とて浦半の詠め言語にも絶したる風景なり。又鹿島村は乙ヶ崎より一里半あり、磯山に鹿島大明神の社あり、此の谷内に要石とて異なる大石あり、此村は元鳳至郡と鹿島郡の境にて則鹿島郡の内なりしか、いつの頃より奥郡となり、要石は往古郡境の由、此浦は鹿島の浦とて名所にて【萬葉】の歌に、

鹿島より熊木をさして漕舟の、かちとる間なく都路おもほゆ、

○曾福　乙崎より二里廿四町、本馬七十七文、輕尻四十七文、人足廿三文、家數六十軒計

此村の後に當りて高山見ゆるは富木の鉾打山なり、此處よりは近し、東平此村の領なり、鳳至・鹿島・羽咋の三郡の境山にて頂に大石ありて境となす。當國三十三所觀音廿四番札所にて、順禮の者は此村より登るなり、委敷事は富木院内の所に記せり。外に高山見ゆる是は本郷の領瓶割

山といふなり、いづれも船の見當にして、所々獵師のたすけになる山なり。

○小牧　曾福より一里六町、本馬四十九文、輕尻三十一文、人足十五文、家數百軒計、入江の緣に在、此村鹿島郡にて駄ちん錢割合違ひあり。

此村より中島へ越ゆる一里の峠あり、高茂山といふて奥深く富木の鄕へ續て、昔しは駒の牧ありしゆゑ小牧とはいへり、今御藪あり、杉の御林あり。又道より南は中島の常林寺抔とて是も大なる杉林なり、此山の麓に瀨嵐村とて公領あり、嶋二つあり、一つは猿嶋とて今畑になりてあり、一つはたねか嶋とて宮森なり、此處嶋の路より四五町あり、嶋の路通り村より小牧・瀨嵐への渡あり、高茂の渡しといふ、中にも陸へ近き所なり。秀景類ひなき地なり。昔七尾の城主畠山義則と申人は風流の人にて此の灘瀨嵐の二島を須磨明石の浦に擬して人丸の廟宇を建、たねか嶋の尾崎を机嶋と名付、硯石なとゝ呼ひ、其頃歌道の秀才月村齋宗碩等を招き、時々の風詠ありし處なり。【萬水一露源抄】抔の家書も此家より出たり、かかる亭莊廟宇も無程兵火に灰塵となり、礎のみ殘れり。其後數十年過き、金城淺井政忠といへるか涌浦入湯の折柄此處へ風來して、此廟宇の跡にて一ッの片石を得て家に歸りて、月村石と號し、盆盞におきしを加州大乘寺の卍山和尚に此石語を乞ふて、

石語曰

子雖未見其石、一覩其所記、則思人丸於明石浦、思畠山於七尾城、思月村於瀨嵐里、如聞其水之瀨聲、目如見其山之嵐翠、彼石不來我心中、我心不往石邊、而文字輪文能轉人思念、實不可思議也、

詩曰

混成靈地物、存古蘚痕斑、彷彿人丸影、依稀月老顏、瀨聲通几上、嵐翠映窓門、不待點頭目、我愛似我顏、

則【鷹峯卍山和尚廣錄】に見えたり、誠に向の嶋の路を淡路嶋とおもひ、後の高茂山の嶺を鵯越とも准へ、左右の浦半の詠いかにも須磨明石にも擬すへき處也。

○中島　小牧より一里、本馬三十八文、輕尻廿五文、人足十九文、家數二百軒計町作りたる處なり。

此邊を熊木の鄕といふて、昔は入江にて數千艘の船著て繁昌なる所にて、【萬葉】の歌に、

堦楯(ハシダテノクマキ)、熊來酒屋爾(サカヤニ)、眞奴良留奴和之(マスラルスワシ)、佐須比立率(サスヒタテヤ)

而來余麻之乎(ヲキナマシヲ)、眞奴良留奴和之(マスラルスワシ)、

此外にも長歌あり略す。今に熊木酒屋といふもの子孫あり、禪宗定林寺とてあり、嘉曆元年京都東寺和尚建立、

（宮前）

其の頃は七堂伽藍にて大寺なりしに、兵亂に燒失して、今境内に礎のみ殘れり。本尊釋迦如來靈像なり、中古金澤天德院に移し奉らんとて舁登しか、津幡の驛にて重くなり、人力におよひかたくむなしく返し奉り安置あるなり。又熊木川とて大川あり。長八間半の橋あり、灘廻りの商船不絕賑敷なり。此橋の邊りに天滿宮の社あり。又上町村近し、廓跡升形などゝてあり、城主しれす。又熊木御收納藏は中嶋村にあり、其外金澤家中侍中米預り藏宿あり。此熊木川上十町餘登れは、宮前村といふに熊甲阿良加志比古神社立給ふ。大社にて一鄕の總社なり、崇神天皇御勅願所にして社頭等御造營あり、其頃は三千石社領あり、兩部習合たり、寶物品々あり、中にも弘法眞筆の【法華經】九卷あり、依て熊木の名あるよし八卷あるへきに九卷有ゆゑなり、同作の藥師如來、春日の作の翁の面、其外品々あり略す。神主四柳氏退轉して今能登部淸水氏預りなり、祭禮は每歲八月廿日にて、近鄕十六ヶ村の祭禮なり、群集して角力抔ありて賑敷事なり、此熊木名物九萬疋(クマヒキ)とて鰭の腸漬なり、昔し禁裏へ捧しなり。

又宮前より谷續き村々多し、西谷村に廓跡あり、德山五兵衞暫住しといへり。又町屋村國分左兵衞といひし人の城跡あり、此村續き山越富木抔より出る道あり。

○河崎　中島より廿六町、本馬廿六文、輕尻十七文、人足十三文、家數七十軒計。

此村は豊田川の流末ゆゑ川崎の名あり、田畑刑部抔とて古き百姓あり。豊田川村中に長十二間の橋あり、川の源は羽咋郡日用村山より流るゝなり。又豊田村近し、藤原彥の神社立給ふ。大社なり、每年八月十六日六方祭とて豊田の保六ヶ村の氏神にて、賑敷なり、社内に八重一重櫻とて名木あり。左近とてふるき百姓あり。畠山式部太夫義春の母は此左近の娘といへり。又笠師村半道あり往來なり、山手より海際迄廿町ある村なり。三輪氏の十村役あり、櫻町藏見抔とて古き百姓あり、大覺寺といふ禪宗あり。御收納藏あり、菅忍比古の神社立給ふ。笠師の保四ヶ村の氏神にて、祭禮每年八月十三日なり、神主井田氏なり。

又鹽津村は十町餘あり、笠師より海邊にある能き村なり、沖に辛嶋とて神森あり、地藏の石佛立給ふ。此邊風景なり。

○大津　川崎より一里十六町、本馬五十八文、輕尻三十八文、人足廿九文、家數百軒計あり。

此村は昔德田村に德田佐渡守といひし領主在住の頃は、諸事運送所にて、船數艘不絕繁昌なる津ゆゑ大津の名あ

りと云へり。今も薪積船等不絶。此村の百姓のもとに昔より何佛といふ事しれぬ木像安置せり。他所の者其家に宿すといろ〳〵怪異あり外へ移せは家に故障ありて是非なく安置すといへり。又田の中に手向の櫻とてあり。弘法大師通り給ふ時に石動山より飛し櫻といへり。又武左衛門とて大野氏の山廻り役あり。又往來の崎に金ヶ崎といふ處に冷水あり。此所風景なり。此所を金ヶ崎といふは、水中に手にとられぬ金見ゆる事ありしといへり。此大津より菖蒲ヶ谷といふを越へ、德田村・矢藏谷村・梨谷小村抔を經て、堀松迄二里あり。本馬八十文なり、此往來より西の方印内村・矢田村・栗山村とて三ヶ村紙漉處あり。大津より二十二町、往來に白濱村あり。能き村なり。此村洲崎宮森あり、風景なり。此近邊より能登密柑の名物出るなり。

又三引村近し。田鶴濱村續きなり。是に赤龍山とて大寺あり、本坊赤龍山本宮寺と號す。推古天皇御祈願所にて、七堂伽藍御建立其頃は六十坊ありしか、兵亂に燒失して今僅榮春院・怡岩院の二坊あり、赤龍山權現は本地千手觀音にて、麓より廿町登るなり、本社二町にして閼伽水とて冷水あり、試に權現御手洗にて淸き事限りなき神水なり、今も諸堂建並て大伽藍なり。講堂に弘法大師の作の

五智如來の金像の丈六の大佛五體安置あり、靈場にして長家より修覆あり。同寺領七石山方一里寄附あり、元は衆徒多く石動山に准しける山なりしなり。又末社に龜山天神とて奇瑞多き御神なり、赤龍山權現は近き迄兩部習合にて、神主長尾土佐守とて有しに、社僧と論ありて斷絶あり。

又田鶴濱西の入口に丑ヶ端とて觀音堂あり、當國廿二番の順禮札所。浦ヶ嶺とは是は此觀音昔は山の上に居給ひしを、長家田鶴濱居住の頃牛ヶ端とて今の所に堂をきつき移し奉るといふ。

○田鶴濱　大津より一里八町、本馬四十文、輕尻廿六文、人足廿文、家數二百軒餘、商家多くよき村なり。

此村は長家の城下にて昔は家數も有しと云へり、惣して此邊を新郡といへり、中頃長家の領分なりしなり。則館跡あり、今御收納藏屋敷となりてあり。馬場の跡なともあり。長家菩提所東嶺寺禪宗にて寺領三十石寄附の大寺なり。同宗悅叟寺とて同寺領十石なり、稱蓮寺とて一向宗の大寺あり、又中村屋六左衛門とて長家へ由緒の者其外類家に能き百姓あり、給人米預り藏宿あり、此村船着にて諸事運送自由なり。又永江屋とて藏宿吟味役あり、此先祖は永江善助とて長家領分の郡奉行勤しよし。又磯邊

（和倉）

傳ひ舟尾村・奥ヶ原村等經て涌浦村へ一里あり、今は和倉と書なり。日本一の熱湯の溫泉あり、湯島とて磯より一里餘に小嶋あり、潮滿る時は嶋を越すなり、潮干になれは湯坪へ熱くて寄ことならす、石傳ひ、そた抔敷て漸に湯汲大なる桶へ三つ一つ湯を入、三の二は潮を埋めて入る事なり、所口町にて取湯するに、海上二里といへともさめることなく、當分うめ水して用ゆるなり、湯本所口和倉屋といふもの御印物頂き、一週り一人に湯賃四十文宛取に廻るなり。湯の嶋の脇に小嶋あり、辨財天の社あり、風景類ひなし、爰に一つの奇特あるは湯坪普請する事あり、熱湯にて邊りへも寄りかたきに、湯の藥師堂は村の後なる山にあり、此尊像を横になし奉れは忽ち潮となり、熱き事なし、普請仕且本尊を直し奉れは、又湯涌出てゝ常のことし、かゝる奇特ある事有がたき事なり、折傷の類ひ瘡毒なとは治せすといふことなし、靈湯なり、所口より和倉へは陸地も二里あり、間に祖濱・靈崎・松百・津向なと村々あり、石崎村は少し高みにて加能越の海を指釣網抔して海上を家にして拵なり、公領なり。祖濱村も公領なり、宝屋とて能き百姓あり、松百村は私領なり、蛇の鮓といふ名物あり。からなと云貝の鮓なり、蛇の子とて龍に似たる長さ一二寸計の物海中にあるを鮓の上へに置、

蛇のすしといふなり。是は海馬なり。入海に渡せる橋あり、此村氏神は海より上り給ふ大石なり。少名彦命の像といへり。此村より所口往還へ出るに近し、又所口へ松百より行は濱傳ひ津向を經出るなり。此松百村橋の邊風景なり。

誰をしも松百の里に千代かけて、海にわたせる橋

の通ひ路

又田鶴濱より金澤への往來を能登部海道といふ。又西海道ともいふて村々多し、是海道といふは往古此道筋入海なりしに依ていふなり。此邊入海にて嶋國なりとあり、高田村往來にあり、高橋氏十村役あり。此屋敷は長家の臣浦野孫右衛門屋敷とて門外に馬場抔あり。此村端に觀音堂あり。當國廿一番順禮所なり。出口に二宮川とて大川あり、長十一間の橋あり。又伊久留村近し。長家より伊勢内宮松田三郎四郎といふ御師持宮の神明あり、社領百廿石百姓八軒あり。又吉田村は伊久留村の西にあり、坪野右衛門とて古き百姓あり、田鶴濱より飯田へ五里餘あり、町屋村へ廿五町此村の助八といふ百姓の持宮に住吉宮あり、是に疣池（イボ）とて明神の誓ひにて此池水の石にて疣をすれは落るなり。三楷村は峠を一つ越ゆるなり、北村氏十村役あり。利常公より御知行頂戴の古き家なり。別

家に同姓山廻り役あり。又池崎村近し、此村に昔孝恩寺とて禪宗に長如庵殿十六才まで新發意にて有しか、改宗して今一向宗安淨寺塔司光雲寺とてあり。又春木村に春木齋藤といひし鄕士の館跡あり、今林照寺とて一向宗の寺屋敷なり、總構堀殘れり、前の田を殿の前などゝ呼なり。

（羽坂）

又羽坂村に鳥屋比古の神社立給ふ、御神體金雞なりと云り、神主高木氏なり、毎年八月十日は十ヶの祭禮とて十ヶ村御幸あり、賑敷なり、又市姫宮あり、此宮の向より所口抔への往還追分あり、一の宮御神輿所口より御歸りの時は、此道筋なり。此宮の前にて一の宮神主（カンヌシ）上指のかふら矢を一筋北の方へはなす。古例なり。惣して一の宮御神輿御往來、七日前より洗濯等より灰汁をつかはぬなり。是は昔氣多御神御通りの時水を乞給ひしを取ちかへ、灰汁を出して御とかめ有しゆゑ、七日の間は忌とて今に灰汁をせず。又西永寺とて一向宗あり。親鸞上人御自作御影木像安置あり。又一村は昔弘法大師水を乞給ふに情なくも水をすゝめさりしゆゑ水を封し給ふとて、一村井戸を堀てもかなけ出用立たず、喰物に川水を汲なり。此村孫十郎とて古き百姓あり、境内に蕚榮（ジュエイ）出來る池あり、泰雲院樣御時代暑中毎日獻上す、右褒美に山廻り役

（川良）

被仰付、于今相つとむ。黒氏村は村續きなり、法泉寺とて一向宗に御名號あり、いろ〳〵奇瑞おほし、毎年七月十四日より盆中弘めあり。

良川村は田鶴濱より二里廿七町あり、馬次にて本馬百十文、輕尻六十三文、人足五十三文なり。當國順禮所廿一番觀音あり、春日作。山田寺とて眞言宗別當あり、此觀音堂にて一の宮鵜祭鵜一宿するなり。又西馬場村の筒ヶ嶺といふに靈在山本道寺とて法華宗あり、日像上人開基の大寺なり、寺中に題目石とて石塔あり、則日像上人の筆にて此石塔の欠を水に入呑は、癩病其外諸病を信心の輩は治するとて、石牌の表過半かきてあり。しかりといへとも題目の文字石に入て失る事なし。奇特の事なり。此寺は二宮村に加賀右衞門・北左衞門とて兩人の開基旦那なり、上人石動山衆徒のいろ〳〵仇をなせしか、兩人懸命に働らき、此寺を建立して上人置まいらせたる寺なり。又東馬場村近し。長家の館跡あり、今は百姓屋敷に圍込てあり。

又德丸村は良川より廿町あり、是にも人足次なり、又能登部下村に能登比咩の神社立給ふ。祭禮毎年十月廿一日にて同所愛宕の社へ御幸あり、此村に一樂といふ百姓あり、此者廿日の夜丑の刻に本社をひらき御神體負奉り後

しさりに歩むことなり。今は暑して草鞋を逆樣にはきあゆむなり、翌日愛宕の社にて祭禮あり、神主清水氏なり、石動山兼帶して此村にあり、一國觸頭なり。又河合氏十村役あり、此村を能登部といふは往古此邊の入海なりし時、渡り口にて有し故いひ傳へり。

（丸金）

又良川村より金丸村へ直通り馬次もあり、一里廿五町あり。本馬五十六文、輕尻三十三文、人足廿六文、御收納藏、給人米藏宿あり。此村に鎌の宮とてあり、毎年祭禮に此宮の神木杉の木に新敷鎌を打込なり、此鎌次第に木中に入て筋となるなり。又此村に當國順禮十八番の札所、澤の觀音といふあり、谷内の人しれぬ處なり、昔兵亂の人かくれ住し處とて不思議なる處なり。又後の山を美女山とて千路の潟を見下し向の山々見渡し絶景至極なれは、美女山といふ。此峠を越上棚村へ出て所々へ行往來あり、是を中道とて三崎迄の往來なり。又鹿嶋路村近し、又松尾坂とてあり、是も同し絶景なり。中山村を經て瀧谷等へ往來。又千路村・柳田村も鹿嶋路の續きなり。此村〳〵は羽咋の潟緣にて一宮へ行に近し、御幸の道筋なり。此柳田村に光專山とて古寺の跡あり、觀音堂あり、本尊運慶の作。當國十七番札處なり。

又金丸村より金丸出村を經て、大町村へ半道あり、出村へ流るゝ川を長澤川とて、源は芹川村の山より流て潟へ落るなり。此出村邊は古戰場なり。大町村に御門主比古の神社立給ふ。御手洗池あり。又御收納藏數戸前あり、潟緣にて天正の頃長家と畠山の殘黨合戰ありし菱脇濱とは此處なり。又飯山へ金丸より一里十二町あり、本馬四十六文、輕尻廿六文、人足廿三文なり。

○所口　田鶴濱より二里二町。本馬八十三文、輕尻五十四文、人足四十二文、山道にて人家なし、併坂なく地は平なり。家數四千軒計あり。

このところは能登一國の府にして諸商賣問屋等あり、町奉行支配にて一方在住、御鹽奉行一方在住、是は口郡破船奉行兼帶なり、小代官六人、町附足輕十人、山廻り役足輕四人、是は宇出津山奉行の支配なり。町年寄六人、惣肝煎兩人、銀座一人、其外諸役人多し、古き町人あり。中に氷見屋何某の一子淨寂坊といふもの利家公石動山御責の時一命を捨しものにて御扶持頂戴罷在。其外酒見富田抔とて古き町人あり。又府中町は利政公の御城下にて是にも湊屋佐藤左衞門とて古きものあり、當處名物多し。中にも羽衣なとゝて酒の名物あり、清水米、豆、飴、その外魚鳥産物に便りよき國府なり、侍從卿御城跡は小丸山といふにあり、御收納藏奉行御貸屋等は大馬出しと

いふにあり。御預地陣屋は登落といふにあり。又寺庵おほし、禪宗九ヶ寺、眞言宗三ヶ寺、淨土宗四ヶ寺、法華宗十三ヶ寺、一向宗十五ヶ寺あり。いつれも畠山城下にありて由來寶物等あり。淨土宗寶幢寺といふに平重盛卿の守り佛同遺物あり、此寺は長如庵殿暫忍ひしなり。松尾山神宮寺あり、印鑰大明神とて御神體多門天なり、今別當最勝寺は眞言宗の妻帶なり、又長福寺は一向宗東方除間一郡の錄所なり、光德寺は一向宗西方院家一國の錄所なり、兩寺ともに町中にある大寺なり、光德寺は昔加州河北郡木越村に有しか、天正年中兵亂に鳳至郡黒嶋村へ來り、夫より畠山の城下に諸堂建立繁榮有しに落城故此處へ移りし寺なり。則今に木越村に光德寺屋敷とて鶯宿梅の大木なと殘りあり、寶物品々有、中にも木越居住の時蓮如上人の御自筆御制札あり。又禪宗龍門寺には龍神より梅山和尚へ捧し滿珠、乾珠、唐織の袈裟とてあり。又一向宗常福寺寺中に鞁とて長七尺計の石あり、耳あて手にて打は鞁の音ある石あり。又眞言宗妙觀院は小嶋といふにありて、磯山の境內秀景言語に絕したる處なり。一山菊名所なり。昔は嶋なりしゆえ小嶋の名あり、當國八番の順禮所觀音あり、海中嶋山などを見下し絕景至極なり。又向に同宗愛宕とて是又風景の地なり。又辛崎とて昔畠山の近江辛崎を移してあり。所口氏神氣多本宮所口村にあり、小名神明野といふに建給ふ、一國府の惣社にて能登生國玉比古の神社是なり、御社領十二石、神主舟木氏兩家あり、昔は社領千石兩部習合にて、社人神子社僧等多しとあり、別當所口寺とて國分寺にて有しなり、神代より鎭座にて昔の社地小丸山城跡の內にあり、此處へ移し奉しと、今も神主入口に一國一宮國分寺と札打あり。廻國納經は此所に納るなり、每年二月初午一の宮氣多大神宮御幸あり、いろ〳〵古式不思議の奇瑞等あり、また當社祭禮は每年三月十三日なり、氏子中歌舞伎などあり、其外年中神事多し、六月晦日御手洗川にて御祓の古祓あり。依て晦日川といふなり。東西へ流るゝゆゑ二俣川ともいふて、所口町中へ流れて所々橋あり。源は多根村山より流れて府中の濱へ出るなり、又府中村山王權現は神主大森氏なり、每年四月中の申の日祭禮なり、侍從卿よりの神事にて國府の大祭禮なり、本宮へ神輿御幸あり、所口町中御領分一の大き成立物山あり、夥敷賑敷なり。又岩屋の水とて冷水あり、洞の內に水坪有りて、所口數百軒の酒屋其外多くの民家汲といへどもわつかの水坪の水かはく事なし、不思議なる靈水なり。其洞の有樣松山の風情、下行く水の淸き事風景類ひなき處なり。一山

空にて洞の奥深きと見えて鰍（コチ）と云ふ魚ぬしとて多くあり。

幾千年汲とも盡しきよくすむ、岩屋の水のなかれ
久しき

此所口七尾といふて、城は松尾山古城の麓に有て、今も古城村・古屋敷村・竹町村・小池川原村抔を七尾とて少し山手にあり。又七尾といひし事は此城山に菊の尾・竹の尾・梅の尾・松の尾・龜の尾・虎の尾・龍の尾とて七尾あり、依て呼へり。惣名は松の尾山といへり、此浦邊を松の尾浦といへり、外に松の尾浦といふなし。定家卿の歌に「たゞ人をまつ尾」といひかけしとあり、若此浦の事にても、はぢぬ風景と、尤此所にてはなけれとも、

來ぬ人をまつをの浦の夕なきに、やくやもしほの
身もこかれつゝ

又往古より此松尾の城は國府にして代々の人居城したり、仁和寬平の頃源順といひし人代官として居城あり。夫より武部判官師澄目代として久安・仁平の頃住せり、其後建武・延元の頃中院少將定淸國司として居城あり、永享の頃より元龜・天正の頃まて畠山氏數代居城有しに、天正の末文祿の頃利家公能州一國御手に入り、此七尾の城下を今の地へ移し、其後所口と改名あり、彌商家等便りよく繁昌せり。

陰茂き松尾の山の松の葉の、かくともつきぬ君か
萬代　　勤文

此勤文といひしは誹人にて、【すゞの海】の作者なり。誠風雅の人なり、今に子孫蠟燭屋とて所口にあり。又城山に享保の頃不思議あり、府中村寶屋兵衞とて大百姓ありて、此城山を田畑にひらき度と願上、則願ひ叶ひて多くの夫の者を登せしに、此山に數千年經る槻木の大木あり、此木をきらんとせし其斧の切口より血流れ出たり、柚どもおそれて伐るあたはす、兵衞此事を聞、安からす思ひて此山へ登る、半途にて俄に空かき曇りて兵衞を虛空へつかみ行、暫く有りて此山の麓へ落す、其骸骨未塵になり死けり。又其夜大槻木は自然に根かへりして倒れけり、其槻木今に根は空へなり、枝は地に付て其儘人も邊りへ不寄。

案るに老木を伐るに必す汗を出すなり、其色極て赤く血のごとくと有。又老木の精あり形ち狗の如くにて是を彭侯（ホウコウ）と號す、壽命の藥とあり。

又後畠村に所口町氷見屋助右衞門御扶持田あり。又藤野村は城山の麓なり、侍從利政卿の御塚あり、御位牌は御菩提所所口禪宗靈泉寺にあり、此寺御寺領十五石七斗五

升、畠地七百八十二歩、高直し三石二斗六升八合なり。此村一言の觀音とて病難をすくひ給ふ事靈驗あらたかなり、又宗右衞門とて大百姓あり、後畠村一人百姓なり。又矢田村近し、清水の觀音とて春日作靈佛なり、昔は清水寺とて眞言宗なり、此寺大同年中開基。名瀧あり、瀧坪二つあり、是は都の清水を移すといへり、所口清水米は此處より始れりといふ。又天滿宮社あり、神主大森氏なり、此村に明星院とて眞言宗あり、伊勢内外の社あり、是は安倍宗任草創の寺とあり。

又所口より磯傳ひ鹿渡島へ行間に島の地へ口渡し往來あり、澤野村近し、牛房の名物なり。此邊よりたばこを賣出す、則崎山たばこと云ふ。又太田村は所口より廿町余あり、海門寺とて禪宗あり、寺領三十俵、昔は畠山氏菩提所にて寺領三千石なり、其時寺代官の筋目百姓三郎太郎とてあり、此寺を海門寺といふことは、向に嶋の端陸の端出合てこなたよりは漸二三間に見えて此寺の門と見ゆるなり、依て海門寺と號するよし。又此村より三室村へ二里あり、福浦といふより向嶋の路日出ヶ嶋村へ小口渡とて半道あり、舟ちん一人三分宛なり、宇出津等への往來なり、此邊の風景言語にものべかたし。向の嶋の路を淡路嶋とおもひ、三室七尾の磯を須磨明石と擬すとも、

をとるまじきなり。【萬葉集】に、

能登の海に釣する海士のいさり火に、光にいませ月待のそら

又鹿渡嶋とてあり鵜浦村の領なり、此灘の尾なるゆゑ角嶋といふことなり、此崎を廻れば中山の鄕などとて灘に十三ヶ村あり、越中氷見へ出るなり。角嶋の觀音は昔此浦へ流寄給ふ聖德太子の御作なり、同作の阿彌陀如來の立像あり、觀音は靈驗有りて龍燈折々あり、椿森とも椿寺ともいふ、坊守觀音院とて有。又小吉（コシ）の間とて舟の懸り間あり、水石の名物なり。此處を廻り灘傳ひ村數十三ヶ村の内八ヶ村公領なり。所口より氷見迄此灘廻りして十一里難所いはんかたなし、鵜浦村は一の宮祭の鵜取て捧るなり、此村より一宮迄十三里あり、此謂は昔此島の御神此磯に寄給ふ、一の宮の御神と夫婦になり給ふ、又御中惡敷なり越後の國能生へ飛給ふ、委は一宮の所にあり。此村御門主の神社立給ふ。又庵村に堂見といふ石動山權現を移し奉りし笊籬山といふ、則天正十年此所に假りに社御建立、五十四坊有りしを、慶長一年石動山を移し奉りしとて、今は權現社別當三坊あり、此村五郎左衞門といふもの山林の奉行勤しとて、利家公御印物所持す、また佐々波村山に佛谷といふ處に自然石大佛像數多立

給ふ、此村中に不動川とて海へ流るゝ小川あり、此川の邊の石を拾へは腹中を煩といへり。又山の谷間に揖ヶ淵とておそろしき小池あり、昔此池へ揖を取おとしけるに氷見の海へ出しといへり。又九郎左衞門とて古百姓あり、利家公御扶持高御印物持傳へり。又黒崎村に火打石の名物あり、今は御留メ石なり。又諏訪宮あり、此宮森の邊黒岩とて大石あり、むかし越後謙信春日山城普請の時この石取越んとて舟に積しかとも神をしみ給ふて舟出ずとて今其所にあり、黒崎の名此石より呼ふといふ。又藥師の宮あり、昔は大社にて有しか兵亂に燒失して二王尊の御頭礎のみ殘れり、此邊畠の中に皮石とて一人して自由になる石あり、畑中にて耕作の邪魔になるゆゑ脇へ取除候へは、其夜の内に元の所へ直り不思議なる石なり、藥師の社地に、昔諸病を治する湯涌しを、女穢たる物を洗ひしより湯出ず、いま赤色の水出るなり。又畠山の時代闕の有し所とて今闕野とて畑中にて其跡あり、此處海際は數十丈は切岸なり、洞二つあり、口は小舟の入程に小穴なれとも、奥は十間に廿間餘もあり、高波の時は入る事ならず、此村に助とて古き百姓あり、昔越後勢珠洲の三崎へ兵粮を積廻り、此沖を通りしを。助先祖兵粮米を奪とり、利家公へ上し御褒美として御扶持も被下候とて御

印物頂戴あり、今は御扶持もなし。また山崎村に阿良伽志彦神社立給ふ。少彦命の像石なり。又奥山に鵜目嶺とてあり觀音堂あり、當國三番の札所なり、難所ゆゑ大かたは鹿渡嶋の觀音に札を納るなり。又熊淵村近し、小名に御出といふ所に數十丈の瀧あり、布引の瀧にもをとるまじき名瀧なり、角嶋より越中境大泊り村まて六里あり、次の村は脇村といふて是は越中氷見の庄なり。

見せはやな君を松尾の浦霞、嶋かくれ行船そつれなき

又嶋の路は長五里、巾一里半、村數廿ヶ村、一向宗十一ヶ寺、惣名を袋嶋といふ、名所記などには、唯能登の島山とあり、【萬葉】の歌に、

とふさ立つ舟木伐るといふ能登の嶋山、けふ見れは小立しけしも幾代神ひて

此歌は伊夜比咩の神社にて始て船木を神詫ありて伐し處といへり、伊夜比咩は二穴村の神明宮なりといふ。今は向田村の八幡宮を謂り昔は鍛目八家の庄とて八ヶ村有しとなり、昔泰澄大師の臥せりの行者は此島の路の人にて【元亨釋書】に曰、大寶二年有少阿彌、自能登嶋來謁云々、臥雪裏、澄名爲臥行者、有此行者の母の住める處を祖母浦村とて其塚今にあり、此ふせりの行者は明暮眠り伏

して靈術あり、常に住ける處を閨村といふ、寐嶋とて觀音堂あり、昔は大樂寺とてありしに今は寺なし、此觀音は臥の行者の鉢の子の中に觀音の像ありといへり、靈像にて奇瑞あり、又【元亨釋書】曰、逢北海積船飛鉢乞供云々、是臥の行者の鉢の子飛行して沖漕船に供を乞ふ、其至る船の者ども供物與しとなり、或時出羽の國公米千石積し船此沖通りしに、此鉢の子來りけれとも、上乘せし淨定（ヤスサダ）といふもの一粒もゆるさす有しに、忽ち千石の船中の米虛空に飛行、此事を臥の行者へ淨定なけきしかは、行者いはく其米我師へ捧しなり、石動山へ行我師へ其事を申へしと有けれは、淨定山へ登り見るに講堂の前に千石の米積あり、淨定此奇特をおもひ法身して泰澄に仕へて木樵水汲ありて難行せしとなり、されは泰澄に淨定・臥りの二行者ありて、泰澄の曰淨定の身行は安し、臥の心行はかたしと有しといへり。其鉢の子の至る處を今鉢ヶ崎村といふ、又日出ヶ嶋村は筆ヶ島なり、ヒフの通ひの誤りにてひてか嶋といへり、此能登にはヒフ假名物毎に違ひてやねふくをヒクといふ、網引をフクといへり、是も沖に机嶋とてあり、是に對して筆ヶ嶋なるを、今日出ヶ嶋となれり。

又野崎村御收納藏所にて高札あり、嶋の路にて此村々向田村は大高村なり。

又向田村は大村にて伊夜彦の神社立給ふ、大社なり。御神體は八幡宮なり、昔御神體十二月三日蛸に乘りて此村の三郎助といふ百姓の前なる平石といふ上へあがり給ふを高の愛宕といふ山へ移し奉る、今も蛸のことくいふて十二月三日に毎歳祭あり、又奇瑞ありて今の社地へ移し奉るなり、當社寶物いろ〳〵あり、月星の玉とて此村の谷内より出る處を明星の谷内とてあり、寶劍の鰐とてあり。又牧の駒有て此所の池水に來りて住む駒あり、是を此神馬にして有しに類ひなき名馬なりけれは、時の將軍賴朝公へめされ名を池好とよび寵愛ありしは此馬なり、其時賴朝公の下し文の判形の物あり、并梶原等の判形の添狀あり、其外は略す。神主舟木氏なり、今も此池好の出し處を牧山とて牧野へ跡あり。又此村に蝦夷の岩屋とてあり、昔蝦夷の大男とて異人の住し洞といへり。又別所村とて山の中に一村あり、此村へ行道に牛の爪坂とてあり、是に蝦夷の大男の手の跡とて石にあり。又須曾村に衣川とてあり鮭多上りしを蝦夷の大男取て食物にせしに、或時臥の行者來り、大男に鮭を吳と有しに、大男をしみてあたへす、其時行者、

きのふきつけふもきて見る衣川、すそほころひて

さけもあからす

かく有けれは、其後鮭一本もあからす、彼大男食物に渇し蝦夷かしまへ行しといへり。其外品々所にいへり、略す。向田村にむかし般若院とて大寺ありし、其礎踏段石なと其儘あり、其外釋迦堂愛宕などとて地名のこり、今一向宗十一ヶ寺は過半教院なりしを改宗ありしなり。又鰀目（エノメ）村と向田村に城跡あり、畠山の取出のよし、鰀目村に當麻氏の十村役あり、此村に嶽の宮とてあり、菅恩神社といへり、風景言語に絶したる處なり、又二穴村に神明宮あり、小嶋神明宮とは是にて、伊夜姫の神社といへり。又此村を二穴村といふは磯山の腰に洞二ツあり、沖にて難風に逢ひし船此洞に入てしのぐなり、又泊り村といふには船の間あり、通村といふは指出たる崎に長者か端とて、昔長者住て今に長者屋敷あり、寶を納し所とて、三錢塚なとゝて有、今に礎石垣抔あり、梶の端といへるもあり、陸へ近し、渡し有故通村と云、高茂の渡しとて瀬嵐村へ渡るなり。又小浦村とて野崎と長崎村の間にありしも、此村年貢米を惜しみ、一村舟に乘、行方なく退轉せり。越後の國へ渡り、今も小浦といふて鹽燒有といへり。惣して此嶋の路は人の氣誠に柔和なり、然共近きは金澤より流人ありて物毎にかしこくなり、今は所口の者も手こりするなり。

（國分寺）

又所口近在の藤橋村といふに山岸とて百姓あり。蓮如上人の筆物傳へて毎月三月廿五日弘めあり。又府中村領往來に住吉の宮あり、昔最勝講村右馬といふもの行倒、果しに、夜々化物となりて往來の人々に障る故、其靈を住吉大明神と祭して、今に右馬子孫の者此宮の前乘打する事ならすといへり。又國分村には昔國分寺とて大寺ありし礎殘れり、高井といふに金谷水とて名水あり、是は所口岩屋の水の源といへり、脇に獅子ヶ端とて獅子に似た岩あり。又古府村に惣社の觀音とて有、昔畠山氏代々歸依ありて餘程の社領も寄附、七堂伽藍にて坊も數多有しとて法覺坊の筋目忠左衛門とて今に宮守あり、祭禮三月十八日、古城村・藤野村・小池村・川原村・古府村の氏神なり。また國下村に實盛の塚とて古塚あり、是は實盛の中間此村のものとて加州篠原にて實盛果給ひし時、沓を取故郷へ歸り、塚を築き、その身削髮して實盛の菩提を吊ひしといへり。又助左衛門とて古き百姓あり、畠山の能役者勤しとて裝束抔持傳へり。又江曾村に當國順禮八番札所練（ネリ）ヶ谷（ヤツ）觀音は寺なし、往來より八町計山へ登るなり、荒木の山刀（ナダ）作りの儘尊像六體あり、運慶の作なり。

又石塚村に塚あり、大石の梵字彫建し有ゆえ石塚の名あ

り、大石にいろ〳〵の物語あり略す。又廿九日村近し、此村の元は昔牧野にて馬の蹄の跡多し、ひつめといひしか慶安の頃一村出來して廿九日村といへり。

又久の木村白山權現の宮あり、是は人王四十二代の帝文武天皇の御母柏の御妃大寶年中此所へ來り給ひおはします內、御夢に異僧來りて聖德太子の木像を授け、我は是法隆梵舍に住するものなりとの給ひしか、これによつて一宇御建立勝圓寺と號給ひ、朝暮御信仰有し後、御妃都へ還り給ふ時、從臣の內大伴伊豫彥を守護として殘し給ふ、其後柏御妃都にて薨御有し故、御骨を分け、久の木村に御廟宇を建し跡今の宮といへり。聖德太子の御像は今在江村の榮林寺にあり。同村藤右衞門といふ百姓は伊與彥の子孫なり、委しくは太子の緣起にあり、久の木村寺屋村抔いろ〳〵舊地有といへとも、今は田畑抔になりてあり。又武部村所口より二里四町、家數百軒計、眞館氏の十村役あり。此村田の中に諏訪の森とてあり、昔諏訪大明神の社有しか、中古東の山へ移し社地に有し大木の杉を伐しか、伐株より一夜の內に長一丈計の杉生し、今大木となりて有り、今も此森の木抔をきれは大蛇杉の木より下り、人を追ふといへり。近年も越中論田村の箕を業とするもの、藤を伐に此森へ入りしに、大蛇追かけおそろしき事に逢ひしといふ。此森の內に御手洗池あり。又往來緣に地藏堂あり、眼病の者此地藏を信仰すれは治するといふ。又昔は能登より石動山への本道は此村よりのぼりしに、半途に大なる池あり、龍すみて人を取喰ふゆゑ往來の人もおそれて二の宮の山道より登り、しやくし峠といふに本道へ出るといふ。彼池の龍退治のため石動山衆徒中一七日の間誦經あり、大木に經を書池をうつめしに、龍は忽ち天に登り、其後人もとらす。往來も安かりしに、自然と二の宮通りの道をのほるもの多かりし故、いつの頃よりか二の宮口本道となるといへり。旱魃の時分見れは、池の中に大木夥し、此道筋觀音の梵字を彫し、石間々々に今殘れり　又此道より南の山は多毛（タモ）の輪とて城跡あり。土田四郎義貞居住有しといふ。

○二の宮　所口より二里十七町、本馬八十二文、輕尻五十文、人足四十二文、家數百四十軒計あり。

此村天日陰姬の神社立給ふ、二宮大明神といふ、神主舟木氏なり、昔天子に啞の姬有しか、此石動山へ籠り給ふを祭り奉りし御神體なり、大社にて淺井の庄數ヶ村の氏神たりしか、兵火に失ひ礎のこれり、祭三月八月十五日なり。三月十五日には近鄕五ヶ村御幸あり。又此左衞門加賀左衞門とて、日像上人歸依して、馬場本道寺の開基旦

（石動山）

那の筋目あり。又二の宮川とてあり、往來に長十間餘の橋あり、川上は石動山より一筋、谷川村山より一筋流て、下もは川尻村といふて田鶴濱の海へ入るなり。又矢篦竹の御藪あり、隔年に役人廻りて篦竹を數多切、御國一の藪なり。

又石動山は二の宮より一里半登るなり。一國第一の高嶺なり、昔此山は天より星落て石となり、天漢石と號す、今講堂の邊にあり。開山泰澄大師、養老二年登山、已前は此石ゆるきて山震動してあれしによつて石動山といへり、本社五社權現は伊須流伎比古の神社是なり、大宮は伊弉諾册の兩命なり、火の宮は大物命、劍の宮は市木島命、梅の宮は天目筒命なり。五神五社なり。本地虛空藏、十一面觀音、正觀音、大聖不動、倶利迦羅不動の五尊なり。【倭漢三才圖會】等に出たり、天智天皇勅願所養老年中の草創、開山泰澄大師は越の大德とて、姓は三神氏、越前淺生津の人、母は伊野氏、父は安角と云、母夢に白玉入懷而有孕、白鳳十一年六月十一日に生る、十四歲の冬越知峰巖洞中にをいて自ら薙髮して松葉を食し、年を積み神通を得て、能登の臥り・出羽の淨定の二行者相隨ふ、神護景雲元年三月十八日遷化あり、八十六歲、委くは【元亨釋書】抔にあり。當山開基の事は泰澄大師天平の頃疱瘡ありて、王公卿士庶民死するもの少なからす、天子大師に勅命ありて加持有に靈驗あらたなり、依て大師勅定をうけて神社佛閣建立あり。石動山天平寺と號て次第に繁榮して、三百六十四坊ありしに、中頃衆徒越後謙信公に與力して利家公に敵す、利家公御勝利有て衆徒の張本般若院・寶達坊・萬藏院の三惡僧を講堂の前にて誅伐あり、其首を芝ヶ峠といふに梟首あり、夫より衰微して今纔に五十八坊殘りあり、是も笊籠（イカケ）山といふに權現を移し奉りし處に有し者共といへり。神主兩人ともあり、大森氏は山に在住、淸水氏は今能登部下村にあり、大宮坊の看主は東林院といふか、兼帶するなり。然りといへとも世々勅願所にして每歲三度御供物の禁裏より御納めあり。同正五九月の御祈禱の禮上るなり。北陸道七ヶ國の大社御朱印を以每年三度の知識米とて勸進あり。社領百五十石、本社御修覆あり、今又繁昌して諸堂諸坊多く結構なり、每年三月廿四日、六月四日は權現の祭禮にて、講堂に於いて【大般若經】講談あり。人形立物山等有りて賑敷、諸人其日多く登山するなり、誠に大地といひ靈山なり、委しくは明曆年中に林夢山子の書れし緣起にあり。本道二の宮より登るなり一里半の道程、芝山裸地、四つ谷、阿彌陀ヶ嶺、護摩堂抔とて難所の古戰場あり、裏道七尾城山の脇よりのほり、多根

越とて所口より三里あり。又多根村とて石動山の寺領百姓あり、此村の四位は石動山權現天竺摩迦陀國より飛ひ給ひし時、御供いたし參りし者とて、本社の鍵を預りしによつて、產する時、又月のさわり有時は小屋を懸て住、食事も竹の先きにて遣し候事にて、何角不自由なるゆゑ、中古鍵を衆徒中へ渡し候得とも、于今家内は隨分物忌なとするなり。又同村の内塚田の水戸左近ころさの番頭といふ兩人のものあり、此のもの共も權現へ由緣ある者にて、昔本社御建立の時礎おもふ樣にすはり不申、時の大工いろ〳〵工夫をめくらしけれとも其詮なし、然る處に天より其礎を思ふ樣にすへ候には、多根の四位、ころさの番頭、塚田の水戸左近手傳いたさせ候はゝ、思ふ如くすわり可申と呼り候ゆゑ。三人を呼よせ則三人の名を石にしるしするゑ候得は、思ふ樣になり、大工も安氣のおもひをなし、社も異議なく建立すといへり。此本社の屋敷は近鄕の高嶺にて、其の頃地面せまきゆゑこぬかを以築足し申屋敷といへり。又勅使御下向の時分は四位宿をせし由。又同村仲屋等廿一人、每年正月十一日に佛藏坊へまねかるゝ、則十日夕佛藏坊より七度使を遣し、八度目の使道に出合ふ樣に右の人々出る、是を七度半の使とて古例なり、石動山より越中氷見へは三里あり、戸津宮抔を經て行なり、石動山一山は松の木一本もなし、是は此山の山神瑩山和尙に松の木をまいらせしとて、酒井村永光寺には松の木多しといへり。尤隣山ともの松木とは大いに違ふ松なり。

又越中へ越ゆるは芹川より登るなり、荒山越といふ、氷見迄五里あり、峠の東の方に升形とて、石動山般若院等の惡僧とり手跡あり、此處より石動山へ行道筋にかふと池としてあり、是は般若院戰疲れ甲を大地へ投け祈念水を乞し跡、池となるといへり、此升形は越中能登の境なり、此荒山に石動山の天漢石の三ツ一ツとて大石あり。

俳師美濃の見龍といへる人此處を通りて、

荒山や鬼も近付の百合の花

又芹川村に櫻井氏の十村役あり、則小名勝山といふにあり、此勝山に袋井隼人の城跡あり、此城跡へ東馬場村の者行事ならす、若押て行は怪我有なり、是は勝山の城を敵案内、東馬場のものいたし落させしゆゑといへり。

又井田村近し、往來に橋あり、此川上に御瀧とてあり、此瀧の不動尊靈驗ありて此瀧に打たるゝもの諸病を治するなり、人籠るなり。脇に熊野權現の能き社あり、別當圓光寺とて眞言宗なり、瀧本とて名茶あり、此村の百姓新四郎といふものゝ境内に舟山とてあり。此小山の根にむかしより石の唐櫃あり、穿なとすれは凶事有とて深く隱してあり。

又小竹村より久江村へ行、往來にさふや堂とて地藏堂あり此處より西海道へ行道あり、昔は邑知潟此處まて入しよし。

又水白村に平相國淸盛の末子三河守知敎の塚あり、則壽永二年此處にて木曾と戰ひ打死有しなり、俗に兜塚といふ、又鍋の形なる塚ゆゑ鍋山ともいふなり。

又久江村往來に長六間の橋あり、此川上へのほれは菊野とて山に自然と菊咲處あり。又願成寺とて一向宗あり、此寺の庭に達磨石とて石川より上りし石なり。

又小田中村は高畠へ近し、往來の際に新王の龜塚とて誠に龜形の塚あり、往古此邊は入海の磯邊なりしとて、此塚に物語りあり、所に云ひ傳へる儘爰に記すなり。此村に入左近といふものゝ子に、太郎といふもの有、或夜の夢に觀音菩薩枕の元に立告て宣ふは、我を連て唐へ渡るへし、國の王となるへしと有、夢覺て見れは小佛の觀音の像枕元にあり。疑ふ事はあらねは、其尊像を守りていつちとも知らぬ築紫潟より便船して、終に唐土へ渡りけり。其頃唐土に或國王の獨り姬宮あり。方々より太子を取むかへ給へとも、此姬君と契りをこめ命全きはなし、後はいかなるものにても此姬君と契りをこめ、恙なきものには御位を讓むと天下に觸給へとも、王位も命あれはこそとて望むもの更になし、彼太郎觀音の告有て其事を望むに、帝望みに任せ給ふ。太郎姬君にまみへて、まつ勝木にて削たる男根をもつて陰門を試見るに、牙ありて其男根をかぢる、後には木にくだかれて牙落て、常の陰門となり。夫より契り淺からす。太子も數多出來給ふとなり。其後故鄕床しくおほして歸國有たき事を又觀音に祈り給ふに、告ありて海邊に出給ふ處に、大成龜來れり、是に乘りて又我國の此小田中の里に歸國し給ふて、爰に崩し給ふ、里人是を祭りて所の氏神にあかめ、上の岡に社有、又五町計山奥に守の觀音を安置し給ふとて觀音堂あり。又其龜の形ちを塚に築て骸をおさめて新王塚といへり。近年此塚を穿て田地にせんとて、廻りの堀の半を崩すといへとも、此塚にいろ〳〵の不思議有りてやみしといへり。則木曾殿新王塚の前に陣取有しと【平家物語】に有は、此塚のことなり。中頃謙信も木曾の吉例に任せて此龜塚に陣取有しなり、此村の寺左衛門といふもの方に木曾義仲の馬の鞍とてもち傳へり。

萬代と限りしものを此塚の、ためし久しき名にそありける

又越中氷見灘の南村といふに奥しれぬ洞有、家具をかしたるなり、かりし者惡敷事ありて其後は其事なしといへり、惣して穴より家具抔をかりたるといふ事處々に有なり。

○高畠　二宮より一里廿町、本馬五十四文、輕尻三十二文、人足廿七文、家數百軒計あり。

此村宿驛にて高畠・福田兩村にて宿役相勤るなり、高畠村太郎左衛門とて長家抔へ由緣ありて古きものあり。又當國十一番札所に常樂寺とて有しか、今寺なし。本尊觀音は此村伊勢屋といふもの方に安置あり、依ていせ屋の觀音といふ、此村より越中氷見へ行道あり、山坂難所にて五里あり。

又酒井村は二村になり、永光寺の門前を寺酒井といふ洞谷山永光寺は曹洞宗螫山和尚の開基、後醍醐天皇の勅願所にして、其頃は近鄕大路七十五ヶ村寺領有て三萬石とあり。大伽藍にて今一山に其基礎あり、往來より少しのほれは觀音あり、當國順禮十三番の札處にて圓通院といひしなり。其昔螫山和尚行脚の折、此堂に夜明し給ふに觀音の告にて登山ありしなり。此堂より寺へは七町計あり、其時は敎院の地なりしに、山神有て此山を和尚にあたへけれは、此所に一宇結ひ住給ひしに、和尚の德行四方にひゞきて無程大寺となり、勅命勅使等度々なりしに、中頃兵亂に炎上して今は其中の一つもなくなりしなり。參內綸旨轉衣等の事も皆此寺に有しを、當寺四世峨山和尚惣持寺へ移り給ふて、今莫大の違なり。峨山和尚は惣持寺にては二世、當寺にては四世なり。併し今も諸堂建ならひて寺領廿石、開山地にして勅使の玉橋等有、寶物品々あり。中にも禁裏より御預ケの摩耶夫人の御骨あり、是は天子の姫宮禪尼此寺を歸依あり、山上に有し御遺物のよし、この尼君は此山大且那にして色々傳へあり。又一宗五開山の骨あり、峨山和尚の梵俗の時盜賊たりし血刀女の髮等あり、其外品々あり略す。每年七月七日虫干して弘めあり。又十町山奥に螫山和尚の座禪石あり、名石なり。又五開山の塚あり、羅漢向樹とて大木あり。爰に十境一體の詩頌を記。掛鞋、拔鳥石、巫女原、運水峯、勝蓮峯、踞猿嶺、栗生原、飯盛塚、集雲峯、埋死谷、是なり。詩曰、

洞谷山中在十境　永光影外揚佳名、
踞猿嶺下對江轉　運水峯頭見月明、
巫女原間人也隔　栗生野上佛種生、
掛鞋榎樹作叢席　埋死岡丘建法城、
鳥石溪邊相見舊　稻荷林際道風聲、

集雲深處龍蛇聚　向飯盛塚誰更耕、

又螫山和尚牛に乘て巡堂ありし、其牛菩提院羅といふ山神になり、折節顯れ出る事あり、誠に此地境は山深く前に羽咋の潮水渺々として、眞如實相の月澄み、嶺松槐々として、風常樂の夢を覺とは、此靈地にして、閑靜いはんかたなし。又一山松茂り有し。是は石動山の山神の螫山和尚に松をまいらせしとて、石動山に今一本もなし。又峨山和尚此寺の勤を仕まひ惣持寺へ行每朝勤ありしとて、其通ひ給ふ道とて所々山中に峨山道とて今に草生せすなり、此酒井より梯比までは十五里あり。其外此寺は惣持寺よりさきとして寺務此寺にありし靈地なり。委は此寺の秘書【洞谷記】にあり。

又本鄕村近し、此村若部原に北村氏の十村役あり、一向宗の善行寺といふあり、此寺に大尊の靈像あり、是は其昔太田村の敎院有しか、此住僧夢想にて細き江川より堀上安置有りしか。其頃此善行寺本尊安置なく、靈像を借り本尊にあがめしとなり。

○飯山　高畠より一里十八町、本馬四十九文、輕尻三十文、人足廿四文　家數九十軒計。

村の中に飯山川とてあり、此源は越中氷見の庄論田村より打越して流て羽咋潟へ入るなり、此村より氷見へ行道あり、村々おほし、山坂にて難所五里あり、又此村に簑屋とて給人藏宿あり、氏神山手に有、明神、祭禮每歲八月十四日、町中御幸あり、神主渡邊氏なり。又白瀨村は少し山手にあり、白狐林豐財院とて禪宗あり、此寺は昔螫山和尚洞谷山中の石上に座禪の時、白狐來りて仕へ奉る。此白狐此處に數千年住とて、和尚の法味に預り、佛果を得しとなん。則螫山和尚此所に一宇御建立有し御寺なり。夫々世々知識住職あり、尊き靈場なり。中にも月寒和尚希代の祈願を起し、血書の【大般若經】六百卷あり、同血佛の三尊あり、其時用ひし硯、金の小刀あり、誠に有かたき寶物なり。此村は公領私領入交りあり、又福水村公領なり。飯山川の緣にあり、此川中に金輪際より通したるとて堀盡しかたき石あり、水の原生七八寸もはなれあり。此石上に穴あり、夫より水涌き出るなり。依て福水の名有。天正年中長如庵殿能州帛ひ合戰のため越中より此福水へ越、則丹治山福水寺に暫止りしとなり、今長殿屋敷として畑になり居るなり。其外圓念坊といふ寺もありしか、兵亂に炎上して礎のみのこれり。

又往來の山手に戰場ヶ端とあり、大路七十五ヶ村目の下に見下し、羽咋の潮上は手の屆く程の無類の風景なり。壽永二年平家の軍兵木曾殿と戰ひし古戰場なり。又天正

（菅原）

の頃讓信勢長家抔と取遣り有りしとき、此處に陣取ありしなり、又中川村往來縁りなり、太郎右衞門とて利家公より御扶持頂戴の山廻りあり、二安達氏なり、此もの鎭守觀音は越中氷見の庄鷲の森より告ありて來りたまふ靈像なり、

又杉野屋村往來縁なり、此村は菅原村とて菅原と一村なりしに、中古杉野屋村と改名して別村になりしよし、此村に吉信といふ古るき百姓あり、此もの家は菅原一村の時、國武（クニタケ）・左官・兼曾、此三人のものどもへ、天滿宮告有りて、京都北野へ尊像を迎ひに來るへしと夢想ありけれは、三人申合せ疑ふ事あらしと、京都へ趣きける。其頃又北野の坊吉信へも夢想ありて能州菅原といふ處より、迎ひに參るへし、其節吉信供いたし來るへしと有り。よりて人々願申され、御直作の尊像申受御供仕り、能州へ下り、吉信は此村に居住しぬ。又菅原天滿宮開帳の刻は當時觀音の像則菅原の社頭に出開帳あり、御首は弘法大師作、御骸は惠心の作のよし。扨開帳の折は菅原より社僧幷菅原氏子中村へ觀音御迎に來るなり。尤夜中御幸にて御紋付御提灯廿張にて來るなり、又當村氏子中は高提灯一張宛出し御送り申なり、賑敷事いはんかたなし、開帳終れは又菅原より御神輿にて社僧氏子御供にて此村へ

御歸りあり、此道に、天王松といふあり、是迄當村氏子不殘御迎ひに出る事なり。扨此村に一向宗光照寺とてあり。此寺は元教院にて其昔三町計浦里に太田といふ村あり、此村に有しか、蓮如上人この邊を巡廻有りし時弟子となり、光照寺といふ、又教院の時太田の湯吉といふより、聖德太子の尊像を夢想にて掘出しぬ、此靈像をは本鄕村善行寺に安置あり。さて光照寺太田村には、宗旨旦那もなく、何とそ寺替いたし度とおもひ居る處に、寺中より白羽の鷹飛去りぬ。何國へ行そと見れは此杉野屋の今の寺院の木に留る、是由緣の地なりと此處に移よし。村端山手に古屋氏の十村役あり、この者は由緣これあるものにて、昔は加州石川郡御供田村に居住のものなるか、中頃此所へ引越被仰付參るよし。此者家は御供田村に住する、むかしは御扶持田等も頂戴有よし。中納言利常公の御代先祖與右衞門と申もの江戸御供被仰付、信州野尻といふ處にて耕作等の義御尋、御褒美として中身の御鑓拜領し今所持す、御直筆の利常公の一行の懸物等あり。其文字如斯、

誠者自成道者自道、

如此の懸物なり、其外拜領の品いろ〳〵有といへとも、年限久しく紛失のよし、此家に【耕家春秋】といふ耕作の

書先年撰御上へ差あぐる其寫し爾今あり。又【加能越山川記】といふて三ヶ國の山川委く記す、是も爾今所持あるなり。

又此邊より一里山奥に千石山といふに大寺ありしとて、伽藍の礎あり。此所に大像の多門運慶の作にて堂計あり。此村を千石といふに昔大百姓あり、家來おほく召仕ひけるに、或時畠に大豆を植よと家來共に申付遣しけるに、家來共彼畠へ行、大豆種をいりて喰仕廻ひ、跡にていかゝと辛勞いたし、爰かしこを大豆種を尋しに、漸く大豆一粒殘り有しを、畠の眞中に植、大勢の家來共打より小便をし、此大豆榮えよと祈りてかへりしに、其一粒の大豆生し枝葉茂り其一本に千石實のりしゆゑ名とすといへり。又鉢伏山とて山續きに廓跡あり、是は末盛の城の取出なるよし、鉢伏山といふは瑩山和尙鉢の子を納めし山なれはいへり、又土橋村近し、新兵衞といふ、利家公より御扶持頂戴の山廻りあり、藤井氏なり、同苗庄右衞門とて山廻り有り。

又菅原村に天滿宮の大社あり、護國山菅原寺といふ、社領九十俵なり。別當成喜坊・遍照坊とて有、社領の內廿俵宛配分あり、殘り五十俵は御修覆料に除知せり、昔勅願所にて大社なりしに、度々の兵亂に綸旨院宣も燒失せり、其頃は同國新宮の城主墨又出羽守より天神社領として田地百俵外寄附あり。坊も三十六坊有しか、兵亂の節退轉して漸三ヶ寺殘り、今二ヶ寺は別當、一ヶ寺は明專寺といふ寺ひしか、いつの頃よりか一向宗になり、明專寺といふ寺あり、中頃、利家公御合戰の御時御勝利を此社へいのり給ふに靈驗のあらたなりしより、御社頭御建立、御社領も御寄附あり、菅原の姓は此處より起れりといへり、いかにや。扨此天滿宮御靈像は、天德四年六月同村行長、先祖國武・西願・兼曾四人のものども天神の御夢想を蒙り、北野へ參り御靈夢の事、別當へ申達せしに、奇異の容體にて別當曰、拙僧去夜靈夢を蒙りしに同し。又當所吉信といふ百姓へも御靈夢あり、然れは菅相丞御自作の尊像を歸屬いたすへし、其村に勸請あれかしとて相渡す、右三人北野の吉信四人御供して八月十三日歸村ありしに、其夜國武へ御靈夢に、

きれいかな北野も玆も同し月

とあらたに御靈夢を蒙り、翌十四日假殿を建て御靈像をうつし奉りけるとなり。于今祭禮八月十四日なり。國武を改め國田行長と呼ふなり、然に天正年中利家公御社參の節、御用も承り候よしにて、行長御扶持頂戴あり、今山廻り勤なり。西願か筋目今にあり。兼曾・吉信の筋目は隣村

の杉野屋村にあり。此天神御靈像御下り前は、白山權現の本地上品上生の彌陀行基の作、脇立十一面觀音、今兩別當の本尊なり、尤同作なり。中頃遍照坊に小僧あり、或夜御靈夢に御發句二句蒙りしよし。

守る國月の光りも淸きかな

國々に榮える梅の若枝かな

拜殿に記して懸有。又利家公御直畫の御像あり、寺の後の山に利家公灰塚あり、僧門より奥今の御印地なり。

○子浦　飯田より一里十五町、本馬四十九文、輕尻廿九文、人足廿三文、家數百八十軒計あり。

此村は昔より驛にて、初は志保、又は志雄とも書しなり、則志乎神社立給ふ。志保の庄十ヶ村の惣社なり、此村の丸屋といふもの近年告ありて、井戸より長三寸計の座像の觀音の金佛あかり給ふ。又敷波屋といふもの方に親鸞上人御影御自作の木像等安置あり。又往來に長十七間の假橋あり、源は寶達原村より一節、宮能村より一節流て羽咋の潟へ入るなり。此處より氷見へ越ゆるは巡見上使道にて臼ヶ峯越といふなり。又昔壽永二年五月平家木曾殿の合戰にも、俱利迦羅志保の軍と有、三河守知教打死は高畠よりあなたなれと、此志保は其時より本驛なりと見えたり。又給人米納藏宿あり。又蓬萊國近とて昔かぶとを作りし鍛冶の子孫あり、屋敷高御朱印なり。又山手に泉龍寺といふ禪宗あり、是も泰雲院殿の戒師金澤寶圓寺先住巨海和尙の開基にて、今泰雲院殿御影堂別に建あり。

又荻谷村に岡部氏の十村役あり、住古は此邊入海にて有しとて荻島村・荻布村・敷波村抔の名あるよし。

又敷波村は公領私領別れてあり。此村に鍵取大明神とて敷波村・荻谷村・荻島村の氏神なり、則志乎神社是なり、昔は大社にて勅使下向有しよし、荻島村其時の神主の筋目とて三人あり。一軒は其家内にて產をする事ならす、他家へ出て產をする、又三軒は右の者とも四足二足のものを喰する事取扱ふもならす、昔勅使の宿もいたすとて今に其名を呼なり。同村に御手洗池あり。月に二度宛潮さす、水白くなる日は極り不申よし。社地續きにしほ越といふ所あり、當時公領の枝村なり、又公領敷波村に利家公御館跡あり、大蓮寺とて法華宗あり、公領庄屋に松永道法といふもの有、古き百姓のよし、同太郎左衞門とて能き百姓在、此村藤七といふもの方に不思議なる大黒の古き木像あり。

又往來に峨山松とて一本の古木あり、是は峨山和尙梵俗の時强盜有しもの見の松なる故峨山松といふよし、枝葉

茂り異なる松ゆゑ宰相綱紀公御庭へ取越なされ度、人夫造用等を御圖らせ有りしに、錢千貫文ほと相懸り候よし申上候ゆゑ其沙汰止むといへり、依て俗に千貫松とも笠松ともいへり。

又宿村とてあり往來なり、今濱へ近し、昔は今濱村抔の宿なく此村驛にて末盛の城下にありしに、兵亂其上田地砂に埋り抔して退轉せしに、今又一兩家殘り有しか、次第に家出來、今は能き村なり。

又末森の城跡は宿村の向敷波の高に有、往來より八九町あり、今は畑に成有り、併し今もいろ〳〵怪異ありて雨の日は獨りは里人も行ぬといへり。相見の神近鄕の宗社なり。末盛の麓に立給ふ、是より寶達の麓押水三鄕の村々多し。

子浦より今濱まて、道程一里十五町、本馬四十六文、輕尻廿九文、人足廿三文なり、是より乾之卷今濱村に出るゆゑ記すなり

能登國名跡志坤之卷　終

越中舊事記

越中舊事記例言

一　神社佛閣の傳記、悉これを盡す事を得ず、只世人のあまねく稱するものを取つて是をしるす。

一　名所は、歌書舊記に載たるをもつてこゝに記す、いまだ其所在を詳にせずといへども、是を著す。猶追て可尋之。

一　舊跡は、先年御尋によつて、在々所々の古老の書上たるを集て一冊とする有、多分是にもとづく、或は軍書等を勘へまじへ、或は傳說の信にちかきものをとつて記す。

一　此輯錄するところ、四郡をわかち、其郡ごとに事跡をしるすといへども、前後混雜する所多し、唯其次第にかゝはらず、追々其郡に誌すによつてなり。

一　猶後に拔書一覽を添て、舊跡等に便せんと、是を纂むるもの也。

越中舊事記卷之上

國名

越（エツラツ クワツ）コユル、アカル、トチシ、ハシル、コシニ、ガマムシロ、コトノシタ、ノアナ、ワタル、キコフ、玉篇于厥切、踰也、月韻又曷韻括切クワツ、字彙發揚也、超也、遠也、走也、逾也、又發語辭、又地名、吳—南—閩—謂之三越、又姓又曷韻—席蒲席也、又瑟下孔也、

說文度也、晉語使—於諸侯注發聞也、又百越南蠻惣名、

中（チウ）ナカ、ヤハラグ、アタル、タイラカ、ナルヨロ、シ、ウガツ、ミツル、ヘダツ、アツカル、イルル前中後州中也、—は玉篇致隆切半也、和也、東韻又送韻丁仲切、射矢至的曰中、字彙陟隆切、廣勾平也、成也、中者不偏不倚無過不及曰中、

二字俱嘉祥也、

【風土記】云、荒血山越中云越中、ゑちう

【家集】はなのすいちるにまさりて匂ひせは、それをそ人は折てとらまし。人麿

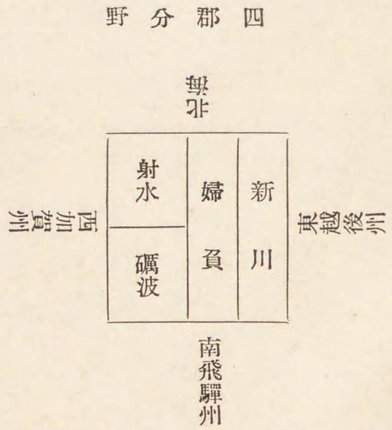
神代卷云、伊弉諾尊伊弉册尊生佐渡洲、次生越州矣、

用明天皇御宇定五畿七道也、越前・加賀・能登・越中・越後、此五州一國也、文武天皇御宇加賀・能登、二州分也、

聖武天皇天平十年、令天下諸國造國郡圖進、分越中國四郡屬越後國、【續日本記】

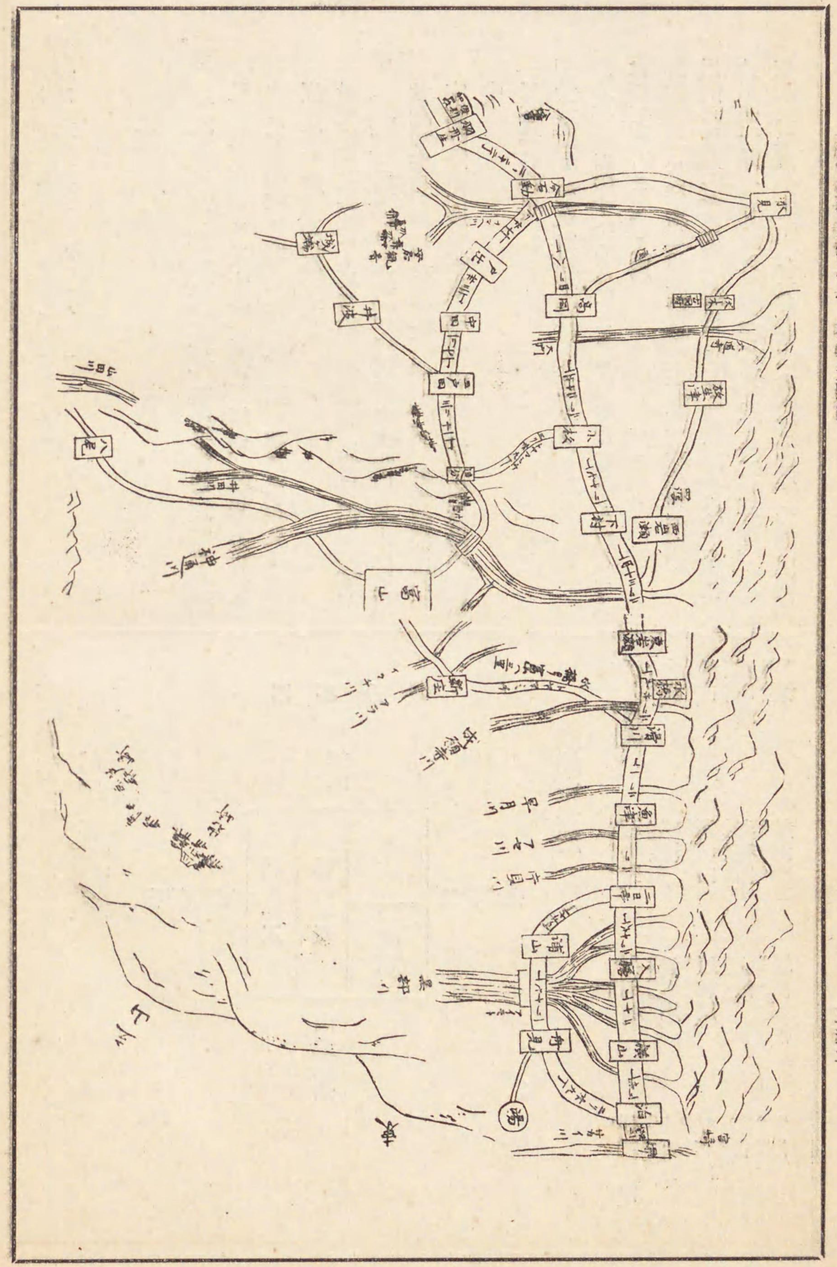
越中四郡 新川婦負 礪波射水

四郡分野



越中名所

伊久里森、　石勢野、　射射水、　伊頭部山、
古江、　磯浦、　這槻川、　大野路、
戀山、　礪波山、　雄神川、　乎布崎、
垂姫崎、　卯花山、　立島、　奈古、
長濱、　越海、　松田江橋、　雪島、



氣比古宮、　鵜坂川、　布勢海、　藪波里、
二上山、　木葉里、　有磯海、　碎田川、
英遠浦、　賣比川、　信濃濱、　叔羅川、
見奈岸山、　繁山、　須蘇末山、　澁谷、
杉野、　菅山、　多枯、　三島野、
宇奈比川、　越湖、伴、丁渡、宅良、厨浦、二塚、高岡、武州にもあり、右の名所或書に載たり、其歌を不知、追々可尋之、

【名所方角抄】曰戀山、氣比の古宮、
雪島壹岐の國にもあり、名寄に兩國に入る也と有。

【新勅撰】一戀の山しけき小笹の露分て、入初るよりぬるゝ袖かな。　神祇伯顯仲

【和漢三才圖會】云、這槻川、宇奈比川、伊久里森、垂姫崎、乎布崎、松田江橋等、名所數多有之、而未勘其處、

菅山
春はなを日かけもなかき菅の山、みらくもあかね花の色かな

木葉里
色染る木の葉の里のから錦、あらしな立なすけの山風
ちりまかふ木の葉の里を立別れ、嘸住うしと秋も行らん

伊頭部山【萬葉】
我こえてしのはゝしらす時鳥、いつへの山を鳴て越らん

見奈岸山【夫木】
押こめてみなきし山の朝霞、やたけも見えす立にけらしも

大野路【萬葉】
大野路はしはし芝原しけくとも、君しかよはゝ道廣からん

藪波里【新後拾遺】
やふなみの里に宿かり春雨に、こもりつらんと妹につけはや　家持

賣比川【萬葉】
めひ川の早きせ毎に篝さしやそともの をはうかわ立けり　同

叔羅川【萬葉】
しくら川なつさひのほり平瀬には、さてもさし渡し早せしには　同

私曰、此等の名所、雖越中名所、未知其處、追々可尋之、

神社・佛閣・名所・舊跡

新川郡

立山當山緣起、依繁多長、以和漢三才圖會記之、

立山權現　祭神　伊弉諾尊、五間南向拜殿七間末社十九棟、力尾權現即手力雄命也

祭四月八日　神輿、七社岩峅寺、別當、天台、妻帶、二十四坊麓大宮也、自此至絕頂、凡十三里八町、

彼山傳記曰、文武天皇大寶元年二月十六日夜、帝夢阿彌陀來枕頭曰、自今令四條大納言有若領越中國、國家當安穩也、覺乃勅有若爲越中國司、而有若卿、同嫡男有賴移住當國

保伏山、一日自辰巳方白鷹飛來止于卿擧、喜愛育之、既而有賴請於父爲鷹野遊、時俄翦去、東西求之不還來、於是森尻權現示現曰、汝當尋辰巳方、因入奥山、日既暮宿于岩間、翌朝至岩倉林、見一老人、右提劔左持念珠曰、汝所尋鷹今在横江林也、有賴問君誰乎、答曰、我是力尾天神也、而去恭禮尙入深山、時猛熊駈來將攫有賴、忽射之、矢中熊胷、流血逆入玉戸窟中、不意三尊佛像巍々異香芬々、熟拜之阿彌陀胸矢立血流、有賴知已矢、大驚且惟之、如來猶夢告、我爲濁世衆生濟、現十界於此山侍汝、故使爲當國主亦方便也、鷹乃劔山力尾天神也、熊乃我也、汝速出家宜開當山焉、有賴流隨喜泪、謁說方原五智寺慈朝師、受戒改名號慈興、尋建立山大權現大宮及王子眷屬等社焉、又登嶽依小山大明神告、到淨土山拜一光三尊如來二十五菩薩、蓋此大嶽形似佛尊貌、膝爲一越、腰腹爲二越、肩爲三越、頭爲四越、頂上佛面爲五越、〇岩峅寺二里、〇横江一里、有賴射熊處、〇血掛（一里、引血去處）蘆峅寺一里、〇有姥堂（大寶三年、卯四月二日）慈興上人老母卒于江州志賀、慈興自作母像、慶雲元年八月彼岸中日爲葬、禮法式于今然、〇湯川（一里名勝妙川）渡藤橋行人取垢離處、美女杉一里有千手堂、有材木坂、傳曰、昔欲建女人堂、略寄材木、然其木皆一夜變石、有熊野權現、鷲窟各一社、傳曰、昔若狹小濱女僧名止宇呂尼者伴壯女一人童女一人、推參女人結界山、故於此壯女乍化成杉木、因名美女杉、〇斷罪坂二里彼童女怖不進、時尼尿而見其勢大罵、其地爲穴、深不知幾許、其處名叱尿〇伏拜一里於此望勝妙瀑布（數十丈、之大瀧）〇桑谷一里有桑崎權現社、〇不動堂一里〇中津原一里名彌陀原、右有高山名藥師嶽、其麓有溫泉、〇國見坂一里有二道（右姥懷道、左市谷道）、若狹老尼於此遂額生角化爲石、名姥石、其角今存爲寶物、三行市谷道、則有畜生原、傳曰、昔奥州板割坂藤義丞者登山、於此頻睡眠、自變成馬、且生角、其角爲寶物、又森尻（當山之中）有智明坊者、性憍慢而俄聲如牛吼、遂爲天狗、自號光藏坊、棲市谷、劔山力尾權現追出之退去、時墮一爪爲寶物于今存、凡市谷行道有小鏈大鏈、人縋之登、其鏈乃三條小鍛冶宗近所作云云、獅子端（ハナ天狗所在）有窟、愛染明王、有弘法大師護摩壇、〇室堂（自是至絶頂凡一里八町）左有山名三寶崩、昔飛驒小萱鄉北山石藏云者、性貪欲猛惡、每殺物命害人、遂自變成鬼神、生尖牙隱于此、爲別山金剛童子所逐、牙拔口噤死、其牙于今在爲寶物、有根尾社右有天狗嶽、其峯有龍神社、是乃狩籠池神也、有地獄谷道追分地藏堂、每歳七月十五日夜胡蝶數多出遊舞此原、呼曰生靈市、建高卒都婆弔無緣菩提、每夏月籠二十四坊中三坊、相更住居室堂、登山人寓于此、（餘月不人住、參詣人亦無、）室堂（四間四間九間）三棟、有阿彌陀・聖觀音・地藏三體、

絶頂有、懺悔坂、有秡川（有五色砂）名五色濱、有六觀音（自是右方、）有淨土山阿彌陀堂（四尺六尺八間南向）三尊影向山（左、方）自一越至五越、各有堂一宇、一

處有稍暖地、名曰九品、行人置杖草鞋參本社、

本社（六尺一丈三尺南向）白砂庭（六尺九尺）右方有奉納堂、

本尊阿彌陀如來、（垂跡伊弉諾尊、）不動明王、（垂跡手力雄命、）

有賴所持刀無銘、蓑服鐵、有賴射熊之矢根、

錫杖（行基菩薩奉納之、）鬼牙一　北山石藏之口牙、

什物　角二ッ若狹老尼額角、駒角藤義丞化馬生角、

天狗爪一ッ光藏坊之手爪、天錢三文之外異國之古錢數多、

別山（自本社、五十町）後光石、橋立石、白山權現堂、折立、富士權現、蟻（アリ）

唐渡（トウワタリイサゴノ）、砂嶽炎王、光佛、行者返、抱石（以上皆、險難地）別山帝釋天（六尺二間堂、本地大日如來、前在硯水之池、）自別山出室堂（五十町）大走、小走、塞河原有、地藏堂、玉戸窟（阿彌陀、）八所小窟、胎内潛、蓮花岩、楊枝嶽、美久里池（周五十町池、有地藏堂）伽羅陀山、地獄谷、（有地藏堂、）八大地獄（各有十六別處、）百三十六地、血池（水色赤、如血、）處々猛火燃起、罵詈號泣聲如聞人潰肝、北有劔山、（山腰有石塔、呼曰不思議之塔、）岩石峙如鋒及、嶮岨不可言、

岩峅蔗峅之峅字無所見、然自古用來之、

【萬葉】たち山に降をけり雪をとこなつに、見れどもあかすかん今ならし。　家持

劔の峯　越路なるつるきの峯もありそ海の、思ひきる瀬もなとなかるへき。

【家集】雁かねは歸るみちにやまよふらん、越の中山霞へたてて　西行

白雪の積るは怪し横雲の上にみへたる越の立山　他阿上人

【東鑑】に、越中森尻寺の住僧、立山の一の谷といふ所にて、牛になりけるとあり、上件の智明坊の事と相似たり。

【元亨釋書】に、藏緣法師は、神融の徒弟なり、北國のみ遊行して、立山・白山を修練の場として、往來することたゆみなしとあり。

文覺上人と山の事は、【平家物語】に見えたり。

行脚の僧、此山に禪定せしに、奥州そとの濱の獵師の靈あらはれて、故郷の妻子へ言傳せししるしとて、袖をちぎりて、渡しけると、善知鳥といふ諺にうたふ、そとの濱、奥州の名所なり、今もそとの濱にうとふ屋敷とてあり、傳へ聞く。佐々氏ざら〳〵越といふは、天正十二年十一月廿三日の事なりといふ、此節景淸盛嗣か、仙人になりたるに逢しとなり。（此事出中山城守か記錄にあり、此城守は太閤秀吉公の右筆なり、）大寶元年より享保二十八年まて千三十五年歟、

【延喜式神名帳】に、雄山の神社といふは、此立山權現の事なりと、神職の人申されし。

立川寺　眼目（サウクハ）　禪宗　大徹和尙の開基、大徹和尙は、能登の總持寺の開山瑩山和尙の第五弟子の其一人なり、此寺の材木は、悉立山權現の寄進し給ふといへり。又化女來

りて傳法し、其布施として袈裟を上る、その袈裟今なほあり、世に比類なしと云、末寺餘多あり。

日石寺　大岩山　眞言宗　不動明王　矜羯羅　制吒迦　行基菩薩作

傳云、昔行基法師諸國に遊行して、佛像を造り給ふ、然るに越中白石と云處にて、東方を臨み見るに、東山の麓に火上石見ゆ、行基直に行て此不動尊を彫刻すといへり。

大瀧小瀧あり、又藤の水と云あり、諸人眼病の治をいのる。

文祿十五年　壬午　七月廿七日、越後彌ち谷といふ處の百姓の盲目こもり居しに、靈夢に、此山の瀧のわきに藤の木あり、其根より水出へし、その水をうけて眼をあらふへしと、有がたく思ひ、御告にまかせて、廿七日の曉、藤を尋て登る。盲目なれは途方もなし、二十七日はまつりなれは參詣の人多し、しかゝと語れは、人々手を引、腰をおして、藤の木のもとへ至り、さくりて水をもとめ、信心肝にめいして洗ひけれは、忽兩眼をひらきて、山を下る時は、杖もいらずとなり、參詣の人親ら是を見たるなり。

明日（アケビ）親音堂　觀音春日作　眞言宗　法福寺　千光坊　甚古跡なり、門の

の仁王は弘法大師の作といへり。

上瀧不動尊　禪宗　大信寺

最勝寺　蜷川村　禪宗　此村に、蜷川寺と云一向宗の寺あり、是も新左衛門の由緒あり、最勝寺とりは蜷川村と云、蜷川寺より最上寺村と云、蜷川新左衛門墓位牌等あり、蜷川氏の事は一休物語にあり。

願樂寺　生地（イクチ）　東派　出【三才圖會】

上宮寺　砂子坂村　西派　蓮如上人の御子の開基か、猶八尾の處に書之。

瑞川寺　林崎村　禪宗　今無住也、

弘誓寺　飯坂村　西派　蓮如上人の御子の開基、井澤村明淳寺など同し開基なり。

猪谷御關所　越中と飛騨との堺なり。　猪谷より半里はかりこなた、舟渡村とのあいだに弘法大師の蒔給へるとて、四季たへす菜生たり、近鄉より、是を摘とるに盡る事なしと云。

鹽村　鹽野淸水、其淸らかなること、たくひなし、近き頃迄御旅屋あり、鹽野南北二里東西一里ありといふ。　安永九年開發田

布市村　桃井播磨守居せし處、興國寺といふ禪宗の寺あり、此寺の本尊は桃井播磨守の看經佛といふ、桃井の位牌あり。れんだいせよじといふあり、是は富山滿淨寺、蓮臺寺と云て、天台宗にて、布市に有し跡と云、今正月毘沙門天の繪を配る、昔は此寺より出しとかや。又ぜん塚、五郎塚とて、二ッの古塚あり、ぜん塚を錢塚といふ、世に作の鞍と云あり、この鞍うちの名人はこの布市村に居せしといふ、何さま布市は城市の跡と見へたり。

月岡野　布市の續き廣野なり。

黑瀨村　黑瀨千石とてむかし禁中へ、貢を納れたる處とか

や。天正年中神通川の瀨かはりて、所々になりしなり。今嶋黑瀨村なといへるも別れけるとなり、日宮（ヒノミヤ）權現といふあり、此御神體は金鏡にて有しに、河水に流れ行て今は能州に在とそ。神通川と熊野川とおち合のきはに、此日の宮の跡ありて、今も祭禮をなす。又桑名孫左衛門といへるは、此ところの盛なりし時、由緒たゝしきものなり、この子孫今猶この邊に在とかや。

友杉村　極性寺屋敷、佛松と云あり、【三才圖會】に傳あり。

舟倉村　舟倉權現　祭禮は三月廿五日・十月十二日なり、十月の神事、まれなることなり、能登の石動山の權現と鬪爭事ありて、舟倉權現礫を打給ふゆへ、上野といふ間には差て石なしといへり、又石動山の權現とは、陰陽の神にて、嫉妬にて、礫をうち給ふともいひ傳へけるなり。

古城　古城跡といふへきを、通辭に古城といふ故、今も是に隨ふ。外川・猿倉とて二處あり　戸川は飛驒の國錦山の城主鍋山休庵の家臣白屋筑前守、越中へ切て出るとて此外川の城に楯籠る、それより福澤の城を責、或は今泉の城河田豐前守を攻落す、【信長記】に越中今泉城河田豐前守も落城すとあり。其後、岩木村に付城いたし、城生の城主齋藤次郎左衛門を責む、齋藤次郎左衛門より越後の長尾家へ後詰を賴む、是に依て長尾家、出馬にて白屋筑前守を飛州へ追返す。

この白屋後に讒信の幕下なる由【甲陽軍鑑】等に見へたり、後の抜書と見合はすへし。　猿倉は、寺嶋三八郎と云人の居城といふ。

また此山に大きなる穴あり、人穴といふ、大勢の人かくるへしといふ。

堺御關所　越後越中の堺なり、堺護國寺　眞言宗　有五太刀菩薩堂。

阿計呂（アケロ）山　越中越後堺川の奥山なり。相傳云、昔山姥有て此山に棲む、古木の榎あり、是すなはち携し所の杖なり。

【三才圖會】　今是を尋るに越後の領なりと云り、堺川かわりたるへし。

泊町古城　此城は、小塚權太夫といふ人の居城なり、山城にて堅三十間横二十間、泊町より五十間ばかり往還道筋にあり。　横尾古城、泊町より半道計東北横尾村山上にあり、笹川を隔て南は横尾北は宮崎。

宮崎　三郎屋敷　古城有、宮崎南山上、後白河院第二の御子以仁親王の御子をは、治承の亂の時、以仁親王の御めのと讃岐前司重秀が北國へぐしまいらせたりけるを、木曾義仲もてなし奉りて、越中の國宮崎といふ所に御所をつくりてすへまいらせ、御元服ありけれは、木曾か宮とも申、又げんそくの宮とも申けり。【源平盛衰記】此以仁親王と申は、高倉の宮の事なり、治承四年源三位賴政のすゝめによつてむほんし給ひ、矢にあたり失給ふ。

松倉古城　鹿熊の城とも云、加積鄉なり、竪二十間横十六

間有とそ、北の方高さ五百七十間、西の方高さ六百四十八間、東の方は高山峙ち連り、南の方は大河ながれ出るなり、北川魚津町へ出る角川なり、魚津より一里二十五町有といふ。

普門藏人俊清居せしなり、越後の國大井田彈正・中條・鳥山・風間・神津・太田・瀧口を初として、その勢都合二萬餘騎にて、新田義貞の加勢として、越中へ打こへけるを、普門藏人國の境へ出て、是を支へんとせしかとも、俊清無勢なれは大半討れて、松倉の城へ引籠るよし。【太平記】二十巻にあり。

【中古日本治亂記】云（此文段長しと雖とも前後に因ある故に、書入るゝなり、又又略せる處もあり）

應安二年九月桃井播磨守宮方たるによつて、先年越中の守護職を取放され、此方彼方浪流しけるか、義詮將軍の薨去に時を得、一族幷に舊好の者を相語ひ、直常か舍弟修理の大夫直信、其弟三郎直弘か息刑部少輔詮信、直常嫡子中務少輔直和、一味同心して、其勢七百餘人、國民を追捕す、彼の國の守護斯波義將、此事を聞て申けるは、我父足利尾張守高經入道道朝執權たりし威勢に募りて、嫡子左兵衛佐氏頼を、執事職に補せられたるに、道朝入道、氏頼を惡んで執權の事を妨く、氏頼父を恨て遁世し、玉田庵主心勝と號す、依て義將家督を繼て九州の探題に被補、陸奥守家長加賀の國に

居住す、兄弟悉國々の守護と成こと、武恩を忝くする所也、然るに我守護の國に敵の足を留させんは、一つには無忠に似たり、二つには無勇といはれん、三つには大將の器に非す、早く駈向つて誅すへしとて、二千餘騎にて馳向ひ、直常か屯を襲打たり、中畧直常つるに、戰負け松倉の城に引籠る、息直和猶素懷をとけんとて、越中の長澤と云所へ出張して、所々を放火したる所へ、義將二十騎にて馳向、散々に攻戰す、直和も爰を先途と戰けるか、大勢に敵しかたく、直和遂に討死し、其餘黨皆沒落し、越中平均したる由申けれは、將軍を初て筑紫發向の首途よしとて悅ひたまひける。同卷に先年越中蜂起して、斯波義將と合戰しけるか、利を失て松倉の城に籠りけるに、其子直和越中の長澤へ出張して、義將と戰しか利を失ひ討死し、餘黨悉沒落し、今は頭をさし出す事も叶はしと思ふ處に、應安四年の七月、直常は再殘黨を相集て、松倉の要害を稠く構へ、兵糧の料とて近境の民屋を追捕し、料を運入、彼國は桃井か本國たるに依て好み深き者多し、又同國の石動山（イスルギ）の大衆二千餘人、桃井に心を合せ斯波義將を討んとはかる。義將大に驚き、其勢四千餘人を引率して石動山に押寄、追手討手相分て散々にこそ責たりけれは、大衆二千餘人も二手に成て、仁王門の坂口に出向て、爰を先途と防ぎける。桃井は五百餘人を引

卒し、城には二百餘人を留めて、七月十六日の酉刻に、斯波か本陣へ寄たりける。大衆後詰の勢に力を得、二千餘人時の聲を合て、前後より揉立しかは、軍兵共立足もなく敗軍する。大將義將も希有にして落行き、悉追討して首四百八十餘級を討取けり。其後應安七年に將軍九州御發向の時、義將も御供の人數を催され、九州へ赴く時、一向此國を打捨て上るならは、桃井隙を伺ひ蜂起する事も有へしとて、舍兄左衛門佐氏頼に、軍兵大勢を差添て、越中に留置、松倉の城を押へさせ、吾身は上洛したりける。去れは其間にも桃井度々打出て、鄉民を追捕して、亂妨狼藉せしかとも、漸く足輕軍して、はか〳〵しき合戰はなかりける。（義將、越中の守護職に補せられたることは、【太平記】三十九にも見へたり）

天正九年二月、信長公京都にて、馬揃有べしとて諸國の大名を召る、是に依て越前・加賀・能登・越中の大名何れも上洛ある、此折を得て、越後の上杉景勝の臣河田豊前守、此松倉の城より伐て出、小井手の城を攻落す。此事京都へ聞へけれは、北國の諸將何もいとまを賜はつて馳下る。河田は佐佐が後詰のため歸國と聞て、小井手の城の圍をとき、松倉の城へ引入けれは、成政も居城寺山へ打入らる。信長公佐々の早速の成功を感し、城中の守護職を佐々に賜りけるよし、【北國太平記】にあり。椎名小四郎道三居城とも云。家傳鍛冶の抄に、義弘と云は、がうといふ鍛冶なり。畠山殿のこて丸の作者越中國松倉住人義弘と、打も有とあり、無双の名作なり。

小出　古城　小井手なり。平城にて、南北三十二間、東西三十間、水橋より十六町有と云、下條保内なり、佐々喜藤治居せしとなり。事は松倉の古城と合せ見るへし。

小川溫泉　小川觀音は、薗椿千本崎の海中より、漁人の網にかゝりて上り給ふ、故臺座に薗椿千本崎と彫付てありと云、心蓮坊・光覺坊・靈藏坊の三寺あり、眞言宗天神山の東南の麓びり谷と云ふ處なり、此溫泉小川村に有しに、此所へ飛しとて小川の湯といふなり。此小川村の辰巳に佛か嶽といふ高山あり、雪の消る頃ほひは、大入道の立姿に見ゆる故僧か嵩とも云なり。

館古城　下條保内なり、土肥美作守の居城と云ふ。

天神古城　加積鄉小川の山入なり、【甲陽軍鑑】に、景勝我身にかゝれる大事と思ひ、何さま一合戰と存つめ、七日路ばかりの處を後詰して、天神山大岩寺野に陣とると有。天神山大岩寺二ヶ所なるへし、其間に村川あり。

大岩寺野　大海寺野なるへし。名のみにて、今は大半田畠村里となれり。

吉祥寺野（南部の古城二津村に有、平城なり、南部五左衛門と云ふ人の古城といふ、）吉祥寺禪宗、むかし

吉祥寺伽藍にて有しゆへ、野の名もかく云なり。今も其礎等有、此野に犬の城と云有、此犬を大谷と名つけしなり、犬の頭なりとて、今も歳末年始の禮なとと云て、諸方より犬の多く來ることありとそ。怪談なりといへとも、まのあたり見たりなど云に任せて、爰に記す。

かうがしら谷　浦山の高なり、こゝに大なる巖あり、此岩に人の手足の跡、馬の足なと彫付たること有。所の人はいろ〳〵の傳說をいふなり、あやしきことなり。

愛本橋　長三十三間半、廣二間、駒寄四間四方。　糟岩愛本橋より三四町西街道邊に有、昔長者酒の粕を捨つ、其變て岩となる、後人神と崇む、祭禮の時は南無粕明神と唱ふと云。寛永元年に初て懸るとなり、【三才圖會】に相本橋大木を以て組出す、棧橋なり、木曾の棧も是にしかすと云。又無不非軒三千風といふ人の此橋の賦有と云、追て可尋之。此橋は四十八瀨といふ黑部川にかけたるなり、越中は川多して橋なし、越中七不思議の一つなり。正保二年二月、　小松樣江戸御發駕の節被仰付、所々川々に橋懸るなり。生地の邊に孤松有、此松を白鳥大明神の社の跡と云。

新川郡の川をいはゝ、　堺川・笹川・小川・舟川、舟川、小川一つになりて赤川と云。

黑部川四十八ヶ瀨、布施川・片貝川、布施川、片貝川一ツに落合。

角川　此川より西を上新川郡といひ、下を下新川郡といふ。　早月川　名所の遺槻川か、はひつきはやつき和語相近。　上市川、堀江川上市のすへなり、大岩川、白岩川、栃津川前はわかさ川と云。　常願寺川、大岩川・白岩川・栃津川・常願寺川すへは、新庄川・荒川・赤江川・鼬川・堀川一ツになるなり。常願寺川、【甲陽軍鑑】に出、

熊野川・薄波川・神通川、熊野川・薄波川・土川・井田川・山田川、皆神通川へ落合。　此ほか小川有といへとも是に記さす。

臘月晦日、生地と魚津との間に潮干有。一里ばかり干となり、是を知人稀なり、又蛤樓臺を作る事此沖にせつ〳〵有といふ。

三日市　德法寺東派有辻源左衛門者、初謁親鸞聞法、爲俗弟、其子孫相續爲住持、【三才圖會】三本柿と云あり、即上人の栽給ふ木なりと云。　越中に櫻井と謠にうたふは、此三日市のあたりとかや

魚津古城　【七國志】に云、天正十年五月信長公、越後の景勝を退治すべき旨、柴田以下の北國の諸將に下知し玉ふ、是に依て柴田修理甥佐久間玄蕃允・佐々成政・前田公・德山五兵衛・神保安藝守・椎名孫六入道以下四萬八千餘騎を從へ瀧川左近將監一益・森勝藏長一と牒し合、越中に發向し魚津の城を攻動かす、是に仍て上杉景勝魚津の城の後詰のため、居城越後の春日山を打立て越中の天神山に陣せらる、然る所に信州海津の城主森勝藏大田切より景勝の居城春日山へ亂入の由、聞へしかは、上杉家大に

驚き天神山を引拂ひ、春日山に歸陣せられ柴田以下諸將、氣にのつて、頓て魚津を攻破、城將吉江織部・河田豊前守を初め、城兵等を悉く討取て勇み進む事限なし。然る所に同き六月四日京都の飛脚到來して　去二日京都本能寺にて信長公御父子ともに日向守光秀がために、御生害の由を告ければ柴田以下の諸將大きに仰天し、陣中上を下へと騷動し、我先にと魚津表を引取ける。下畧

此已後越中大納言樣御手に入、城生村の城に入置せられ青山佐渡を魚津の城へ入置せらる。魚津の町に久阿幸因とて、町人家二軒あり。大同年中より子孫相續今に有、此二軒折々不思議も有と云。

天神山大岩寺野　天神古城は魚津より南の方一里餘にあり此天神山の邊に大岩寺野と云處なし、魚津より半里はかりに大海寺野村、天神山より西にして、其間に六郎丸村陰田村石垣村等あり片貝村あり

滑川（ナメリ）　今枝内記をこし給こと、【三壺聞出】に有

水橋　【枕草子】に、わたりは水はし。註に越中とあり。

升方古城　加積鄕なり佐々新左衛門後に竹田宮内といふ人居城と云、西北は高山峙連り、東南は切れ谷なり、堅二十五間、横二十間有と云。魚津より一里十一町あり、今も五月五日の早朝に、この古城に數十ながれの旗のみゆること有といふ、寔にこれ有哉。

佛生寺古城　高野の鄕なり、城主不知、追て可尋之。

館古城　弓庄鄕なり、戸井美作守居せしとなり、南北六十八間、東西二十八間あり。

堀江古城　戸井左衛門尉居城となり、南北三十間、東西二十八間、高さ五尺ほと有、城下に川有、此川高月川なり。高月より一里十町有と云。

大村古城　轡田豐後守居せしと云、東西二十六間、南北三十八間、水橋より三十三町、長榎五ヶの内なり。

東岩瀨　ひかし岩瀨にて、

早稻の香や、わけ入みきはありそ海。　はせお翁

古城　廣田鄕なり、東西三十間、南北九間、岩瀨より一里三十町有、三輪權平居せしとなり。この權平は佐々成政の臣なり、【七國志】には、三輪權平は堺を守らしむと有。

町新庄古城　此城主は、轡田備後守・井上肥後守、兩入楯籠り、越後景虎と大きなる合戰あり。新庄より富山までの間に、しりたれ坂、びや橋なと云有、其節の合戰の街なりと、びや川とて昔は大河なりしとなり今は少の跡有。さて此城は、元龜三年に落城すとなり、其跡今東西七十五間、南北六十八間有なり。私曰、佐々の爲めに落城なるへし。舊記に據有なり。然れとも佐々は天正年中越中へ來

る、元龜三年は天正元年なり。此說も是か、猶ほ追て尋ぬべし。

又此びや川の道筋に石地藏有、此石佛を縛れは瘧病かならすおつると云。昔此所に淨土寺といふ伽藍有、經堂のありしところを、今經堂村と云是なり。この石佛も淨土寺の地藏なりとそ、此淨土寺の本尊は今富山淨誓寺の阿彌陀如來なり。

（上人松）

淸水村　享保十四乙酉年閏九月四日此村に一株の松有、大さ梁にすへし。然るに三日の夜より、此松に一丈ばかりより火燃付て、四日には枝ことに火移りて燒のほる、いかなる故といふ事を知らす。此木根本より虛なれは、根もとに煙草なと捨しにや。其節見物の人おふかりし。此松の下は小松原作左衞門と云人の墓なりと云り。

又處々に上人松と云有、是は准如大僧正江戸へ下向の時、御輿たちて門下の拜禮をうけ、其御輿の立し處々を、門下追慕のあまり松を植て、後世のしるしとす、是を上人松と云。

町村の宮　景淸の墓なりといふ、平家の侍惡七兵衞にては有べからす。ある人の云、越後の景勝の類葉なと傳へしともいふ、追て可尋之。

神宮寺　日養山　眞言宗　在上掛尾村　聖武皇帝日本に七ヶ寺神宮寺を建、其一寺なり。

吉岡村　【東鑑】に云ふ、吉岡住、

柵ヶ原村人穴有、此穴越後へ通りて、先年白き犬を越後よる入ければ黑犬に變して此里へ出けると云。

下伏村　蛇骨つらなる累〳〵たること半道はかり、白くして白石をならへたることし、いつれの時、何のために死たると云ことを傳へす、今猶のこりて有、土砂を蔽しゆへにさだかに見へす。

國分寺　高堂村　藥師堂あり。

布市村天神　佐々成政公、三輪權平を尾張へ遣し、尾州の天神を爰に勸請すと云り。神の字シンと淸く讀へし。菅家にてはなし、國常立の尊なりといへり。

富山　往昔は藤居村と申せし處となり、されは普泉寺は前は富山寺と云しなり。藤居山と云ふ。藤居村といひしゆへに此號ありと、古老の說なり。

御城　昔は安住の城と申て、神保家二三代居城、其後佐々成政越前より引越る、此事往々に是を記す。天正八年閏三月のことなるへし、其以後朝日山の砦より加越のあらそひ始りて、末盛、鳥越等の合戰にて、天正十三年九月五日佐々降參にて、大納言樣御領となる。かくて守山へは利長樣入らせられ、富山の城へは前田作州入らせらる。其以後慶長

十三年利長樣富山へ入らせらる、西は安養坊吳服町より東は新庄水橋まて、御家中建つゞけたり。町家はいたち川の端より諏訪の川原、磯邊木町まて、建つゞけたり。斯て四年富山に御座なさせられ候所に、鼬川の端柄卷屋彥三郎といふ者、三月十八日に出火いたし、御城を初め富山大略燒失いたす、是によつて利長樣、高岡へ入せらる。其跡しはらく山本淸三郎支配のよし。其後寬永十八年十月中旬に、淡路守樣あらたに錦城を築せ給ひ、御入城となり。【御尋書上】【三壺聞書】【末守記】【七國志】等の趣なり。

（米たかしひ）

佐々成政降參にて、新川一郡は太閤より成政に下さる、其以後筑後國を下され、國中の一揆をしつめ、上洛のせつ、攝州尼ヶ崎にて切腹となる。然るに依て新川一郡太閤の御藏入になりしなり。扨土方勘兵衞雄久と云は尾州犬山の城主にて、織田信雄卿の家臣なり佐々降參の節信雄卿より、秀吉公へ使者に越れし人なり。大納言樣とは、御外戚方の御緣類とかや、然るに信雄卿秋田へ流人と成給ひしかは、土方も流浪して加州へ來り、此由加州より太閤へ上意を伺給へは、秀吉公より新川郡の內布市村の南の方にて、一萬石土方に下されける、ひしかた米といふ是なり、其後は新川も御領となる、土方の一萬石は御公領となる、然るに百姓とも、あまりに驕、其上御領にて犯科人なと逃入しゆへ、今の能州かいそくろしま等の一萬とかはりけるとなり。

富山町數九十一

府內寺院神社

天台宗

圓隆寺　前は西養寺と云、敷地元祿年中迄は鼬川の際今の正念寺の北にあり。　照岸寺

眞言宗

眞興寺　觀音堂行司　普泉寺　藥師堂　宥照寺　不動堂閻魔堂

來迎寺　前は海禪寺と云觀音堂　長久寺　正念寺

顯正院　不動院　愛宕宮　祐眞院

高像寺

禪宗　曹洞派

光嚴院　御菩提寺常會出【三才圖會】　海岸寺

淸源寺　全慶寺

同法燈派

蓮華寺　行司　興國寺　太平寺

淨土宗

西養寺　極樂寺　守山　來迎寺　寺川

大信寺　蓮臺寺　來迎寺　布市

極樂寺　富山　守山極樂寺、富山極樂寺、金澤にも二ヶ寺高岡にも二ヶ寺、佛眼妙心法親王開基

淨土眞宗　西派

蓮照寺　願稱寺　滿德寺
長源寺　金乘坊　大德寺
願海寺　正龍寺　淨誓寺行司
妙福寺行司　滿淨寺　長念寺增山
遍照寺有澤　西岸寺　明榮寺
大雲寺前は長福寺と云。　乘光寺　正源寺
持專寺　明德寺、此持專寺は京都常樂寺の通寺なり。圓覺寺、持專寺、末寺四十餘寺あり梅澤と云。

通寺　古國府勝興寺の通寺也、乃富山勝興寺と云。

同東派

永福寺行司寺と云　永宗寺墨崎　蓮照寺堀
專琳寺　極性寺【三才圖會】に傳あり此に略す。　覺性寺
正覺寺　應聲寺
妙樂寺　樂成寺　聞成寺
專福寺　慶念寺　明休寺
善久寺

法華宗　一致派

大法寺敷地法華寺屋鋪と云處、今の練若當上人再興懶菩提寺。　本顯寺
立像寺　妙國寺　妙傳寺
法華寺　全勝寺　本證寺

乘光寺　立正寺　長淸寺

同　勝劣派

本壽寺行司　正顯寺　長蓮寺
本陽寺　安立寺

時宗

淨禪寺

寺々之傳記依繁多略之。

正一位　山王權現　山王祭富山奉宮、往古は向新庄邑に御鎭座と云也、祭四月中近世日限不定神主中尾大和守。【神社啓蒙】曰、所祭神七座、大宮大己貴命、二宮國常立尊、神皇產靈尊、聖眞子正哉吾勝尊、八王子國狹槌尊、客人伊弉册尊、十禪師瓊々杵尊、三宮惶根尊、右本宮七社也、所屬十四座、加上七座、稱二十一社、

神明　山王町　祭五月二日　吉尾伊勢守
中神明　山王町　祭六月十六日　近尾河內守

天滿宮　淨禪寺　天滿宮の御事は、神社考に詳也。不載之、今此天滿宮は法性坊尊意の畫とうけたまはる。敷地前は鮏川のはたに在、元祿年中いたち川洪水にて、今の柳町へうつす、祭三月二十五日。

祇園　圓隆寺　祇園緣起云、天竺二の地有國名九相、其國有園名吉祥、其國中有城、城中有王名牛頭天皇、又名武谷天神、婆婆竭羅龍王女爲后、生八王子、其眷屬八萬四千六百

五十四神と云云、

白山權現　中野町產宮也、祭三月朔日、八月十二日、

伊弉諾尊　號妙理大菩薩、

鹿島大明神　長柄町產宮也、祭三月十二日、八月十一日、武甕槌命

愛宕　不動院丹橋向　祭六月廿四日、將軍地藏菩薩

稻荷　稻荷町　本住院　祭三月十八日、

上宮土祖神、中社倉稻神、下社大山祇女云云、

稻荷　祐眞院　千石町

謂熊野彌三左衞門稻荷也、

此外町之名、雖有覺中町・仁右衞門町・柳町・宗爲町・隆覺寺町・藏人殿町等傳說、其傳區々而難爲信用、仍不誌之、

婦負郡

大底神通川より東を新川郡とし、神通川より西を婦負郡とす。然とも川を隔て八ヶ村新川郡とする有、しかも其村々入まじり所々に有なり、住古の謂れ有ことなるへし。又古老の物語には、昔は新川のうち馬瀨口と云あたりまて、婦負郡にて有しといふなり。

西岩瀨　昔石勢と書しなり、又以波世とも有、【名所方角抄】には岩瀨の渡り能登の國分也、能州に岩瀨と云處ある哉、此西岩瀨むかしはなるほと北へひろく、今よりは三里餘りも有ことなり、岩瀨の森とて大きなる森有、又岩瀨野とも云なり。

【新拾遺】　いはせのの秋萩しのき駒なへて、小鷹狩をもせてや別ん。　家持

【家集】　いはせのゝ鳥踏たてゝ箸鷹の、こ鈴もゆうに雪はふりつゝ。　定家

打出　むかしは三千軒ほと有、驛宿にて甚繁昌の地と申傳るなり。此所に花塚の松と云有、むかし此打出繁昌の處ゆへ、遊女あまた有しとなり、其中にはなと云遊君、わきて時めきしに、病にかゝりて、死たり、其墓に植し松、年經て大木と成しなり。九郎判官義經奧州へ下向の時、此松の下に休ませ給ひ、辨慶をめされ、この松見所おふし、見るにあかぬとをふせられしと、所の人は傳へけるなり。

長岡山

御墓所　延寶年中創建、

禪宗　眞國寺、光嚴寺下

早晩勤行

法華宗　經妙寺、大法寺下

百塚村　牛か首祭禮とて每年八月十六日相撲有、抑この祭禮は四萬石用水の祭とて、そのかみ山本與四兵衞と云もの此用水をいたし、上下四萬石の田にかゝるとなり。又

この百塚村に、富山蓮花寺の和尚、一石に一字の妙法蓮華を書寫し爰に埋む、うへに卒都婆を立、歌あり。

色も香も今は見へねと法の花、後のしるしの石ふみの跡

吳服山　安養坊山といふ【七國志】には、安寧坊と云、【太平記】に、桃井播磨守屯せしよし見へたり。關白秀吉公、天正十三年九月佐々奥州退治のため、此吳服山に御陣をすへらる。今の太閤山といふ是なり、事は【末森記】に委しく有。

七面大明神　五時谷、祭　七月十九日　富山　立像　寺

麓に華表あり、此鳥居の下へ昔は神通川ながれけるとなり。今五艘村と云は、船五艘にて渡しける處となり。或は船五艘此所につき埋しゆへ、名とするとも云。天正九年の頃、川の瀬東へなかれけるとなり。

五福村　五郎次郎則重といふ鍛冶居せし所なり、鎌倉五郎〝入道か弟子なり。

附刀鍛冶のこと。

宇多國光（宇津の故入道といふ、もとは大和鍛冶なり。）國房、國弘、國宗、貞宗、國友、友則（みな越中鍛冶なり。近世は清光なり。）

駒見村　内山大臣と云公卿の居せし所と古老の説なり、所見なし。また此里にヨウヤウト云老尼有り、此尼は狂犬となりてさま〴〵妖怪をなせしに、ある時山臥に足をきられて此里にすます。爾後三年ほとへて、射水郡あら山といふ所より、駒見村の八右衛門と云百姓のもとへ、書通をこしたり。犬の手跡なりとて、人みな是を見たりと云。

八幡宮　八幡村　天長八年八月十五日　勸請、

八幡村は、拜殿本社布目村に有しとなり。今の布目村の眞福寺別當にて、村社にてありしを、越後の長尾勢越中守山を攻し節、燒拂ひけるとなり。

北代村　往古は眞言宗の寺二十四ヶ寺有しにこと〴〵く斷絶いたし、只其内光明山極樂寺ばかり今にあり。此寺に神保家の高札其外書ものあまた有、繁昌の處にて有しとなり。

此村の野に長者屋敷とて跡あり、其姓名を傳へす。此長者屋敷の歌とて、近き頃まであたりのものゝうたひしは、

うれし千ばい、朱千ばひ、こがねの鳥かひとつがい、朝日さす夕日かゞやく、木の下にみつはうつぎのしたにある。

とうたひけるなり。また此村にすゞめの森といふ宮あり、いにしへ蜆貝船に積來りしに、此ふね嶋になりしを、宮屋敷にいたしけるとなり。この嶋船の形ちにて、今もこの森のなかに、蜆貝のから多くあるとなり。蜆の宮哉（すゞめの宮）

寺町村　寺屋敷墓所あり。是は海湯山寂照寺とて、京都東福寺末寺にて、大寺有し所といふ。

金屋村　此の村の西野と申處に少しの撰立あり。木曾義仲北國をうつて、責のぼられける時、宿せられし所にて、後代のしるしにとて、木賊を植置れけるとなり。近きころまで、多くこれありといふ、昔日は有澤の船渡しより金屋村かねかどりの瀬といふ所まで舟つきけるよし。ほせり坂通の往還なりといへり。

ほぜりの祭禮は、八月六日相撲あり。是は此邊を古澤屋仁右衛門と云者開發田にいたせしゆへ、古澤ひらきとも、仁右衛門開ともいふ也。

しら鳥古城　金屋村の高なり。神保長元是を築き、其以後は加州より岡嶋備中・片山伊賀守兩人入置せらると也。岡嶋は其後安田村に城をとり立てうつり、片山は五福村のすがけと云所に城を築て居せし也。今の伊賀の城と云是なり。

安田村　瀧の宮と云瀧有、此瀧にうたれ候へは、頭痛腰のいたみ治すといひて、此已前群集せしといふ。

友坂村　宮あり、越中大社三十六社の其一つといふ、追て可尋之、又朋坂山ともいふ、此宮の高に、糠塚（スカツカ）といふ色々の傳説を云、近き頃まで御旅屋あり。

長澤村　醫王山各願寺　眞言宗　文武天皇大寶元年勅願寺云云、

傳云、此各願寺は天台宗にて、比叡山の本尊と一體にて、三千坊有。越中より東國は、此各願寺にて、灌頂なとせしと云。（私曰、大寶年中は、天台宗興行よりは、七十年許前なり。天武天皇の御願天台宗といふことは恐くは非也、猶可尋之）是によつて、山門の衆徒大きに憤り、嗷訴に及ふ、灌頂等停止せしむるのよし、勅使をもつて、各願寺へ仰下さる、各願寺の衆徒奮勅使なりとて、是を殺害すと云、今の勅使塚是なり。其後叡山の衆徒大勢にて、極月下旬越中へ馳せ向ひ、醫王山を攻る是に依て一山の衆徒並に鄕民等防戰す、寄手戰まけ極月晦日三戸田といふ所へ引退く、各願寺の衆徒鄕民等さすか武士にあらさるかなしさは、きのふの軍に勝ほこり、正月朔日衆徒は本堂にのほつて勤行し、鄕民は家々に歸り油斷しける折ふし、三戸田の山門勢又押寄けるに、軍不意におこりけれは、一山忽に責おとされ、堂宇をはしめ三千坊一時に燒はらいけるとなり。此時多く兒の有しに谷へ逃けるを、寄手のものともこゝかしこに切ふせ、こと〴〵くうたれける、兒谷といふ今に有。又嶺つゞきに藏屋敷といふ所有、今も燒米なと有とかや、花水谷といふ谷のうへに、清水有、各願寺の閼伽にくみし所と云。またしらかけの清水と云ふ、この水日中に器に

汲入るに赤光ちらりと霞のやうにちりて、跡もなし、器にふたをして、其ふたを明る時また元の如く赤光たつとなり。此長澤にて、應安二年桃井播磨守の息中務少輔直和出張して、斯波義將に戰まけ打死せし由【治亂記】に見えたり。【王代一覽】にも有、前後新川郡古城の下に記す。

羽根村　古城あり。

富崎村　此村鑄物師の天福年中の龜鑑有、所の傳へには、勅筆なりといへり。此御綸旨に公卿の名を多く連書せり、然れは勅筆といふこと、いかゞ、されとも、一行一句も御宸翰なるにや、不淨不禮にして、拜見せしものは立ところにたゞり有こと、揭焉也。當時は社におさめ宮となすなり。二月九日祭とす、御りんし祭といふことなり、天福は八十六代四條院の年號なり。

瀧山古城　水越入道といふ人取立、その後は神保越中守居城とす。越後の上杉家と合戰いたし、越中守戰負自害いたさる、それより越後爲景礪波郡增山の城へとりかけ、是も勝利を得られ、歸陣の節油斷いたされ、終に討死せしとなり。其後は、神保の臣寺嶋牛之助、同甚助此城に居せし所に、佐々成政に責つめられ、大戸山へ引退、其後牛之助・甚助、成政の幕下になるといふ。（此說先年依御尋書上の趣なり。）

按するに、此一件舊記の據をしらす、佐々氏は、信長公より神保かひそへに、越前よりつかわさる、元より神保と佐々は緣者なり。然は神保の家臣たる牛之助・甚助、佐々との取あひ、疑なき事にあらす、越後爲景も本書は、謙信と有、私に爲景と記す也。謙信公にいたしては、前後都合せぬ也。委く此末に記す、猶明人是を糺せ。

城生村　古城　又是も神保家かき立のよし、其後あき城になりて有所を、齋藤次郎左衞門（又は一鷗）といふ人井田の城より城生の城へうつる、然に飛州の白屋筑前守越中へ切て出、岩木村といふ所に付城をかまへ、齋藤を攻る。齋藤危く覺へけれは、越後の長尾家へ加勢をたのむ、是によつて、越後より出馬にて、白屋を飛州へ追返すとなり。其以後佐々與左衞門・神保氏治兩人此齋藤を責動かす、佐々與左衞門は、葛原村の下に付城いたし、神保氏治は城生村の天狗平といふ所より責る。城中より神保氏治方へ使者をもつて、御望みを達すへくと、神保返しには、其方の繼父淨舟は、我ら敵に候へは、淨舟か首を渡されは、陣を引申べきと。是によつて家來齋藤喜右衞門・豊嶋茂手木淨舟をたばかり、打落し、神保へ渡す。神保よりまた城も明候へといひ入る、よつて城を明、佐々與左衞門に渡す。則與左衞門居城とす。齋藤次郎左衞門は、本國常陸の國へ引こしけるとなり、其後大納言樣御領に成ては、青山佐渡を御入置き、十二三年も居城として、後は魚津へつかはさる、其跡へ笹嶋三藏、石動より引こし入れ置せらると也。

井田村　齋藤次郎左衞門居せし處、井田川のすへは神通川に入。

八尾　一月に六ヶ日市有、買賣便あり。紙・苧・漆・糸・綿、

聞名寺　西派　鐘銘桐山下野聞名寺とあり其先、於飛驒國曰願智房、從覺如上人、願智房執持鈔受與之云云、越中飛驒有末寺四十三寺。

山田谷　溫泉あり、藥師堂　牛嶽大明神社あり、飛驒山に牛嶋といふ高山有、彌生の頃ほひ、雪の消かゝる時は、牛のかたちに能似たり、是によつて名とすとなり。

山田川すへは神通川へ落合、されは此川上にゆふねといふ所に魚とまりの瀧といふところ有。此瀧より上へは、魚いたることあたはす、是によつて魚とまりの瀧といふと云り、又此川源飛驒の國百瀨といふ所より流れいづる也、よつて百瀨川ともいふ。

布谷村　佐五兵衞といふ百姓あり、是は箕田源氏渡邊綱か子孫といふなり。

牛滑村　謙信塚、所の傳へには、越後の上杉景虎瀧山の城より增山の城を責、其歸りに打死にて此處に墓有といへり。

按するに、謙信公にてはなく、父爲景なるへし、其ゆへは【甲陽軍艦】に云、景虎公村上義清に對面なされ、仰らるゝは、我ら父爲景越中能登加賀三ヶ國を心かけ發向仕り、度々のせり合、合戰に勝利を得られたると申事を、我らは幼少にて、父にはなれしかと存せす、近國なれは義清には結句某より能御存なさるへく候、爲景勝合戰の後油斷いたされ、越中にて討死は其かくれなしと存、是よく此もとの舊說に符合せり。

同軍鑑に謙信公は、天正六戊寅三月九日に越後の春日山の閑所にて、煩出し五日煩、十三日に四十九歲にて、他界し給ふと有、然れは謙信公ならざること、明らけし。謙信公の代になり、管領職となり、武名高き故越後の長尾といふを、後人はや謙信塚と呼ならへし。例せは震旦を、漢土唐土といふか如きか。

又外輪野の高に大かまへ、小かまへと云あり、爲景陣を張られしところといふ。

蓮花寺村　神保越中守の墓あり、其事瀧山古城の處にあり。

上行寺　楡原村　日蓮宗　一村皆法華宗なり、古楡原法華とて名ある所也、惣してこの近在を楡原の保内といふ、

此楡原村に、畠山六郎重保の墓といふあり、所の傳へには、重忠の息六郎にて、此所に居せしに、正月十五日此處の八幡宮へ參詣するとて、風呂へ入ける所を、野心のもの有て、討とりしといふ也。またの說には、六郎のゆかりの者有之、このところに供養塚をつきしともいふ、說是ならん。又思ふに、足利將軍の時代三管領のうち畠山能州穴水に在て、越中も畠山恩補の國なれは、其枝葉に六郎といふ人有て、此所にて死せしか也。それを賴朝公の時代の重忠の息ととなへ違るにや。元久年中相州二俣川にて、北條義時と合戰して、重忠一黨打死なり。【王代一覽】にも載之。猶追て可勘乎、又この處にて千人切といふをせしとて、千人卒都婆といふ有、怪敷ことなり。

常樂寺　森田村　眞言宗

觀音堂　緣起云、文武天皇御勅願、大寶壬寅二年御建立也。本尊十一面觀音行基師の作、御堂十一間四面觀音を安置す。護摩堂六間四面五大明王を安置す、是弘法大師の筆なり。總坊都て一千坊有、其後仁壽二壬申慈覺大師當所へ下向有て、北方に三間四面の二重塔、南方に慈覺自七日七夜に千體地藏を御造立有之、七間に十三間の堂に安置す。前堂本尊同大師の作聖觀音なり、然るに前堂の下に靈水湧出、十間四面の池となる、池中より蓮花生し出と也、又當山の坤に五間四面の大日堂有之、諸國の齒骨を納る、今の高野山のことし。其後天曆四庚戌當山の座主、夢想によつて、天神の社を建つ、北野梅林山と號す、又鎭守は稻荷大明神と云云、其後兵亂に依て、破壞すと也。今も其靈像歷々とあり。

本法寺　黑瀨谷　曰長松山　法華宗　傳記云、日順法印弘安八乙酉出生、薙染而學台教、而正和元壬子二十八歲入宗門、元應元巳未建本法寺、而應安五年壬子五月九日壽八十七而寂云云、此寺に法華經廿八品の繪圖あり。傳て云、此繪圖は後醍醐天皇の嘉曆元年の春、越中放生津の浦に夜々海上に光暉あり、是によつて、漁人網をおろして、彼波の下を探りもとむるに、浮木のことくなるものを得たり。破りて是をみるに、二十二の卷軸有、則越中富崎の城主神保八郎左衞門尉に是を獻す。時の人何の圖繪と知ものなし、爰に本法寺の日順法印一々是を演說す。是に依て本法寺に寄附して、永く寶物となれり。また放生津の曼荼羅寺といふ寺も、此圖繪の初て上りたる處故、此號ありといへり。

後醍醐天皇の御宇に、富崎村に神保氏あるべきやうなし、疑らくは別人か、但し年月の違ひ有かといへり。猶可尋之。

鵜坂寺　鵜坂村　眞言宗　記云、鵜坂大明神、面足惶根尊分靈也、本地　藥師如來　白鳳二年御鎭座、鵜坂の事は、書籍に粗見へたり。むかしは神官祭の日楮をもつて、參詣の女をうちしと也。江州筑摩の事に似たり。又苗一夜に杉と成し故、苗杉といふ、今も有と也。

【萬葉集】には鵜坂とあり。

鵜坂川わたる瀨おほへ我駒の、あかきの水にそ
はぬれつゝ。　家持

いかにせん鵜坂の森に身はすとも、君かしもとの
數しらぬみを。　俊賴

麥嶋の宮　此宮に樫の木有、祭禮の日こと或は宿願有ときは、此木に鎌をうちこむゆへ、數百ヶの鎌打込て有、しかも、此木活生かわることなし。

べろ川。みかど川　此川むかし神通川のうち入てなかれける跡なりと云。

西勝寺　城生村　西派　古城在、城生村也古城前に記す。

明淳寺　井澤村　西派　曰寺尾、此二寺并に新川郡砂子坂村上宮寺、蓮如上人御子開基なりといふ。

野積谷　名目

室牧谷

高熊　高橋　柴橋　竹內　中村

谷內　宮ヶ嶋　尾久　窪　天池

追分　馬瀨　柚木　足谷　大道

下名　上名　須口　嶺　野須口

和山　北袋　坂下　高尾　上野

細瀧

仁部谷　長谷

切谷　杉ヶ平　瀧谷　庵谷　夏前

東原　新屋　西ヶ原　田頭　野

內名　嶋地　谷　清水　花房

上牧　一後谷　薄尾　安澤谷　二ッ屋

横平　上中山　栗須　栃折　名ヶ嶋

土玉生　小谷　正間　平澤　吉友

大玉生　下畠　尾畠　無道原　倉谷

谷折　三杉　鼠谷　草連　入谷

上仁部　下仁部　大下仁部

東野積谷

獵師原　桂原　西松瀨　赤石

布谷　東布谷　東川倉　下牧

西川倉　川住　岩嶋　水口

上ヶ嶋　宮ヶ島　宮ノ下　道畠

下中山　青根　乘嶺　新名

高嶺　下乘嶺　八十島　上田地
下田地　東昔坂　西葛坂　油
或書に曰く、野積谷は、住古より國司守護と云ふものなく、帝へ金銀糸綿蠟等を貢とす。
この谷の支配人は、天文年中より永祿年中まで布市村の渡部源四郎、大玉生村の阿倍新左衛門、島地村の湯淺亦兵衛、栃折村の武戸孫助この四人なりしと云ふ。

婦負郡新川郡寺院員數

三百九ヶ寺　内百七十一ヶ寺　金澤御領　富山御領　浄土眞宗東西
二十五ヶ寺　内四ヶ寺　金澤御領　富山御領　法華宗一致勝劣
三十九ヶ寺　内十七ヶ寺　金澤御領　富山御領　眞言宗
四十四ヶ寺　内二十七ヶ寺　金澤御領　富山御領　禪宗曹洞法燈
十七ヶ寺　内九ヶ寺　金澤御領　富山御領　浄土宗
二ヶ寺　富山御領　天台宗
一ヶ寺　富山御領　時宗

以上

越中舊事記卷之上　終

越中舊事記卷之下

神社・佛閣・名所・舊跡

礪波郡

加禮谷　此所に四尺はかりの石を削りて、三稜とす。是三郡の界也。北は射水、東は婦負郡、西は礪波とす。

三十三塚　來由しらす追て可尋也。

增山村　古城　此城主は、一熊川宗範といふ人居せしなり。越後爲景婦負郡瀧山の城を攻落、それよりこの增山の城を責おとすといふ。傳へて云、越後の長尾數年此城を責るといへとも、地の利よろしく、要害なれは、輙くせめ落し得す、寄手水の手をたちきるとも、城中水とほしからす。高樓の上にて、馬を洗ふ、其蕩々として瀑布のごとし、其跡に鳥の多く群りさわぐを見て水にあらす、白米なることを知りて、彌水の手をたち切、これによつて城中くるしむと。

私に曰、白米をもつて水に欺くこと、軍書に粗有、近代は不知、近代にてもかゝる淺術有ましきこと也、他をはかりてこゝに流傳せるにや。

又兵粮通路を塞く、食攻にす、されとも城中聊食にくるします。爰に此邊に妙淨といふ老尼有つて、寄手のものにをしへけるは、此城の兵粮は東の方の林原を通路として、婦負郡より運送すと、是によつて寄手この道をたちふさきて、五月十二日に落城すと云、今もこの林原一里ばかりも續てあり。また此林のうちに大きなる窟有、此窟の中へ人の入て終にかへらす。寶永年中のことなり。また此城の本丸とおほしき所に、手水鉢のごとくなる石あり、この石に水一升ばかり常にたゝへたり、汲かへるに盡ることなし。是はむかし此城中の和田川の水を、龍骨車のいきほひにして、此水鉢にとりたる、今に存して如此といへり。和田川は沼野俣と云よりながれ出て、小河にあらす。又此古城に向ひて、淨蓮社といふ淨土宗の寺あり、又淨妙か峯といふ有、これは兵粮の通路を教へし、妙淨か住しところと云、或は妙昌ともいふ也。

淺野谷　古城　是を鬼ケ城といふ、むかし鬼の住し處なりといふあやしきこと也。

千光寺　芹谷　眞言宗　鐘が淵といふ處有、此淵へ千光寺の鐘、兵亂の時沈みしとて、今も晴天のときは水に映して、鐘の龍頭みゆるといふ。

別所七山　此別所七山は、山の尾七つ喰ひちがひ出て、其あいだを河水めくり流るゝなり、景色おもしろき處也。

此七山の傳說は、昔祐福の者に賴成といふもの有、一人の女をもつて有、もとより容貌たくひなく、人あまた是をいひわたる。一日賴成のいわく、この高の窄田の野あり、四方水の便なし。若此野に水をあけて、田となす人あ

らは、我が女をめ合せんと、あまねく是をいひ傳ふ。爰に一人の男來りて云く、此野に水をあけて女をあたえんやと、頼成諾す。其夜うしろの山を突ぬきて、川水流れて水向ふ、頼成思ひけるは、是は人間の所爲に非す、大蛇のわさなるへし、頗る思ひ合すること有とて、多人夫を以て、水口をふさぎて、其野に水一をうけす。またかしこより川水むかへは、又せきおとして、水をうけす。かくのことくして、ついに女をあたへすとなり。今の七山其跡也と云。また此處に頼成村と云ふあり、是頼成の居せし處といふ。

やち川　昔このあたりに、親鸞聖人の俗弟有、然るに弘長二年のとし鸞師京都にて、遷化のよし聞ゆ。折ふし此門人雜喉を取得て、腸をぬき、砂を去。時しも此事を聞て大に驚歎し、彼多く腸をぬきたる雜喉を、此やち川へすつる、それより以後、このやちの川の雜喉はらわたなし、今にいたりてなをしかりといふ。昔吳王船中にて魚膾をこのみ給ひて、其のこりたるを海中へすて給ふ。是今のきすといふ魚なりとかや、されは鱠の殘魚と書く、鱠殘魚とは讀也。かゝるためしも有ことかや。

中田　軍書に般若野とあるは、此あたりなり。この中田を般若野庄内貞重の郷と今もいふ也。

貴船古城　越中貴船城主石黑左近並水牧采女、信長公の下知として、江州佐和山にて、切腹の事、【七國志】にあり。但し【盛衰記】に、越中に石黑氏有、壽永の頃ほひより天正年中まで、石黑氏子孫相ついて、この左近に至りて絶たるか。

末森等の合戰の節は、成政より佐々平左衞門をこの城に入置、其後御領になりては、津幡の城より前田左近秀繼樣御入なさる。然るに天正十三年七月廿七日大地震にて此城を動崩し、左近樣御他界なされけると也。此外庄川の川口辨財天、或は飛州山口へつづきたる處まで、此地震にて動崩したること、【三壺聞書】に、委しく有。又水牧村といふも此あたりにあり。

水戸田　井波　古城、成政の臣前野小兵衞居せしなり。軍士二千餘騎入置と【末森記】にあり。

瑞泉寺　井波　末寺三百五十餘寺　後小松院明德三年綽如上人建立す、綽如讓本寺於巧如、幽居當國礪波郡杉谷、于時異國書翰來于京都、有文義難曉者、以博識召綽令讀之、文々句々、如水流、叡感最甚焉、嘗欲建立一宇越中奏之、卽勅許下向于此所、乘馬俄斷留不行、其地涌出清泉、於此建寺、勅賜瑞泉寺周圓上人號、又改礪波爲井波、

三才圖會　又上宮太子の繪有、每年六月虫干有、諸方より參詣

交易しげくして市となる、【七國志】に越中大坊と有。

福岡芹谷野新村　往古せんだん野と云　爰にも謙信塚といふ有、婦負郡にも有、何れを是としいづれを非とせんかや。すゝきこの古塚に生茂り、人是を苅、或は馬などすすめは、必横死に逢こと有とて、此嘗薄にさわる事なしといふ。謙信公の墓ならすとも、勇士の古墳なるへし。なを牛滑の處に是を穿鑿す。（せんだん野）

嚴照寺　福岡　西派　百間四方拜領。

杤上新村　此處に蓮如上人ト居の跡有。

福光川　大なるうぐひ魚出る、名物、又左に山有、玉かい出ると也。

和田川庄川　尾矢部川　あらたま川　せんば川　山田川　此外小川有
子撫川　むかし東國より京師へいたる僧有て、此あたりの家に立より、茶を乞てのむ。此僧美僧にて有しに、其家の娘愛染のこゝろを生し、僧出てのち、其茶の餘瀝いささか、碗にのこりしをのみたり、それより懷妊して一子をうむ。父母其夫を問とも、答るところなし。かくて此兒三歳にいたる時、件の僧歸りつゝ、又此家に立寄、娘しかゝとかたりて、兒を引て僧にみせしむ、僧もおもふところの有けるにや、諍ふことはなく、念呪して此兒の頂より脚下迄、撫たりしに、泡のことくにとろけたりしを、この川へ流しけるとなり。仍てこの川の名ありと也。又此僧を、弘法大師ともいふなり、常に兒女のもの語に此事をいふ信なりや。昔女ありて、鴨川にて衣を洗ふ、折ふし箭一すじ流れ來る、鴨の羽を筈にかへて有しを取て家に歸り、軒端にさして置しに、是より女はらむこと有て、男子を生したり。是則今の加茂明神別當の命也と、舊記に有、類なき事にもあらざるなり。

櫛田明神　くし田清水、辨慶杖にて堀と云、この神體は、女のさし櫛なり。昔此下の池より大蛇出て人を呑、或時一女この處を過る、件の蛇呑んとするに、櫛におそれて、近付得す、其後此蛇出る事なし、仍て此櫛を留て、神と崇と云也

善德寺　城ヶ端　東派　檀越凡一萬餘人云云、【三才圖會】又作尉之鼻、城ヶ端は絹の出所也。（儀藤太秀鄕此地へ大蛇を放ちたりと云、城ヶ端より一里あり。）

繩池といふあり、わすれても刃ものを帶して近くことかなわす、もし近つけは、必怪我あると也。旱魃の時は、雨乞のために遠くより刃もの投入れは雨くだるといふなり。

卯花山　射水郡ともいふなり、（この池三ヶ月の形にして、長きこと二十丁渡り二丁ほと有）

【名所方角抄】云、卯の花山藪波里となみ山邊と有。

【夫木】　日影さす卯の花山にさよ衣、たれねきかけて神まつるらん　　小侍從

【新千載集】　時鳥卯の花山にやすらいて、空にしられん月に鳴けり　　守光

藪波里　やふなみの里に宿かり春雨の、こほりつらんと妹につけつる。

安居寺　彌勒山　眞言宗。

觀音堂　觀音　釋尊作云云、有證文乎仁王運慶作、

繪馬狩野古法眼畫

緣起に云、この寺は善無畏三藏、此所に紫雲立をみて、この寺を發起すとなり。

善無畏は、北天竺の甘露飯王の後胤なり、唐の開元四年丙辰に長安城に至る、同し年二十三年に入滅し、我朝の元正天皇の養老年中に、この國へ來られしかとも、法運時のいまだひらけす、人機熟せすして、化道端も無益のことくなりぬ。

我朝の養老元年は、唐開元五年にあたる、善無畏の我朝へ來る事、達磨の片岡山のことく相似たり。慶長年中、岡嶋備中寄進にて、觀音堂を初め大殿となるとなり。

あやこ村　この里は、竈の煙り外へ見えぬ處と也、いかなる故にかあらん。

弓の清水　辨慶故事。又は弘法の清水か。

しびれ川　橋あり。

今石動　能登の石動山、五社權現の神靈、此處へ飛給へしゆへ今石動といふなり。

熊野權現　【治亂記】に越中石動山の衆徒二千餘人、桃井播磨守心を合せ、斯波義將と合戰の事有、能登の石動山のこととともいふなり。

蓮沼　安居と今石動の間に蓮沼道場とて有、是を燒はらはれしこと【七國志】に有。

八幡宮　羽丹生、

木曾義仲願書　太夫坊覺明書　今信州康樂寺此覺明か孫也と云々。

【平家物語】に云、木曾我身一萬餘騎てをやべの渡りをして、礪波山の北のはつれ、羽丹生に陣をそ取たりける。下略　木曾は、羽丹生に陣を取て、四方をきつと見まはせは、夏山の峯のみとり、木の間より朱の玉垣等の見えて、かたそき作りの社あり、前には鳥居そ立つたりける。

松根

源氏峯

二俣　天正十三年八月廿四日、佐々成政富山を打ち出、松根の城、源氏峯、俱利加羅、二俣なと堅固に備なしてと、【末守記】にあり。

もとゞり山　このあたりにすむもの、男子をうむ、父母よろこぶこと限りなし。然れとも、成長するまて腰たゝす、或時一俵の米をかづきて、俄に腰たつ、語りて曰、この米は

われいつ〳〵、其方にかしたる米也。此米をとらんためにに汝か子と生れ來れり、今はもとどりしたりとて、此山へ入て見えすとなん。是によつてもとゞり山といふと、所の物語なり。此山高きゆゑ、海上より目當にすといふ。

俱利伽羅　名所の礪波山と云ふは、加賀と越中との境なり、峯に一宇の伽藍あり、昔越の大德、諸國修行し給ひしに、俱利伽羅明王を行ひ給ひたりしかは、夫よりして此山を俱利伽羅嶽とも、越中國礪波郡の名あれは、礪波山とも申也とあり

礪波山、

妹か家に雪のふるまひ知るやらん、となみの關をけふこへくれは　　顯季

越路にはそり行ほとになりにけり、となみの關の雪の明ほの

歌には關をよめり、又【名所方角抄】云、そりといふ物して北國の雪中にのりて行なり。かぢきといふものは、別か、歌などには見えすと有、かぢきは橇也、そりは雪車也。

俱利伽羅不動王　俱利伽羅山長樂寺寺領百十一石五斗八升八合一說曰、八劍大菩薩變作靈驗揭焉、又曰俱利迦羅、一曰俱哩迦、一云迦龍、一曰俱里、劍一云刀迦、黑龍纏繞劍、是不動威怒王三昧耶形也、於壁上畫一劍、以古力迦龍王繞此劍上、龍形如蛇、劍中書阿字、心中亦自觀此劍及阿字、了了分明心念不動使者、於羯羅制陀迦誦根本陀羅尼、一百八偏、一日三時滿六箇月、多誦益好　三才圖會　越大德と云は、泰澄法師也。神融和尚とも云なり、【元亨釋書】に傳有。

又くりからおとしとて、大き成古戰場也、普く知る處なりといへり。童子のなぐさみに、【盛衰記】を略して、爰にしるす、去ほどに、木曾殿吉例にまかせて、初は七手に分て、後は一つに寄合せて、もみに揉んて、南の谷追をとすへしとて、方々手をそ分られける。一手は十郎藏人行家、然るへき者とも、一萬餘騎、鹽の山の搦手へさしつかはす。一手は根井小彌太を大將として、二千餘騎、越中の住人蟹江治郎を案內者につけ、鷲嶋をうちめくり、松永の西のはつれ、鷲尾へうち上り、みろそ山を引まはす。一手は今井四郎兼平大將として、越中住人石黑太郎、高堅次郎光信を案內者にうちぐして、松永の日の宮林にさしつかはす。一手は樋口次郎兼光を大將にて三千餘騎加賀の富樫をうちぐして、かさのとん田を打まはり、竹のはしの搦手へこそは向ひけれ。一手信濃國の住人餘多次郎丸子の小中太、諏訪の三郎小林次郎、小室太郎忠兼、同小太郎實光、を大將にして、三千餘騎、越中の住人宮崎の太郎、鄉田荒次郎兄弟二人を案內者にて、安樂寺を通り、きん

ふ坂をうち登、北黒坂を引まはし、倶りからの峠の西のはつれ、薄原へさしつかはす。一手は巴女を大將として一千餘騎、越中住人水牧四郎、同小太郎を案内者にて、鷲嶽のもとへさし向ひけり。一手は木曾三萬餘騎にて、尾矢部川をうちわたり、羽丹生の庄に陣をとり、勢のかさを見せんとて、くしの木原、柳原に引かへす。下略源氏は、追手搦手さま〴〵、用意したりける中に、樋口次郎兼光は搦手にまはりたりけるか、三千餘騎其なかに、太鼓螺貝千はかりこそこめたりける、木曾は大手によせけるか、牛四百疋とりあつめ、角に松明をゆひつけて、夜のふけるをそ相まちける。是より「平家物語」を引く盛衰記文段なき故是を記さず。

去ほどに、源平兩方陣を合す、陣のあはい僅三町ばかりに寄せ合せたる、源氏もすゝます、平家もすゝます、源氏十騎を出せは、平家も十騎を出す、百騎を出せは百騎を出す、源氏は只日の暮るを相待ける。去程に、南北よりまはり、倶利から堂の邊に廻あひ、籠のほうたてを打叩、鬨をどつとそ作りける、各うしろを顧見れは、白旗雲の如くにさし上たり。此山は四方巖石にて有なれば、搦手よもまはらましとこそ思ひつるに、こはいかにと騒きける。去程に大手より木曾殿一萬餘騎、鬨を合せ給ふ、となみ山　そしの森に引かくしたる、一萬餘騎、日の宮林にひかへたる、今井四郎六千餘騎も、同しく、鬨の聲をそ合せける、前後四萬餘騎かおめく聲に、山も川も只一度に、崩るゝことこそ聞えけれ。さるほどに、次第にくらうはなる、前後より敵は攻來る、蓬やかへせ〳〵と、族をほかりけれとも、大勢のかたふきたるは、左右なく取て返すことのかたけれは、平家の大勢うしろの倶利からか谷へ、我先にとそ落行けれ、さきに落したる者みえねは、此の底にも道のあるにこそとて、親落せは子も落し、兄か落せは弟も落し、主を落せは家の子、郎黨もつゞけり、馬に人、ひとには馬、をちかさなり〳〵、さはかり深き谷一ッを平家の勢七萬餘騎にてそ埋めたりける。かんせん血をなかし、死骸丘をなせり、去は此谷の邊には、矢の穴、刀の疵のこりて、今に有とそうけたまはる。平家七萬餘騎か中より僅に二千餘騎そのかれたる。下畧また判官殿奥州下向の時、三條小鍛冶宗近か作の三日月と云太刀を、此倶利から不動へ献せられしこと、鍛冶家の抄にあり。

射水郡

有磯賦 并序

源支考

有磯はむかし大伴宿禰家持卿此國の守に任せられ、この浦に遊ひ給ふとて、四郡に越の風景を探りて、詠歌のかすくなからす、萬葉集に出る物しか也。騒客墨人も、愛に歌をよみ、詩をつくる、代々の撰に載る物多し、誠に三越の名蹤なり、西に箱崎博多といひ、東に松島蝋潟といひ、まして琵琶湖の八景といふとも、いかて此浦の産物にしかむ、こゝにそれ〳〵の耳目をかさりて、一篇に賦するものかくのことし。世に傳ふ萬葉集に駒なみていさうち行むしふ谷の、きよき、伊蘇未にとも詠し、或は有磯によする波、いや思久〳〵にいにしへおもほゆともよめる、南は奈呉の江にならびて、射水川此間にながれいれは、奈呉と有磯との波をわかち、北は能登の三崎につゞきて、眼前さらに果なし、須弥山のあらしは、蜑衣をひるかへし、二上山の月は杜鵑をまつ、英遠浦眞柴川・みすみ山の初雪は玉をけつり、もみち川の夕日は錦をひたす、たるひめの崎、まつたいの橋、このくれ山もともに名を傳へて、今はそのあともさだかならす、しかれは多枯の藤咲て、布瀬のしら浪と見ゆらんを、和歌には一景一名なるや。唐嶋の、めぐり二町ばかり、其かたち方壺をちゞめて、巓に辨財天を安置す、崖をめぐれる奇石怪岩も、龜鼈龍蛇の波にうかびて、ひとへに天宮を護するに似たり。昔源義經は安宅の關をしのぎて、しばらく此浦の風景にやすらふ、判官の茶の間、辨慶が沓の跡、沖の牛嶋、猿へり此二嶋は、かつきの蟹の息もつきあへぬ世のたつきに、袖をほすべき寄所とも、河武か嶋・岩崎か嶋、弓手には狩野中務の城有、馬手には長澤筑前守の城有、海老坂山の出城は、神保氏治の餘波を傳へ、乎布か崎の石壁は菊池入道の世盛をおもふ、金橋の觀音は、船からおかむによろしくて、朝日觀音は海より上るをたふとむ、このふたつの山は、白鳳年中にひらけて、共に靈佛靈場なり、さかり松、みたらし水、龍灯松の風靜まりて、年越の夜の闇をてらし、出雲窟の水清ふして三伏の夏の喉をひやす。しかるに明峯の光禪寺は、洞家に四箇の本寺なるよし、本は七堂伽藍とか。國泰寺はむかし尊氏の建立にして、由良に法燈の光りをつとふ。いつれも禪家の名區也。神社は射水布施箭代・磯部和泉の天滿宮は、相生の竹を生して、直なる道を世にしめし、金田の虚空藏は、枯木にあらはれて、禮徳の名に花さかす。諏訪野の松、五社宮の櫻、眞砂のちとりは、歌人の跡をつたへ、入江のかもめは隠者の影にともなふ。湊は、出船入船の帆をかそへ、吳東楚南の人をまじゆ、かしこに明州の津はしらす、三越に風土の隨一と稱すへし。氷見御座・氷見枇杷・鰯鰤・鼻曲みは鮨の名なからも、名よしにはあらて、あしく聞蠣・蜆・海苔・和布・うつせ貝は歌仙に名高く、鯛とるとは萬葉によめ

り。さては山里の土産には、葛葉笊・瑞田箕・早借筵・指崎縄・女良庖丁は曉が手になれて、終に惠王の厨を見す、長坂の桃、味正の柿、山のかせきも、濱のわたらひも、ゆふべの鹽かまの煙、沖にあかつきのいさり日の影みるに、愁腸を寫さすと云事なく、聞に、旅魂を驚かすといふものなし。近きは元祿の始ならむ、芭蕉老翁は秋にたとりてわけ入、右に早稻の香を吟し、詩佛老人は春にあそびて、嶋山の風情を詩に盡せり。しかれは今もいにしへも、此うら波のあとたへす、濱のまさごの永き世につたへしも、さしも遊覽の人の便ならんかも。【和漢文藻】

射水郡

加茂大明神　下村　祭禮四月四日、氏子競馬とり行ふ。

女堤といふ有めは安くなちんと、即此女を埋しと也、かくのごときの言說所々あるごとなり。（昔此堤をふせし時、一人の女來りていはく、此口に人をつき埋

伊勢寮　或伊勢領　往古馬寺といふ伽藍ありて、丈六の彌陀像有しと也、御頭御手なと殘りて有といふ。小杉の邊

覺寺とも、蓮王寺ともいふ。

明王院　黑川　眞言宗（加賀也越中黑川にあらす。）後小松院の時、當國疫病甚流行す、不動尊修護摩。【三才圖會】

高岡　むかしは、關野といふ處を、慶長十四年八月十六日、瑞龍院樣富山より御うつりなされて、高岡と付かへさせられけるよし、【三壺聞書】にあり。

熊野權現　祭は三月十八日、前はかわらけ町にありしを、此處へうつしけるを、瑞龍院樣御鷹野の節、まつ休まんと仰られしより、まつの宮ともいふと也。此社の傳說にいはく、平判官康頼・舟波少輔成經・俊寬僧都硫黃か嶋へ流さるよし、【平家もの語】【盛衰記】等に記したれとも、子細ありて、實はこのところなり、康頼熊野權現をたてて祝言の事も、此熊野權現の事なりと有、又傳記にも俊寬の墓、氷見に有ともいふ也。或記に曰、肥前の國かせの庄に、法勝寺といふ寺あり、此寺は俊寬僧都の建立なり、委くは當寺の緣起に有、是は成經康頼きかいか嶋を出る時、ひそかに僧都をぐし、此處にかくし置、年經て俊寬死せると有、猶可尋之。

稻荷社　おなし所にあり、社領二十石。

瑞龍寺　曰高岡山禪宗（寺領三百石、祠堂銀四十五貫四百九十一匁六分）微妙院樣の御時、明曆二年申より萬治元戊まて三年にて工匠功終る。但し、山門は正保年中出來すとなり、大工は山上善右衞門善廣漢土の徑山寺のさし圖を以てす、誠に無双の伽藍なり。

槃久寺　五十石、禪宗、利長公の御墓所あり。

大野路　【萬葉】

大野路はしはし芝原しけくとも、君し通は道ひろ

からん。

古老のいわく、往昔今の蓮花寺の近所しゆくし橋といふより北の方、放生津濱まて西東へも、なる程廣く大き成荒野にて、是を大野路と申せしよし、古來より傳へけると語りしまゝ、前に處在を知らすと書しかも爰に記す。

【中古日本治亂記】卷四十五其後、景虎北國の諸將と一旦和睦しけれとも、武田信玄も彼の國々を窺ひけれは、他人の爲めに被捕ては我北國にある甲斐なきに似たりとて、ふたゝひ勢を催して、永祿二年七月二十四日越中へ發向し、高岡に旗をたつ。彼國の大將椎名神保此事を聞しかは、渠も同く軍兵を引率して、景虎に對陣す。此時景虎下知を加へ、其夜の子の刻八手に分つ、先つ先陣は河田對馬守長政・大關阿波守盛次、其勢千騎、二の手は石川備後守爲之・高梨源五郎政頼千騎、三の手は新津丹後守正世・本庄美作守光重・本庄彌次治郎光信千騎、旗本の左右は毛利上總介爲秀・近藤出羽守嗣成、旗本の右は山岸宮内大輔貞臣・飯森攝津守重之・鳥山因幡守義胤千騎、旗本の先手は水原壹岐守隆則・鬼山吉小次郎親章・其外宇佐美駿河守實正・嫡子民部少輔實忠・唐崎孫次郎吉俊・黑金孫太郎保清・北條五郎景則・大貫五郎兵衞尉時奉・内藤主殿助正重・柏崎孫七郎時員以下千餘騎、後陣は長尾左衞門尉景村・長尾小次郎景連・越民部丞景信・竹の俣筑後守業家等千騎、遊軍には保田伯耆守義正・本賀志摩守頼直・苅和彦太郎實景・飯野源四郎景久・須田若狹守忠永千騎、又兼日より偸（シノヒ）を敵の方へ入て暇隙を窺ひ知り、前後左右より亂入十方に相分れ、在所を不定斬廻（キリマハシ）越中勢又大に打負て四方八方に逃走（此處合戰の次第略してこゝに記す）景虎軍に打かつて、首共實檢したりけるに、冑首三百二十一級其外雜兵たり。乃ち高岡に棹結渡し、彼首七百六級を梟並へ、勝鬨三ヶ度とり行ひ越後の國へそ歸りける。

是等をもつて思ふ時は、前より高岡といひけるにや、猶可尋。

そぶ川　この川より鱸いづる、名物にて腮の下のひれなしとかや、松江鱸とひとしくなりと云。

鱸つる江をわか里の、なかめかな　清　範

有礒海

【萬葉】有礒海波間かきわけかつ蜑の、いまもつきあへす物をこそ思へ

【夫木】大崎の有礒の渡り霧こめて、遠かた人も舟よはふ也

【新後撰】かよひくるなのみ有礒の浦衞、よそに鳴つゝ戀や渡らん

【萬葉】かたらむとかねて知せは越の海の、有礒の波も見せましものを　家　持

【同】大崎の有礒の渡りはふ葛の、行衞もなくや戀渡るらん　よみ人不知

【古二】我戀はよむともつきし有礒海の、はまのまさごはよみつくすとも　同

【後撰】しまかくれ有礒にかよふ蘆たつの、ふみおく跡はなみもたえなん　同

【拾遺】かくてのみ有礒の浦の濱千鳥、よそに鳴つつ戀や渡らん　同

【同】有礒海の浦と頼めし名殘なみ、打よせてける忘れ貝かな　同

堀川院の御時、けしうふみ合の時、人知れぬ思ひ有礒のうら風に、波のよるこそいはまほしけれ　俊　忠

有礒は越中の海の惣名にもよみ、又大崎の有礒といふは、別て傳へには海老江より堀岡までの間の海をいふとも、氷見あたりをいふとも也

越の海【夫木】能登の守になりて下りけるに
越の海に生てるるとも都鳥、みやこの人を戀しかるへき　順

【千載】天津空ひとつに見ゆる越の海、波を分けてもかへる雁かね。　頼　政

こしの海は惣名なるへし、射水には限らさるへし。

有礒渡　八雲渡り【國花萬葉記】に出、

【夫木】吹風の有礒の渡り波こへて、くつの若葉にむすふ白露　後九條

放生津　長翔寺　禪宗　曼陀羅寺　淨土宗　大樂寺　同
淨蓮寺　東派　專念寺　同　妙蓮寺　西派
長榮寺　同　勝光寺　同　光正寺　同
圓德寺　同

八幡宮　大社なり、祭八月十五日。

氣比の古宮　放生津に有、戀の山といふも、此處なとゝいふ也。

奈古

【金葉】逢ふ事もなこ江にあまる蘆鴨の、うき寢に鳴と人は知すや　攝政左大臣

【續古】月出て今こそかへれなこの江に、夕わするゝあまの釣舟　光　俊

【新續古】浪さわくなこの湊の浦風に、入江の鶺むれてたつなり　伏見院

【萬葉】あいの風いたく吹らしなこの海、釣する小舟こきかへるみゆ　家　持

【夫木】夕されは鹽風いたく吹らしなこの海の、寒き洲さきに鶴鳴なり　鷹司院

【同】いたつらに立や果なんたつの鳴、なこの江の小菅むすほゝれつゝ　衣笠內侍

なこの海の汐しはやひよあさりにし、出んと田鶴は今そ鳴也

【夫木】なこの浦あれたる波の嶋かくれ、風にかたよるすかの群鳥　經　正

【同】なこの浦の潮干のかたの秋きりに、猶あらわれぬ礒の浦松　爲　家

越湖　放生津の潟なりといへり【名所方角抄】には佐渡國となり

【家集】汐のほる越の水海しつかにて、蛤もまたゆられきにけり　貫　之

【續後拾遺】恨みても何かはせむあわゝのみ、越の湖見るめなければ　俊　成

碎田川　放生津の邊と云ふ。

二ッ塚　【太平記】曰、越中守護名越遠江守時有舍弟修理亮有朝甥の兵庫の助貞持三人は、出羽越後の宮方北陸道をへて、京都へ攻のぼるべしと聞えしかは、道にて是を支へんとて、越中の二塚と云處に陣を取て、近國の勢共を相催ける。かゝる所に、六波羅既に攻落されて後、東國にも軍をこりて、既に鎌倉へよせけるなどゝ、さま〴〵に聞ゑけれは、催促に從て、唯今迄馳集ける能登越中の兵、放生津に引退てかへつて、守護の陣へをし寄んと企ける。下略

一家の輩、譜代の侍、わづかに七十九人、元弘三年五月十七日午刻同時に腹をかき切て、兵火の底に燒死ける。其亡魂後にも此地にとゞまりけるを、越後よりのぼる船人此浦を過るに見けるなとあり、委く本書に有。

六道寺渡　此もとの常語に、六だうし籠のわたしといふ也。昔は籠の渡しにても有けるにや。判官どの奥州下向の時、此處にて船賃なくして、船頭に直垂をあたへ給ふと、いふよし聞傳へたり。

勝興寺　古國府　西派　寺領二百石　記錄に曰く、創建は人皇百四代後土御門院、文明四壬辰暦、本願第八世蓮如法印大僧都爲念佛弘通、巡勸北國、而於當國礪波郡蟹谷莊土山幷新川郡動清水邑兩所、令堂舍建立度群生、而后二男蓮乘暫爲住職、蓮乘歸京都、而四男蓮誓大僧都令下向蓮誓同郡高木場中田於兩所、佛閣令開基、其後移安養寺村焉、而四世之住至實玄權大僧都時從本願寺實如

大僧都、以二眞筆三ヶ條一賜二制法一、糺二法流邪正一、僧侶之法式隨當寺之批判、當寺及二大破一、北國七ヶ國之下流、可令加力之條也矣、當六代顯榮、七代顯幸之二代及亂世、而立離安養寺村、處々ト居、厥后佐々陸奥守成政於二領内一諸坊地於成政、乃讓與於守山籠古國府之地、因茲爲寺院再興、且神保安藝守氏張添一宗寺庵可加助力之一册、而天正甲申曆府分一圓氏張令寄附、同十二乙酉從太閤秀吉公賜禁制之御朱印、乃大納言利家公有添牒、同十六戊子十月一日前田孫四郎利勝公。於境地邊、百俵地令寄附矣、利長公於富山賜坊地、乃引移 動清 水之堂宇、中略 九世至准教而住持絕焉、而正保三丙戌曆使本願寺准如大僧正 六男 光昌院良昌爲中興、而勝興寺住職下略

【三才圖會】云、中納言利常卿爲聟、故有寺領、三百石前代より三百石は如是乎越中四郡西派之總錄にて與力之寺四百ヶ寺と云也。

一の宮　慶高寺　寺領十石

高瀨大明神或云氣多大明神　天活玉命神名帳注社記曰、延喜八年八月十六日乙卯、以越中國氣多大神預官幣、按據此說、則能州氣多神爲天活玉命必也。【曆裏】

祭神大己貴命

延曆三年三月　神階正三位　【三才圖會】

或云國府礪波郡一宮高瀨大明神有、越中の一宮兩所にして是非を不知とも云也。

伏木

光久寺　東派　飯久保田村

初眞言宗號玄巢院長谷寺、康永二年性專房改宗而寺號亦改【三才圖會】幷【遺德法論集】に出づ。

岩崎

雨はらしの窟、伏木よりひみへ行道筋なり、判官との奥州下りの時、折ふしこの所にて雨にあひ給ふを、辨慶におふせて石をもつてこの雨はらしをり給ふといふなり、前より有ける處を辨慶とかくしつらいたるなるへし。

唐嶋　辨財天

守山

大悲院　眞言宗　千手觀音、文武天皇大寶年中行基草創、【七國志】に云く、越中守山城主神保安藝守氏春も能州畠山の八臣のうちなり、近代織田家に降り、剩へ信長の妹聟になりて、寵遇淺からず、此安藝守の子息淸十郎は、佐々成政の聟也。是に仍て天正八年閏三月のころ、越中一揆原兼ては、景勝退治のため、神保に添て佐々成政越中にさし越る。其ころ佐々は、越前府中の邊にて、五萬石の領主なり。

御領になりては、利長樣入らせらるよし見へたり。岩か淵にて文祿二年八月向井彌八郎と印牧藤兵衛といふ浪と、兵法の事にて大きなる喧嘩有し由、【三壺聞書】に有

多枯

【拾遺】　多枯の浦の庭さへ匂ふ藤波を、かさして
行ん見ん人のため　人丸

【家集】　音信よ越のは山の時鳥、多枯の浦藤いさ
盛りなる　家隆

【玉葉】　沖津風吹すに礒の松かへに、あまりてか
よるたこの浦藤　宗泰
早苗とる多枯の浦人藤かけて、苗代水に入江せ
くらし　家隆

【後拾遺】　早苗とるたこの浦人此頃や、もしほも
汲ぬ袖ひたすらん　教定

【夫木】　朝氷鳰もかよはす成にけり、なにをよす
らんたこの浦浪　讀人不知

古江

【新拾遺】　五月雨は古江の森の笘屋かた、軒迄か
かる多枯の浦波　法印宗圓

【萬葉】十七長歌、あし鴨のすたく古江におとつひ
も、きのふあかす云云　家持

國泰寺　西田　禪宗　十二石三斗九升

淸水國師開基由良派の本寺也、足利尊氏將軍建立と云。

二上山　養老寺　寺領六石七斗九升二合。

二上權現　別當慈尊寺　本覺坊　金光院

【續古今】　うは玉の夜や更ぬらし玉匣、ふたかみ
山に月かたふきぬ　家持

澁谷　しふ谷のさきの有礒に寄る浪、いやしら〳〵
にいにしへ覺ゆ　家持

三嶋野　【方角抄】に云、二上の邊とあり。

【新續古】　いかに寢て都の夢をみしまのの、淺ち
苅敷露の手枕　景守

【續拾遺】　三嶋野の淺ちか上葉秋風に、色付ぬと
や鶉なくらん　前內大臣

【新拾遺】　みしま野や暮れはむすふやかたおの、
鷹と眞白に雪は降つゝ　爲家

阿尾　靑尾とも書、【萬葉】には英遠浦、

みるめかり思ふ人にはあをの浦、夕顏白き礒
のやの月　阿尾人咏

この處は、菊池伊豆入道、同十六郎居せし所なり、事は【末森記】【七國志】等に有、今なを金府に名家有、其節菊池の放されし鷹の子孫、今なを有て巢作るといふ。

布勢海